芥川龍之介全集

第八巻

大正十三年六月撮影

書齋（下階）

第八卷目錄

人物記

雜記

序跋

書籍批評

雜俎

補遺

點心

御降り

今日は御降りである。尤も歳事記を檢べて見たら、二日は御降りと云はぬかも知れぬ。が蓬萊を飾つた二階にゐれば、やはり心もちは御降りである。下では赤ん坊が泣き續けてゐる。舌に腫物が出來たと云ふが、鵞口瘡にでもならねば好い。ぢつと炬燵に當りながら、「つづらふみ」を讀んでゐても、心は何時かその泣き聲にとられてゐる事が度々ある。私の家は鶉居ではない。娑婆界の苦勞は御降りの今日も、遠慮なく私を惱ますのである。昔或御降りの座敷に、姉や姉の友達と、羽根をついて遊んだ事がある。その仲間には私の外にも、私より幾つか年上の、おとなしい少年が交つてゐた。彼は其處にゐた少女たちと、悉仲好しの間がらだつた。だから羽根をつき落したものは、羽子板を讓る規則があつたが、自然と誰でも私より、彼へ羽子板を渡し易かつた。所がその内にどう云ふ拍子か、彼のついた金羽根が、長押しの溝に落ちこんでしまつた。彼は早速勝手から、大きな踏み臺を運んで來た。さうしてその上へ乘りながら、長押しの金羽根を取り

出さうとした。その時私は脊の低い彼が、踏み臺の上に爪立つたのを見ると、いきなり彼の足の下から、踏み臺を側へ外してしまつた。彼は長押しに手をかけた儘、ぶらりと宙へぶら下つた。姉や姉の友だちは、さう云ふ彼を救ふ爲に、私を叱つたり賺したりした。が、私はどうしても、踏み臺を人手に渡さなかつた。彼は少時下つてゐた後、兩手の痛みに堪へ兼たのか、とうとう大聲に泣き始めた。して見れば御降りの記憶の中にも、幼いながら嫉妬なぞと云ふ娑婆界の苦勞はあつたのである。私に泣かされた少年は、その後學問の修業はせずに、或會社へ通ふ事になつた。今ではもう四人の子の父親になつてゐるさうである。私の家の御降りは、赤ん坊の泣き聲に滿たされてゐる。彼の家の御降りはどうであらう。（一月二日）

御降りや竹ふかぶかと町の空

夏雄の事

香取秀眞氏の話によると、加納夏雄は生きてゐた時に、百圓の月給を取つてゐた由。當時百圓の月給取と云へば、勿論人に羨まれる身分だつたのに相違ない。その夏雄が晩年床に就くと、屢枕もとへ一面に小判や大判を並べさせては、しけじけと見入つてゐたさうである。さうしてそれ

を見た弟子たちは、先生は好い年になつても、まだ貪心が去らないと見える、淺間しい事だと評したさうである。しかし夏雄が黄金を愛したのは、千葉勝が紙幣を愛したやうに、黄金の力を愛したのではあるまい。床を離れるやうになつたら、今度はあの黄金の上に、何を刻んで見ようかなぞと、仕事の工夫をしてゐたのであらう。師匠に貪心があると思つたのは、思つた弟子の方が卑しさうである。香取氏はかう病牀にある夏雄の心理を解釋した。私も恐らくさうだらうと思ふ。所がその後或男に、この逸話を話して聞かせたら、それはさもあるべき事だと、即座に贊成の意を表した。彼の述べる所によると、彼が遊蕩を止めないのも、實は人生を觀ずる爲の手段に過ぎぬのださうである。さうしてその機微を知らぬ世俗が、すぐに兎や角非難をするのは、夏雄の場合と同じださうである。が、實際さうか知らん。（一月六日）

冥途

この頃内田百間氏の「冥途」（新小説新年號所載）と云ふ小品を讀んだ。「冥途」「山東京傳」「花火」「件」「土手」「豹」等、悉く夢を書いたものである。漱石先生の「夢十夜」のやうに、夢に假託した話ではない。見た儘に書いた夢の話である。出來は六篇の小品中、「冥途」が最も見事である。

たつた三頁ばかりの小品だが、あの中には西洋じみない、氣もちの好い Pathos が流れてゐる。しかし百間氏の小品が面白いのは、さう云ふ中味の爲ばかりではない。あの六篇の小品を讀むと、文壇離れのした心もちがする。作者が文壇の塵氛の中に、我々同樣呼吸してゐたら、到底あんな夢の話は書かなかつたらうと云ふ氣がする。書いてもあんな具合には出來なからうと云ふ氣がする。つまり僕にはあの小品が、現在の文壇の流行なぞに、囚はれて居らぬ所が面白いのである。これは僕自身の話だが、何かの拍子に以前出した短篇集を開いて見ると、何處か流行に囚はれてゐる。實を云ふと僕にしても、他人の廡下には立たぬ位な、一人前の自惚れは持たぬでもない。が、物の考へ方や感じ方の上で見れば、やはり何處か囚はれてゐる。(時代の影響と云ふ意味ではない。もつと膚淺な囚はれ方である。)僕はそれが不愉快でならぬ。だから百間氏の小品のやうに、自由な作物にぶつかると、餘計僕には面白いのである。しかし人の話を聞けば、「冥途」の評判は好くないらしい。偶僕の目に觸れた或新聞の批評家なぞにも、全然あれがわからぬらしかつた。これは一方現狀では、尤ものやうな心もちがする。同時に又一方では、尤もでないやうな心もちもする。(一月十日)

長井代助

我々と前後した年齢の人々には、漱石先生の「それから」に動かされたものが多いらしい。その動かされたと云ふ中でも、自分が此處に書きたいのは、あの小說の主人公長井代助の性格に惚れこんだ人々の事である。その人々の中には惚れこんだ所か、自ら代助を氣取つた人も、少くなかつた事と思ふ。しかしあの主人公は、我々の周圍を見廻しても、滅多にゐなさうな人間である。「それから」が發表された當時、世間にはやつてゐた自然派の小說には、我々の周圍にも大勢ゐさうな、その意味では人生に忠實な性格描寫が多かつた筈である。しかし自然派の小說中、「それから」のやうに主人公の模倣者さへ生んだものは見えぬ。これは獨り「それから」には限らず、ウエルテルでもルネでも同じ事である。彼等はいづれも一代を動搖させた性格である。が、如何に西洋でも、彼等のやうな人間は、滅多にゐぬのに相違ない。滅多にゐぬやうな人間が、反つて模倣者さへ生んだのは、滅多にゐぬからではあるまいか。無論滅多にゐぬと云ふ事は、何處にもゐぬと云ふ意味ではない。何處にもゐるとは云へぬかも知れぬ、が、何處かにはゐさうだ位の心もちを含んだ言葉である。人々はその主人公が、手近に住んで居らぬ所に、憧憬の意味を見出すので

あらう。さうして又その主人公が、何處かに住んでゐさうな所に、惝怳の可能性を見出すのであらう。だから小說が人生に、人間の意欲に働きかける爲には、この手近に住んでゐない、しかも何處かに住んでゐさうな性格を創造せねばならぬ。これが通俗に云ふ意味では、理想主義的な小說家が負はねばならぬ大任である。カラマゾフを書いたドストエフスキイは、立派にこの大任を果してゐる。今後の日本では抑誰が、かう云ふ性格を造り出すであらう。（一月十三日）

嘲魔

一かどの英靈を持つた人々の中には、二つの自己が住む事がある。一つは常に活動的な、情熱のある自己である。他の一つは冷酷な、觀察的な自己である。この二つの自己を有する人々は、ややもすると創作力の代りに、唯賢明な批評力を獲得するだけに止まり易い。M. de la Rochefoucauld はこれである。が、モリエエルはさうではない。彼はこの二つの自己の分裂を感じない人間であつた。不思議にもこの二つの自己を同時に生きる人間であつた。彼が古今に獨步する所以は、かう云ふ壯嚴な矛盾の中にある。Sainte-Beuve のモリエエル論を讀んでゐたら、こんな事を書いた一節があつた。私も私自身の中に、冷酷な自己の住む事を感ずる。この嘲魔を却け

る事は、私の顔が變へられないやうに、私自身には如何とも出來ぬ。もし年をとると共に、嘲魔のみが力を加へれば、私も亦メリメエのやうに、「私の友人のなにがしがかう云ふ話をして聞かせた」なぞと、書き始める事にも倦みさうである。殊に虚無の遺傳がある東洋人の私には容易かも知れぬ。L'Avare や Ecole des Femmes を書いたモリエエルは、比類の少い幸福者である。が、奸妻に惱まされ、病肺に苦しまされ、作者と俳優と劇場監督と三役の繁務に追はれながら、しかも猶この嘲魔の毒手に、陷らなかつたモリエエルは、愈羨望に價すべき比類の少い幸福者である。（一月十四日）

池西言水

「言ひ難きを言ふは老練の上の事なれど、そは多く俗事物を詠じて、雅ならしむる者のみ。其事物如何に雅致ある者なりとも、十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめん事は、殆ど爲し得べからざる者なれば、古來の俳人も皆之を試みざりしに似たり。然れども一二此種の句なくして可ならんや。池西言水は實に其作者なり。」これは正岡子規の言葉である。（俳諧大要。一五六頁）子規はその後に實例として、言水の句二句を揭げてゐる。それは「姨捨てん湯婆に燗せ

星月夜」と「黒塚や局女のわく火鉢」との二句である。自分は言水のこれらの句が、「十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめ」たとするには、何の苦情も持つて居らぬ。しかしこの意味では蕪村や召波も、「十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめ」てはゐないか。「御手打の夫婦なりしを衣更へ」や「いねかしの男うれたき砧かな」も、やはり複雑な内容を十七字の形式につづめてはゐないか。しかも「燗せ」や「わく」と云ふ言葉使ひが耳立たないだけに、一層成功してはゐないか。して見れば子規が評した言葉は、言水にも確に當て嵌まるが、言水の特色を云ひ盡すには、餘りに廣すぎる憾みはないか。かう自分は思ふのである。では言水の特色は何かと云へば、それは彼が十七字の内に、萬人が知らぬ一種の鬼氣を盛りこんだ手際にあると思ふ。子規が掲げた二句を見ても、すぐに自分を動かすのは、その中に漂ふ無氣味さである。

試に言水句集を開けば、この類の句は外にも多い。

御忌の鐘皿割る罪や曉の雲

つま猫の胸の火や行く潦

夜櫻に怪しやひとり須磨の蜑

蚊柱の礎となる捨子かな

人魂は消えて梢の燈籠かな

あさましや蟲鳴く中に尼ひとり
火の影や人にて凄き網代守

句の佳否に關らず、これらの句が與へる感じは、蕪村にもなければ召波にもない。元祿でも言水唯一人である。自分は言水の作品中、必しもかう云ふ鬼趣を得た句が、最も神妙なものだとは云はぬ。が、言水が他の大家と特に趣を異にするのは、此處にあると云はざるを得ないのである。言水通稱は八郎兵衞、紫藤軒と號した。享保四年歿。行年は七十三である。（一月十五日）

托氏宗教小説

今日本郷通りを歩いてゐたら、ふと托氏宗教小説と云ふ本を見つけた。價を尋ねれば十五錢だと云ふ。物質生活のミニマムに生きてゐる僕は、この間渦福の鉢を買はうと思つたら、十八圓五十錢と云ふのに辟易した。が、十五錢の本位は、仕合せと買へぬ身分でもない。僕は早速三箇の白銅の代りに、薄つぺらな本を受け取つた。それが今僕の机の上に、古ぼけた表紙を曝してゐる。托氏宗教小説は、西曆千九百有七年、支那では光緒三十三年、香港の禮賢會(Rhenish Missionary Society)が、剞劂に付した本である。譯者は獨逸の宣教師 Genähr と云ふ人である。但し飜

譯に用ひた本は、Nisbet Bain の英譯だと云ふ、内容は名高い主奴論以下、十二篇の作品を集めてゐる。この本は勿論珍書ではあるまい。文求堂に頼みさへすれば、すぐに取つてくれるかも知れぬ。が、表紙を開けた所に、原著者托爾斯泰の寫眞があるのは、何となしに愉快である。好い加減に頁を繰つて見れば、牧色、加夫單、沽未士なぞと云ふ、西洋語の音譯が出て來るのも、僕にはやはり物珍しい。こんな飜譯が上梓された事は原著者托氏も知つてゐたであらうか。香港上海の支那人の中には、偶然この本を讀んだ爲めに、生涯托氏を師と仰いだ、若干の青年があつたかも知れぬ。托氏はさう云ふ南方の青年から、遙に敬愛を表すべき手紙を受け取りはしなかつたであらうか。私は托氏宗教小説を前に、この文章を書きながら、そんな空想を逞しくした。托氏とは伯爵トルストイである。（一月二十八日）

「西洋の民は自由を失つた。恢復の望みは殆ど見えない。東洋の民はこの自由を恢復すべき使命がある。」これは次手に孫引きにしたトルストイの書簡の一節である。（一月三十日）

印税

Jules Sandeau のいとこが Palais Royal のカツフエへ行つてゐると、出版書肆のシヤルパ

ンテイエが、バルザックと印税の相談をしてゐた。その後彼等が忘れて行つた紙を見たら、無暗に澤山の數字が書いてあつた。サンドオがバルザックに會つた時、この數字の意味を問ひ訊すと、それは著書が十萬部賣切れた場合、著者の手に渡るべき印税の額だつたと云ふ。當時バルザックが定めた印税は、オクタヴオ版三フラン半の本一册につき、定價の一割を支拂ふのだつた。して見ればまづ日本の作家が、現在取つてゐる印税と大差がなかつた訣である。が、これがバルザックがユウジエニエ・グランデエを書いた時分だから、千八百三十二年か三年頃の話である。まあ印税も日本では、西洋よりざつと百年ばかり遲れてゐると思へば好い。原稿成金なぞと云つても、日本では當分小說家は、貧乏に堪へねばならぬやうである。（一月三十日）

日米關係

日米關係と云つた所が、外交問題を論ずるのではない。文壇のみに存在する日米關係を云ひたいのである。日本に學ばれる外國語の中では、英吉利語程範圍の廣いものはない。だから日本の文士たちも、大抵は英吉利語に手依つてゐる。所が英吉利なり亞米利加なり、本來の英吉利語文學は、ショオとかワイルドとか云ふ以外に、餘り日本では流行しない。やはり讀まれるのは大陸・

文學である。然るに英吉利語譯の大陸文學は、亞米利加向きのものが多い。何故と云へばホイツ・トマン以後、藝術的に荒蕪な亞米利加は、他國に天才を求めるからである。その關係上日本の文壇は、さ程著しくないにしても、近年は亞米利加の流行に、影響される形がないでもない。イバネスの名前が聞え出したのは、この實例の一つである。(僕が高等學校の生徒だつた頃は、あの「大寺院の影」の外に、英吉利語譯のイバネスは何處を探しても見當らなかつた。)向う河岸の火の手が靜まつたら、今度はパピニなぞの伊太利文學が、日本にも紹介され出すかも知れぬ。これは大陸文學ではないが、以前文壇の一角に、愛蘭土文學が持て囃されたのも、火の元は亞米利加にあつたやうだ。かう云ふ日米關係は、英吉利語文學が流行しないだけに存外見落され勝ちのやうである。偶丸善へ行つて見たら、イバネス、ブレスト・ガナ、デ・アラルコン、バロハなぞの西班牙小說が澤山並べてあつた爲め、こんな事を記して置く氣になつた。(一月一日)

Ambroso Bierce

日米關係を論じた次手に、亞米利加の作家を一人擧げよう。アムブロオズ・ビイアスは異色の變つた作家である。(一)短篇小說を組み立てさせれば、彼程鋭い技巧家は少い。評家がポオの再

來と云ふのは、確にこの點でも當つてゐる。その上彼が好んで描くのは、やはりポオと同じやうに、無氣味な超自然の世界である。この方面の小說家では、英吉利に Algernon Blackwood があるが、到底ビイアスの敵ではない。(一)彼は又批評や諷刺詩を書くと、辛辣無双な皮肉家である。現にレジンスキイと云ふ、確か波蘭土系の詩人の如きは、彼の毒舌に飜弄された結果自殺を遂げたと云はれてゐる。が、彼の批評を讀めば、精到の妙はないにしても、犀利の快には富んでゐると思ふ。(二)彼は同時代の作家の中では、最もコスモポリタンだつた。南北戰爭に從軍した事もある。桑港の雜誌の主筆をした事もある。倫敦に文を賣つてゐた事もある。しかも彼は生きたか死んだか、未に行方が判然しない。中には彼の惡口が、餘りに人を傷けた爲め暗殺されたのだと云ふものもある。(四)彼の著書には十二卷の全集がある。短篇小說のみ讀みたい人は In the Midst of Life 及び Can Such Things Be? の二卷に就くが好い。私はこの二卷の中に、特に前者を推したいのである。後者には佳作は一二しか見えぬ。(五)彼の評傳は一冊もない。オウ・ヘンリイ等に比べると、此處でも彼は薄倖である。彼の事を多少知りたい人は、ケムブリツヂ版の History of American Literature 第二卷の三八六—七頁、或は Cooper 著 Some American Story Tellers のビイアス論を見るが好い。前に書くのを忘れたが、年代は一八三八—一九一四?である。日本譯は一つも見えない。紹介もこれが最初であらう。(二月二日)

むし

私は「龍」と云ふ小說を書いた時、「虫の垂衣をした女が一人、建札の前に立つてゐる」と書いた。その後或人の注意によると、虫の垂衣が行はれたのは、鎌倉時代以後ださうである。その證據には源氏の初瀬詣の條にも、虫の垂衣の事は見えぬさうである。私はその人の注意に感謝した。が、私が虫の垂衣云々の事を書いたのは、「信貴山緣起」「粉河寺緣起」なぞの畫卷物によつてゐたのである。だからさう云ふ注意を受けても、剛情に自說を改めなかつた。その後何かの次手から、宮本勢助氏にこの事を話すと、虫の垂衣は今昔物語にも出てゐると云ふ事を敎へられた。それから早速今昔を見ると、本朝の部卷六、從鎭西上人依觀音助遁賊難持命語の中に、「轉て思すらむ。然れども晝傘子を風の吹き開きたりつるより見奉るに、更に物不レ思罪免し給へ云云」とある。私は心の舒びるのを感じた。同時に自說は曲げずにゐても、矢張文獻に證據のないのが、今までは多少寂しかつたのを知つた。（二月二日）

蕗

坂になつた路の土が、砥の粉のやうに乾いてゐる。寂しい山間の町だから、路には石塊も少くない。両側には古いこけら葺の家が、ひつそりと日光を浴びてゐる。僕等二人の中學生は、その路をせかせか上つて行つた。すると赤ん坊を背負つた少女が一人、濃い影を足もとに落しながら、静に坂を下つて來た。少女は袖のまくれた手に、莖の長い蕗をかざしてゐる。何の爲めかと思つたら、それは眞夏の日光が、すやすや寢入つた赤ん坊の顏へ、當らぬ爲の蕗であつた。僕等二人はすれ違ふ時に、そつと微笑を交換した。が、少女はそれも知らないやうに、やはり靜に通りすぎた。かすかに頬が日に燒けた、大樣の顏だちの少女である。その顏が未にどうかすると、はつきり記憶に浮ぶ事がある。里見君の所謂一目惚れとは、こんな心もちを云ふのかも知れない。（二月十日）

（大正十年）

本の事

僕は本が好きだから、本の事を少し書かう。僕の持つてゐる洋綴の本に、妙な演劇史が一冊ある。この本は明治十七年一月十六日の出版である。著者は東京府士族、警視廳警視屬、永井徹と云ふ人である。最初の頁にある所藏印を見ると、嘗は石川一口の藏書だつたらしい。序文に、「夫演劇は國家の活歴史にして、文盲の早學問なり。故に歐洲進化の國に在ては、縉紳貴族皆之を尊重す。而してその隆盛に至りし所以のものは、有名の學士羅希に出て、之れが改良を謀るに由る。然るに吾邦の學者は夙に李園(原)を鄙み、措て顧みざるを以て、之を記するの書、未嘗多しとせず。卽文化の一具を缺くものと謂可し。(中略)余玆に感ずる所あり。寸暇を得るの際、米佛等の書を繙き、その要領を纂譯したるもの、此冊子を成す。因て之を各國演劇史と名く」とある。羅希に出た有名の學士とは、希臘や羅馬の劇詩人だと思ふと、それだけでも微笑を禁じ得ない。本文にはさんだ、三葉の銅版畫の中には、「英國俳優デオフライ空窖へ幽囚せられたる圖」と云ふ

のがある。その畫が又どう見ても、土の牢の景清と云ふ氣がする。ヂオフライは勿論 Geoffrey であらう。英吉利の古代演劇史を知るものには、これも噴飯に堪へないかも知れない。次手に本文の一節を引けば、「然るに千五百七十六年女王エリサベスの時代に至り、始めて特別演劇興業の爲め、ブラツク・フラヤス寺院の不用なる領地に於て劇場を建立したり。之を英國正統なる劇場の始祖とす。而て此はレスター伯に屬し、ゼームス・ボルベージ之が主宰たり。俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり。當時は十二歳の兒童なりしが、ストラタフオルドの學校にて、羅甸並に希臘の初學を卒業せしものなり」と云ふのがある。俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり！　三十何年か前の日本は、髣髴とこの一語に窺ふ事が出來る。この本は希覯書でも何でもあるまい。が、僕はかう云ふ所に、捨て難いなつかしみを感じてゐる。もう一つ次手に書き加へるが、僕は以前物好きに、明治十年代の小説を五十種ばかり集めて見た。小説そのものは仕方がない。しかしあの時代の活字本には、當世の本よりも誤植が少い。あれは一體世の中が、長閑だつたのにもよるだらうが、僕はやはりその中に、篤實な人心が見えるやうな氣がする。誤植の次手に又思ひだしたが、何時か石印本の王建の宮詞を讀んでゐたら、「御池水色春來好。處處分流白玉渠。密奏君王知入月。喚人相伴洗裙裾」と云ふ詩の、入月が人用と印刷してあつた。入月とは女の月經の事である。(詩中月經を用ひたのは、この宮詞に止まるかも知れ

ない。）入用では勿論意味が分らない。僕はこの誤にぶつかつてから、どうも石印本なるものは、一體に信用出來なくなつた。何だか話が横道へそれたが、永井徹著の演劇史以前に、こんな著述があつたかどうか、それが未に疑問である。未にと云つても僕の事だから、別に探して見た訣ではない。唯誰かその道の識者が、教を垂れて呉れるかと思つて、やはり次手に書き加へたのである。

天路歷程

僕は又漢譯の Pilgrim's Progress を持つてゐる。これも希覯書とは稱されない。しかし僕にはなつかしい本の一つである。ピルグリムス・プログレスは、日本でも譯して天路歷程と云ふが、これはこの本に學んだのであらう。本文の譯もまづ正しい。所々の詩も韻文譯である。「路旁生命水清流　天路行人喜暫留　百果奇花供悅樂　吾儕幸得此埔遊」――大體こんなものと思へば好い。面白いのは銅版畫の插畫に、どれも支那人が描いてある事である。Beautiful の宮殿へ來た所なども、やはり支那風の宮殿の前に、支那人の Christian が歩いてゐる。この本は清朝の同治八年（千八百六十九年）蘇松上海華草書院の出版である。序に「至咸豐三年中國士子

與耶蘇教師參譯始成」とあるから、この前にも譯本は出てゐたものらしい。譯者の名は全然不明である。この夏、北京の八大胡同へ行つた時、或清吟小班の妓の几に、漢譯のバイブルがあるのを見た。天路歷程の讀者の中にも、あんな麗人があつたかも知れない。

Byron の詩

僕は John Murray が出した、千八百二十一年版のバイロンの詩集を持つてゐる。內容は Sardanapalus, The Two Foscari, Cain の三種だけである。ケエンには千八百二十一年の序があるから、或は他の二つの悲劇と共に、この詩集がその初版かも知れない。これも檢べて見ようと思ひながら、未にその儘打遣つてある。バイロンはサアダナペエラスをゲエテに、ケエンをスコツトに獻じてゐる。事によると彼等が讀んだのも、僕の持つてゐる詩集のやうに、印刷の拙い本だつたかも知れない。僕はそんな事を考へながら、時々唯氣まぐれに、黃ばんだペエヂを繰つて見る事がある。僕にこの本を贈つたのは、海軍教授豐島定氏である。僕は海軍の學校にゐた時、難解の英文を教へて貰つたり、時にはお金を借して貰つたり、いろいろ豐島氏の世話になつた。豐島氏は鮭が大好きである。この頃は每日晩酌の膳に、生鮭、鹽鮭、粕漬の鮭なぞが、代る代る載

つてゐるかも知れない。僕はこの本をひろげる時には、そんな事も亦思ふ事がある。が、バイロンその人の事は、殆念頭に浮べた事がない。たまに思ひ出せば五六年以前に、マゼツパやドン・ジュアンを讀みかけた儘、どちらも讀まずにしまつた事だけである。どうも僕はバイロンには、縁なき衆生に過ぎないらしい。

かげ草

これは夢の話である。僕は夢に從姉の子供と、三越の二階を歩いてゐた。すると書籍部と札を出した臺に、Quarto 版の本が一冊出てゐた。誰の本かと思つたら、それが森先生の「かげ草」だつた。臺の前に立つた儘、好い加減に二三枚あけて見ると、希臘の話らしい小說が出て來た。文章は素直な和文だつた。「これは小金井きみ子女史の譯かも知れない。何時か古今奇觀を讀んでゐたら、村田春海の竺志船物語と、ちつとも違はない話が出て來た。この譯の原文は何かしら。」夢の中の僕はそんな事を思つた。が、その小說のしまひを讀んだら、「わか葉生譯」と書いてあつた。もう少し先をあけて見ると、今度は寫眞版が澤山出て來た。みんな森先生の書畫だつた。何でも蓮の畫と不二見西行の畫とがあつた。寫眞版の次は書簡集だつた。「子供が死んだから、

小說は書けない。御寛恕下さい」と云ふのがあつた。宛は畑耕一氏だつた。永井荷風氏宛のも澤山あつた。それは皆どう云ふ訣か、荷風堂先生と云ふ宛名だつた。「荷風堂は可笑しいな。森先生ともあらうものが。」——夢の中の僕はそんな事も思つた。それぎり夢はさめてしまつた。僕はその日五山館詩集に、森先生の署せられた字を見てゐた。それから畑耕一氏に、煙草を一箇貰つてゐた。さう云ふ事が夢の中に何時か織りこまれてゐたと見える。Max Beerbohm の書いた物に自分の一番集めたい本は、本の中の人物が書いたと云ふ、架空の本だと云ふのである。が、僕は「新聞國」の初版よりも、この Quarto 版の「かげ草」が欲しい。この本こそ手に入れば希覯書である。

（大正十年十二月）

雑筆

竹田

竹田は善き人なり。ロオランなどの評價を學べば、善き畫描き以上の人なり。世にあらば知りたき畫描き、大雅を除けばこの人だと思ふ。友だち同志なれど、山陽の才子ぶりたるは、竹田より遙に品下れり。山陽が長崎に遊びし時、狹斜の遊あるを疑はれしとて、「家有縞衣待吾返、孤衾如水已三年」など云へる詩を作りしは、聊眉に唾すべきものなれど、竹田が同じく長崎より「不上酒閣　不買歌鬟　償周文畫　筆頭水墨余山」の詞を寄せたるは、恐らく眞情を吐露せしなるべし。竹田は詩書畫三絶を稱せられしも、和歌などは巧ならず。畫道にて悟入せし所も、三十一文字の上には一向利き目がないやうなり。その外香や茶にも通ぜし由なれど、その道の事は知らざれば、何ともわれは定め難し。面白きは竹田が茸の畫を作りし時、賴みし男佛頂面をなしたるに、竹田「わが苦心を見給へ」とて、水に浸せし椎茸を大籠に一杯見せたれば、その男感歎してやみしと云ふ逸話なり。竹田が刻意勵精はさる事ながら、俗人を感心させるには、かう云ふ事にまさるものなし。大家の苦心談などと云はるる中、人の惡き名人が、凡下の徒を飜弄する爲

に假作したものも少くあるまい。山陽などはどうもやりさうなり。竹田になるとそんな惡戯氣は、嘘にもあつたとは思はれず。返す返すも竹田は善き人なり。「田能村竹田」と云ふ書を見たら、前より此の人が好きになつた。この書は著者大島支郎氏、賣る所は豐後國大分の本屋忠文堂。（七月二十日）

奇聞

大阪の或る工場へ出入する辨當屋の小娘あり。職工の一人、その小娘の頬を舐めたるに、忽ち發狂したる由。

亞米利加の何處かの海岸なり。海水浴の仕度をしてゐる女、着物を泥棒に盜まれ、一日近くも脫衣場から出る事出來ず。その後泥棒はつかまりしが、罪名は女の羞恥心を利用したる不法監禁罪なりし由。

電車の中で老婦人に足を踏まれし男、忌々しければ向うの足を踏み返したるに、その老婦人忽ち演說を始めて曰、「皆さん。この人は唯今私が誤まつて足を踏んだのに、今度はわざと私の足を踏みました。云々」と。踏み返した男、とうとう閉口してあやまりし由。その老婦人は矢島楫子女史か何かの子分ならん。

世の中には噓のやうな話、存外あるものなり。皆小穴一遊亭に聞いた。（七月二十三日）

芭蕉

又猿簑を讀む。芭蕉と去來と凡兆との連句の中には、波瀾老成の所多し。就中こんな所は、何とも云へぬ心もちにさせる。

　　ゆかみて蓋のあはぬ半櫃　　兆
　草庵に暫く居ては打やふり　　蕉
　　いのち嬉しき撰集のさた　　來

芭蕉が「草庵に暫く居ては打やふり」と付けたる付け方、德山の棒が空に閃くやうにて、息もつまるばかりなり。どこからこんな句を拈して來るか、恐しと云ふ外なし。この鋭さの前には凡兆と雖も頭が上るかどうか。

凡兆と云へば下の如き所あり。

　蕾ねふる青鷺の身のたふとさよ　　蕉
　　しよろしよろ水に藺のそよくらん　　兆

これは凡兆の付け方、未しきやうなり。されどこの芭蕉の句は、なかなか世間並の才人が筋斗

百回した所が、付けられさうもないには違ひなし。たつた十七字の活殺なれど、芭蕉の自由自在には恐れ入つてしまふ。西洋の詩人の詩などは、日本人故わからぬせゐか、これ程えらいと思つた事なし。まづ「成程」と云ふ位な感心に過ぎず。されば芭蕉のえらさなども、いくら説明してやつた所が、西洋人にはわかるかどうか、疑問の中の疑問なり。(七月十一日)

蜻蛉

蜻蛉が木の枝にとまつて居るのを見る。羽根が四枚平に並んでゐない。前の二枚が三十度位あがつてゐる。風が吹いて來たら、その羽根で調子を取つてゐた。木の枝は動けども、蜻蛉は去らず。その儘悠々と動いて居る。猶よく見ると、風の吹く強弱につれて、前の羽根の角度が可成いろいろ變る。色の薄い赤蜻蛉。木の枝は枯枝。見たのは崖の上なり。(八月十八日青根温泉にて)

子供

子供の時分の事を書きたる小説はいろいろあり。されど子供が感じた通りに書いたものは少し。大抵は大人が子供の時を回顧して書いたと云ふ調子なり。その點では James Joyce が新機軸を

出したと云ふべし。

ジョイスの A Portrait of the Artist as a Young Man は、如何にも子供が感じた通りに書いたと云ふ風なり。或は少し感じた通りに書き候と云ふ氣味があるかも知れず。されど珍品は珍品なり。こんな文章を書く人は外に一人もあるまい。讀んで好い事をしたりと思ふ。（八月二十日）

十千萬堂日録

十千萬堂日録一月二十五日の記に、紅葉が諸弟子と芝蘭簿の記入を試むる條あり。風葉は「身長今一寸」を希望とし、春葉は「四十迄生きん事」を希望とし、紅葉は「歐洲大陸にマアブルの句碑を立つ」を希望とす。更に又春葉は書籍に西遊記を擧げ、風葉は「あらゆる字引類」を擧げ、紅葉はエンサイクロピデイアを擧ぐ。紅葉の好み、諸弟子に比ぶれば頗る西洋かぶれの氣味あり。されどその嫌味なる所に、返つて紅葉の器量の大が窺ひ知られるやうな心もちがする。

それから又一月二十三日の記に、「此夜（八）の八を草して黎明に至る。終に脱稿せず。たうときものは寒夜の炭。」とあり。何となく嬉しきくだりなり。（八）は金色夜叉の（八）。（八月二十一日）

「姉さん。これ何？」
「ゼンマイ。」
「ゼンマイ珈琲つてこれから拵へるんでせう。」
「お前さん莫迦ね。ちつと默つていらつしやいよ。そんな事を云つちや、私がきまり惡くなるぢやないの。あれは玄米珈琲よ。」
姉は十四五歲。妹は十二歲の由。この姉妹二人ともスケツチ・ブツクを持つて寫生に行く。雨降りの日は互に相手の顏を寫生するなり。父親は品のある五十恰好の人。この人も畫の嗜みありげに見ゆ。（八月二十二日靑根溫泉にて）

若さ

木米は何時も黑羽二重づくめなりし由。これ贅澤に似て、反つて德用なりと或人云へり。その人又云ひしは、されどわれら若きものは、木米の好みの善きことも重々承知はしてゐれど、黑羽二重づくめになる前に、もつといろいろの事をして見たい氣ありと。この言葉はそつくり小說を

書く上にも當て嵌るやうなり。どう云ふ作品が難有きか、そんな事は朧げながらわかつてゐれど、一圖にその道へ突き進む前に、もつといろいろな行き方へも手を出したい氣少からず。こは偸安と云ふよりも、若きを恃む心もちなるべし。この心もちに安住するは、餘り善い事ではないかも知れず。云はば藝術上の蕩子ならんか。（八月二十三日）

痴情

男女の痴情を寫盡せんとせば、どうしても房中の事に及ばざるを得ず。されどこは役人の禁ずる所なり。故に小說家は最も迂遠な仄筆を使つて、やつと十の八九を描く事となる。金瓶梅が古今無双の痴情小說たる所以は、一つにはこの點でも無遠慮に筆を揮つた結果なるべし。あれ程でなくとも、もう少し役人がやかましくなければ、今より數等深みのある小說が生まれるならん。金瓶梅程の小說、西洋に果してありや否や。ピエル・ルイの Aphrodite なども、金瓶梅に比ぶれば、子供の玩具も同じ事なり。尤も後者は序文にある通り、樂欲主義と云ふ看板もあれば、一概に比ぶるは不都合なるべし。（八月二十三日）

竹.

後の山の竹藪を遠くから見ると、暗い杉や檜の前に、房々した緑が浮き上つて居る。まるで鳥の羽毛のやうなり。頭の中で拵へた幽篁とか何とか云ふ氣はしない。支那人は竹が風に吹かるるさまを、竹笑と名づける由、風の吹いた日も見てゐたが、一向竹笑らしい心もち起らず。夕霧の深い夕方出て見たら、皆ぼんやり黑く見える所、平凡な南畫じみてつまらなかつた。それより竹藪の中にはひり、竹の皮のむけたのが、裏だけ日の具合で光るのを見ると、其處らに蛞蝓が這つてゐさうな、妙な無氣味さを感ずるものなり。（八月二十五日青根溫泉にて）

貴族

貴族或は貴族主義者が思ひ切つてうぬぼれられないのは、彼等も亦われら同樣、厠に上る故なるべし。さもなければ何處の國でも、先祖は神々のやうな顏をするかも知れず。德川時代の大諸侯は、參覲交代の途次旅宿へとまると、必大恭は砂づめの樽へ入れて、後へ殘さぬやうに心がけた由。その話を聞かされたら、彼等もこの弱點には氣づいてゐたと云ふ氣がしたり。これをもつと上品に云へば、ニイチエが「何故人は神だと思はないかと云ふと、云々」の警句と同じになつてしまふだらう。（八月二十六日）

信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり、拓落たる道情、良寛に劣らず。下島空谷氏が近來その句を蒐集してゐる。「朝顏に急がぬ膳や殘り客」「ひそひそと何料理るやら榾明り」「初秋の心づかひや味噌醬油」「大事がる馬の尾づつや秋の風」「落栗の座をさだむるや窪たまり」（初めて伊那に來て）「鬼灯の色にゆるむや畑の繩」等、句も天保前後の人にしては、思ひの外好い。辭世は「何處やらで鶴の聲する霞かな」と云ふ由。憾むらくはその傳を詳にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。（九月十日）

百日紅

自分の知れる限りにては、葉の黄ばみそむる事、櫻より早きはなし。槐これに次ぐ。その代り葉の落ち盡す事早きものは、百日紅第一たり。櫻や槐の梢にはまだ疎に殘葉があつても、百日紅ばかりは坊主になつてゐる。梧桐、芭蕉、柳など詩や句に搖落を歌はるるものは、みな思ひの外散る事遲し。一體百日紅と云ふ木、春も新綠の色洽き頃にならねば、容易に赤い芽を吹かず。長塚節氏の歌に、「春雨になまめきわたる庭ぬちにおろかなりける梧桐の木か」とあれど、梧桐の芽

を吹くは百日紅よりも早きやうなり。朝寝も好きなら宵寝も好きなる事、百日紅の如きは滅多になし。自分は時々この木の横着なるに、人間同樣腹を立てる事あり。（九月十三日）

大作

龜尾君譯エッケルマンのゲエテ語錄の中に、少壯の士の大作を成すは勞多くして功少きを戒めてやまざる一段あり。蓋ゲエテ自身ファウストなどを書かんとして、懲り懲りしたる故なるべし。思へばトルストイも「戰爭と平和」や「アンナ・カレニナ」の大成に沒頭せしかば、遂には全歐九十年代の藝術がわからずなりしならん。勿論他人の藝術がわからずとも、トルストイのやうな堂々たる自家の藝術を持つてゐれば、毛頭差支へはなきやうなり。されどわかるわからぬの上より云へば、藝術論を書きたるトルストイは、寧ろ憐むべき鑑賞眼の所有者たりし事は疑ひなし。まして我々下根の衆生は、好い加減な野心に煽動されて、柄にもない大作にとりかかつたが最期、虻蜂とらずの歎を招くは、わかり切つた事かも知れず。とは云ふものの自分なぞは、一生大作を企つべき機緣が熟したと思つたら、ゲエテの忠告も聞えぬやうに、忽いきり立つてしまひさうな氣がする。（九月二十六日）

河童の考證は柳田國男氏の山島民譚集に盡してゐる。御維新前は大根河岸の川にもやはり河童が住んでゐた。觀世新路の經師屋があの川へ障子を洗ひに行つてゐると、突然後より抱きつきて、無暗にくすぐり立てるものあり。經師屋閉口して、仰向けに往來へころげたら、河童一匹背中を離れて、川へどぶんと飛びこみし由、幼時母より聞きし事あり。その後萬年橋の下の水底に、大緋鯉がゐると云ふ噂ありしが、どうなつたか詳しくは知らず。父の知人に夜釣りに行つたら、吾妻橋より少し川上で、大きなすつぽんが船のともへ、乘りかかるのを見たと云ふ人あり。そのすつぽんの首太き事、鐵瓶の如しと話してゐた。東京の川にもこんな水怪多し。田舍へ行つたら猶の事、未に河童が蘆の中で、相撲などとつてゐるかも知れない。偶一遊亭作る所の河太郎獨酌之圖を見たから、思ひ出した事を記しとどめる。（九月三十日）

器量

天龍寺の峨山が或雪後の朝、晴れた空を仰ぎながら「昨日はあんなに雪を降らせた空が、今朝はこんなに日がさしてゐる。この意氣でなくては人間も、大きな仕事は出來ないな」と云ひし由。

今夜それを讀んだら、叶はない氣がした。僅百枚以内の短篇を書くのに、悲喜交至つてゐるやうでは、自分ながら氣の毒千萬なり。この間も湯にはひりながら、湯にはひる事その事は至極簡單なのに、湯にはひる事を書くとなると中々容易でないのが不思議だつた。同時に又不愉快だつた。されど下根の衆生と生まれたからは、やはり辛抱專一に苦勞する外はあるまいと思ふ。（十月三日）

誤謬

Ars longa, vita brevis を譯して、藝術は長く人生は短しと云ふは好い。が、世俗がこの句を使ふのを見ると、人亡べども業顯ると云ふ意味に使つてゐる。あれは日本人或は日本の文士だけが獨り合點の使ひ方である。あのヒポクラテエスの第一アフオリズムには、さう云ふ意味はひつて居らぬ。今の西人がこの句を使ふのも、やはりさう云ふ意味には使つて居らぬ。藝術は長く人生は短しとは、人生は短い故刻苦精勵を重ねても、容易に一藝を修める事は出來ぬと云ふ意味である。こんな事を說き明かすのは、中學教師の任かも知れぬ。しかし近頃は我々に教へ顏をする批評家の中にさへ、このはき違へを知らずにゐるものもある。それでは文壇にも氣の毒なやうだ。そんな意味に使ひたくば、希臘の哲人の語を借らずとも、孫過庭なぞに人亡業顯、云々の

名文句が殘つてゐる。序ながら書いて置くが、これからの批評家は、「ランダアやレオパルディのイマジナリイ・コムヴアセエション」などと出たらめの氣焔を擧げてゐてはいけぬ。そんな事ではいくら威張つても、衒學の名にさへ價せぬではないか。徒に人に教へたがるよりは、まづ自ら教へて來るが好い。（十月五日）

不朽

人命に限りあればとて、命を粗末にして好いとは限らず。なる可く長生をしようとするのは、人各々の分別なり。藝術上の作品も何時かは亡ぶのに違ひなし。畫力は五百年、書力は八百年とは、王世貞既にこれを云ふ。されどなる可く長持ちのする作品を作らうと思ふのは、これ亦我々の隨意なり。かう思へば藝術の不朽を信ぜざると、後世に作品を殘さんとするとは、格別矛盾した考へにもあらざるべし。さらば如何なる作品が、古くならずにゐるかと云ふに、書や畫の事は知らざれども、文藝上の作品にては簡潔なる文體が長持ちのする事は事實なり。勿論文體即作品と云ふ理窟なければ、文體さへ然らばその作品が常に新なりとは云ふべからず。されど文體が作品の佳否に影響する限り、絢爛目を奪ふ如き文體が存外古くなる事は、殆疑なきが如し。ゴオテイエは今日讀むべからず。然れどもメリメエは日に新なり。これを我朝の文學に見るも、鷗

外先生の短篇の如き、それらと同時に發表されし「冷笑」「うづまき」等の諸作に比ぶれば、今猶清新の氣に富む事、昨日校正を濟ませたと云ふとも、差支へなき位ならずや。ゾラは嘗て文體を學ぶに、ヴォルテエルの簡を宗とせずして、ルツソオの華を宗とせしを歎き、彼自身の小說が早晩古くなるべきを豫言したる事ある由、善く己を知れりと云ふべし。されど前にも書きし通り、文體は作品のすべてにあらず。文體の如何を超越したる所に、作品の永續性を求むれば、やはりその深さに歸着するならん。「凡そ事物の能く久遠に垂るる者は、(中略)切實の體あるを要す」(芥舟學畫編)とは、文藝の上にも確論だと思ふ。(十月六日)

流俗

思ふに流俗なるものは、常に前代には有用なりし眞理を株守する特色あり。尤も一時代前、二時代前、或は又三時代前と、眞理の古きに從つて、いろいろの流俗なきにあらず。さらば一時代の長さ幾何かと云へば、こは時と處とにより、一概には何年と定め難し。まづ日本ならば一時代約十年とも申すべきか。而して普通流俗が學問藝術に害をなす程度は、その株守する眞理の古さと逆比例するものなり。たとへば武士道主義者などが、今日子供の悪戯程も時代の進歩を害せざるは、この法則の好例なるべし。故に現在の文壇にても、人道主義の陣笠連は、自然主義の陣笠

連より厄介物たるを當然とす。（十月七日）

木犀

牛込の或町を歩いてゐたら、誰の屋敷か知らないが、黒塀の續いてゐる所へ出た。今にも倒れてしまひさうな、ひどく古い黒塀だつた。塀の中には芭蕉や松が、凭れ合ふやうに一杯茂つてゐた。其處を獨り歩いてゐると、冷たい木犀の匂がし出した。何だかその匂が芭蕉や松にも、滲み透るやうな心もちがした。すると向うからこれも一人、まつすぐに歩いて來る女があつた。やがて側へ來たのを見たら、何處かで見たやうな顏をしてゐた。すれ違つた後でも考へて見たが、どうしても思ひ出せなかつた。が、何だか風流な氣がした。それから賑な往來へ出ると、ぽつぽつ雨が降つて來た。その時急にさつきの女と、以前遇つた所を思ひ出した。今度は急に下司な氣がした。四五日後折柴と話してゐると、底に穴を明けた瀬戸の火鉢へ、緣日物の木犀を植ゑて置いたら、花をつけたと云ふ話を聞かせられた。さうしたら又牛込で遇つた女の事を思ひ出した。が、下司な氣は少しもしなかつた。（十月十日）

サムエル・バトラアの説に云ふ。「モリエルが無智の老媼に自作の臺本を讀み聞かせたと云ふは、何も老媼の批評を正しとしたのではない。唯自ら朗讀する間に、自ら臺本の瑕疵を見出すが爲である。かかる場合聽き手を勤むるものは、無智の老媼に若くものはあるまい」と。まことに一理ある説である。白居易などが老媼に自作の詩を讀み聽かせたと云ふのも、同じやうな心があつたのかも知れぬ。しかし自分がバトラアの説を面白しとするのは、啻に一理あるが故のみではない。この説はバトラアのやうに創作の經驗がある人でないと、道破されさうもない説だからである。成程世のつねの學者や批評家にも、モリエルの喜劇はわかるかも知れぬ。が、それだけでは立ちどころに、バトラアの説が吐けるものではない。こんな消息に通じるには、おのれの中にモリエルその人を感じてゐなければ駄目である。其處が自分には難有い氣がする。ロダンの手記なぞが尊いのも、かう云ふ所が多い故だ。二千里外に故人の面を見ようと思つたら、どうしても自ら苦まねばならぬ。(十月十九日)

今夜

今夜は心が平かである。机の前にあぐらをかきながら、湯に溶かしたブロチンを啜つてゐれば、泰平の民の心もちがする。かう云ふ時は小説なぞ書いてゐるのが、あさましいやうにも考へられ

る。そんな物を書くよりは、發句の稽古でもしてゐる方が、餘程養生になるではないか。發句より手習ひでもしてゐれば、もつと事が足りるかも知れぬ。いや、それより今かうして坐つてゐる心もちがその儘難有いのを知らぬかなぞとも思ふ。おれは道書も佛書も讀んだ事はない。が、どうもおれの心の底には、虛無の遺傳が潛んでゐるやうだ。西洋人がいくらもがいて見ても、結局はカトリツクの信仰に舞ひ戾るやうに、おれなぞはだんだん年をとると、隱棲か何かがしたくなるかも知れない。が、まだ今のやうに女に惚れたり、金が欲しかつたりしてゐる內は、到底思ひ切つた眞似は出來さうもないな。尤も仙人と云ふ中には、祝雞翁のやうな蓄產家や郭璞のやうな漁色家がある。ああ云ふ仙人にはすぐになれさうだ。しかしどうせなる位なら、俗な仙人にはなりたくない。横文字の讀める若隱居なぞは、猶更おれは眞平御免だ。そんなものよりは小說家の方が、まだしも道に近いやうな氣がする。「尋仙未向碧山行　住在人間足道情」かな。何だか今夜は半可通な獨り語ばかり書いてしまつた。（十月二十日）

夢

世間の小說に出て來る夢は、どうも夢らしい心もちがせぬ。大抵は作爲が見え透くのである。「罪と罰」の中の困馬の夢でも、やはりこの意味ではまことらしくない。夢のやうな話なぞと云ふ

が、夢は夢らしく書きこなす事は、好い加減な現實の描寫よりも、反つて周到な用意が入る。何故かと云ふと夢中の出來事は、時間も空間も因果の關係も、現實とは全然違つてゐる。しかもその違ひ方が、到底型には嵌める事が出來ぬ。だから實際見た夢でも寫さない限り、夢らしい夢を書く事は、殆不可能と云ふ外はない。所が小說中夢を道具に使ふ場合は、その道具の目的を果す必要上、よくよく都合の好い夢でも見ねば、實際見た夢を書く訣に行かぬ。この故に小說に出て來る夢は、善く行つた所がドストエフスキイの困馬の夢を出難いのである。しかし實際見た夢から、逆に小說を作り出す場合は、その夢が夢として書かれて居らぬ時でも、夢らしい心もちが現れる故、往々神祕的な作品が出來る。名高い自殺俱樂部の話なぞも、スティヴンソンがあの落想を得たのは、誰かが見た夢の話からだと云ふ。この故にさう云ふ小說を書かうと思つたら、時時の夢を記して置くが好い。自分なぞはそれも怠つてゐるが、ドオデエには確か夢の手記があつた。わが朝では志賀直哉氏に、「イヅク川」と云ふ好小品がある。（十月二十五日）

日本畫の寫實

日本畫家が寫實にこだはつてゐるのは、どう考へても妙な氣がする。それは寫實に進んで行つても、或程度の成功を收められるかも知れぬ。が、いくら成功を收めたにしても、洋畫程寫實が

出來る筈はない。光だの、空氣だの、質量だのの感じが出したかつたら、何故さきにパレットを執らないのか。且又さう云ふ感じを出さうとするのは、印象派が外光の效果を出さうとしたのとは、餘程趣が違つてゐる。佛人は一歩先へ出たのだ。日本畫家が寫實にこだはるのは、一歩横へ出ようとするのだ。自分は速水御舟氏の舞妓の畫なぞに對すると、如何にも日本畫に氣の毒な氣がする。昔芳幾が描いた寫眞畫と云ふ物は、あれと類を同じくしてゐたが、求める所が鄙俗なだけ、反つてあれ程嫌味はない。甚失禮な申し分ながら、どうも速水氏や何かの畫を作る動機は、存外足もとの浮いた所が多さうに思はれてならぬのである。（十一月一日）

理解

一時は放蕩さへ働けば、一かど藝術がわかるやうに思ひ上つた連中がある。この頃は道義と宗教とを談ずれば、芭蕉もレオナルド・ダ・ヴィンチも一呑みに呑みこみ顔をする連中がある。ヴィンチは兎も角も、芭蕉さへ一通り偉さがわかるやうになるのは、やはり相當の苦勞を積まねばならぬ。ことによると末世の我々には、死身に思ひを潛めた後でも、まだ會得されない芭蕉の偉さが殘つてゐるかも知れぬ位だ。ジアン・クリストフの中に、クリストフと同じやうにベエトオフエンがわかると思つてゐる俗物を書いた一節がある。わかると云ふ事は世間が考へる程、無造

作に出來る事ではない。何事も藝道に志したからは、わかつた上にもわからうとする心がけが肝腎なやうだ。さもないと野狐に墮してしまふ。偶電氣と文藝所載の諸家の芭蕉論の中に、一二孟浪杜撰の說を見出した故、不平のあまり書きとどめる。（十一月四日）

茶釜の蓋置き

今日香取秀眞氏の所にゐたら、茶釜の蓋置きを三つ見せてくれた。小さな鐵の五德のやうな物である。それが三つとも形が違ふ。違ふと云つた所が五德同樣故、三本の足と環との釣合ひが、僅に違つてゐるに過ぎない。が三つとも明らかに違ふ。見てゐれば見てゐる程愈違ひが甚しい。一つは莊重な心もちがする。一つは氣の利いた、洒脫な物である。最後の一つは見るに堪へぬ。これ程簡單な物にもこれ程出來の違ひがあるかと思つたら、何事も藝道は恐しい氣がした。一刀一拜の心もちが入るのは、佛を刻む時ばかりでないと云ふ氣がした。名人の仕事に思ひ比べれば、我々の書き殘した物なぞは、悉焚燒しても惜しくはないと云ふ氣がした。考へれば考へる程愈底の知れなくなるものは天下に藝道唯一つである。（十一月十一日）

西洋人

茶碗に茶を汲んで出すと、茶を飲む前にその茶碗を見る。これは日本人には家常茶飯に見る事だが、西洋人は滅多にやらぬらしい。「結構な珈琲茶碗でございます」などと云ふ言葉は、西洋小說中にも見えぬやうである。それだけ日本人は藝術的なのかも知れぬ。或はそれだけ日本人の藝術は、細い所にも手がとどくのかも知れぬ。リイチ氏などは立派な陶工だが、皿や茶碗の仕事を見ると、裏には心がはひつて居らぬやうだ。これなぞも誰か注意さへすれば、何でもない事だとは云ふものの、其處に爭はれぬ西洋人を感ずるやうな心もちがする。（十一月十一日）

粗密と純雜

粗密は氣質の差によるものである。粗を嫌ひ密を喜ぶのは、各好む所に從ふが好い。しかし粗密と純雜とは、自ら又異つてゐる。純雜は氣質の差のみではない。更に人格の深處に根ざした、我々が一生の一大事である。純を尊び雜を卑むのは、好惡の如何を超越した批判の沙汰に移らねばならぬ。今夜ふと菊池寛著す所の「極樂」を出して見たが、菊池の小說の如きは粗とは云へても、終始雜俗の氣には汚れてゐない。その證據には作中の言葉が、善かれ惡しかれ滿ちてゐる。唯一不二の言葉ばかり使つてないにしろ、白痴脅しの言葉は並んでゐない。あれはあれなりに出來上つた、他に類のない小說である。その點では一二の大家先生の方が、遙に雜俗の屎臭を放つてゐ

ると思ふ。粗密は前にも書いた通り、氣質の違ひによるものである。だから鑑賞の上から云へば、菊池の小說を好むと好まざるとは、何人も勝手に聲明するが好い。しかしその藝術的價値の批判にも、粗なるが故に許し難いとするのは、好む所に偏するの譏を免れぬ。同時に又創作の上から云へば、菊池の小說は菊池の氣質と切り離し難い物である。あの粗は決して等閑に書き流した結果然るのではない。その故に他の作家、殊に本來密を喜ぶ作家が、妄に菊池の小說作法を踏襲したら、勢雜俗の病に陷らざるを得ぬ。自分なぞは氣質の上では、可也菊池と隔つてゐる。だから粗密の好みを云へば、一致しない點が多いかも知れぬ。が、純雜を論ずれば、必しも我等は他人ではない。（十一月十二日）

（大正九年）

骨董羹

——壽陵余子の假名のもとに筆を執れる戲文——

別乾坤

Judith Gautier が詩中の支那は、支那にして又支那にあらず。葛飾北斎が水滸畫傳の插畫も、誰か又是を以て如實に支那を寫したりと云はん。さればかの明眸の女詩人も、この短髮の老畫伯も、その無聲の詩と有聲の畫とに彷彿たらしめし所謂支那は、寧ろ彼等が白日夢裡に逍遙遊を恣にしたる別乾坤なりと稱すべきか。人生幸にこの別乾坤あり。誰か又小泉八雲と共に、天風海濤の蒼々浪々たるの處、去つて還らざる蓬萊の蜃中樓を歎く事をなさん。（一月二十二日）

輕薄

元の李衎、文湖州の竹を見る數十幅、悉く意に滿たず。東坡山谷等の評を讀むも亦思ふらく、その交親に私するならんと。偶友人王子慶と遇ひ、話次文湖州の竹に及ぶ。子慶曰、君未眞蹟を見ざるのみ。府史の藏本甚眞、明日借り來つて示すべしと。翌日卽之を見れば、風枝抹疎として寒煙を拂ひ、露葉蕭索として清霜を帶ぶ、恰も渭川淇水の間に坐するが如し。衎感歎措く

能はず。大いに聞見の寡陋を恥ぢたりと云ふ。術の如きは未だ恕すべし。かの寫眞版のセザンヌを見て色彩のヴアリユルを喋々するが如き、論者の輕薄唾棄するに堪へたりと云ふべし。戒めずんばあるべからず。（一月二十三日）

俗漢

バルザツクのペエル・ラシエエズの墓地に葬らるるや、棺側に侍するものに内相バロツシユあり。送葬の途上同じく棺側にありしユウゴオを顧みて尋ぬるやう「バルザツク氏は材能の士たりしにや」と。ユウゴオ怫吁として答ふらく「天才なり」と。バロツシユその答にや憤りけん傍人に囁いて云ひけるは、「このユウゴオ氏も聞きしに勝る狂人なり」と。佛蘭西の臺閣亦這般の俗漢なきにあらず。日東帝國の大臣諸公、意を安んじて可なりと云ふべし。（一月二十四日）

同性戀愛

ドオリアン・グレエを愛する人は Escal Vigor を讀まざる可からず。男子の男子を愛するの情、この書の如く遺憾なく描寫せられしはあらざる可し。書中若しこれを飜譯せんか。我當局の忌違に觸れん事疑なきの文字少からず。出版當時有名なる訴訟事件を惹起したるも、亦是等艶

治の筆の累する所多かりし由。著者 George Eekhoud は白耳義近代の大手筆なり。聲名必しもカミユ・ルモニエの下にあらず。されど多士濟々たる日本文壇、未この人が等身の著述に一言の紹介すら加へたるもの無し。文藝豈獨り北歐の天地にのみ、オウロラ・ボレアリスの盛觀をなすものならんや。(一月二十五日)

同人雜誌

年少の子弟醵金して、同人雜誌を出版する事、當世の流行の一つなるべし。されど紙代印刷費用共に甚廉ならざる今日、經營に苦しむもの亦少からず。傳へ聞く、ル・メルキウル・ド・フランスが初號を市に出せし時も、元より文壇不遇の士の黃白に裕なる筈なければ、やむ無く一株六十法の債券を同人に募りしかど、その唯一の大株主たるジユウル・ルナアルが持株すら僅々四株に過ぎざりしとぞ。しかもその同人の中には、アルベエル・サマンの如き、レミ・ド・グルモンの如き、一代の才人多かりしを思へば、當世流行の同人雜誌と雖も、資金の甚潤澤ならざるを憾むべき理由なきに似たり。唯、得難きは當年のル・メルキウルに、象徴主義の大旆を樹てしが如き英靈底の漢一ダアスのみ。(一月二十六日)

日本の作家今は多く雅號を用ひず。文壇の新人舊人を分つ、殆雅號の有無を以てすれば足るが如し。されば前に雅號ありしも捨てて用ひざるさへ少からず。雅號の薄命なるも亦甚しいかな。露西亞の作家にオシツプ・ディモフと云ふものあり。チエホフが短篇「蟬」の主人公と同名なりしと覺ゆ。ディモフはその名を借りて雅號となせるにや。博覽の士の示教を得れば幸甚なり。

(一月二十八日)

青樓

佛蘭西語に妓樓を la maison verte と云ふは、ゴンクウルが造語なりとぞ。蓋し青樓美人合せの名を飜譯せしに出づるなるべし。ゴンクウルが日記に云ふ。「この年(千八百八十二年)わが納的なる日本美術品蒐集の爲に費せし金額、實に三千法に達したり。これわが收入の全部にして、懐中時計を購ふべき四十法の殘餘さへ止めず」と。又云ふ。「數日以來(千八百七十六年)日本に赴かばやと思ふ心止め難し。されどこの旅行はわが日頃の蒐集癖を充さんが爲のみにはあらず。われは夢む、一卷の著述を成さん事を。題は『日本の一年』。日記の如き體裁。敍述よりも情調。かく

せば比類なき好文字を得べし。唯、わがこの老を如何」と。日本の版畫を愛し、日本の古玩を愛し、更に又日本の菊花を愛せる伶俜孤寂のゴンクウルを想へば、青樓の一語短なりと雖も、無限の情味なき能はざるべし。（一月二十九日）

言語

言語は元より多端なり。山と云ひ、嶽と云ひ、峯と云ひ、巒と云ふ。義の同うして字の異なるを用ふれば、即ち意を隱微の間に偶するを得べし。大食ひを大松と云ひ差出者を左兵衛次と云ふ。聞くものにして江戸つ子ならざらんか、面罵せらるるも猶恬然たらん。試に思へ、品蕭の如き、後庭花の如き、倒澆燭の如き、金瓶梅肉蒲團中の語彙を借りて一篇の小說を作らん時、善くその淫褻俗を壞るを看破すべき檢閲官の數何人なるかを。（一月三十一日）

誤譯

カアライルが獨逸文の飜譯に誤譯指摘を試みしはデ・クインシイがさかしらなり。されどチエルシイの哲人はこの後進の鬼才を遇する事反つて甚だ篤かりしかば、デ・クインシイも亦その襟懷に服して百年の心交を結びたりと云ふ。カアライルが誤譯の如何なりしかは知らず。予が知れ

る誤譯の最も滑稽なるはマドンナを奥さんと譯せるものなり。譯者は樂園の門を守る下僕天使にもあらざるものを。（二月一日）

戲訓

往年久米正雄氏ショウを訓して笑迂と云ひ、イブセンを訓して燻仙と云ひ、メエテルリンクを訓して瞑照燐火と云ひ、チエホフを訓して知慧豐富と云ふ。戲訓と稱して可ならん乎。二人比丘尼の作者鈴木正三、その耶蘇教弁斥の書に題して破鬼理死端と云ふ。亦惡意ある戲訓の一例たるべし。（二月二日）

俳句

紅葉の句未古人靈妙の機を會せざるは、獨りその談林調たるが故のみにもあらざるべし。この人の文を見るも楚々たる落墨直に松を成すの妙はあらず。長ずる所は精整緻密、花を描いて一細草の點綴を忘れざる巧にあり。句に短なりしは當然ならずや。牛門の秀才鏡花氏の句品遂に師翁の上に出づるも、亦この理に外ならざるのみ。遮莫、齋藤綠雨が彼縱横の才を藏しながら、句は遂に沿門獨黑の輩と軒輊なかりしこそ不思議なれ。（二月四日）

松並木

東海道の松並木伐らるべき由、何時やらの新聞紙にて讀みたる事あり。元より道路改修の爲とあれば止むを得ざるには似たれども、これが爲に百尺の枯龍斧鉞の災を蒙るもの百千なるべきに想到すれば、惜みても猶惜むべき限りならずや。ポオル・クロオデル日本に來りし時、この東海道の松並木を見て作る所の文一篇あり。瘦蓋煙を含み危根石を倒すの狀、描き得て靈彩奕々たりと云ふべし。今やこの松並木亡びんとす。クロオデルもしこれを聞かば、或は恐る、黃面の豎子未王化に浴せずと長太息に堪へざらん事を。（一月五日）

日本

ゴオティエが娘の支那は旣に云ひぬ。José Maria de Heredia が日本も亦別乾坤なり。簾裡の美人琵琶を彈じて鐵衣の勇士の來るを待つ。景情元より日本ならざるに非ず。(le samourai) されどその絹の白と漆と金とに彩られたる世界は、却つて是縹渺たるパルナシアンの夢幻境のみ。しかもエレデイアの夢幻境たる、もしその所在を地圖の上に按じ得べきものとせんか、恐らく佛蘭西には近けれども、日本には遙に隔りたるべし。彼ゲエテの希臘と雖も、トロイの戰の勇士の

口には一沫ミュンヘンの麥酒の泡の未消えざるを如何にすべき。歎ずらくは想像にも亦國籍の存する事を。（二月六日）

大雅

東海の畫人多しとは云へ、九霞山樵の如き大器又あるべしとも思はれず。されどその大雅すら、年三十に及びし時、意の如く技の進まざるを憂ひて、教を祇南海に請ひし事あり。血性大雅に過ぐるもの、何ぞ進歩の遲々たるに焦燥の念無きを得可けんや。唯、返へす返すも學ぶべきは、聖胎長養の機を誤らざりし九霞山樵の工夫なるべし。（二月七日）

妖婆

英語に witch と唱ふるもの、大むねは妖婆と飜譯すれど、年少美貌のウイッチ亦決して少しとはいふべからず。メレジュコウスキイが「先覺者」ダンヌンツイオが「ジョリオの娘」或は遙に品下れどクロオフオオドが Witch of Prague など、蘋玉の如きウイッチを描きしもの、尋ぬれば猶多かるべし。されど白髮蒼顏のウイッチの如く、活躍せる性格少きは否み難き事實ならんか。スコット、ホオソオンが昔は問はず、近代の英米文學中、妖婆を描きて出色なるものは、キップリ

ングが The Courting of Dinah Shadd の如き、或は隨一とも稱すべき乎。ハアディが小說にも、妖婆に材を取る事珍らしからず。名高き Under the Greenwood の中なる、エリザベス・エンダアフィルドもこの類なり。日本にては山姥鬼婆共に純然たるウイツチならず。支那にてはかの夜譚隨錄載する所の夜星子なるもの、略妖婆たるに近かるべし。（二月八日）

柔術

西人は日本と云ふ每に、必柔術を想起すと聞けり。さればにやアナトオル・フランスが「天使の反逆」の一章にも、日本より巴里に來れる天使佛蘭西の巡査を捻い摑んで物も見事に投げ捨つるくだりあり。モオリス・ルブランが探偵小說の主人公俠賊リュパンが柔術に通じたるも、日本人より學びし所なりとぞ。されど日本現代の小說中、柔術の妙を極めし主人公は僅に泉鏡花氏が「芍薬の歌」の桐太郞のみ。柔術も亦豫言者は故鄕に容れられざるの歎無きを得んや。好笑好笑。（二月十日）

昨日の風流

趙甌北が吳門雜詩に云ふ。看盡煙花細品評、始知佳麗也虛名、從今不作繁華夢、消

領茶煙一縷清。又その山塘の詩に云ふ。老入歡場感易増、煙花猶記昔遊曾、酒樓舊日紅粧女、已似禪家退院僧。一腔の詩情殆 永井荷風氏を想はしむるものありと云ふべし。（一月十一日）

發音

ポオの名 Quantin 版に Poë と印刷せられてより、佛蘭西を始め諸方にポオエの發音行はれし由。予等が英文學の師なりし故ロオレンス先生も、時にポオエと發音せられしを聞きし事あり。西人の名の發音の誤り易きはさる事ながら、ホイツトマン、エマスンなどを崇め尊ぶ人のわが佛の名さへアクセントを誤りたるは、無下にいやしき心地せらる。愼まざる可らざるなり。（二月十三日）

傲岸不遜

一靑年作家或會合の席上にて、われら文藝の士はと云ひさせしに、傍なるバルザツク忽ちその語を遮つて云ひけるは、「君の我等に伍せんとするこそ烏滸がましけれ。我等は近代文藝の將帥なるを」と。文壇の二三子夙に傲岸不遜の譏ありと聞く。されど予は未一人のバルザツクに似たる

ものを見ず。元より人間喜劇の著述二三子の手に成るを聞かざれども。（二月十五日）

煙草

煙草の世に行はれしは、亞米利加發見以後の事なり。埃及、亞刺比亞、羅馬などにも、喫煙の俗ありしと云ふは、青盲者流のひが言のみ。亞米利加土人の煙を嗜みしは、コロムブスが新世界に至りし時、既に葉巻あり、刻みあり、嗅煙草ありしを見て知るべし。タバコの名も實は植物の名稱ならで、刻みの煙を味ふべきパイプの意なりしぞ滑稽なる。されば歐洲の白色人種が喫煙に新機軸を出したるは、僅に一事輕便なるシガレツトの案出ありしのみ。和漢三才圖會によれば、南蠻紅毛の甲比丹がまづ日本に船載したるも、このシガレツトなりしものの如し。村田の煙管未世に出でざりし時、われらが祖先は既にシガレツトを口にしつつ、春日煕々たる山口の街頭、天主會堂の十字架を仰いで、西洋機巧の文明に讃嘆の聲を惜まざりしならん。（二月二十四日）

ニコチン夫人

ボオドレエルがパイプの詩は元より、Lyra Nicotiana を飜すも、西洋詩人の喫煙を愛づるは、東洋詩人の點茶を悅ぶと好一對なりと云ふを得べし。小說にてはバリイが「ニコチン夫人」最も人

口に膾炙したり。されど唯輕妙の筆、容易に讀者を微笑せしむるのみ。ニコチンの名、もと佛蘭西人ジアン・ニコツトより出づ。十六世紀の中葉、ニコツト大使の職を帶びて西班牙に派遣せらるるや、フロリダ渡來の葉煙草を得て、その醫療に效あるを知り、栽培大いに努めしかば、一時は佛人煙草を呼んでニコチアナと云ふに至りしとぞ。デ・クインシイが「阿片喫煙者の懺悔」は、さきに佐藤春夫氏をして「指紋」の奇文を成さしめたり。誰か又バリイの後に出でて、バリイを拔く事數等なる、恰もハヴアナのマニラに於ける如き煙草小說を書かんものぞ。（二月二十五日）

一字の師

唐の任翻天台巾子峯に遊び、詩を寺壁に題して云ふ。「絶頂新秋生夜涼。鶴翻松露滴衣裳。前峯月照一江水。僧在翠微開竹房。」題し畢つて後行く事數十里、途上一江水は半江水に若かざるを覺り、直に題詩の處に回れば、何人か既に「一」字を削つて「半」字に改めし後たりき。翻長太息に堪へずして曰、台州有人と。古人が詩に心を用ふる、慘憺經營の跡想ふべし。靑々が句集妻木の中に、「初夢や赤なる紐の結ぼほる」の句あり。予思ふらく、一字不可、「る」字に易ふに「れ」字を以てすれば可ならんと。知らず、靑々予を拜して能く一字の師と做すや否や。一笑。（二月二十六日）

應酬

ユウゴオ一夕宴をアヴニウ・ディロオの自邸に張る。偶衆客皆杯を擧げて主人の健康を祝するや、ユウゴオ傍なるフランソア・コツペエを顧みて云ふやう、「今この席上なる二詩人迭に健康を祝さんとす。亦善からずや」と。意コツペエが爲に乾杯せんとするにあり。コツペエ辭して云ふ、「否、否、座間詩人は唯一人あるのみ」と。意詩人の名に背かざるものは唯ユウゴオ一人のみなるを云ふなり。時に「オリアンタアル」の作者、忽ち破顔して答ふるやう、「詩人は唯一人あるのみとや。善し、さらば我は如何」と。意コツペエが言を翻しておのが抑損を示せるなり。曰く「僧院の秋」の會、曰く「三浦製絲場主」の會、曰く猫の會、曰く杓子の會、方今の文壇會甚多しと雖も、未滑脱の妙を極めたる、斯くの如き應酬ありしを聞かず。傍に人あり。嗤つて云ふ、「請ふ、隗より始めよ」と。（二月二十七日）

白雨禪

狩野芳涯常に諸弟子に教へて曰、「畫の神理、唯當に悟得すべきのみ。師授によるべからず」と。一日芳涯病んで臥す。偶白雨天を傾けて來り、深巷寂として行人を絕つ。師弟共に默して雨聲

を聽くもの多時、忽ち一人あり。高歌して門外を過ぐ。芳涯莞爾として、諸弟子を顧みて曰く「會せりや」と。句下殺人の意あり。吾家の吹毛劍、單于千金に購ひ、妖精太陰に泣く。一道の寒光、君看取せよ。（三月三日）

批評

ピロンが、皮肉は世に聞えたり。一文人彼に語るに前人未發の業を成さん事を以てす。ピロン冷然として答ふらく、「易々たるのみ。君自身の讚辭を作らば可」と。當代の文壇、聞くが如くんば、黨派批評あり。賣笑批評あり。挨拶批評あり。雷同批評あり。紛々たる毀譽褒貶、庸愚の才が自讃の如きも、一犬の虛に吠ゆる處、萬犬亦實を傳へて、必しもピロンが所謂、前人未發の業と做す可らず。壽陵余子生れてこの季世にあり。ピロンたるも亦難いかな。（三月四日）

語謬

門前の雀羅蒙求を囀ると說く先生あれば、燎原を燒く火の如しと辯ずる夫子あり。明治神宮の用材を贊して、彬々たるかな文質と云ふ農學博士あれば、海陸軍の擴張を議して、艨艟罷休あらざる可らずと云ふ代議士あり。昔は姜度の子を誕するや、李林甫手書を作つて曰く、聞く、弄麞の

喜ありと。客之を視て口を掩ふ。蓋し林甫の璋字を誤つて、麞字を書せるを笑へるなり。今は大臣の時勢を慨するや、危險思想の瀰漫を論じて曰、病既に膏肓に入る、國家の興廢旦夕にありと。然れども天下怪しむ者なし。漢學の素養の顧られざる、亦甚しと云はざる可らず。況や方今の青年子女、レツテルの英語は解すれども、四書の素讀は覺束なく、トルストイの名は耳に熟すれども、李青蓮の號は眼に疎きもの、紛々として數へ難し。頃日偶 青林の店頭に、數冊の古雜誌を見る。題して紅潮社發兌紅潮第何號と云ふ。知らずや、漢語に紅潮と云ふは女子の月經に外ならざるを。（四月十六日）

入月

西洋に女子の紅潮を歌へる詩ありや否や、寡聞にして未之を知らず。支那には宮掖閨閤の詩中、稀に月經を歌へるものあり。王建が宮詞に曰「密奏君王知入月、喚人相伴洗裙裾」と。春風珠簾を吹いて、銀鉤を蕩するの處、蛾眉の宮人の衣裙を洗ふを見る、月事も亦風流ならずや。
（四月十六日）

西洋に男子の遺精を歌へる詩ありや否や、寡聞にして未之を知らず。日本には俳諧錦繍段に、「遺精驚く曉のゆめ、神叔」とあり。但この遺精の語義、果して當代に用ふる所のものと同じきや否やを詳にせず。識者の示教を得ば幸甚なり。（四月十六日）

後世

君見ずや。本阿彌の折紙古今に變ず。羅曼派起つてシエクスピイアの名、四海に轟く事迅雷の如く、羅曼派亡んでユウゴオの作、八方に廢るる事霜葉に似たり。茫々たる流轉の相。目前は泡沫、身後は夢幻。智音得可からず。衆愚度し難し。フラゴナアルの技を以太利に修めんとするや、ブウシエその行を送つて曰、「ミシエル・アンジユが作を見ること勿れ。彼が如きは狂人のみ」と。ブウシエを晒つて俗漢と做す、豈敢て難しとせんや。遮莫千年の後、天下靡然としてブウシエの見に赴く事無しと云ふ可らず。白眼當世に傲り、長嘯後代を待つ、亦是鬼窟裡の生計のみ。何ぞ若かん、俗に混じて、しかも自ら俗ならざるには。籬に菊有り。琴に絃無し。南山見來れば常に悠々。壽陵余子文を陋屋に賣る。願くば一生後生を云はず、紛々たる文壇の張三李四と、トルストイを談じ、西鶴を論じ、或は又甲主義乙傾向の是非曲直を喋々して、遊戯三昧の境に安んぜんかな。（五月二十六日）

鷗外先生を主筆とせる「しがらみ草紙」第四十七號に、謫天情僊の七言絶句、「讀罪與罰上篇」數首あり。泰西の小説に題するの詩、嚆矢恐らくはこの數首にあらんか。左にその二三を抄出すれば、「考慮閃來如電光、茫然飛入老婆房、自談罪跡眞耶假、警吏暗殺狂不狂」(第十三回)「窮女病妻哀涙紅、車聲轣轆仆家翁、傾嚢相救客何俠、一度相逢酒肆中」(第十四回)「可憐小女去邀賓、慈善書生半死身、見到室中無一物、感恩人是動情人」(第十八回)の如し。詩の佳否は暫く云はず、明治二十六年の昔、既に文壇ドストエフスキイを云々するもののありしを思へば、この數首の詩に對して破顔一番するを禁じ難きもの、何ぞ獨り壽陵余子のみならん。(五月二十七日)

惡魔

惡魔の數甚多し。總數百七十四萬五千九百二十六匹あり。分つて七十二隊を爲し、一隊毎に隊長一匹を置くとぞ。是れ十六世紀の末葉、獨人 Wierus が惡魔學に載する所、古今を問はず、東西を論ぜず、魔界の消息を傳へて詳密なる、斯くの如きものはあらざるべし。(十六世紀の歐羅

巴には、悪魔學の先達尠からず。ヴイルスが外にも、以太利の Pietro d'Apone の如き、英吉蘭の Reginald Scot の如き、皆天下に雷名あり。）又曰「悪魔の變化自在なる、法律家となり、昆侖奴となり、黒驪となり、僧人となり、驢となり、猫となり、兎となり、或は馬車の車輪となる」と。既に馬車の車輪となる。豈半夜人を誘つて、煙花城中に去らんとする自動車の車輪とならざらんや。畏る可く、戒む可し。（五月二十八日）

聊齋志異

聊齋志異が剪燈新話と共に、支那小説中、鬼狐を說いて、寒燈爲に青からんとする妙を極めたるは、洽く人の知る所なるべし。されど作者蒲松齡が、滿洲朝廷に潔からざるの餘り、牛鬼蛇神の譚に託して、宮掖の隱微を諷したるは、往々本邦の讀者の爲に、看過せらるるの憾みなきに非ず。例へば第二卷所載俠女の如きも、實は宦人年羹堯の女が、雍正帝を暗殺したる祕史の飜案に外ならずと云ふ。崑崙外史の題詞に、「董狐豈獨人倫鑒」と云へる、亦這般の消息を洩らせるものに非ずして何ぞや。西班牙にゴヤの Los Caprichos あり。支那に留仙の聊齋志異あり。共に山精野鬼を借りて、亂臣賊子を罵殺せんとす。東西一双の白玉瓊、金匱の藏に堪へたりと云ふべし。（五月二十八日）

西班牙に麗人あり。Dona Maria Theresa と云ふ。若くしてヴィラフランカ十一代の侯 Don José Alvalez de Toledo に嫁す。明眸絳脣、香肌白き凝脂の如し。女王マリア・ルイザ、その美を妬み、遂に之を鴆殺せしむ。人間止め得たり一香嚢の長恨ある、かの楊太眞と何れぞや。侯爵夫人に情郎あり。Francesco de Goya と云ふ。ゴヤは畫名を西班牙に馳するもの、生前屢ドンナ・マリア・テレサの像を描く。俗傳にして信ずべくんば、Maja vestida と Maja desnuda との兩畫幀、亦實に侯爵夫人が一代の國色を傳ふるが如し。後年佛蘭西に一畫家あり。Edouard Manet と云ふ。ゴヤが侯爵夫人の畫像を得て、狂喜自ら禁ずる能はず。直にその畫像を模して、一幀春の如き麗人圖を作る。マネ時に印象派の先達たり。交を彼と結ぶもの、當世の才人尠からず。その中に一詩人あり。Charles Baudelaire と云ふ。マネが侯爵夫人の畫像を得て、愛翫する事洪璧の如し。千八百六十六年、ボオドレエルの狂疾を發して、巴里の寓居に絕命するや、壁間亦この檀口雪肌、天仙の如き麗人圖あり。星眼長へに秋波を浮べて、「惡の華」の詩人が臨終を見る、猶往年マドリッドの宮廷に、黃面の侏儒が觔斗の戲を傍觀するが如くなりしと云ふ。（五月二十九日）

賣色鳳香餅

支那に龍陽の色を賣る少年を相公と云ふ。相公の語、もと像姑より出づ。妖嬈恰も姑娘の如くなるを云ふなり。像姑相公同音相通ず。卽用ひて陰馬の名に換へたるのみ。支那に路上春を鬻ぐの女を野雉と云ふ。蓋し徘徊行人を誘ふ、恰も野雉の如くなるを云ふなり。邦語にこの種を夜鷹と云ふ。殆ど同一轍に出づと云ふべし。野雉の語行はれて、野雉車の語出づるに至る。野雉車とは抑何ぞ。北京上海に出沒する、無鑑札の朦朧車夫なり。（五月三十日）

泥黎口業

壽陵余子雜誌「人間」の爲に、骨董羹を書く事既に三回。東西古今の雜書を引いて、衒學の氣焰を擧ぐる事、恰もマクベス曲中の妖婆の鍋に類せんとす。知者は三千里外にその臭を避け、味者は一彈指間にその毒に中る。思ふに是泥黎の口業。羅貫中水滸傳を作つて、三生啞子を生むとせば、壽陵余子亦骨董羹を書いて、抑如何の冥罰をか受けん。默殺か。撲滅か。或は余子の小說集、一冊も市に賣れざるか。若かず、速に筆を投じて、醉中獨り繡佛の前に逃禪の閑を愛せんには。昨の非を悔い今の是を知る。何ぞ須臾も踟躕せん。拋下す、吾家の骨董羹。今日喫し得て珍重な

らば、明日厠上に瑞光あらん、糞中の舎利、大家看よ。（五月三十日）

（大正九年）

支那の畫

雲林を見たのは唯一つである。その一つは宣統帝の御物、今古奇觀と云ふ畫帖の中にあつた。畫帖の中の畫は大部分、董其昌の舊藏に係るものらしい。雲林筆と稱へる物は、文華殿にも三四幅あつた。しかしその畫帖の中の、雄勁な松の圖に比べれば、遙かに畫品の低いものである。

わたしは梅道人の墨竹を見、黃大癡の山水を見、王叔明の瀑布を見た。（文華殿の瀑布圖ではない。陳寶琛氏藏の瀑布圖である）が、氣稟の然らしむる所か頭の下つた事を云へば、雲林の松に及ぶものはない。

松は尖つた岩の中から、眞直に空へ生え拔いてゐる。その梢には石英のやうに、角張つた雲煙が橫はつてゐる。畫中の景はそれだけである。しかしこの幽絕な世界には、雲林の外に行つたものはない。黃大癡の如き巨匠さへも此處へは足を踏み入れずにしまつた。況や明淸の畫人をやで

ある。

南畫は胸中の逸氣を寫せば、他は措いて問はないと云ふが、この墨しか着けない松にも、自然は髣髴と生きてゐはしないか？　油畫は眞を寫すと云ふ。しかし自然の光と影とは、一刻も同一と云ふ事は出來ない。モネの薔薇を眞と云ふか、雲林の松を假と云ふか、所詮は言葉の意味次第ではないか？　わたしはこの圖を眺めながら、そんな事も考へた覺えがある。

蓮鷺圖

志賀直哉氏の藏する宋畫に、蓮花と鷺とを描いたのがある。南蘋などの蓮の花は、この畫よりも所謂寫生に近い。花瓣の薄さや葉の光澤は、もつと如實に寫してある。しかしこの畫の蓮のやうに、空靈澹蕩たる趣はない。

この畫の蓮は花でも葉でも、悉どつしり落ち着いてゐる。殊に蓮の實の如きは、古色を帶びた絹の上に、その實の重さを感ぜしめる程、金屬めいた美しさを保つてゐる。鷺も亦唯の鷺ではない。背中の羽根を逆に撫でたら、手の平に羽先がこたへさうである。かう云ふ重々しい全體の感じは、近代の畫にないばかりではない。大陸の風土に根を下した、隣邦の畫にのみ見られるも

のである。
日本の畫は勿論支那の畫と、親類同士の間がらである。しかしこの粘り强さは、古畫や南畫にも見當らない。日本のはもつと輕みがある。同時に又もつと優しみがある。八大の魚や新羅の鳥さへ、大雅の巖下に游んだり、蕪村の樹上に棲んだりするには、餘りに逞しい氣がするではないか？　支那の畫は實に思ひの外、日本の畫には似てゐないらしい。

鬼趣圖

天津の方若氏のコレクションの中に、珍しい金冬心が一幅あつた。これは二尺に一尺程の紙へ、いろいろの化け物を描いたものである。

羅兩峯の鬼趣圖とか云ふのは、寫眞版になつたのを見た事があつた。兩峯は冬心の御弟子だから、あの鬼趣圖のプロトタイプも、こんな所にあるのかも知れない。兩峯の化け物は寫眞版によると、妙に無氣味な所があつた。冬心のはさう云ふ妖氣はない、その代りどれも可愛げがある。こんな化け物がゐるとすれば、夜色も晝よりは明るいであらう。わたしは蕭々たる樹木の間に、彼等の群つたのを眺めながら、化け物も莫迦には出來ないと思つた。

何とか云ふ獨逸出來の本に、化け物の畫ばかり集めたのがある。その本の中の化け物などは、大抵見世物の看板に過ぎない。まづ上乘と思ふものでも何か妙に自然を缺いた、病的な感じを作つてゐる。冬心の化け物にそれがないのは、立ち場の違つてゐる爲のみではない。出家庵粥飯僧の眼はもう少し遠方を見てゐたのである。

古怪な寒山拾得の顏に、「靈魂の微笑」を見たものは、岸田劉生氏だつたかと思ふ。もしその「靈魂の微笑」の陰に、多少の惡戯を點じたとすれば、それは冬心の化け物である。この水墨の薄明りの中に、或は泣き、或は笑ふ、愛すべき異類異形である。

野人生計事

一　清閑

「亂山堆裡結茅廬　已共紅塵跡漸疎
莫問野人生計事　窓前流水枕前書」

とは少時漢詩なるものを作らせられた時度たびお手本の役をつとめた李九齡の七絶である。今は子供心に感心したほど、名詩とも何とも思つてゐない。亂山堆裡に茅廬を結んでゐても、恩給證書に貯金の通帳位は持つてゐたのだらうと思つてゐる。

しかし兎に角李九齡は窓前の流水と枕前の書とに悠悠たる清閑を領してゐる。その點は甚だ羨ましい。僕などは賣文に餬口する爲に年中匆忙たる思ひをしてゐる。ゆうべも二時頃まで原稿を書き、やつと床へはひつたと思つたら、今度は電報に叩き起された。社命、僕にサンデイ毎日の隨筆を書けと云ふ電報である。

隨筆は清閑の所産である。少くとも僅に清閑の所産を誇つてゐた文藝の形式である。古來の文

人多しと雖も、未だ清閑さへ得ないうちに隨筆を書いたと云ふ怪物はない。しかし今人は（この今人と云ふ言葉は非常に狹い意味の今人である。ざつと大正十二年の三四月以後の今人である）清閑を得ずにもさつさと隨筆を書き上げるのである。いや、清閑を得ずにもではない。寧ろ清閑を得ない爲に手つとり早い隨筆を書き飛ばすのである。

在來の隨筆は四種類である。或はもつとあるかも知れない。が、ゆうべ五時間しか寢ない現在の僕の頭によると、第一は感慨を述べたものである。第二は異聞を錄したものである。第三は考證を試みたものである。第四は藝術的小品である。かう云ふ四種類の隨筆にレエゾン・デエトルを持たないと云ふものは滅多にない。感慨は兎に角思想を含んでゐる。異聞も異聞と云ふ以上は興味のあることに違ひない。考證も學問を借りない限り、手のつけられないのは確である。藝術的小品も――藝術的小品は問ふを待たない。

しかしかう云ふ隨筆は多少の清閑も得なかつた日には、たとひ全然とは云はないにしろ、さうさう無暗に書けるものではない。是に於て乎、新らしい隨筆は忽ち文壇に出現した。新らしい隨筆とは何であるか？　掛け値なしに筆に隨つたものである。純乎として純なる出たらめである。

もし僕の言葉を疑ふならば、古人の隨筆は姑く問はず、まづ觀潮樓偶記を讀み或は斷腸亭雜稾を讀み、次に月月の雜誌に出る隨筆の大半と比べて見るがよい。後者の孟浪杜撰なることは忽ち

瞭然となるであらう。しかもこの新しい隨筆の作者は必しも庸愚の材ばかりではない。ちやんとした戯曲や小說の書ける（一例を擧げれば僕の如き）相當の才人もまじつてゐるのである。隨筆を清閑の所產とすれば、清閑は金の所產である。だから清閑を得る前には先づ金を持たなければならない。或は金を超越しなければならない。これはどちらも絕望である。すると新らしい隨筆以外に、ほんものの隨筆の生れるのもやはり絕望といふ外はない。

李九齡は「莫問野人生計事」といつた。しかし僕は隨筆を論ずるにも、清閑の所產たる隨筆を論ずるにも、野人生計の事に及ばざるを得ない。況や今後もせち辛いことは度たび辯ぜずにはゐられないであらう。かたがた今度の隨筆の題も野人生計の事とつけることにした。勿論これも清閑を待たずにさつさと書き上げる隨筆である。もし幾分でも面白かつたとすれば、それは作者たる僕自身の偉い爲と思つて頂きたい。もし又面白くなくなつたとしたら――それは僕に責任のない時代の罪だと思つて頂きたい。

二　室生犀星

室生犀星の金澤に歸つたのは二月ばかり前のことである。

「どうも國へ歸りたくてね、丁度脚氣になつたやつが國の土を踏まないと、癒らんと云ふやうなものだらうかね。」

さう言つて歸つてしまつたのである。室生の陶器を愛する病は僕よりも膏肓にはひつてゐる。尤も御同樣に貧乏だから、名のある茶器などは持つてゐない。しかし室生のコレクションを見ると、ちやんと或趣味にまとまつてゐる。云はば白高麗も畫唐津も室生犀星を語つてゐる。これは當然とは云ふものの、必しも誰にでも出來るものではない。

或日室生は遊びに行つた僕に、上品に赤い唐艸の寂びた九谷の鉢を一つくれた。それから熱心にこんなことを云つた。

「これへ は羊羹を入れなさい。(室生は何何し給へと云ふ代りに何何しなさいと云ふのである)まん中へちよつと五切ればかり、まつ黑い羊羹を入れなさい。」

室生はかう云ふ忠告さへせずには氣のすまない神經を持つてゐるのである。

或日又遊びに來た室生は僕の顏を見るが早いか、團子坂の或骨董屋に靑磁の硯屛の出てゐることを話した。

「賣らずに置けと云つて置いたからね、二三日中にとつて來なさい。もし出かける暇がなけりや、使でも何でもやりなさい。」

宛然僕にその硯屛を貰ふ義務でもありさうな口吻である。しかし御意通りに貰つたことを未だに後悔してゐないのは室生の爲にも僕の爲にも兎に角欣懷と云ふ外はない。

室生はまだ陶器の外にも庭を作ることを愛してゐる。石を据ゑたり、竹を植ゑたり、叡山苔を匍はせたり、池を掘つたり、葡萄棚を掛けたり、いろいろ手を入れるのを愛してゐる。それも室生自身の家の室生自身の庭ではない。家賃を拂つてゐる借家の庭に入らざる數寄を凝らしてゐるのである。

或夜お茶に呼ばれた僕は室生と何か話してゐた。すると暗い竹むらの蔭に絶えず水のしたたる音がする。室生の庭には池の外に流れなどは一つもある筈はない。僕は不思議に思つたから、「あの音は何だね？」と尋ねて見た。

「ああ、あれか、あれはあすこのつくばひへバケツの水をたらしてあるのだ。そら、あの竹の中へバケツを置いて、バケツの胴へ穴をあけて、その穴へ細い管をさして……」

室生は澄まして說明した。室生の金澤へ歸る時、僕へかたみに贈つたものはかういふ因緣のあるつくばひである。

僕は室生に別れた後、全然さういふ風流と緣のない暮しをつづけてゐる。あの庭は少しも變つてゐない。庭の隅の枇杷の木は丁度今寂しい花をつけてゐる。室生はいつ金澤からもう一度東京

へ出て來るのかしら。

三　キュウピッド

淺草といふ言葉は複雜である。たとへば芝とか麻布とかいふ言葉は一つの觀念を與へるのに過ぎない。しかし淺草といふ言葉は少くとも僕には三通りの觀念を與へる言葉である。

第一に淺草といひさへすれば僕の目の前に現れるのは大きい丹塗りの伽藍である。或はあの伽藍を中心にした五重塔や仁王門である。これは今度の震災にも幸と無事に燒殘つた。今ごろは丹塗りの堂の前にも明るい銀杏の黃葉の中に、不相變鳩が何十羽も大まはりに輪を描いてゐることであらう。

第二に僕の思ひ出すのは池のまはりの見世物小屋である。これは悉く燒野原になつた。

第三に見える淺草はつつましい下町の一部である。花川戶、山谷、駒形、藏前――その外何處でも差支へない。唯雨上りの瓦屋根だの、火のともらない御神燈だの、花の凋んだ朝顏の鉢だのに「淺草」の作者久保田万太郎君を感じられさへすれば好いのである。これも亦今度の大地震は一望の焦土に變らせてしまつた。

この三通りの淺草のうち、僕のもう少し彽徊したいのは第二の淺草、——活動寫眞やメリイ・ゴウ・ランドの小屋の軒を竝べてゐた淺草である。もし久保田万太郎君を第三の淺草の詩人とすれば、第二の淺草の詩人もない訣ではない。谷崎潤一郎君もその一人である。室生犀星君も亦その一人である。が、僕はその外にもう一人の詩人を數へたい。といふのは佐藤惣之助君である。僕はもう四五年前、確か雜誌「サンエス」に佐藤君の書いた散文を讀んだ。それは僅か數頁にオペラの樂屋を描いたスケッチだつた。が、キュウピッドに扮した無數の少女の廻り梯子を下る光景は如何にも潑剌としたものだつた。

第二の淺草の記憶は澤山ある。その最も古いものは砂文字の婆さんの記憶かも知れない。婆さんはいつも五色の砂に白井權八や小紫を描いた。砂の色は妙に曇つてゐたから、白井權八や小紫もやはりもの寂びた姿をしてゐた。それから長井兵助と稱した、蝦蟇の脂を賣る居合拔きである。あの長い刀をかけた、——いや、かういふ昔の景色は先師夏目先生の「彼岸過迄」に書いてある以上、今更僕の惡文などは待たずとも好いのに違ひない。その後ろは水族館である、安本龜八の活人形である、或は又珍世界のX光線である。

更にずつと近い頃の記憶はカリガリ博士のフィルムである。(僕はあのフィルムの動いてゐるうちに、僕の持つてゐたステツキの柄へかすかに絲を張り渡す一匹の蜘蛛を發見した。この蜘蛛は

表現派のフィルムよりも、數等僕には氣味の惡い印象を與へた覺えがある。）さもなければロシアの女曲馬師である。さう云ふ記憶は今になつて見るとどれ一つ懷しさを與へないものはない。が、最も僕の心にはつきりと跡を殘してゐるのは佐藤君の描いた光景である。キュウピッドに扮した無數の少女の廻り梯子を下る光景である。

僕も亦或晩春の午後、或オペラの樂屋の廊下に彼等の一群を見たことがある。彼等は佐藤君の書いたやうに、ぞろぞろ廻り梯子を下つて行つた。薔薇色の翼、金色の弓、それから薄い水色の衣裳、――かう云ふ色彩を煙らせた、もの憂いパステルの心もちも佐藤君の散文の通りである。僕はマネジャアのN君と彼等のおりるのを見下しながら、ふとその中のキュウピッドの一人の萎れてゐるのを發見した。キュウピッドは十五か十六であらう。ちらりと見た顏は頰の落ちた、腺病質らしい細おもてである。僕はN君に話しかけた。

「あのキュウピッドは悄氣てゐますね。舞臺監督にでも叱られたやうですね。」

「どれ？　ああ、あれですか？　あれは失戀してゐるのですよ。」

N君は無造作に返事をした。

このキュウピッドの出るオペラは喜歌劇だつたのに違ひない。しかし人生は喜歌劇にさへ、――今更そんなモオラルなどを持ち出す必要はないかも知れない。しかし兎に角月桂や薔薇にフッ

ト・ライトの光を受けた思ひ出の中の舞臺には、その後もずつと影のやうにキュウピッドが一人失戀してゐる。……

（大正十三年一月）

續野人生計事

一 放屁

アンドレエフに百姓が鼻糞をほじる描寫がある。フランスに婆さんが小便をする描寫がある。しかし屁をする描寫のある小説にはまだ一度も出あつたことはない。出あつたことのないといふのは、西洋の小説にはと云ふ意味である。日本の小説にはない訣ではない。その一つは青木健作氏の何とかいふ女工の小説である。駈落ちをした女工が二人、干藁か何かの中に野宿する。夜明に二人とも目がさめる。一人がぷうとおならをする。もう一人がくすくす笑ひ出す――たしかそんな筋だつたと思ふ。その女工の屁をする描寫は予の記憶に誤りがなければ、甚だ上品に出來上つてゐた。予は此の一段を讀んだ爲に、今日もなほ青木氏の手腕に敬意を感じてゐる位なものである。

もう一つは中戸川吉二氏の何とか云ふ不良少年の小説である。これはつい三四箇月以前、サンデイ毎日に出てゐたのだから、知つてゐる讀者も多いかも知れない。不良少年に口説かれた女が

際どい瞬間におならをする、その爲に折角醸されたエロチツクな空氣が消滅する、女は妙につんとしてしまふ、不良少年も手が出せなくなる――大體から云ふ小說だつた。この小說も巧みに書きこなしてある。

青木氏の小說に出て來る女工は必しもおならをしないでも好い。しかし中戸川氏の小說に出て來る女は嫌でもおならをする必要がある。しなければ成り立たない。だから屁は中戸川氏を得た後始めて或重大な役目を勤めるやうになつたと云ふべきである。

しかしこれは近世のことである。宇治拾遺物語によれば、藤大納言忠家も「いまだ殿上人におはしける時、びびしき色好みなりける女房ともの云ひて、夜更くるほどに月は晝よりもあかかりけるに」たへ兼ねてひき寄せたら、女は「あなあさまし」と云ふ拍子に大きいおならを一つした。忠家はこの屁を聞いた時に、「心うきことにも逢ひぬるかな。世にありて何かはせん。出家せん」と思ひ立つた。けれども、つらつら考へて見れば、何も女が屁をしたからと云つて、坊主にまでなるには當りさうもない。忠家は其處に氣がついたから、出家することだけは見合せたが、匆匆その場は逃げ出したさうである。すると中戸川氏の小說も文學史的に批評すれば、前人未發と云ふことは出來ない。しかし斷えたるを繼いだ功は當然同氏に屬すべきである。この功は多分中戸川氏自身の豫想しなかつたところであらう。しかし功には違ひないから、序に此處に吹聽するこ

とにした。

二　女と影

紋服を着た西洋人は滑稽に見えるものである。或は滑稽に見える餘り、西洋人自身の男振などは滅多に問題にならないものである。クロオデル大使の「女と影」も、云はば紋服を着た西洋人だつたから、一笑に付せられてしまつたのであらう。しかし當人の男ぶりは紋服たると燕尾服たるとを問はず獨立に美醜を論ぜらるべきである。「女と影」に對する世評は存外この點に無頓着だつたらしい。さう男ぶりを閑却するのは佛蘭西人たる大使にも氣の毒である。

試みにあの作品の舞臺をペルシアか印度かへ移して見るが好い。桃の花の代りに蓮の花を咲かせ、古風な侍の女房の代りに王女か何か舞はせたとすれば、毒舌に富んだ批評家と雖も、今日のやうに敢然とは鼎の輕重を問はなかつたであらう。況やあの作品にさへ三歎の聲を惜まなかつた鑑賞上の神祕主義者などは勿論無上の法悦の爲に卽死を遂げたのに相違あるまい。クロオデル大使は紋服の爲にこの位損な目を見てゐるのである。

しかし男ぶりは姑く問はず、紋服そのものの感じにしても、全然面白味のない訣ではない。成

程「女と影」なるものは日本のやうな西洋のやうな、妙にとんちんかんな作品である。けれどもあのとんちんかんのところは手腕の鈍い爲に起つたものではない。日本とか我我日本人の藝術とかに理解のない爲に起つたものである。虎を描かうと思つたのが猫になつてしまつたのではない。猫も虎も見わけられないから、同じやうに描いてすましてゐるのである。思ふに虎になり損たつた彼は小說家になり損なつた批評家のやうに、義理にも面白いとは云はれたものではない。けれども猫とも虎ともつかない、何か怪しげな動物になれば、古來野師の儲けたのはかう云ふ動物恩惠である。我我は面白いと思はないものに一錢の木戸錢をも抛つ筈はない。

これは「女と影」ばかりではない。「サムラヒ」とか「ダイミヤウ」とか云ふエレディアの詩でも同じことである。ああ云ふ作品は可笑しいかも知れない。しかしその可笑しいところに、善く云へば阿蘭陀の花瓶に似た、惡く云へばサムラヒ商會の輸出品に似た一種のシャルムがひそんでゐる。このシャルムさへ認めないのは偏狹の譏を免れないであらう。予は野口米次郎氏の如き、或は郡虎彦氏の如き、西洋に名を馳せた日本人の作品も、その名を馳せた一半の理由はこのシャルムにあつたことを信じてゐる。と云ふのは勿論兩氏の作品に非難を加へようと云ふのではない。寛大な西洋人に迎へられたことを兩氏の爲に欣幸とし、偏狹な日本人に郤けられたことをクロオデル大使の爲に遺憾とするのである。

仄聞するところによれば、クロオデル大使はどう云ふ訣か、西洋輓近の藝術に對する日本人の鑑賞力に疑惑を抱いてゐるさうである。まことに「女と影」の如きも、予などの批評を許さないかも知れない。しかし時の古今を問はず、わが日本の藝術に對する西洋人の鑑賞力は――予は先夜細川侯の舞臺に櫻間金太郎氏の「すみだ川」を見ながら欠伸をしてゐたクロオデル大使に同情の微笑を禁じ得なかつた。すると半可通をふりまはすことは大使も予もお互ひ様である。佛蘭西の大使クロオデル閣下、どうか惡しからずお讀み下さい。

三　ピエル・ロティの死

ピエル・ロティが死んださうである。ロティが「お菊夫人」「日本の秋」等の作者たることは今更辯じ立てる必要はあるまい。小泉八雲一人を除けば、兎に角ロティは不二山や椿やべべ・ニツポンを着た女と最も因縁の深い西洋人である。そのロティを失つたことは我我日本人の身になるとまんざら人ごとのやうに思はれない。

ロティは偉い作家ではない。同時代の作家と比べたところが、餘り脊の高い方ではたゞさうである。ロティは新らしい感覺描寫を與へた。或は新らしい抒情詩を與へた。しかし新らしい人生

の見かたや新らしい道德は與へなかつた。勿論これは藝術家たるロティには致命傷でも何でもないのに違ひない。提燈は火さへともせれば、敬意を表して然るべきである。合羽のやうに雨が凌げぬにしろ、輕蔑して好いと云ふものではない。しかし雨が降つてゐるから、まづ提燈は持たずとも合羽の御厄介にならうと云ふのはもとより人情の自然である。かう云ふ人情の矢面には如何なる藝術至上主義も、提燈におしなさいと云ふ忠告と同樣、利き目のないものと覺悟せねばならぬ。我我は土砂降りの往來に似た人生を辿る人足である。けれどもロティは我我に一枚の合羽をも與へなかつた。だから我我はロティの上に「偉い」と云ふ言葉を加へないのである。古來偉い藝術家と云ふのは、――勿論合羽の施行をする人に過ぎない。

又ロティはこの數年間、佛蘭西文壇の「人物」だつたにせよ、佛蘭西文壇の「力」ではなかつた。だから彼の死も實際的には格別影響を及ぼさないであらう。唯我我日本人は前にもちよいと云つた通り、美しい日本の小說を書いた、當年の佛蘭西の海軍將校ジュリアン・ヴィオオの長逝に哀悼の念を抱いてゐる。ロティの描いた日本はヘルンの描いた日本よりも、眞を傳へない畫圖かも知れない。しかし兎に角好畫圖たることは異論を許さない事實である。我我の姉妹たるお菊さんだの或は又お梅さんだのは、ロティの小說を待つた後、巴里の敷石の上をも步むやうになつた。我我は其處にロティに對する日本の感謝を捧げたいと思ふ。なほロティの生涯は大體左に示す通

りである。
千八百五十年一月十四日、ロティはロシュフォオルで生れ、十七歳の時、海軍に入り、千九百六年大佐になつた。大佐になつたのは數へ年で五十七の時である。
最初の作は千八百七十九年、卽ち二十九歳の時公にした Aziyadé である。後ち一年、千八百八十年に Rarahu を出して一躍流行兒になつた。これは二年の後「ロティの結婚」と改題再刊されたものである。
かの「お菊さん」は千八百八十七年に、「日本の秋」は八十九年に公にされた。
アカデミイの會員に選まれたのは九十一年、數へて四十二歳の時である。
彼は、國際電報の傳ふるところによると、十日アンダイエで死んだのである。時に歳七十三。

四　新綠の庭

櫻　さつぱりした雨上りです。尤も花の蕚は赤いなりについてゐますが。
椎　わたしもそろそろ芽をほごしませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹　わたしは未だに黄疸ですよ。……

芭蕉　おつと、この綠のランプの火屋を風に吹き折られる所だつた。

梅　何だか寒氣がすると思つたら、もう毛蟲がたかつてゐるんだよ。

八つ手　痒いなあ、この茶色の産毛のあるうちは。

百日紅　何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覽の通り枯枝ばかりさ。

霧島躑躅　常――常談云つちやいけない。わたしたどはあんまり忙しいもんだから、今年だけはつい何時にもない薄紫に咲いてしまつた。

覇王樹　どうでも勝手にするが好いや。おれの知つたことぢやなし。

石榴　ちよいと枝一面に蛋のたかつたやうでせう。

苔　起きないこと？

石　うんもう少し。

楓　「若楓茶色になるも一盛り」――ほんたうにひと盛りですね。もう今は世間並みに唯水水しい鶸色です。おや、障子に灯がともりました。

五　春の日のさした往來をぶらぶら一人歩いてゐる

春の日のさした往來をぶらぶら一人歩いてゐる。向うから來るのは屋根屋の親かた。屋根屋の親かたもこの節は紺の背廣に中折帽をかぶり、ゴムか何かの長靴をはいてゐる。それにしても大きい長靴だなあ。膝――どころではない。腿も半分がたは隱れてゐる。ああ云ふ長靴をはいた時には、長靴をはいたと云ふよりも、何かの拍子に長靴の中へ落つこつたやうな氣がするだらうな

あ。

顔馴染の道具屋を覗いて見る。正面の紅木の棚の上に蟲明けらしい徳利が一本。あの徳利の口などは妙に猥褻に出來上つてゐる。さうさう、いつか見た古備前の徳利の口もちよいと接吻位したかつたつけ。鼻の先に染めつけの皿が一枚。藍色の柳の枝垂れた下にやはり藍色の人が一人、莫迦に長い釣竿を伸ばしてゐる。誰かと思つて覗きこんで見たら、金澤にゐる室生犀星！

又ぶらぶら歩きはじめる。八百屋の店に慈姑がすこし。慈姑の皮の色は上品だなあ。古い泥七寶の青に似てゐる。あの慈姑を買はうかしら。譃をつけ。買ふ氣のないことは知つてゐる癖に。だが一體どう云ふものだらう、自分にも譃をつきたい氣のするのは。今度は小鳥屋。どこもかしこも鳥籠だらけだなあ。おや、御亭主も氣樂さうに山雀の籠の中に坐つてゐる！

「つまり馬に乘つた時と同じなのさ。」

「カントの論文に祟られたんだね。」

後ろからさつさと通りぬける制服制帽の大學生が二人。ちよいと聞いた他人の會話と云ふものは氣違ひの會話に似てゐるなあ。この邊そろそろ上り坂。もうあの家の椿などは落ちて茶色に變つてゐる。尤も崖側の竹藪は不相變黄ばんだままなのだが……おつと向うから馬が來たぞ。馬の目玉は大きいなあ。竹藪も椿も己の顔もみんな目玉の中に映つてゐる。馬のあとからはモンシ

ロ蝶。

「生ミタテ玉子アリマス。」

アア、サウデスカ？　ワタシハ玉子ハ入リマセン。――春の日のさした往來をぶらぶら一人歩いてゐる。

六　霜夜

霜夜の記憶の一つ。

いつものやうに机に向つてゐると、いつか十二時を打つ音がする。十二時には必ず寝ることにしてゐる。今夜もまづ本を閉ぢ、それからあした坐り次第、直に仕事にかかれるやうに机の上を片づける。片づけると云つても大したことはない。原稿用紙と入用の書物とを一まとめに重ねるばかりである。最後に火鉢の火の始末をする。はんねらの瓶に鐵瓶の湯をつぎ、その中へ火を一つづつ入れる。火は見る見る黒くなる。炭の鳴る音も盛んにする。水蒸氣ももやもや立ち昇る。何か樂しい心もちがする。何か又はかない心もちもする。床は次の間にとつてある。次の間も書齋も二階である。寝る前には必ず下へおり、のびのびと一人小便をする。今夜もそつと二階を下

りる。家族の眼をさまさせないやうに、出來るだけそつと二階を下りる。座敷の次の間に電燈がついてゐる。まだ誰か起きてゐるなと思ふ。誰が起きてゐるのかしらとも思ふ。その部屋の外を通りかかると、六十八になる伯母が一人、古い綿をのばしてゐる。かすかに光る絹の綿である。「伯母さん」と云ふ。「まだ起きてゐたの？」と云ふ。「ああ、今これだけしてしまはうと思つて。お前ももう寢るのだらう？」と云ふ。後架の電燈はどうしてもつかない。やむを得ず暗いまま小便をする。後架の窓の外には竹が生えてゐる。風のある晩は葉のすれる音がする。今夜は音も何もしない。唯寒い夜に封じられてゐる。

　薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

七　蒐集

僕は如何なる時代でも、蒐集癖と云ふものを持つたことはない。もし持つたことがあるとすれば、年少時代に昆蟲類の標本を集めたこと位であらう。現在は成程書物だけは幾らか集まつてゐるかも知れない。しかしそれも集まつたのである。落葉の風だまりへ集まるやうに自然と書棚へ集まつたのである。何も苦心して集めた訣ではない。

書物さへ既にさうである。況や書畫とか骨董とかは一度も集めたいと思つたことはない。尤もこれはと思つたにしろ、到底我我賣文の徒には手の出ぬせゐでもありさうである。しかし僕の集めたがらぬのは必しもその爲ばかりではない。寧ろ集めたいと云ふ氣持に餘り快哉を感ぜぬのである。或は集めんとする氣組みに倦怠を感じてしまふのである。

これは智識も同じことである。僕はまだ如何なる智識も集めようと思つて集めたことはない。尤も集めたと思はれるほど、智識のないことも事實である。しかし多少でもあるとすれば、兎に角集まつたと云はなければならぬ。

蒐集家は情熱に富んだものである。殊にたつた一枚のマッチの商標を手に入れる爲に、世界を周遊する蒐集家などは殆ど情熱そのものである。だから情熱を輕蔑しない限り、蒐集家も一笑に付することは出來ない。しかし僕は蒐集家とは別の鑄型に屬してゐる。同時に又革命家や豫言者とも別の鑄型に屬してゐる。

僕はマッチの商標に對する情熱にも同情を感じてゐる。いや、同情と云ふ代りに敬意と云つても差支へない。しかしマッチの商標の價値にはどちらかと云へば懷疑的である。僕は以前から云ふ氣質を羞づかしいと思つたことがあつた。けれども面皮の厚くなつた今はさほど卑下する氣もちにもなれない。——

八 知己料

僕等は當時「新思潮」といふ同人雜誌に楯こもつてゐた。「新思潮」以外の雜誌にも時時作品を發表するのは久米正雄一人ぎりだつた。そこへ「希望」といふ雜誌社から、突然僕へ宛てた手紙が來た。手紙には、五月號に間に合ふやうに短篇を一つお願ひしたい。御都合は如何と書いてあつた。僕は勿論快諾した。

僕は一週間たたない内に、「虱」といふ短篇を希望社へおくつた。それから――原稿料の屆くのを待つた。最初の原稿料を待つ氣もちは賣文の經驗のない人には、ちよいと想像が出來ないかも知れない。僕も少し誇張すれば、直侍を待つ三千歲のやうに、振替の來る日を待ちくらしたのである。

原稿料は容易に屆かなかつた。僕はたびたび久米正雄と、希望社は僕の短篇にいくら拂ふかを論じ合つた。

「一圓は拂ふね。一圓ならば十二枚十二圓か。そんなことはないな。一圓五十錢は大丈夫拂ふよ。」

久米はかういふ豫測を下した。何だかさう云はれて見れば、僕も一圓五十錢は拂つてもらはれさうな心もちになつた。

「一圓五十錢拂つたら、八圓だけおごれよ。」

僕はおごると約束した。

「一圓でも、五圓はおごる義務があるな。」

久米はまたかういつた。僕はその義務を認めなかつた。しかし五圓だけ割愛することには、格別異存も持たなかつた。

その内に「希望」の五月號が出、同時に原稿料も手にはひつた。僕はそれをふところにしたまま、久米の下宿へ出かけて行つた。

「いくら來た？　一圓か？　一圓五十錢か？」

久米は僕の顏を見ると、彼自身のことのやうに熱心にたづねた。僕は何ともこたへずに、振替の紙を出して見せた。振替の紙には殘酷にも三圓六十錢と書いてあつた。

「三十錢か。三十錢はひどいな。」

久米もさすがになさけない顏をした。僕はなほ更佛頂づらをしてゐた。が、僕等はしばらくすると、同時ににやにや笑ひ出した。久米はいはゆる微苦笑をうかべ、僕は手がるに苦笑したので

ある。

「三十錢は知己料をさしひいたんだらう。一圓五十錢マイナス三十錢――一圓二十錢の知己料は高いな。」

久米はこんなことをいひながら、振替の紙を僕にかへした。しかしもうこの間のやうに、おごれとか何とかはいはなかつた。

九　妄問妄答

客　菊池寛氏の說によると、我我は今度の大地震のやうに命も危いと云ふ場合は藝術も何もあつたものぢやない。まづ命あつての物種と尻端折りをするのに忙しいさうだ。しかし實際さう云ふものだらうか？

主人　そりや實際さう云ふものだよ。

客　藝術上の玄人もかね？　たとへば小說家とか、畫家とか云ふ、――

主人　玄人はまあ素人より藝術のことを考へさうだね。しかしそれも考へて見れば、實は五十步百步なんだらう。現在頭に火がついてゐるのに、この火焰をどう描寫しようなどと考へる豪傑

はゐまいからね。
客　しかし昔の侍などは横腹を槍に貫かれながら、辭世の歌を咏んでゐるからね。
主人　あれは唯名譽の爲だね。意識した藝術的衝動などは別のものだね。
客　おや我我の藝術的衝動はああ云ふ大變に出合つたが最後、全部なくなつてしまふと云ふのかね？
主人　そりや全部はたくならないね。現に遭難民の話を聞いて見給へ。思ひの外藝術的なものも澤山あるから。――元來藝術的に表現される爲にはまづ一應藝術的に印象されてゐなければならない筈だらう。するとさう云ふ連中は知らず識らず藝術的に心を働かせて來た訣だね。
客　（反語的に）しかしさう云ふ連中も頭に火でもついた日にや、やつぱり藝術的衝動を失ふことになるだらうね？
主人　さあ、さうとも限らないね。無意識の藝術的衝動だけは案外生死の瀬戸際にも最後の飛躍をするものだからね？　辭世の歌で思ひ出したが、昔の侍の討死などは大抵戲曲的或は俳優的衝動の――つまり俗に云ふ芝居氣の表はれたものとも見られさうぢやないか？
客　ぢや藝術的衝動はどう云ふ時にもあり得ると云ふんだね？
主人　無意識の藝術的衝動はね。しかし意識した藝術的衝動はどうもあり得るとは思はれない

ね。現在頭に火がついてゐるのに、……

客　それはもう前にも聞かされたよ。ぢや君も菊池寛氏に全然贊成してゐるのかね？

主人　あり得ないと云ふことだけはね。しかし菊池氏はあり得ないのを寂しいと云つてゐるのだらう？　僕は寂しいとも思はないね、當り前だとしか思はないね。

客　なぜ？

主人　なぜも何もありやしないさ。命あつての物種と云ふ時にや、何も彼も忘れてゐるんだからね。藝術も勿論忘れる筈ぢやないか？　僕などは大地震どころぢやないね。小便のつまつた時にさへレムブラントもゲエテも忘れてしまふがね。格別その爲に藝術を輕んずる氣などは起らないね。

客　ぢや藝術は人生にさ程痛切なものぢやないと云ふのかね？

主人　莫迦を云ひ給へ。藝術的衝動は無意識の裡にも我我を動かしてゐると云つたぢやないか？　さうすりや藝術は人生の底へ一面深い根を張つてゐるんだ。――と云ふよりも寧ろ人生は藝術の芽に滿ちた苗床なんだ。

客　すると「玉は碎けず」かね？

主人　玉は――さうさね。玉は或は碎けるかも知れない。しかし石は碎けないね。藝術家は或

は亡びるかも知れない。しかしいつか知らず識らず藝術的衝動に支配される熊さんや八さんは亡びないね。

客　ぢや君は問題になつた里見氏の説にも菊池氏の説にも部分的には反對だと云ふのかね。

主人　部分的には贊成だと云ふことにしたいね。何しろ兩雄の挾み打ちを受けるのはいくら僕でも難澁だからね。ああ、それからまだ菊池氏の説には信用出來ぬ部分もあるね。

客　信用の出來ぬ部分がある？

主人　菊池氏は今度大向うからやんやと喝采される爲には譃が必要だと云ふことを痛感したと云つてゐるだらう。あれは餘り信用出來ないね。恐らくはちよつと感じた位だね。まあ、もう少し見てゐ給へ。今に又何かほんたうのことをむきになつて云ひ出すから。

十　梅花に對する感情

このジャアナリズムの一篇を謹嚴なる西川英次郎君に獻ず

予等は藝術の士なるが故に、如實に萬象を觀ざる可らず。少くとも萬人の眼光を借らず、予等の眼光を以て見ざる可らず。古來偉大なる藝術の士は皆この獨自の眼光を有し、おのづから獨自

の表現を成せり。ゴッホの向日葵の寫眞版の今日もなほ愛玩せらるる、豈偶然の結果ならんや。(幸ひにＧＯＧＨをゴッホと呼ぶ發音の誤りを咎むること勿れ。予はＡＮＤＥＲＳＥＮをアナアセンと呼ばず、アンデルゼンと呼ぶを恥ぢざるものなり。)

こは藝術を使命とするものには白日よりも明らかなる事實なり。然れども獨自の眼を以てするは必しも容易の業にあらず。(否、絕對に獨自の眼を以てするは不可能と云ふも妨げざる可し。)殊に萬人の詩に入ること屢なりし景物を見るに獨自の眼光を以てするは予等の最も難しとする所なり。試みに「暮春」の句を成すを思へ。蕪村の「暮春」を詠ぜし後、誰か又獨自の眼光を以て「暮春」を詠じ得るの確信あらんや。梅花の如きもその一のみ。否、正にその最たるものなり。

梅花は予に伊勢物語の歌より春信の畫に至る柔媚の情を想起せしむることなきにあらず。然れども梅花を見る毎に、まづ予の心を捉ふるものは支那に生じたる文人趣味なり。こは啻に予のみにあらず、大方の君子も亦然るが如し。(是に於て乎、中央公論記者も「梅花の賦」なる語を用ゐるならん。)梅花を唯愛すべきジエヌス・プリヌスの花と做すは紅毛碧眼の詩人のことのみ。予等は梅花の一瓣にも、鶴を想ひ、初月を想ひ、空山を想ひ、野水を想ひ、斷角を想ひ、書燈を想ひ、脩竹を想ひ、淸霜を想ひ、羅浮を想ひ、仙妃を想ひ、林處士の風流を想はざる能はず。既に斯くの如しとせば、予等獨自の眼光を以て萬象を觀んとする藝術の士の、梅花に好意を感ぜざるは必

しも怪しむを要せざるべし。（こは夙に永井荷風氏の「日本の庭」の一章たる「梅」の中に道破せる眞理なり。文壇は詩人も心臓以外に腦髄を有するの事實を認めず。是予に今日この眞理を盗用せしむる所以なり。）

予の梅花を見る毎に、文人趣味を喚び起さるるは既に述べし所の如し。然れども妄に予を以て所謂文人と做すこと勿れ。予を以て詐僞師と做すは可なり。謀殺犯人と做すは可なり。やむを得ずんば大學教授の適任者と做すも忍ばさるにあらず。唯幸ひに予を以て所謂文人と做すこと勿れ。十便十宜帖あるが故に、大雅と蕪村とを並稱するは所謂文人の爲す所なり。予はたとひ宮せらると雖も、この種の狂人と伍することを願はず。

ひとり是のみに止らず、予は文人趣味を輕蔑するものなり。殊に化政度に風行せる文人趣味を輕蔑するものなり。文人趣味は道樂のみ。道樂に終始すと云はば卽ち已まん。然れどももし道樂以上の貼札を貼らんとするものあらば、山陽の畫を觀せしむるに若かず。日本外史は兎も角も一部の歴史小説なり。畫に至つては呉か越か、畢につくね芋の山水のみ。更に又竹田の百活矣は如何。これをしも藝術と云ふ可くんば、安來節も藝術たらざらんや。予は勿論彼等の道樂を排斥せんとするものにあらず。予をして當時に生まれしめば、戲れに河童晩歸の圖を作り、山紫水明樓上の一粲を博せしやも亦知る可からず。且又彼等も聰明の人なり。豈彼等の道樂を彼等の藝術と

混同せんや。予は常に確信す、大正の流俗、藝術を知らず、無邪氣なる彼等の常談を大眞面目に隨喜し渇仰するの時、まづ噴飯に堪へざるものは彼等兩人に外ならざるを。

梅花は予の輕蔑する文人趣味を强ひんとするものなり、下劣詩魔に魅せしめんとするものなり。予は孑然たる征旅の客の深山大澤を恐るるが如く、この梅花を恐れざる可からず。然れども思へ、征旅の客の踏破の快を想見するものも常に亦深山大澤なることを。予は梅花を見る毎に、峨眉の雪を蹈める徐霞客の如く、南極の星を仰げるシャツクルトンの如く、鬱勃たる雄心をも禁ずることを能はず。

　　灰捨てて白梅うるむ垣根かな

加ふるに凡兆の予等の爲に夙に津頭を敎ふるものあり。予の渡江に急ならんとする、何ぞ少年の客氣のみならんや。

予は獨自の眼光を以て容易に梅花を觀難きが故に、愈獨自の眼光を以て梅花を觀んと欲するものなり。聊かパラドックスを弄すれば、梅花に冷淡なること甚しきが故に、梅花に熱中することと甚しきものなり。高靑邱の詩に云ふ。「瓊姿只合在瑤臺　誰向江邊處處栽」又云ふ。「自去何郎無好詠　東風愁寂幾回開」眞に梅花は仙人の令孃か、金持の隱居の圍ひものに似たり。（後者は永井荷風氏の比喩なり。必しも前者と矛盾するものにあらず）予の文に至らずとせば、斯る

美人に對する感慨を想へ。更に又汝の感慨にして唯ほれぼれとするのみなりとせば、已んぬるかな、汝も流俗のみ、濟度す可からざる乾屎橛のみ。

十一　暗合

「お富の貞操」と云ふ小說を書いた時、お富は某氏夫人ではないかと尋ねられた人が三人ある。又あの小說の中に村上新三郎と云ふ乞食が出て來る。幕末に村上新五郎と云ふ奇傑がゐたが同一人かと尋ねられた人もある。しかしあの小說は架空の談だから、謂ふ所のモデルを用ゐたのではない。「お富の貞操」の登場人物はお富と乞食と二人だけである。その二人とも實在の人物に似てゐると云ふのは珍らしい暗合に違ひない。僕は以前藤野古白の句に「傀儡師日暮れて歸る羅生門」と云ふのを見、「傀儡師」「羅生門」共に僕の小說集の名だから、暗合の妙に驚いたことがある。然るに今又この暗合に出合つた。僕には暗合が祟つてゐるらしい。

十二　コレラ

コレラが流行るので思ひ出すのは、漱石先生の話である。先生の子供の時分にも、コレラが流行つたことがある。その時、先生は豆を澤山食つて、水を澤山飲んで、それから先生のお父さんと一緒に、蚊帳の中に寢てゐたさうである。さうして、その明け方に、蚊帳の中で、いきなり吐瀉を始めたさうである。すると、先生のお父さんは「そら、コレラだ」と言つて、蚊帳を飛び出したさうである。蚊帳を飛び出して、どうするかと思ふと、何もすることがないものだから、まだ星が出てゐるのに庭を箒で掃き始めたさうである。勿論、先生の吐瀉したのは、豆と水とに祟られたので、コレラではなかつたが、この事があつたために、先生は人間の父たるもののエゴイズムを知つたと話してゐた。

コレラの小說では何があるか。紅葉の「青葡萄」とかいふのが、多分、コレラの話だつたらう。La Motte といふ人の短篇に、日本のコレラを書いたのがある。何も際立つた事件はないが、魚河岸の暇になつたり、何かするところをなかなか器用に書いてある。

僕はコレラでは死にたくはない。へどを吐いたり下痢をしたりする不風流な往生は厭やである。ショウペンハウエルがコレラを恐がつて、逃げて歩いたことを讀んだ時は、甚だ彼に同情した。ことに依ると、彼の哲學よりも、もつと、同情したかも知れない。

しかし、ショウペンハウエル時代には、まだコレラは食物から傳染するといふことがわからな

かつたのである。が、僕は現代に生れた難有さに、それをちやんと心得てゐるから、煮たものばかり食つたり、鹽酸レモナアデを服んだり、悠悠と豫防を講じてゐる。この間、臆病すぎると言つて笑はれたが、臆病は文明人のみの持つてゐる美德である。臆病でない人間が偉ければ、ホッテントットの王樣に三拜九拜するがいい。

十三　長崎

菱形の凧。サント・モンタニの空に揚つた凧。うらうらと幾つも漂つた凧。

路ばたに商ふ夏蜜柑やバナナ。敷石の日ざしに火照るけはひ。町一ぱいに飛ぶ燕。

丸山の廓の見返り柳。

運河には石の眼鏡橋。橋には往來の麥稈帽子。――忽ち泳いで來る家鴨の一むれ。白白と日に照つた家鴨の一むれ。

南京寺の石段の蜥蜴。

中華民國の旗。煙を揚げる英吉利の船。「港をよろふ山の若葉に光さし……」顱頂の禿げそめた齋藤茂吉。ロティ。沈南蘋。永井荷風。

最後に「日本の聖母の寺」その內陣のおん母マリア。穗麥に交じつた矢車の花。光のない眞晝の蠟燭の火。窓の外には遠いサント・モンタニ。

山の空にはやはり菱形の凧。北原白秋の歌つた凧。うらうらと幾つも漂つた凧。

十四　東京田端

時雨に濡れた木木の梢。時雨に光つてゐる家家の屋根。犬は炭俵を積んだ上に眠り、鷄は一籠に何羽もぢつとしてゐる。

庭木に烏瓜の下つたのは鑄物師香取秀眞の家。

竹の葉の垣に垂れたのは、畫家小杉未醒の家。

門內に廣い芝生のあるのは、長者鹿島龍藏の家。

ぬかるみの路を前にしたのは、俳人瀧井折柴の家。

踏石に小笹をあしらつたのは、詩人室生犀星の家。

椎の木や銀杏の中にあるのは、――夕ぐれ燈籠に火のともるのは、茶屋天然自笑軒。

時雨の庭を塞いだ障子。時雨の寒さを避ける火鉢。わたしは紫檀の机の前に、一本八錢の葉卷

を啣へながら、一游亭の鷄の畫を眺めてゐる。

（大正十一年―十三年）

澄江堂雜記

僕は日頃大雅の畫を欲しいと思つてゐる。しかしそれは大雅でさへあれば、金を惜まないと云ふのではない。まあせいぜい五十圓位の大雅を一幅得たいのである。

大雅は偉い畫描きである。昔、高久靄厓は一文無しの窮境にあつても、一幅の大雅だけは手離さなかつた。ああ云ふ英靈漢の筆に成つた畫は、何百圓と雖も高い事はない。それを五十圓に値切りたいのは、僕に餘財のない悲しさである。しかし大雅の畫品を思へば、たとへば五百萬圓を投ずるのも、僕のやうに五十圓を投ずるのも、安いと云ふ點では同じかも知れぬ。藝術品の價値も小切手や紙幣に換算出來ると考へるのは、度し難い俗物ばかりだからである。

Samuel Butler の書いた物によると、彼は日頃「出來の好い、ちやんと保存された、四十シリング位のレムブラント」を欲しがつてゐた。處が實際二度までも莫迦に安いレムブラントに遭遇した。一度は一磅と云ふ價の爲に買はなかつたが、二度目には友人の Gogin に諮つた上、とうとうそれを手に入れる事が出來た。その畫はどう云ふ畫だつたか、どの位の金を拂つたか、それは

どちらも明らかではない。が、買つた時は千八百八十七年、買つた場所はストランド(ロンドン)の或質店の店さきである。
から云ふ先例もあつて見ると、五十圓の大雅を得んとするのは、必しも不可能事ではないかも知れぬ。何處か寂しい町の古道具屋の店に、たつた一幅賣り殘された、九霞山樵の水墨山水――僕は時時退屈すると彌勒の出世でも待つもののやうに、こんな空想にさへ耽る事がある。

二 にきび

昔「羅生門」と云ふ小説を書いた時、主人公の下人の頬には、大きい面皰のある由を書いた。當時は王朝時代の人間にも、面皰のない事はあるまいと云ふ、謙遜すれば當推量に據つたのであるが、その後左經記に二君とあり、二君又は二禁なるものは今日の面皰である事を知つた。二君等は勿論當て字である。尤もかう云ふ發見は、僕自身に興味がある程、傍人には面白くも何ともあるまい。

三 將軍

官憲は僕の「將軍」と云ふ小説に、何行も抹殺を施した。處が今日の新聞を見ると生活に窮した

癈兵たちは、「一隊長殿にだまされた閣下連の踏臺」とか、「後顧するなと大うそつかれ」とか、種種のポスタアをぶら下げながら、東京街頭を歩いたさうである。癈兵そのものを抹殺する事は、官憲の力にも覺束ないらしい。

又官憲は今後と雖も、「〇〇か〇〇に〇〇の念を失はしむる」物は、發賣禁止を行ふさうである。〇〇の念は戀愛と同樣、虚僞の上に立つ事の出來るものではない。虚僞とは過去の眞理であり、今は通用せぬ藩札の類である。官憲は虚僞を強ひながら、〇〇の念を失ふなと云ふ。それは藩札をつきつけながら、金貨に換へろと云ふのと變りはない。

無邪氣なるものは官憲である。

四　毛生え藥

文藝と階級問題との關係は、頭と毛生え藥との關係に似てゐる。もしちやんと毛が生えてゐれば、必しも塗る事を必要としない。又もし禿げ頭だつたとすれば、恐らくは塗つても利かないであらう。

五　藝術至上主義

藝術至上主義の極致はフロオベルである。彼自身の言葉によれば、「神は萬象の創造に現れてゐるが、しかも人間に姿を見せない。藝術家が創作に對する態度も、亦斯くの如くなるべきである。」この故にマダム・ボヴァリイにしても、ミクロコスモスは展開するが、我我の情意には訴へて來ない。

藝術至上主義、――少くとも小説に於ける藝術至上主義は、確かに欠伸の出易いものである。

六　一切不捨

何の某は帽子ばかり上等なのをかぶつてゐる。あの帽子さへなければ好いのだが、――かう云ふ言葉を做す人がある。しかしその帽子を除いたにしても、何の某の服装なるものは、寸分も立派になる次第ではない。唯貧しげな外觀が、全體に蔓延するばかりである。

何の某の小説はセンティメンタルだとか、何の某の戲曲はインテレクチュアルだとか、それらはいづれも帽子の場合と、選ぶ所のない言葉である。帽子ばかり上等なるものは、帽子を除き去る工夫をするより、上着もズボンも外套も、上等ならしむる工夫をせねばならぬ。センティメンタルな小説の作者は、感情を抑へる工夫をするより、理智を活かすべき工夫をせねばならぬ。

これは獨り藝術上の問題のみではない。人生に於ても同じ事である。五欲の克服のみに骨を折

つた坊主は、偉い坊主になつた事を聞かない。偉い坊主になつたものは、常に五欲を克服すべき、他の熱情を抱き得た坊主である。雲照さへ坊主の羅切を聞いては、「男根は須く隆隆たるべし」と、弟子共に教へたと云ふではないか？

我等の内にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に與へられた、唯一の成佛の道である。

七　赤西蠣太

或時志賀直哉氏の愛讀者と、「赤西蠣太の戀」の話をした事がある。その時僕はこんな事を云つた。「あの小説の中の人物には榮螺とか鱒次郎とか安甲とか、大抵魚貝の名がついてゐる。志賀氏にもヒュウモラス・サイドはないのではない。」すると客は驚いたやうに、「成程さうですね。そんな事には少しも氣がつかずにゐました」と云つた。その癖客は僕なぞよりも「赤西蠣太の戀」の筋をはつきり覺えてゐたのである。

客は決して輕薄兒ではない。學問も人格も兼備した、寧ろ珍しい文藝通である。しかもこの事實に氣づかなかつたのは、志賀氏の作品の型とでも云ふか、兎に角何時か頭の中にさう云ふ物を拵へた上、それに囚はれてゐた爲であらう。これは獨り客のみではない。我我も氣をつけねばな

らぬ事である。

八　釣名文人

古來作家が本を出した時、その本の好評を計る爲に、新聞雜誌に載るべき評論を利用する事は稀ではない。中には手加減を加へるどころか、作者自身然るべき匿名のもとに、手前味噌の評論を書いたのもある。

ド・ラ・ロシュフウコオルは名高い格言集の作家である。處がサント・ブウヴの書いたものによると、この人さへジュルナアル・デ・サヴァンに出た評論には、彼自身修正を施したらしい。しかもジュルナアル・デ・サヴァンは、當時發行された唯一の新聞であり、その評論の載つたのは、千六百六十五年三月九日だと云ふのだから、作家の評論を利用するのも、ずゐぶん淵源は古いものである。僕はロシュフウコオルの格言を思ひながら、この記事を讀んだ時、實際苦笑せずにはゐられなかつた。それを思へば日本の文壇は、新開地だけに惡風も少い。賣笑批評とか仲間褒め批評とか云つても、まづ害毒は知れたものである。

因に云ふ。この評論の筆者はマダム・ド・サブレ、評論されたのは例の格言集である。

九　歴史小説

歴史小說と云ふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠實でないものはない。しかし一時代の特色のみを、——殊に道德上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとへば日本の王朝時代は、男女關係の考へ方でも、現代のそれとは大分違ふ。其處を宛然作者自身も、和泉式部の友だちだつたやうに、虛心平氣に書き上げるのである。この種の歷史小說は、その現代との對照の間に、自然或暗示を與へ易い。メリメのイザベラもこれである。フランスのピラトもこれである。

しかし日本の歷史小說には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に、今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へた、手つ取り早い作品ばかりである。誰か年少の天才の中に、上記の新機軸を出すものはゐないか？

十　世人

西洋雜誌の載せる所によると、二十一年の九月巴里にアナトオル・フランスの像の建つた時、彼自身その除幕式に演說を試みたと云ふ事である。この頃それを讀んでゐると、かう云ふ一節を

發見した。「わたしが人生を知つたのは、人と接觸した結果ではない。本と接觸した結果である。」しかし世人は書物に親しんでも、人生はわからぬと云ふかも知れない。ルノアルの言つた言葉に、「畫を學ばんとするものは美術館に行け」とか云ふのがある。しかし世人は古名畫を見るよりも、自然に學べと云ふかも知れない。世人とは常にかう云ふものである。

十一　火渡りの行者

社會主義は、理非曲直の問題ではない。單に一つの必然である。僕はこの必然を必然と感じないものは、恰も火渡りの行者を見るが如き、驚嘆の情を禁じ得ない。あの過激思想取締法案とか云ふものの如きは、正にこの好例の一つである。

十二　俊寛

平家物語や源平盛衰記以外に、俊寛の新解釋を試みたものは現代に始まつた事ではない。近松門左衛門の俊寛の如きは、最も著名なものの一つである。

近松の俊寛の島に殘るのは、俊寛自身の意志である。丹左衛門尉基康は、俊寛成經康頼等

人の赦免狀を携へてゐる。が、成經の妻になつた、島の女千鳥だけは、舟に乘る事を許されない。正使基康には許す氣があつても、副使の妹尾が許さぬのである。妻子の死を聞いた俊寛は、千鳥を船に乘せる爲に、妹尾太郎を殺してしまふ。「上使を斬りたる咎によつて、改めて今鬼界が島の流人となれば、上の御慈悲の筋も立ち、御上使の落度いささかなし。」この英雄的な俊寛は、成經康賴等の乘船を勸めながら、從容と又かうも云ふのである。「俊寛が乘るは弘誓の船、浮き世の船には望みなし。」

僕は以前久米正雄と、この俊寛の芝居を見た。俊寛は故人段四郎、千鳥は歌右衛門、基康は羽左衛門、――他は記憶に殘つてゐない。俊寛が乘るは云云の文句は、當時大いに久米正雄を感心させたものである。

近松の俊寛は源平盛衰記の俊寛よりも、遙かに偉い人になつてゐる。勿論舟出を見送る時には、嘆き悲しむのに相違ない。しかしその後は近松の俊寛も、安らかに餘生を送つたかも知れぬ。少くとも盛衰記の俊寛程、悲しい末期には遇はなかつたであらう。――さう云ふ心もちを與へる限り、「苦しまざる俊寛」を書いたものは、夙に近松にあつたと云ふべきである。

しかし近松の目ざしたのは、「苦しまざる俊寛」にのみあつたのではない。彼の俊寛は「平家女護が島」の登場人物の一人である。が、倉田、菊池兩氏の俊寛は、俊寛のみを主題としてゐる。鬼界

が島に流された俊寬は如何に生活し、又如何に死を迎へたか？——これが兩氏の問題である。この問題は殊に菊池氏の場合、かう云ふ形式にも換へられるであらう。——「我等は俊寬と同じやうに、島流しの境遇に陷つた時、どう云ふ生活を營むであらうか？」

近松と兩氏との立ち場の相違は、盛衰記の記事の改めぶりにも、窺はれると云ふ事を妨げない。近松はあの俊寬を作る爲に、俊寬の悲劇の關鍵たる赦免狀の件さへも變更した。兩氏も勿論近松に劣らず、盛衰記の記事を無視してゐる。しかし兩氏とも近松のやうに、赦免狀の件は改めてゐない。與へられたる條件の内に、俊寬の解釋を試みる以上、これだけは保存せねばならぬからである。

丁度その場合と同じやうに、倉田氏と菊池氏との立ち場の相違も、やはり盛衰記の記事を變更した、その變更のし方に見えるかも知れぬ。倉田氏が俊寬の娘を死んだ事にしたり、菊池氏が島を豐沃の地にしたり、——それらは皆兩氏の俊寬、——「苦しめる俊寬」と「苦しまざる俊寬」とを描出するに便だつた爲であらう。僕の俊寬もこの點では、菊池氏の俊寬の蹤を追ふものである。唯菊池氏の俊寬は、寧ろ外部の生活に安住の因を見出してゐるが、僕のは必しもそればかりではない。

しかし謠や淨瑠璃にある通り、不毛の孤島に取り殘された儘、しかもなほ悠悠たる、偉い俊寬

を考へられぬではない。唯この巨鱗を捉へる事は、現在の僕には出來ぬのである。

附記　盛衰記に現れた俊寛は、機智に富んだ思想家であり、鶴の前を愛する色好みである。僕は特にこの點では、盛衰記の記事に忠實だつた。又俊寛の歌なるものは、康頼や成經より拙いやうである。俊寛は議論には長じてゐても、詩人肌ではなかつたらしい。僕はこの點でも、盛衰記に忠實な態度を改めなかつた。又盛衰記の鬼界が島は、たとひタイティではないにしても、滿更岩ばかりでもなささうである。もしあの盛衰記の島の記事から、邊土に對する都會人の恐怖や嫌惡を除き去れば、存外古風土記にありさうな、愛すべき島になるかも知れない。

十三　漢字と假名と

漢字なるものの特徴はその漢字の意味以外に漢字そのものの形にも美醜を感じさせることださうである。假名は勿論使用上、音標文字の一種たるに過ぎない。しかし「か」は「加」と云ふやうに、祖先はいづれも漢字である。のみならず、いつも漢字と共に使用される關係上、自然と漢字と同じやうに假名そのものの形にも美醜の感じを含み易い。たとへば「い」は落ち着いてゐる、「り」は如何にも鋭いなどと感ぜられるやうになり易いのである。

これは一つの可能性である。しかし事實はどうであらう？

僕は實は平假名には時時形にこだはることがある。たとへば「て」の字は出來るだけ避けたい。殊に「何何して何何」と次に續けるのは禁物である。その癖「何何してゐる。」と切れる時には苦にならない。「て」の字の次は「く」の字である。これも丁度折れ釘のやうに、上の文章の重量をちやんと受けとめる力に乏しい。片假名は平假名に比べると、「ク」の字も「テ」の字も落ち着いてゐる。或は片假名は平假名よりも進歩した音標文字なのかも知れない。或は又平假名に慣れてゐる僕も片假名には感じが鈍いのかも知れない。

十四　希臘末期の人

この頃エジプトの砂の中から、ヘラクレニウムの熔岩の中から、希臘人の書いたものが發見される。時代は 350 B.C. から 150 B.C. 位のものらしい。つまりアテネ時代からロオマ時代へ移らうとする中間の時代のものである。種類は論文、詩、喜劇、演説の草稿、手紙――まだ外にもあるかも知れない。作者は從來書いたものの少しは知られてゐた人もある。名前だけやつと傳はつてゐた人もある。勿論全然名前さへ傳はつてゐなかつた人もある。

しかしそれは兎も角も、さういふ斷簡零墨を近代語に譯したものを見ると、どれもこれも我我にはお馴染みの思想ばかりである。たとへば Polystratus と云ふエピクロス派の哲學者は「あら

ゆる虚僞と心勞とを脱し、人生を自由ならしむる爲には萬物生成の大法を知らなければならぬ」と論じてゐる。さうかと思へば Cercidas と云ふ所謂犬儒派の哲學者は「蕩兒と守錢奴とは黃白に富み、予ばかり貧乏するのは不都合である！……正義は土豚のやうに盲目なのか？ Themis（正義の女神）の明は蔽はれてゐるのか？」と大いに憤慨を洩らした後、「遮莫我徒は病弱を救ひ、貧窶を惠むことを任にしたい」と勇ましい信念を披露してゐる。更に又彼に先立つこと三十年餘と傳へられる Colophon の Phœnix は「何びとも金持ちには友だちである。金さへあれば神神さへ必ず君を愛するであらう。が、萬一貧しければ母親すら君を憎むであらう」と諷刺に滿ちた詩を作つてゐる。最後に Œnoanda の Diogenes は「予の所見に從へば、人類は百般の無用の事に百般の苦楚を味つてゐる。……予は既に老人である。生命の太陽も沈まうとしてゐる。予は唯予の道を敎へるだけである。……天下の人は悉く互に虛僞を移し合つてゐる。丁度一群の病羊のやうに」と救援の道を敎へてゐる。

かう云ふ思想はいつの時代、どこの國にもあつたものと見える。どうやら人種の進步などと云ふのは蛞蝓の步みに似てゐるらしい。

十五　比喩

メタフォアとかシミリイとかに文章を作る人の苦勞するのは遠い西洋のことである。我我は皆せち辛い現代の日本に育つてゐる。さう云ふことに苦勞するのは勿論、兎に角意味を正確に傳へる文章を作る餘裕さへない。しかしふと目に止まつた西洋人の比喩の美しさを愛する心だけは殘つてゐる。

「ツインガレラの顏は脂粉に荒らされてゐる。しかしその皮膚の下には薄氷の下の水のやうに何かがまだかすかに仄めいてゐる。」

これは Wassermann の書いた賣笑婦ツインガレラの肖像である。僕の譯文は拙いのに違ひない。けれどもむかし Guys の描いた、優しい賣笑婦の面影はありありと原文に見えるやうである。

十六　告白

「もつと己れの生活を書け、もつと大膽に告白しろ」とは屢諸君の勸める言葉である。僕も告白をせぬ訣ではない。僕の小說は多少にもせよ、僕の體驗の告白である。けれども諸君は承知しない。諸君の僕に勸めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上に起つた事件を臆面もなしに書けと云ふのである。おまけに卷末の一覽表には主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名假名をずらりと竝べろと云ふのである。それだけは御免を蒙らざるを得ない。――

第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮しの奥底をお目にかけるのは不快である。第二にさう云ふ告白を種に必要以上の金と名とを着服するのも不快である。たとへば僕も一茶のやうに交合記錄を書いたとする。それを又中央公論か何かの新年號に載せたとする。讀者は皆面白がる。批評家は一轉機を來したなどと褒める。友だちは愈裸になつたなどと、——考へただけでも鳥肌になる。

ストリンドベルクも金さへあれば、「痴人の告白」は出さなかつたのである。又出さなければならなかつた時にも、自國語の本にする氣はなかつたのである。僕も愈食はれぬとなれば、どう云ふ活計を始めるかも知れぬ。その時はおのづからその時である。しかし今は貧乏なりに兎に角露命を繋いでゐる。且又體は多病にもせよ、精神狀態はまづノルマアルである。マゾヒスムスなどの徵候は見えない。誰が御苦勞にも恥ぢ入りたいことを告白小說などに作るものか。

十七　チヤプリン

社會主義者と名のついたものはボルシェヴィツキたると然らざるとを問はず、悉く危險視されるやうである。殊にこの間の大地震の時にはいろいろその爲に祟られたらしい。しかし社會主義者と云へば、あのチヤアリイ・チヤプリンもやはり社會主義者の一人である。もし社會主義者を

迫害するとすれば、チャプリンも亦迫害しなければなるまい。試みに某憲兵大尉の爲にチャプリンが殺されたことを想像して見給へ。家鴨歩きをしてゐるうちに突き殺されたことを想像して見給へ。苟くも一たびフイルムの上に彼の姿を眺めたものは義憤を發せずにはゐられないであらう。この義憤を現實に移しさへすれば、――兎に角諸君もブラック・リストの一人になることだけは確かである。

十八　あそび

これはサンデイ毎日所載、福田雅之助君の「最近の米國庭球界」の一節である。

「ティルデンは指を切つてから、却つて素晴らしい當りを見せる樣になつた。なぜ指を切つてからの方が、以前よりうまくなつたかと云ふに、一つは彼の氣が緊張してゐるからだ。彼は非常に芝居氣があつて、勝てるマッチにもたやすく勝たうとはせず、或程度まで相手をあしらつて行くらしかつたが、今年度は「指」と云ふハンディキャップの爲に、ゲエムの始めから緊張してかかるから、尙更強いのである……」

ラケットを握る指を切斷した後、一層腕を上げたティルデンはまことに偉大なる選手である。が、指の滿足だつた彼も、――同時に又相手を飜弄する「あそび」の精神に富んでゐた彼も必しも

偉大でないことはない。いや、僕はティルデン自身も時時はちよつと心の底に、「あそび」の精神に富んでゐた昔をなつかしがつてゐはしないかと思つてゐる。

十九　塵勞

僕も大抵の賣文業者のやうに匆忙たる暮しを營んでゐる。勉强も中中思ふやうに出來ない。二三年前に讀みたいと思つた本も未だに讀まずにゐる始末である。僕は又かう云ふ煩ひは日本にばかりあることと思つてゐた。が、この頃ふとレミ・ド・グルモンのことを書いたものを讀んだら、グルモンはその晩年にさへ、毎日ラ・フランスに論文を一篇、二週間目にメルキュウルに對話を一篇書いてゐたらしい。すると藝術を尊重する佛蘭西に生れた文學者も甚だ淸閑には乏しい訣である。日本に生れた僕などの不平を云ふのは間違ひかも知れない。

二十　イバネス

イバネス氏も日本へ來たさうである。滯在日數も短かかつたし、まあ通り一ぺんの見物をすませただけであらう。イバネス氏の評傳には Camille Pitollet の V. Blasco-Ibáñez, Ses romans et le roman de sa vie などと云ふ本も流行してゐる。と云つて讀んでゐる次第ではない。唯二

三年前の横文字の雜誌に紹介してあるのを讀んだだけである。

「わたしの小説を作るのは作らずにはゐられない結果である。……わたしは青年時代を監獄に暮した。少くとも三十度は入獄したであらう。わたしは囚人だつたこともある。度たび野蠻な決闘の爲に重傷を蒙つたこともある。わたしは又人間の堪へ得る限りの肉體的苦痛を嘗めてゐる。貧乏のどん底に落ちたこともある。が、一方には代議士に選擧されたこともある。土耳古のサルタンの友だちだつたこともある。宮殿に住んでゐたこともある。それからずつと鉅萬の金を扱ふ實業家にもなつてゐた。亞米利加では村を一つ建設した。かう云ふことを話すのはわたしは小説を生活の上に實現出來ることを示す爲である。紙とインクとに書き上げるよりも更に數等巧妙に實現出來ることを示す爲である。」

これはピトオレエの本の中にあるイバネス氏自身の言葉ださうである。しかし僕はこれを讀んでも、文豪イバネス氏の云ふやうに、格別小説を生活の上に實現してゐると云ふ氣はしない。するのは唯小説の廣告を實現してゐると云ふ氣だけである。

二十一　船長

僕は上海へ渡る途中、筑後丸の船長と話をした。政友會の横暴とか、ロイド・ジョオジの政

義」とかそんなことばかり話したのである。その内に船長は僕の名刺を見ながら、感心したやうに小首を傾けた。

「アクタ川と云ふのは珍らしいですね。ははあ、大阪毎日新聞社、――やはり御専門は政治經濟ですか？」

僕は好い加減に返事をした。

僕等は又少時の後、ボルシェヴィズムか何かの話をし出した。僕は丁度その月の中央公論に載つてゐた誰かの論文を引用した。が、生憎船長は中央公論の讀者ではなかつた。

「どうも中央公論も好いですが、――」

船長は苦にがしさうに話しつづけた。

「小說を餘り載せるものですから、つい買ひ澁つてしまふのです。あれだけはやめる訣に行かないものでせうか？」

僕は出來るだけ情けない顏をした。

「さうです。小說には困りますね。あれさへなければと思ふのですが。」

爾來僕は船長に格別の信用を博したやうである。

二十二 相撲

「負けまじき相撲を寢ものがたりかな」とは名高い蕪村の相撲の句である。この「負けまじき」の解釋には思ひの外異説もあるらしい。「蕪村句集講義」によれば虛子、碧梧桐兩氏、近頃は又木村架空氏も「負けまじき」を未來の意味としてゐる。「明日の相撲は負けてはならぬ。その負けてはならぬ相撲を寢ものがたりに話してゐる。」――と云ふやうに解釋するのである。僕はずつと以前から過去の意味にばかり解釋してゐた。今もやはり過去の意味に解釋してゐる。「今日は負けてはならぬ相撲を負けた。それをしみじみ寢ものがたりにしてゐる。」――と云ふやうに解釋するものである。もし將來の意味だつたとすれば、蕪村は必ず「負けまじき」と調子を張つた上五の下へ「寢ものがたりかな」と調子の延びた止めを持つて來はしなかつたであらう。これは文法の問題ではない。唯「負けまじき」をどう感ずるかと云ふ藝術的觸角の問題である。尤も「蕪村句集講義」の中でも、子規居士と內藤鳴雪氏とはやはり過去の意味に解釋してゐる。

二十三 「とても」

「とても安い」とか「とても寒い」と云ふ「とても」の東京の言葉になり出したのは數年以前のこと

である。勿論「とても」と云ふ言葉は東京にも全然なかつた訣ではない。が從來の用法は「とてもかなはない」とか「とても纏まらない」とか云ふやうに必ず否定を伴つてゐる。

肯定に伴ふ新流行の「とても」は三河の國あたりの方言であらう。現に三河の國の人のこの「とても」を用ゐた例は元祿四年に上梓された「猿簑」の中に殘つてゐる。

秋風やとても芒はうごくはず　三河、子尹

すると「とても」は三河の國から江戸へ移住する間に二百年餘りかかつた譯である。「とても手間どつた」と云ふ外はない。

二十四　猫

これは「言海」の猫の説明である。

「ねこ、(中略)人家ニ畜フ小サキ獸。人ノ知ル所ナリ。溫柔ニシテ馴レ易ク、又能ク鼠ヲ捕フレバ畜フ。然レドモ竊盜ノ性アリ。形虎ニ似テ二尺ニ足ラズ。(下略)」

成程猫は膳の上の刺身を盜んだりするのに違ひはない。が、これをしも「竊盜ノ性アリ」と云ふならば、犬は風俗壞亂の性あり、燕は家宅侵入の性あり、蛇は脅迫の性あり、蝶は浮浪の性あり、鮫は殺人の性ありと云つても差支へない道理であらう。按ずるに「言海」の著者大槻文彥先生は少

くとも鳥獸魚貝に對する誹謗の性を具へた老學者である。

二十五　版數

日本の版數は出たらめである。僕の聞いた風說によれば、或相當の出版業者などは内務省への獻本二冊を一版に數へてゐるらしい。たとひそれは譃としても、今日のやうに出たらめでは、五十版百版と云ふ廣告を目安に本を買つてゐる天下の讀者は愚弄されてゐるのも同じことである。尤も佛蘭西の版數さへ甚だ當てにならぬものださうである。例へばゾラの晩年の小說などは二百部を一版と號してゐたらしい。しかしこれは惡習である。何も香水やオペラ・バックのやうに輸入する必要はないに違ひない。且又メルキュルは出版した本に一一何册目と記したこともある。メルキュルを學ぶことは困難にしろ、一版を何部と定めた上、版數も僞らずに廣告することは當然日本の出版業組合も厲行して然るべき企てであらう。いや、かう云ふ見易いことは賢明なる出版業組合の諸君のとうに氣づいてゐる筈である。するとそれを實行しないのは「もし佳書を得んと欲せば版數の少きを選べ」と云ふ敎訓を垂れてゐるのかも知れない。

二十六　家

早川孝太郎氏は「三州横山話」の巻末にまじなひの歌をいくつも掲げてゐる。

盗賊の用心に唱へる歌、――「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる木、夢の間に何ごとあらば起せ、桁梁」

火の用心の歌、――「霜柱、氷の梁に雪の桁、雨のたる木に露の葺き草」

いづれも「家」に生命を感じた古へびとの面目を見るやうである。かう云ふ感情は我我の中にもとうの昔に死んでしまつた。我我よりも後に生れるものは是等の歌を讀んだにしろ、何の感銘も受けないかも知れない。或は又鐵筋コンクリイトの借家住まひをするやうになつても、是等の歌は幻のやうに山かげに散在する茅葺屋根を思ひ出させてくれるかも知れない。

なほ次手に廣告すれば、早川氏の「三州横山話」は柳田國男氏の「遠野物語」以來、最も興味のある傳說集であらう。發行所は小石川區茗荷谷町五十二番地郷土研究社、定價は僅かに七十錢である。但し僕は早川氏も知らず、勿論廣告も頼まれた訣ではない。

附記　なほ四五十年前の東京にはかう云ふ歌もあつたさうである。「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる木、梁も聽け、明けの六つには起せ大びき」

二十七　續「とても」

肯定に伴ふ「とても」は東京の言葉ではない。東京人の古來使ふのは「とても及ばない」のやうに否定に伴ふ「とても」である。近來は肯定に伴ふ「とても」も盛んに行はれるやうになつた。たとへば「とても綺麗だ」「とてもうまい」の類である。この肯定に伴ふ「とても」の「猿蓑」の中に出てゐることは「澄江堂雜記」(隨筆集「百艸」の中)に辨じて置いた。その後島木赤彦さんに注意されて見ると、この「とても」も「とてもかくても」の「とても」である。

秋風やとても芒はうごくはず　三河、子尹

しかしこの頃又亂讀をしてゐると、「續春夏秋冬」の春の部の中にもかう言ふ「とても」を發見した。

市雛やとても數ある顏貌　化羊

元祿の子尹は肩書通り三河の國の人である。明治の化羊は何國の人であらうか。

二十八　丈艸の事

蕉門に龍象の多いことは言ふを待たない。しかし誰が最も的的と芭蕉の衣鉢を傳へたかと言へば恐らくは內藤丈艸であらう。少くとも發句は蕉門中、誰もこの俳諧の新發知ほど芭蕉の寂びを捉へたものはない。近頃野田別天樓氏の編した「丈艸集」を一讀し、殊にこの感を深うした。

前書略

木枕の垢や伊吹にのこる雪
大原や蝶の出て舞ふおぼろ月
谷風や青田を廻る庵の客
小屏風に山里涼し腹の上
竈のさそひ出してや火とり蟲
草芝を出づる螢の羽音かな
雞頭の晝をうつすやぬり枕
病人と撞木に寢たる夜寒かな
蜻蛉の來ては蠅とる笠の中
夜明けまで雨吹く中や二つ星
榾の火や曉がたの五六尺

是等の句は啻に寂びを得たと言ふばかりではない。一句一句變化に富んでゐることは作家たる力量を示すものである。几董輩の丈艸を嗤つてゐるのは僭越も亦甚しいと思ふ。

二十九　袈裟と盛遠

「袈裟と盛遠」と云ふ獨白體の小說を、四月の中央公論で發表した時、或大阪の人からこんな手紙を貰つた。「袈裟は亘の義理と盛遠の情とに迫られて、操を守る爲に死を決した烈女である。それを盛遠との間に情交のあつた如く書くのは、烈女袈裟に對しても氣の毒なら、國民教育の上にも面白からん結果を來すだらう。自分は君の爲にこれを取らない。」が、當時すぐにその人へも返事を書いた通り、袈裟と盛遠との間に情交があつた事は、自分の創作でも何でもない。源平盛衰記の文覺發心の條に、「はや來つて女と共に臥し居たり、狹夜も漸更け行きて云云」と、ちやんと書いてある事である。

それを世間一般は、どう云ふ量見か默殺してしまつて、あの憐む可き女主人公をさも人間ばなれのした烈女であるかの如く廣告してゐる。だから史實を勝手に改竄した罪は、あの小說を書いた自分になくして、寧ろあの小說を非難するブルヂョア自身にあつたと云つて差支へない。改竄するしないは格別大問題だとも心得てゐないが、事實としてこの機會にこれだけの事を發表して置く。勿論源平盛衰記の記事は譃だと云ふ考證家が現れたら、自分は甘んじて何時でも、改竄者の燒印を押されようとするものである。

三十　後世

私は知己を百代の後に待たうとしてゐるものではない。

公衆の批判は、常に正鵠を失しやすいものである。現在の公衆は元より云ふを待たない。歴史は旣にペリクレス時代のアゼンスの市民や文藝復興期のフロレンスの市民でさへ、如何に理想の公衆とは緣が遠かつたかを敎へてゐる。旣に今日及び昨日の公衆にして斯くの如くんば、明日の公衆の批判と雖も亦推して知るべきものがありはしないだらうか。彼等が百代の後よく砂と金とを辨じ得るかどうか、私は遺憾ながら疑ひなきを得ないのである。

よし又理想的な公衆があり得るにした所で、果して絕對美なるものが藝術の世界にあり得るであらうか。今日の私の眼は、唯今日の私の眼であつて、決して明日の私の眼ではない。と同時に又私の眼が、結局日本人の眼であつて、西洋人の眼でない事も確である。それならどうして私に、時と處とを超越した美の存在などが信じられよう。成程ダンテの地獄の火は、今も猶東方の豎子をして戰慄せしむるものがあるかも知れない。けれどもその火と我我との間には、十四世紀の伊太利なるものが雲霧の如くにたなびいてゐるではないか。

況んや私は尋常の文人である。後代の批判にして誤らず、普遍の美にして存するとするも、書

を名山に藏する底の事は、私の爲すべき限りではない。私が知己を百代の後に待つものでない事は、問ふまでもなく明かであらうと思ふ。

時時私は廿年の後、或は五十年の後、或は更に百年の後、私の存在さへ知らない時代が來ると云ふ事を想像する。その時私の作品集は、堆い埃に埋もれて、神田あたりの古本屋の棚の隅に、空しく讀者を待つてゐる事であらう。いや、事によつたらどこかの圖書館にたつた一册殘つた儘、無殘な紙魚の餌となつて、文字さへ讀めないやうに破れ果ててゐるかも知れない。しかし――

私はしかしと思ふ。

しかし誰かが偶然私の作品集を見つけ出して、その中の短い一篇を、或は其一篇の中の何行かを讀むと云ふ事がないであらうか。更に蟲の好い望みを云へば、その一篇なり何行かなりが、私の知らない未來の讀者に多少にもせよ美しい夢を見せるといふ事がないであらうか。

私は知己を百代の後に待たうとしてゐるものではない。だから私はかう云ふ私の想像が如何に私の信ずる所と矛盾してゐるかも承知してゐる。

けれども私は猶想像する。落莫たる百代の後に當つて、私の作品集を手にすべき一人の讀者のある事を。さうしてその讀者の心の前へ、朧げなりとも浮び上る私の蜃氣樓のある事を。

私は私の愚を嗤笑すべき賢達の士のあるのを心得てゐる。が、私自身と雖も私の愚を笑ふ點に

かけては敢て人後に落ちようとは思つてゐない。唯、私は私の愚を笑ひながら、しかもその愚に戀々たる私自身の意氣地なさを憐れまずにはゐられないのである。或は私自身と共に意氣地ない一般人間をも憐れまずにはゐられないのである。

三十一 「昔」

僕の作品には昔の事を書いたものが多いから、そこでその昔の事を取扱ふ時の態度を話せと云ふ註文が來た。態度とか何とか云ふと、甚大袈裟に聞えるが、何もそんな大したものを持ち合せてゐる次第では決してない。まあ僕の昔の事を書く時に、どんな眼で昔を見てゐるか、云ひ換れば僕の作品の中で昔がどんな役割を勤めてゐるか、そんな事を話して見ようかと思ふ。元來裃をつけての上の議論ではないのだから、どうかその心算でお聽きを願ひたい。

お伽噺を讀むと、日本のなら「昔々」とか「今は昔」とか書いてある。西洋のなら「まだ動物が口を利いてゐた時に」とか「ベルトが糸を紡いでゐた時に」とか書いてある。あれは何故であらう。どうして「今」ではいけないのであらう。それは本文に出て來るあらゆる事件に或可能性を與へる爲の前置きにちがひない。何故かと云ふと、お伽噺の中に出て來る事件は、いづれも不思議な事ばかりである。だからお伽噺の作者にとつては、どうも舞臺を今にするのは具合が惡い。絕對に

今ではならんと云ふ事はないが、それよりも昔の方が便利である。「昔々」と云へば既に太古緬邈の世だから、小指ほどの一寸法師が住んでゐても、竹の中からお姫様が生れて來ても、格別矛盾の感じが起らない。そこで豫め前へ「昔々」と食附けたのである。

所でもしこれが「昔々」の由來だとすれば、僕が昔から材料を採るのは大半この「昔々」と同じ必要から起つてゐる。と云ふ意味は、今僕が或テエマを捉へてそれを小說に書くとする。さうしてそのテエマを藝術的に最も力强く表現する爲には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし惡い、もし强て書けば、多くの場合不自然の感を讀者に起させて、その結果折角のテエマまでも犬死をさせる事になつてしまふ。所でこの困難を除く手段には「今日この日本に起つた事としては書きこなし惡い」と云ふ語が示してゐるやうに、昔か（未來は稀であらう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起つた事とするより外はない。僕の昔から材料を採つた小說は大抵この必要に迫られて、不自然の障碍を避ける爲に舞臺を昔に求めたのである。

しかしお伽噺と違つて小說は小說と云ふものの要約上、どうも「昔々」だけ書いてすましてゐると云ふ譯には行かない。そこで略時代の制限が出來て來る。從つてその時代の社會狀態と云ふやうなものも、自然の感じを滿足させる程度に於て幾分とり入れられる事になつて來る。だから所

謂歷史小說とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的にしてゐないと云ふ點で區別を立てる事が出來るかも知れない。――まあざつとこんなものである。

序につけ加へて置くが、さう云ふ次第だから僕は昔の事を小說に書いても、その昔なるものに大して憧憬は持つてゐない。僕は平安朝に生れるよりも、江戶時代に生れるよりも、遙に今日のこの日本に生れた事を難有く思つてゐる。

それからもう一つつけ加へて置くが、或テエマの表現に異常なる事件が必要になる事があると云つたが、それには其外にすべて異常なる物に對して僕（我我人間と云ひたいが）の持つてゐる興味も働いてゐるだらうと思ふ。それと同じやうに或異常なる事件を不自然の感じを與へずに書きこなす必要上、昔を選ぶと云ふ事にも、さう云ふ必要以外に昔其ものの美しさが可也影響を與へてゐるのにちがひない。しかし主として僕の作品の中で昔が勤めてゐる役割は、やはり「ベルトが糸を紡いでゐた時に」である。或は「まだ動物が口を利いてゐた時に」である。

三十二　徳川末期の文藝

徳川末期の文藝は不眞面目であると言はれてゐる。成程不眞面目ではあるかも知れない。しかしそれ等の文藝の作者は果して人生を知らなかつたかどうか、それは僕には疑問である。彼等通

人も肚の中では如何に人生の暗澹たるものかは心得てゐたのではないであらうか？　しかもその事實を回避する爲に（たとひ無意識的ではあつたにもせよ）洒落れのめしてゐたのではないであらうか？　彼等の一人、――たとへば宮武外骨氏の山東京傳を讀んで見るが好い。ああ云ふ生涯に往しながら、しかも人生の暗澹たることに氣づかなかつたと云ふのは不可解である。

　これは何も黄表紙だの洒落本だのの作者ばかりではない。僕は曲亭馬琴さへも彼の勸善懲惡主義を信じてゐなかつたと思つてゐる。馬琴は或は信じようと努力してはゐたかも知れない。が饗庭篁村氏の編した馬琴日記抄等によれば、馬琴自身の矛盾には馬琴も氣づかずにはゐなかつた筈であらう。森鷗外先生は確か馬琴日記抄の跋に「馬琴よ、君は幸福だつた。君はまだ先王の道に信頼することが出來た」とか何とか書かれたやうに記憶してゐる。けれども僕は馬琴も亦先王の道などを信じてゐなかつたと思つてゐる。

　若し譃と云ふことから言へば、彼等の作品は譃ばかりである。彼等は彼等自身と共に世間を欺いてゐたと言つても好い。しかし善や美に對する欣求は彼等の作品に殘つてゐる。殊に彼等の生きてゐた時代は佛蘭西のロココ王朝と共に實生活の隈隈にさへ美意識の行き渡つた時代だつた。從つて美しいと云ふことから言へば、彼等の作品に溢れた空氣は如何にも美しい（勿論多少頽廢した）ものであらう。

僕は所謂江戸趣味に餘り尊敬を持つてゐない。同時に又彼等の作品にも頭の下らない一人である。しかし單に「淺薄」の名のもとに彼等の作品を一笑し去るのは彼等の爲に氣の毒であらう。若し彼等の「常談」としたものを「眞面目」と考へて見るとすれば、黃表紙や洒落本もその中には幾多の問題を含んでゐる。僕等は彼等の作品に隨喜する人人にも贊成出來ない。けれども亦彼等の作品を一笑してしまふ人人にもやはり輕輕に贊成出來ない。

（大正七年—十三年）

續澄江堂雜記

一　夏目先生の書

僕にも時々夏目先生の書を鑑定してくれろと言ふ人がある。が、僕の眼光ではどうも判然とは鑑定出來ない、唯まつ赤な贋せものだけはおのづから正體を現はしてくれる。僕は近頃その贋せものの中に決して贋せものとは思はれぬ一本の扇に遭遇した。成程この扇に書いてある句は漱石と言ふ名はついてゐても、確かに夏目先生の書いたものではない。しかし又句がらや書體から見れば、夏目先生の贋せものを作る爲に書いたのではないことも確かである。この漱石とは何ものであらうか？　太白堂三世村田桃鄰も始めの名はやはり漱石である。けれども僕の見た扇はさほど古いものとも思はれない。僕はこの贋せものならざるに贋せものと呼ばれる扇の筆者を如何にも氣の毒に思つてゐる。因に言ふ、夏目先生の書にも近年はめつきり贋せものが殖えたらしい。

（大正十四年十月二十日）

二　霜の來る前

毎日庭を眺めてゐると、苔の最も美しいのは霜の來る前、――まづ十月一ぱいである。それから霜の來る前に「カナメモチ」や「モツコク」などの赤々と芽をふいてゐるのは美しいよりも寧ろもの哀れでならぬ。（同年十一月十日）

三　澄江堂

僕になぜ澄江堂などと號するかと尋ねる人がある。なぜと言ふほどの因縁はない。唯いつか漫然と澄江堂と號してしまつたのである。いつか佐佐木茂索君は「スミエと言ふ藝者に惚れたんですか？」と言つた。が、勿論そんな訣でもない。僕は時々本名の外に入らざる名などをつけることはよせば好かつたと思つてゐる。（十一月十二日）

四　雅號

しかし雅號と言ふものはやはり作品と同じやうにその人の個性を示すものである。菱田春草は年少時代には駿走の號を用ひてゐた。年少時代の春草は定めし駿走らしかつたであらう。さう言

へば正宗白鳥氏も昔は白塚と號してゐたかと思ふ。これは僕の記憶違ひかも知れない。が、若し違つてゐないとすれば、この號も兎に角年少時代の正宗氏を想はせるのに足るものであらう。僕は昔の文人たちの雅號を幾つも持つてゐたのは必しも道樂に拵へたのではない。彼等の趣味の進歩に應じておのづから出來たものと思つてゐる。（同前）

五　シルレルの頭蓋骨

シルレルの遺骸は彼の歿年、——千八百五年以來、ちやんとワイマアルの大公爵家の靈廟の中に收められてゐた。が、二十年ばかりたつた後、その靈廟を再建する際に頭蓋骨だけゲエテに贈ることになつた。ゲエテは彼の机の上にこの舊友の頭蓋骨を置き、「シルレル」と題する詩を作つた。そればかりではない。エエベルラインなどは御苦勞にも「シルレルの頭蓋骨を見守れるゲエテ」とか何とか言ふ半身像を作つた。けれどもこれはシルレルではない、誰か他の人の頭蓋骨だつた。（ほんたうのシルレルの頭蓋骨はやつと近年テユウビンゲンの解剖學の教授に發見された。）僕はかう言ふ話を讀み、惡魔のいたづらを見たやうに感じた。他人の頭蓋骨に感激したゲエテは勿論滑稽に見えるであらう。しかしその頭蓋骨がなかつたとしたらば、ゲエテ詩集は少くとも「シルレル」の一篇を缺いてゐたのである。（十一月二十日）

六　美人禍

ゲエテをワイマアルの宮廷から退かせたのはフォン・ハイゲンドルフ夫人である。しかも又ショオペンハウエルに一世一代の戀歌を作らせたのもやはりこのフォン・ハイゲンドルフ夫人である。前者に反感を抱いた女性は彼女の外になかつたらしい。後者に好感を與へたのは勿論彼女一人である。兎に角雨天才を惱ませただけでも、ただの女ではなかつたのであらう。現に寫眞に徵すると、目の大きい、鼻の尖つた、如何にも一癖ありげな美人である。（二十一日）

七　放心

僕は教師をしてゐた頃、ネクタイをするのを忘れたまま、澄まして往來を歩いてゐた。それを幸ひにも見つけてくれたのは當年の菅忠雄君である。しかしその後學校へ行つたら、今度は物理の教官が一人、カラアをつけるのを忘れたと見え、ネクタイだけシャツにぶら下げてゐた。どちらがはた目には可笑しかつたかしら。（二十二日）

八　同上

僕は菊池と長崎へ行つた時、汽車中大いに文藝論をした。そのうちにふと氣がついて見ると、菊池はいつか兩手の間にパラソルを一本まはしてゐる。僕は勿論「おい、君」と言つた。すると菊池は苦笑しながら、鄰にゐた奥さんにパラソルを返した。僕は早速文藝論の代りに菊池の放心を攻撃した。菊池の降參したのはこの時だけである。が、長崎を立つ段になると、僕自身うつかり上野屋へ雨外套を忘れて來てしまつた。菊池の嬉しがるまいことか、忌々しくも大笑ひをして曰、

「君も亦細心は誇れないね。」（同上）

わが家の古玩

蓬平作墨蘭圖一幀、司馬江漢作秋果圖一幀、仙厓作鍾鬼圖一幀、愛石の柳陰呼渡圖一幀、巣兆、樗良、蜀山、素檗、乙二等の自詠を書せるもの各一幀、高泉、慧林、天祐等の書各一幀、――わが家の藏幅はこの數幀のみなり。他にわが伯母の嫁げる狩野勝玉作小楠公圖一幀、わが養母の父なる香以の父龍池作福祿壽圖一幀等あれども、こはわが一族を想ふ爲に稀に壁上に掲ぐるのみ。陶器もペルシア、ギリシア、ワコ、新羅、南京古赤畫、白高麗等を藏すれども、古織部の角鉢の外は言ふに足らず。古玩を愛する天下の士より見れば、恐らくは嗤笑を免れざるべし。わが吉利支丹の徒の事蹟を記せるを以て、所謂「南蠻もの」を藏すること多からんと思ふ人々もなきにあらざれども、われは數冊の古書の外に一體のマリア觀音を藏するに過ぎず。若しわれをしも蒐集家と言はば、張三李四の徒も蒐集家たるべし。然れどもわが友に小穴一游亭あり。若し千古の作什を得んと欲すれば、必しもかの書畫家の如く叩頭百拜するを須ひず。當來の古玩の作家を有せる

は或は古玩を有するよりも多幸なる所以なり。

古玩は前人の作品なり。前人の作品を愛するは必しも容易の業にあらず。われは室生犀星の陶器を愛するを見、その愛を共にするに一年有半を要したり。書畫、篆刻、等を愛するに至りしも小穴一游亭に負ふ所多かるべし。天下に易々として古玩を愛するものあるを見る、われは唯わが性の迂拙なるを歎ずるのみ。然れども文章を以て鳴るの士の蒐集品を一見すれば、いづれも皆古玩と稱するに足らず。唯室生犀星の蒐集品はおのづから蒐集家の愛を感ぜしむるに足る。古玩にして佳什ならざるも、凡庸の徒の及ばざる所なるべし。

われは又子規居士の短尺の如き、夏目先生の書の如き、近人の作品も藏せざるにあらず。然れどもそは未だ古玩たらず。(半ば古玩たるにもせよ。)唯近人の作品中、「越哉」及び「鳳鳴岐山」と刻せる濱村藏六の石印のみは聊か他に示すに足る古玩たるに近からん乎。わが家の古玩に乏しきは正に上に記せるが如し。われを目して「骨董好き」と言ふ、誰か掌を拊つて大笑せざらん。唯われは古玩を愛し、古玩のわれをして恍惚たらしむるを知る。賣り立ての古玩は價高うして落札すること能はずと雖も、古玩を愛するわが生の豪奢なるを誇るものなり。文章を作り、女人を慕ひ、更に古玩を弄ぶに至る、われ豈君王の樂しみを知らざらんや。旦暮に死するも亦瞑目すと言ふべし。雨後花落ちて啼鳥を聽く。神思殆ど無何有の郷にあるに似たり。即ちペンを走らせて「わが

家の古玩」の一文を艸す。若し他日わが家の古玩の目録となるを得ば、幸甚なるべし。

（昭和二年）

〔遺稿〕

人物記

岩野泡鳴氏

何でも秋の夜更けだつた。

僕は岩野泡鳴氏と一しよに、巣鴨行の雷車に乘つてゐた。泡鳴氏は昂然と洋傘の柄にマントの肘をかけて、例の如く聲高に西洋草花の栽培法だの氏が自得の健胃法だのをいろいろ僕に話してくれた。

その内にどう云ふ拍子だつたか、話題が當時評判だつた或小説の賣れ行きに落ちた。すると泡鳴氏は傍若無人に、

「しかし君、新進作家とか何とか云つたつて、そんなに本は賣れやしないだらう。僕の本は大抵一部賣れるが、君なんぞは一體何部位賣れる？」と云つた。

僕は聊か恐縮しながら、止むを得ず「傀儡師」の賣れ高を答へた。

「皆そんなものかね？」

泡鳴氏は更に追求した。

僕よりも著書の賣れ高の多い新進作家は大勢ある。――僕は二三の小說を擧げて、僕の仄聞する賣れ高を答へた。それらは不幸にも氏の著書より、多數は賣れ行きが好いに違ひなかつた。

「さうかね。存外好く賣れるな。」

泡鳴氏は一瞬間、不審さうに顏を曇らせた。が、それは文字通り、一瞬間に過ぎなかつた。僕がまだ何とも答へない內に、氏の眼には忽ち前のやうな潑剌たる光が還つて來た。と同時に泡鳴氏は恰も天下を憐れむが如く、悠然とかう云ひ放つた。

「尤も僕の小說はむづかしいからな。」

詩人、小說家、戲曲家、評論家、――それらの資格は餘人がきめるが好い。少くとも僕の眼に映じた我岩野泡鳴氏は、殆ど壯嚴な氣がする位、愛すべき樂天主義者だつた。

豐島與志雄氏

豐島は僕より一年前に佛文を出た先輩だから、親しく話しをするやうになつたのは、寧ろ最近の事である。僕が始めて豐島與志雄と云ふ名を知つたのは、一校の校友會雜誌に「褪紅色の球」と云ふ小品が出た時だらう。それがどう云ふ訣か、僕の記憶には「登志雄」として殘つた。その登志雄が與志雄と校正されたのは、豐島に會つてからの事だつたと思ふ。

初めて會つたのは、第三次の新思潮を出す時に、本郷の豐國の二階で、出版元の啓成社の人たちと同人との會があつた、その時の事である。一番隅の方へひつこんでゐた僕の前へ、紺絣の着物を着た、大柄な、色の白い、若い人が來て坐つた。眼鏡はその頃はまだかけてゐなかつたと思ふが、確には覺えてゐない。僕はその人と小說の話をした。それが豐島だつた事は、云ふまでもなからう。何でもその時は、大へんおとなしい、無口な人と云ふ印象を受けた。それから、いい男だとも思つたらしい。らしいと云ふのは、その後鴻の巢か何かで會があつた時に、豐島の男ぶ

りを問題にした覺えがあるからである。

それから豐島とは、始終或程度の間隔を置いて、つき合つてゐた。何かの用で內へ來た時に、ムンクの畫が好きだと云ひながら、持つてゐる本を出して見せた事がある。多分好きだらうと思つて、ギイの素描を見せたら、これは嫌ひだと云つたのもその時ではないかと思ふ。それからどこかの芝居の二階で遇つた事がある。その時は糸織の羽織か何か着て、髮を油で光らせて、甚大家らしい風格を備へてゐた。それから新思潮が發刊して一年たつた年の秋、どこかで皆が集まつて、飯を食つた時にも會つたと云ふ記憶がある。「玉突場の一隅」を褒めたら、あれは左程自信がないと云つたのも恐らく其時だつたらう。それから——後はみんな、忘れてしまつた。が、兎に角、世間並の友人づき合ひしかしなかつた事は確である。それでゐて、始終豐島の作品を注意して讀んでゐた所を見ると、やはり僕の興味は豐島の書く物に可也強く動かされてゐたのかも知れない。

それが今日ではだんだんお互に下らない事もしやべり合ふやうな仲になつた。尤もそれは何時からだかはつきり分らない。三土會などが出來る以前からだつたやうな氣もするし、以後からだつたやうな氣もしない事はない。

豐島は作品から受ける感じとよく似た男である。誰かがそれを洒落て、「豐島は何時でも秋の

中にゐる」と形容した。さう云ふ性格の一面は世間でもよく知つてゐるだらう。が、豐島の人間にある愛す可き惡黨味は、その藝術からは得られない。親しくしてゐると、ちよいと人の好い公卿惡と云ふやうな所がある。さうしてそれが豐島の人間に、或「動き」をつけてゐる。さう云ふ所を知つて見ると、豐島が比較的多方面な生活上の趣味を持つてゐるのも不思議はない。

だから何も豐島は「何時でも秋の中にゐる」訣ではない。反つて實は秋が豐島の中にゐるのである。

（大正七年四月）

菊池寛氏

自分は菊池寛と一しよにゐて、氣づまりを感じた事は一度もない。と同時に退屈した覺えも皆無である。菊池となら一日ぶらぶらしてゐても、飽きるやうな事はなからうと思ふ。(尤も菊池は飽きるかも知れないが。)それと云ふのは、菊池と一しよにゐると、何時も兄貴と一しよにゐるやうな心もちがする。こつちの善い所は勿論了解してくれるし、よしんば惡い所を出しても同情してくれさうな心もちがする。又實際、過去の記憶に照して見ても、さうでなかつた事は一度もない。唯、この弟たるべき自分が、時々向うの好意にもたれかかつて、あるまじき勝手な熱を吹く事もあるが、それさへ自分に云はせると、兄貴らしい氣がすればこそである。

この兄貴らしい心もちは、勿論一部は菊池の學殖が然しめる所にも相違ない。彼のカルテュアは多方面で、しかもそれぞれに理解が行き屆いてゐる。が、菊池が兄貴らしい心もちを起させるのは、主として彼の人間の出來上つてゐる結果だらうと思ふ。ではその人間とはどんなものだと

云ふと、一口に說明する事は困難だが、苦勞人と云ふ語の持つてゐる一切の俗氣を洗つてしまへば、正に菊池は立派な苦勞人である。その證據には自分の如く平生好んで悪辣な辯舌を弄する人間でも、菊池と或問題を論じ合ふと、その議論に勝つた時でさへ、どうもこつちの云ひ分に空疎な所があるやうな氣がして、一向勝ち映えのある心もちになれない。ましてこつちが負けた時は、ものの分つた伯父さんに重々御尤な意見をされたやうな、甚憫然な心もちになる。いづれにしてもその原因は、思想なり感情なりの上で、自分よりも菊池の方が、餘計苦勞をしてゐるからだらうと思ふ。だからもつと卑近な場合にしても、實生活上の問題を相談すると、誰よりも菊池がこつちの身になつて、いろいろ考をまとめてくれる。このこつちの身になると云ふ事が、我々――殊に自分には眞似が出來ない。いや、實を云ふと、自分の問題でもこつちの身になつて考へないと云ふ事を、內々自慢にしてゐるやうな時さへある。現に今日まで度々自分は自分よりも自分の身になつて、菊池に自分の問題を考へて貰つた。それ程自分に兄貴らしい心もちを起させる人間は、今の所天下に菊池寬の外は一人もゐない。

まだ外に書きたい問題もあるが、菊池の藝術に關しては、帝國文學の正月號へ短い評論を書く筈だから、ここではその方に讓つて書かない事にした。序ながら菊池が新思潮の同人の中では最も善い父で且夫たる事をつけ加へて置く。

（大正七年十二月）

佐藤春夫氏

一、佐藤春夫は詩人なり、何よりも先に詩人なり。或は誰よりも先にと云へるかも知れず。

二、されば作品の特色もその詩的なる點にあり。詩を求めずして佐藤の作品を讀むものは、猶南瓜を食はんとして蒟蒻を買ふが如し。到底滿足を得るの機會あるべからず。既に滿足を得ず、而して後その南瓜ならざるを云々するは愚も亦甚し。去つて天竺の外に南瓜を求むるに若かず。

三、佐藤の作品中、道德を諷するものなきにあらず、哲學を寓するもの亦なきにあらざれど、その思想を彩るものは常に一脈の詩情なり。故に佐藤はその詩情を滿足せしむる限り、乃木大將を崇拜する事を辭せざると同時に、大石內藏助を撲殺するも顧る所にあらず。佐藤の一身、詩佛と詩魔とを併せ藏すと云ふも可なり。

四、佐藤の詩情は最も世に云ふ世紀末の詩情に近きが如し。纖婉にしてよく幽渺たる趣を兼ぬ。「田園の憂鬱」の如き、「お絹とその兄弟」の如き、皆然らざるはあらず。これを稱して當代の珍と

云ふ。敢て首肯せざるものは皆偏に南瓜を愛するの徒か。

（大正八年五月）

久米正雄氏

久米は官能の鋭敏な田舍者です。書くものばかりぢやありません。實生活上の趣味でも田舍者らしい所は澤山あります。それでゐて官能だけは、好い加減な都會人より遙に鋭敏に出來上つてゐます。嘘だと思つたら、久米の作品を讀んでごらんなさい。色彩とか空氣とか云ふものは、如何にも鮮明に如何にも清新に描けてゐます。この點だけ切り離して云へば、現在の文壇で幾人も久米の右へ出るものはないでせう。勿論田舍者らしい所にも、善い點がないと云ふのではありません。いや、寧ろ久米のフオルトたる一面は、そこにあることさへ云はれるでせう。素朴な抒情味などは、完くこの田舍者から出てゐるのです。

序にもう一つ制限を加へませうか。それは久米が田舍者でも唯の田舍者ではないと云ふ事です。尤もこれはちや何だと云はれると少し困りますが、まあ久米の田舍者の中には、道樂者の素質が

多分にあるとでも云つて置きませう。そこから久米の作品の中にあるヴオラプテユアスな所が生れて來るのです。そんな點で多少のクラデルなんぞを想起させる所もありますが、勿論全體としては別段似てもゐません。

かう云ふ特質に冷淡な人は、久米の作品を讀んでも、一向面白くないでせう。しかしこの特質は、決してそこいらにありふれてゐるものではありません。久米正雄は、――依然として久米正雄です。

（大正八年八月）

江口渙氏

江口は決して所謂快男兒ではない。もつと複雜な、もつと陰影に富んだ性格の所有者だ。愛憎の動き方なぞも、一本氣な所はあるが、その上にまだ殆病的な執拗さが潜んでゐる。それは江口自身不快でなければ、近代的と云ふ語で形容しても好い。兎に角憎む時も愛する時も、何か酷薄に近い物が必江口の感情を火照らせてゐる。鐵が燒けるのに黑熱と云ふ狀態がある。見た所は黑いが、手を觸れれば、忽その手を爛らせてしまふ。江口の一本氣の性格は、この黑熱した鐵だと云ふ氣がする。繰返して云ふが、決して唯の鐵のやうな所謂快男兒などの類ではない。

それから江口の頭は批評家よりも、やはり創作家に出來上つてゐる。議論をしても、論理よりは直觀で押して行く方だ。だから江口の批評は、時によると脫線する事がないでもない。が、それは大抵受取つた感銘へ論理の裏打ちをする時に、脫線するのだ。感銘そのものの誤は滅多にはない。「技巧などは修辭學者にも分る。作の力、生命を掴むものが本當の批評家である。」と云ふ

說があるが、それはほんたうらしい嘘だ。作の力、生命などと云ふものは素人にもわかる。だからトルストイやドストエフスキイの飜譯が賣れるのだ。ほんたうの批評家にしか分らなければ、どこの新劇團でもストリンドベルクやイブセンをやりはしない。作の力、生命を摑むばかりでなく、技巧と內容との微妙な關係に一隻眼を有するものが、始めてほんたうの批評家になれるのだ。江口の批評家としての强味は、この微妙な關係を直覺出來る點に存してゐると思ふ。これは何でもない事のやうだが、存外今の批評家に缺乏してゐる强味なのだ。

最後に創作家としての江口は、大體として人間的興味を中心とした、心理よりも寧ろ事件を描く傾向があるやうだ。「馬丁」や「赤い矢帆」には、この傾向が最も著しく現れてゐると思ふ。が、江口の人間的興味の後には、屢如何にしても健全とは呼び得ない異常性が潛んでゐる。これは菊池が先月の文章世界で指摘してゐるから、今更繰返す必要もないが、唯、自分にはこの異常性が、あの黑熱した鐵のやうな江口の性格から必然に湧いて來たやうな心もちがする。同じ病的な酷薄さに色づけられてゐるやうな心もちがする。描寫は殆谷崎潤一郎氏の大幅な所を思はせる程達者だ。何でも平押しにぐいぐい押しつけて行く所がある。尤もその押して行く力が、まだ十分江口に支配され切つてゐない憾もない事はない。あの力が盲目力でなくなる時が來れば、それこそ江口がほんたうの江口になり切つた時だ。

江口は過去に於て屢辯難攻撃の筆を弄した。その爲に善くも惡くも、いろいろな誤解を受けてゐるらしい。江口を快男兒にするも善い誤解の一つだ。惡い誤解の一つは江口を粗笨漢扱ひにしてゐる。それらの誤解はいづれも江口の爲に、拂ひ去られなければならない。江口は快男兒だとすれば、憂鬱な快男兒だ。粗笨漢だとすれば、餘りに教養のある粗笨漢だ。僕は「新潮」の「人の印象」をこんなに長く書いた事はない。それが書く氣になつたのは、江口や江口の作品が僕等の仲間に比べると、一番歪んで見られてゐるやうな氣がしたからだ。こんな慌しい書き方をした文章でも、江口を正當に價値づける一助になれば、望外の仕合せだと思つてゐる。

（大正八年十月）

近藤浩一路氏

近藤君は漫畫家として有名であつた。今は正道を踏んだ日本畫家としても有名である。が、これは偶然ではない。漫畫には落想の滑稽な漫畫がある。畫そのものの滑稽な漫畫がある。或は二者を兼ねた漫畫がある。近藤君の漫畫の多くは、この二者を兼ねた漫畫でなければ、畫そのものの滑稽な漫畫であつた。唯、威儀を正しさへすれば、一頁の漫畫が忽ちに、一幅の山水となるのは當然である。

近藤君の畫は枯淡ではない。南畫じみた山水の中にも、何處か肉の臭ひのする、しつこい所が潜んでゐる。其處に藝術家としての貪婪が、あらゆるものから養分を吸收しようとする欲望が、露骨に感ぜられるのは愉快である。

今日の流俗は昨日の流俗ではない。昨日の流俗は、反抗的な一切に冷淡なのが常であつた。今日の流俗は反抗的ならざる一切に冷淡なのを常としてゐる。二種の流俗が入り交つた現代の日本

に處するには、——近藤君もしつかりと金剛座上に尻を据ゑて、死身に修業をしなければならない。

近藤君に始めて會つたのは、丁度去年の今頃である。君はその時神經衰弱とか號して甚意氣が昻らなかつた。が、殆丸太のやうな櫻のステツキをついてゐた所を見ると、いくら神經衰弱でも、犬位は撲殺する餘勇があつたのに違ひない。が、最近君に會つた時、君は神經衰弱も癒つたとか云つて、甚元氣らしい顏をしてゐた。健康も恢復したのには違ひないが、その間に君の名聲が大いに舉り出したのも事實である。自分はその時君と、小杉未醒氏の噂を少々した。君は、いが栗頭も昔の通りである。書生らしい容子も、以前と變つてゐない。しかしあの丸太のやうな、偉大なる櫻のステツキだけは、再び君の手に見られなかつた。——

（大正九年五月）

南部修太郎氏

――長所十八――

一、語學の英露獨など出來る事。但どの位よく出來るか知らず。

二、几帳面なる事。手紙を出せば必ず返事をくれるが如き。

三、家庭を愛する事。殊に母堂に篤きが如し。

四、論爭に勇なる事。

五、作品の雕琢に熱心なる事。遲筆なるは推敲の屢なるに依るなり。

六、おのれの作品の評價に謙遜なる事。大抵の作品は「ありや駄目だよ」と云ふ。

七、月評に忠實なる事。

八、半可な通人ぶりや利いた風の贅澤をせざる事。

九、容貌風采共卑しからざる事。

十、精進の志に乏しからざる事。大作をやる氣になつたり、讀み切りさうもない本を買つたり

する如き。
十一、妄に遊蕩せざる事。
十二、視力の好き事。一しよに往來を歩いてゐると、遠い所の物は代りに見てくれる故、甚便利なり。
十三、繪や音樂にも趣味ある事。但どちらも大してはわからざる如し。
十四、どこか若々しき所ある事。
十五、皮肉や揚足取りを云はぬ事。
十六、手紙原稿すべて字のわかり好き事。
十七、陸海軍の術語に明き事。少年時代軍人になる志望ありし由。
十八、正直なる事。嘘を云はぬと云ふ意味にあらず。稀に嘘を云ふともその爲反つて正直な所がわかるやうな嘘を云ふ意味。

（大正九年七月）

菊池寛氏 ヌ

菊池は生き方が何時も徹底してゐる。中途半端のところにこだはつてゐない。彼自身の正しいと思ふところを、ぐんぐん實行にうつして行く。その信念は合理的であると共に、必ず多量の人間味を含んでゐる。そこを僕は尊敬してゐる。僕なぞは藝術にかくれるといふ方だが、菊池は藝術に顯はれる――と言つては、をかしいが、藝術は菊池の場合、彼の生活の一部に過ぎないかの觀がある。一體藝術家には、トルストイのやうに、その人がどう人生を見てゐるかに興味のある人と、フロオベルのやうに、その人がどう藝術を見てゐるかに興味のある人と二とほりあるらしい。菊池なぞは勿論、前者に屬すべき藝術家で、その意味では人生のための藝術といふ主張に緣が近いやうである。

菊池の小說も、菊池の生活態度のやうに、思切つてぐんぐん書いてある。だから、細かい味なぞといふものは乏しいかも知れない。そこが一部の世間には物足りないらしいが、それは不服を

言ふ方が間違つてゐる。菊池の小說は大味であつても、小說としてちやんと出來上つてゐる。細かい味以外に何もない作品よりどの位ましだか分らないと思ふ。

菊池はさういふ勇敢な生き方をしてゐる人間だが、思ひやりも決して薄い方ではない。物質的に困つてゐる人たちには、殊に同情が篤いやうである。それはいくらも實例のあることだが公けにすべき事ではないから、ここに擧げることは差し控へる。それから、僕自身に關したことでいふと、仕事の上のことで、隨分今迄に菊池に慰められたり、勵まされたりしたことが多い。いや、口に出してさう言はれるよりも、菊池のデリケエトな思ひやりを無言のうちに感じて、氣強く思つたことが度々ある。だから、仕事の上では勿論、實生活の問題でも度々菊池に相談したし、これからも相談しようと思つてゐる。ただ一つ、情事に關する相談だけは持込まうと思つてゐない。

それから、頭腦のいいことも、高等學校時代から僕等の仲間では評判である。語學なぞもよく出來るが、それは結局菊池の分析的の頭腦のよさの一つの現はれに過ぎないのだと思ふ。所謂理智の逞ましさにかけては、文壇でも菊池の向うを張れる人は、數へるほどもないに違ひない。何時か雨の降る日に、菊池と外を步いてゐたことがある。僕はその時、ぬかるみに電車の影が映つたり、雨にぬれた洋傘が光つたりするのに感服してゐたが、菊池は軒先の看板や標札を覗いては、苗字の讀み方や、珍らしい職業の名なぞに注意ばかりしてゐた。菊池の理智的な心の持ち方は、

こんな些事にも現はれてゐるやうに思ふ。

それから家庭の菊池は、いい良人でもあるし、いい父でもあるのみならず、いい隣人をも兼ねてゐるやうである。菊池の家へ行くと、近所の子供が大ぜい集まつて、菊池夫婦や、菊池の子供と遊んでゐることが度々ある。一度などは菊池の一家は留守で、近所の子供だけが二三人で留守番をしてゐたことがあつた。かういふ工合に、子供たちと仲がいいのだから、その子供たちの親たちとも仲のいいのは不思議はない。僕等の間では、今に菊池は町會議員に選擧されはしないかといふ噂さへある。

今まで話したやうな事柄から菊池には、菊池の境涯がちやんと出來上がつてゐるといふ氣がする。さうして、その境涯は、可也僕には羨ましい境涯である。若し、多岐多端の現代に純一に近い生活を樂しんでゐる作家があるとしたら、それは詠嘆的に自然や人生を眺めてゐる一部の詩人的作家よりも、寧ろ、菊池なぞではないかと思ふ。

（大正九年十二月）

小杉未醒氏

一昨年の冬、香取秀眞氏が手賀沼の鴨を御馳走した時、其處に居合せた天岡均一氏が、初對面の小杉未醒氏に、「小杉君、君の畫は君に比べると、如何にも優しすぎるぢやないか」と、いきなり一撥を與へた事がある。僕はその時天岡の翁も、やはり小杉氏の外貌に欺かれてゐるなと云ふ氣がした。

成程小杉氏は一見した所、如何にも天狗倶樂部らしい、勇壯な面目を具へてゐる。僕も實際初對面の時には、突兀たる氏の風采の中に、未醒山人と名乘るよりも、寧ろ未醒蠻民と號しさうな邊方瘴煙の氣を感じたものである。が、その後氏に接して見ると、――接したと云ふ程接しもしないが、兎に角まあ接して見ると、肚の底は見かけよりも、遙に細い神經のある、優しい人のやうな氣がして來た。勿論今後猶接して見たら、又この意見も變るかも知れない。が、差當り僕の見た小杉未醒氏は、氣の弱い、思ひやりに富んだ、時には毛嫌ひも強さうな、我々と存外縁の近

い感情家肌の人物である。

だから僕に云はせると、氏の人物と氏の畫とは、天岡の翁の考へるやうに、ちぐはぐな所がある訣ではない。氏の畫はやはり竹のやうに、本來の氏の面目から、まつすぐに育つて來たものである。

小杉氏の畫は洋畫も南畫も、同じやうに物柔かである。が、決して輕快ではない。何時も妙に寂しさうな、薄ら寒い影が纏はつてゐる。僕は其處に僕等同樣、近代の風に神經を吹かれた小杉氏の姿を見るやうな氣がする。氣取つた形容を用ひれば、梅花書屋の窓を覗いて見ても、氏の唐人は氣樂さうに、林處士の詩なぞは謠つてゐない。しみじみと獨り爐に向つて、Rêvons……le feu s'allume とか何とか考へてゐさうに見えるのである。

序ながら書き加へるが、小杉氏は詩にも堪能である。が、何でも五言絶句ばかりが、總計十首か十五首しかない。その點は僕によく似てゐる。しかし出來映えを考へれば、或は僕の詩よりうまいかも知れない。勿論或はまづいかも知れない。

（大正十年二月）

森先生

或夏の夜、まだ文科大學の學生なりしが、友人山宮允君と、觀潮樓へ參りし事あり。森先生は白きシャツに白き兵士の袴をつけられしと記憶す。膝の上に小さき令息をのせられつつ、佛蘭西の小說、支那の戲曲の話などせられたり。話の中、西廂記と琵琶記とを間違へ居られし爲、先生も時には間違はるる事あるを知り、反つて親しみを增せし事あり。部屋は根津界隈を見晴らす二階、永井荷風氏の日和下駄に書かれたると同じ部屋にあらずやと思ふ。その頃の先生は面の色日に燒け、如何にも軍人らしき心地したれど、謹嚴など云ふ堅苦しさは覺えず。英雄崇拜の念に充ち滿ちたる我等には、快活なる先生とのみ思はれたり。

又夏目先生の御葬式の時、靑山齋場の門前の天幕に、受附を勤めし事ありしが、霜降の外套に中折帽をかぶりし人、わが前へ名刺をさし出したり。その人の顏の立派なる事、神彩ありとも云ふべきか、滅多に世の中にある顏ならず。名刺を見れば森林太郎とあり。おや、先生だつたかと

思ひし時は、もう齋場へ入られし後たりき。その時先生を見誤りしは、當時先生の面の色黑から ざりし爲なるべし。當時先生は陸軍を退かれ、役所通ひも止められしかば、日に燒けらるる事も なかりしなり。（未定稿）

（大正十一年八月）

恒藤恭氏

恒藤恭は一高時代の親友なり。寄宿舍も同じ中寮の三番室に一年の間居りし事あり。當時は恒藤もまだ法科にはひらず。一部の乙組卽ち英文科の生徒なりき。

恒藤は朝六時頃起き、午の休みには晝寢をし、夜は十一時の消燈前に、ちやんと齒を磨いた後、床にはひるを常としたり。その生活の規則的なる事、イマヌエル・カントの再來か時計の振子かと思ふ程なりき。當時僕等のクラスには、久米正雄の如き或は菊池寛の如き、天縱の材少からず、是等の豪傑は恒藤と違ひ、酒を飲んだりストオムをやつたり、天馬の空を行くが如き、或は乘合自動車の町を走るが如き、放縱なる生活を喜びしものなり。故に恒藤の生活は是等の豪傑の生活に對し、規則的なるよりも一層規則的に見えしなるべし。僕は恒藤の親友なりしかど、到底彼の如くに几帳面なる事能はず、人並みに寢坊をし、人並みに夜更かしをし、凡庸に日を送るを常としたり。

恒藤は又秀才なりき。格別勉強するとも見えざれども、成績は常に首席なる上、佛蘭西語だの羅甸語だの、いろいろのものを修業しゐたり。それから休日には植物園などへ、水彩畫の寫生に出かけしものなり。僕もその御伴を仰せつかり、彼の寫生する傍らに半日本を讀みし事も少からず、恒藤の描きし水彩畫中、最も僕の記憶にあるものは冬枯れの躑躅を寫せるものなり。但し記憶にある所以は不幸にも畫の妙にあらず。躑躅だと說明される迄は牛だとばかり思つてゐた故なり。

恒藤は又論客なりき。――その前にもう一つ書きたき事は恒藤も詩を作れる事なり。當時僕等のクラスには詩人歌人少からず。「げに天才の心こそカメレオンにも似たりけれ」と歌へるものは當時の久米正雄なり。「敎室の机によれば何となく怒鳴つて見たい心地するなり」と歌へるものは當時の菊池寛なり。當時の恒藤に數篇の詩あるも、亦怪しむを要せざるべし。その一篇に云ふ。

かみはつねにうゑにみてり
いのちのみをそのにまきて
みのれるときむさぼりくふ
かみのうゑのゆゑによりて

かみのみなをほめたたふや
はかなきみをむすべるもの

もう一度新たに書き出せば、恒藤は又論客なり。僕は爾來十餘年、未だ天下に彼の如く恐るべき論客あるを知らず。若し他に一人を數ふべしとせば、唯兒島喜久雄君あるのみ。僕は現在恒藤と會ふも、滅多に議論を上下せず。上下すれば負ける事をちやんと心得てゐる故なり。されど一高にゐた時分は、飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは純粹思惟とか、西田幾多郎とか、自由意志とか、ベルグソンとか、むづかしい事ばかりに限りしを記憶す。僕はこの論戰より僕の論法を發明したり。聞説す、かのガリヴァアの著者は未だ論理學には熟せざるも、議論は難からずと傲語せしと。思ふにスヰフトも親友中には、必恒藤恭の如き、辛辣なる論客を有せしなるべし。

恒藤は又謹嚴の士なり。酒色を好まず、出たらめを云はず、身を處するに清白なる事、僕などとは雲泥の差たり。同室同級の藤岡藏六も、やはり謹嚴の士なりしが、これは謹嚴すぎる憾なきにあらず。「待合のフンクティオネンは何だね？」などと屢僕を困らせしものはこの藤岡藏六なり。藤岡にはコオエンの學説よりも、待合の方が難解なりしならん。恒藤はそんな事を知らざるに非ず。知つて而して謹嚴なりしが如し。しかもその謹嚴なる事は一言一行の末にも及びたりき。

例へば恒藤は寮雨をせず。寮雨とは夜間寄宿舍の窓より、勝手に小便を垂れ流す事なり。僕は時と場合とに應じ、寮雨位辭するものに非ず。僕問ふ。「君はなぜ寮雨をしない？」恒藤答ふ。「人にされたら僕が迷惑する。だからしない。君はなぜ寮雨をする？」僕答ふ。「人にされても僕は迷惑しない、だからする。」恒藤は又賄征伐をせず。皿を破り飯櫃を投ぐるは僕も亦能くせざる所なり。僕問ふ。「君はなぜ賄征伐をしない？」恒藤問ふ。「無用に器物を毀すのは悪いと思ふから。――君はなぜしない？」僕答ふ。「しないのぢやない、出來ないのだ。」

今恒藤は京都帝國大學にシュタムラアとかラスクとかを講じ、僕は東京に文を賣る。相見る事一年に一兩度のみ。昔一高の校庭なる菩提樹下を逍遙しつつ、談笑して倦まざりし朝暮を思へば、懷舊の情に堪へざるもの多し。卽ち改造社の囑に應じ、立ちどころにこの文を作る。時に大正壬戌の年、黄花未だ發せざる重陽なり。

（大正十一年九月）

久米正雄氏 又

——倣久米正雄文體——

……新しき時代の浪曼主義者は三汀久米正雄である。「涙は理智の薄明り、感情の燈し火」とうたへる久米、眞白草花の涼しげなるにも、よき人の面影を忘れ得ぬ久米、鮮かに化粧の匂へる妓の愛想よく酒を勸むる暇さへ「招かれざる客」の歎きをする久米、——さう云ふ多感多情の久米の愛すべきことは誰でも云ふ。が、私は殊に、如何なる悲しみをもおのづから堪へる、あはれにも勇ましい久米正雄をば、こよなく嬉しく思ふものである。

　この久米はもう弱氣ではない。そしてその輝かしい微苦笑には、本來の素質に鍛錬を加へた、大いなる才人の強氣しか見えない。更に又杯盤狼藉の間に、從容迫らない態度などは何とはなしに心憎いものがある。いつも人生を薔薇色の光りに仄めかさうとする浪曼主義。その誘惑を意識しつつ、しかもその誘惑に抵抗しない、たとへば中途まで送つて來た妓と、「何事かひそひそ囁き交したる後、」莫迦莫迦しさをも承知した上、「わざと取つてつけたやうに高く左樣なら」と云ひ合

ひて、別れ別れに一方は大路へ、一方は小路へ、姿を下駄音と共に消すのも、滿更厭な氣ばかり起させる訣でもない。

私も嘗て、本鄉なる何某と云ふレストランに、久米とマンハツタン・カクテルに醉ひて、その生活の放漫たるを非難したる事ありしが、何時か久米の俗然たる一家の風格を成したのを見ては、鷄は陸に米を啄み家鴨は水に泥鰌を追ふを悟り、寢靜まりたる家々の向う、「低き夢々の疊める間に、晩くほの黃色き月の出を見出でて」去り得ない趣さへ感じたことがある。愛すべき三汀、今は蜜月の旅に上りて東京にあらず。……

小春日や小島眺むる頰寄せて　　三汀

（大正十二年十二月）

谷崎潤一郎氏

僕は或初夏の午後、谷崎氏と神田をひやかしに出かけた。谷崎氏はその日も黑背廣に赤い襟飾りを結んでゐた。僕はこの壯大なる襟飾りに、象徴せられたるロマンティシズムを感じた。尤もこれは僕ばかりではない。往來の人も男女を問はず、僕と同じ印象を受けたのであらう。すれ違ふ度に谷崎氏の顏をじろじろ見ないものは一人もなかつた。しかし谷崎氏は何と云つてもさう云ふ事實を認めなかつた。

「ありや君を見るんだよ。そんな道行きなんぞ着てゐるから。」

僕は成程夏外套の代りに親父の道行きを借用してゐた。が、道行きは茶の湯の師匠も菩提寺の和尚も着るものである。衆俗の目を駭かすことは到底一輪の紅薔薇に似た、非凡なる襟飾りに及ぶ筈はない。けれども谷崎氏は僕のやうにロヂックを尊敬しない詩人だから、僕も亦強ひてこの眞理を呑みこませようとも思はなかつた。

その内に僕等は裏神保町の或カツフエへ腰を下した。何でも喉の渇いたため、炭酸水か何か飲みにはひつたのである。僕は飲みものを註文した後も、つらつら谷崎氏の喉もとに燃えたロマンティシズムの烽火を眺めてゐた。すると白粉の剝げた女給が一人、兩手にコツプを持ちながら、僕等のテエブルへ近づいて來た。コツプは眞理のやうに澄んだ水に細かい泡を躍らせてゐた。女給はそのコツプを一つづつ、僕等の前へ立て竝べた。それから、――僕はまだ鮮かにあの女給の言葉を覺えてゐる！　女給は立ち去り難いやうにテエブルへ片手を殘したなり、しけじけと谷崎氏の胸を覗きこんだ。

「まあ、好い色のネクタイをしていらつしやるわねえ。」

十分の後、僕はテエブルを離れる時に五十錢のティツプを渡さうとした。谷崎氏はあらゆる東京人のやうに無用のティツプをやることに輕蔑を感ずる一人である。この時も勿論五十錢のティツプは谷崎氏の冷笑を免れなかつた。

「何も君、世話にはならないぢやないか？」

僕はこの先輩の冷笑にも羞ぢず、皺だらけの札を女給に渡した。女給は何も僕等の爲に炭酸水を運んだばかりではない。又實に僕の爲には赤い襟飾りに關する眞理を天下に擧揚してくれたいである。僕はまだこの時の五十錢位誠意のあるティツプをやつたことはない。（大正十三年一月）

佐藤春夫氏 又

佐藤春夫は不幸にも常に僕を誤解してゐる。僕の「有島生馬君に與ふ」を書いた時、佐藤は僕にかう云つた。「君はいつもあゝ云ふ風にもの云へば好いのだ。あれは旗幟鮮明で好い。」僕はいつも旗幟鮮明である。まだ一度も莫迦だと思ふ君子に、聰なるかな、明なるかななどと云つたことはない。唯莫迦だと云はないだけである。それを旗幟不鮮明のやうに思ふのは佐藤の誤解と云はなければならぬ。

又僕の「保吉の手帳」を書いた時、佐藤は僕にかう云つた。「うん、あれは好いよ。唯僕に云はせれば、未完成の美を認めないのは君の爲に遺憾だと思ふね。」これも佐藤の誤解である。僕は未完成の美に冷淡ではない。さもなければ何も僕のやうに、恬然と未完成の作品ばかり發表する氣にはなれぬ訣である。

又僕の何かの拍子に「喜劇を書きたい」と云つた時、佐藤は僕にかう云つた。喜劇ならば君には

すぐ書けるだらう。」僕のテムペラメントは嚴肅である。全精神を振ひ起さなければ滅多に常談も云ふことは出來ない。それを佐藤は世間と共に容易の業のやうに誤解してゐる。

又或新進の豪傑の佐藤を褒め、僕を貶した時、佐藤は僕にかう云ふ手紙をよこした。「僕は君と比較されるのを甚だ迷惑に思つてゐる。」これも亦誤解と云はなければならぬ。僕はまだ一篇の琴唄の作者を新進の豪傑と同程度の頭腦の持ち主と思つたことはない。尤もさう云ふ佐藤の厚意に感謝したことは勿論である。

又震災後に會つた時、佐藤は僕にかう云つた。「銀座の回復する時分には二人とも白髮になつてゐるだらうなあ。」これは佐藤の僕に對して抱いた、最も大いなる誤解である。いつか裸になつたのを見たら、佐藤は詩人には似合はしからぬ、堂々たる體格を具へてゐた。到底僕は佐藤と共に天壽を全うする見込みはない。醜惡なる老年を迎へるのは當然佐藤春夫にのみ神々から下された宿命である。

（大正十三年二月）

飯田蛇笏氏

或木曜日の晩、漱石先生の處へ遊びに行つてゐたら、何かの拍子に赤木桁平が頻に蛇笏を褒めはじめた。當時の僕は十七字などを並べたことのない人間だつた。勿論蛇笏の名も知らなかつた。が、さう云ふ偉い人を知らずにゐるのは不本意だつたから、その飯田蛇笏なるものの作句を二つ三つ尋ねて見た。赤木は卽座に妙な句ばかりつづけさまに諳誦した。しかし僕は赤木のやうに、うまいとも何とも思はなかつた。正直に又「つまらんね」とも云つた。すると何ごとにもムキになる赤木は「君には俳句はわからん」と忽ち僕を撲滅した。

丁度やはりその前後にちよつと「ホトトギス」を覗いて見たら、虚子先生も滔滔と蛇笏に敬意を表してゐた。句もいくつか拔いてあつた。僕の蛇笏に對する評價はこの時も亦ネガティイフだつた。殊に細君のヒステリイか何かを材にした句などを好まなかつた。かう云ふ事件は句にするよりも、小說にすれば好いのにとも思つた。爾來僕は久しい間、ずつと蛇笏を忘れてゐた。

その内に僕も作句をはじめた。すると或時歳事記の中に「死病得て爪美しき火桶かな」と云ふ蛇笏の句を發見した。この句は蛇笏に對する評價を一變する力を具へてゐた。僕は「ホトトギス」の雜詠に出る蛇笏の名前に注意し出した。勿論その句境も剽竊した。「癆咳の頰美しや冬帽子」「惣嫁指の白きも葱に似たりけり」――僕は蛇笏の影響のもとにさう云ふ句なども製造した。

當時又可笑しかつたことには赤木と俳談を鬪はせた次手に、うつかり蛇笏を賞讚したら、赤木は透かさず「君と雖も畢に蛇笏を認めたかね」と大いに僕を冷笑した。僕は「常談云つちやいけない。僕をして過たしめたものは實は君の諳誦なんだからな」とやつと冷笑を投げ返した。と云ふのは蛇笏を褒めた時に、博覽強記なる赤木桁平もどう云ふ頭の狂ひだつたか、「芋の露連山影を正うす」と云ふ句を「連山影を齊うす」と間違へて僕に聞かせたからである。

しかし僕は一二年の後、いつか又「ホトトギス」に御無沙汰をし出した。それでも蛇笏には注意してゐた。或時句作をする青年に會つたら、その青年は何處かの句會に蛇笏を見かけたと云ふ話をした。同時に「蛇笏と云ふやつはいやに傲慢な男です」とも云つた。僕は惡口を云はれた蛇笏に甚だ賴もしい感じを抱いた。それは一つには僕自身も傲慢に安んじてゐる所から、同類の思ひをなしたのかも知れない。けれどもまだその外にも僕はいろいろの原因から、どうも俳人と云ふものは案外世渡りの術に長じた奸物らしい氣がしてゐた。「いやに傲慢な男です」などと云ふ非難は

到底受けさうもない氣がしてゐた。それだけに惡口を云はれた蛇笏は惡口を云はれない連中よりも高等に違ひないと思つたのである。

爾來更に何年かを閲した今日、僕は卒然飯田蛇笏と、――いや、もう昔の蛇笏ではない。今は飯田蛇笏君である。――手紙の往復をするやうになつた。蛇笏君の書は豫想したやうに如何にも俊爽の風を帶びてゐる。成程これでは小兒などに「いやに傲慢な男です」と惡口を云はれることもあるかも知れない。僕は蛇笏君の手紙を前に賴もしい感じを新たにした。

　　春雨の中や雪おく甲斐の山

これは僕の近作である。次手を以て甲斐の國にゐる蛇笏君に獻上したい。僕は又この頃思ひ出したやうに時時句作を試みてゐる。が、一度句作に遠ざかつた祟りには忽ち苦吟に陷つてしまふ。どうも蛇笏君などから鞭撻を感じた往年の感激は返らないらしい。所詮下手は下手なりに句作そのものを樂しむより外に安住する所はないと見える。

　　おらが家の花も咲いたる番茶かな

先輩たる蛇笏君の憫笑を蒙れば幸甚である。

（大正十三年二月）

久保田万太郎氏

僕の知れる江戸つ兒中、文壇に緣あるものを尋ぬれば第一に後藤末雄君、第二に辻潤君、第三に久保田万太郎君なり。この三君は三君なりにいづれも性格を異にすれども、江戸つ兒たる風采と江戸つ兒たる氣質とは略一途に出づるものの如し。就中後天的にも江戸つ兒の稱を曠うせざるものを我久保田万太郎君と爲す。少くとも「のて」の臭味を帶びず、「まち」の特色に富みたるものを我久保田万太郎君と爲す。

江戸つ兒はあきらめに住するものなり。既にあきらめに住すと云ふ、積極的に強からざるは辯ずるを待たず。久保田君の藝術は久保田君の生活と共にこの特色を示すものと云ふべし。久保田君の主人公は常に道德的薄明りに住する閭巷無名の男女なり。是等の男女はチエホフの作中にも屢その面を現せども、チエホフの主人公は我等讀者を哄笑せしむること少しとなさず。久保田君の主人公はチエホフのそれよりも哀婉なること、なほ日本の刻み煙草のロシアの紙卷よりも柔

かなるが如し。のみならず作中の風景さへ、久保田君の筆に上るものは常に瀟洒たる淡彩畫なり。更に又久保田君の生活を見れば、――僕は久保田君の生活を知ること、最も膚淺なる一人ならん。然れども君の微笑のうちには全生活を感ずることなきにあらず。微苦笑とは久米正雄君の日本語彙に加へたる新熟語なり。久保田君の時に浮ぶる微笑も微苦笑と稱するを妨げざるべし。唯僕をして云はしむれば、これを微哀笑と稱するの或は適切なるを思はざる能はず。

既にあきらめに住すと云ふ、積極的に強からざるは辯ずるを待たず。然れども又あきらめに住すほど、消極的に強きはあらざるべし。久保田君をして一たびあきらめしめよ。梃でも棒でも動くものにあらず。談笑の間もなほ然り。醉うて虎となれば愈然り。久保田君の主人公も、常にこの頑固さ加減を失ふ能はず。これ又チエホフの主人公と、面目を異にする所以なり。久保田君と君の主人公とは、撓めんと欲すれば撓むることを得れども、折ることは必しも容易ならざるもの、――たとへば、雪に伏せる竹と趣を一にすと云ふを得べし。

この強からざるが故に強き特色は、江戸つ兒の全面たらざるにもせよ、江戸つ兒の全面に近きものの如し。僕は先天的にも後天的にも江戸つ兒の資格を失ひたる、東京育ちの書生なり。故に久保田君の藝術的並びに道德的態度を悉理解すること能はず。然れども君の小說戲曲に敬意と愛とを有することは必しも人後に落ちざるべし。卽ち原稿用紙三枚の久保田万太郎論を草する所

以なり。久保田君、幸ひに首肯するや否や？　もし又首肯せざらん乎、――君の一たび抛下すればゞ、梃でも棒でも動かざるは既に僕の知る所なり。僕亦何すれぞ首肯を強ひんや。僕亦何すれぞ首肯を強ひんや。

因に云ふ。小説家久保田万太郎君の俳人傘雨宗匠たるは天下の周知する所なり。僕、曩日久保田君に「うすうすと曇りそめけり星月夜」の句を示す。傘雨宗匠善と稱す。數日の後、僕前句を改めて「冷えびえと曇り立ちけり星月夜」と爲す。傘雨宗匠頭を振つて曰、「いけません。」然れども僕畢に後句を捨てず。久保田君亦畢に後句を取らず。僕等の差を見るに近からん乎。

（大正十三年五月）

宇野浩二氏

宇野浩二は聰明の人である。同時に又多感の人である。尤も本來の喜劇的精神は人を欺くことがあるかも知れない。が、己を欺くことは極めて稀にしかない人である。

のみならず、又宇野浩二は喜劇的精神を發揮しないにもしろ、あらゆる多感と聰明とを二つとも兼ね具へた人のやうに滅多にムキにならない人である。喜劇的精神を發揮することそのことにもムキにはならない人である。これは時には宇野浩二に怪物の名を與へるかも知れない。しかし其處に獨特のシヤルム――たとへば精神的カメレオンに對するシヤルムの存することも事實である。

宇野浩二は本名格二(或は次)郎である。あの色の淺黑い顏は正に格二郎に違ひない。殊に三味線を彈いてゐる宇野は浩さん離れのした格さんである。

次手に顏のことを少し書けば、わたしは宇野の顏を見る度に必ず多少の食慾を感じた。あの顏

は頰から耳のあたりをコオルド・ビフのやうに料理するが好い。皿に載せた一片の肉はほんのりと赤い所どころに白い脂肪を交へてゐる。が、ちよつと裏返して見ると、鳥膚になつた頰の皮はもぢやもぢやした揉み上げを殘してゐる。——と云ふ空想をしたこともあつた。尤も實際口へ入れて見たら、豫期通り一杯やれるかどうか、その邊は頗る疑問である。多分はいくら香料をかけても、揉み上げにしみこんだ煙草の匂は羊肉の匂のやうにぷんと來るであらう。

いざ子ども利鎌とりもち宇野麻呂が揉み上げ草を刈りて馬飼へ

（大正十三年七月）

室生犀星氏

室生犀星はちやんと出來上つた人である。僕は實は近頃まであの位室生犀星なりに出來上つてゐようとは思はなかつた。出來上つた人と云ふ意味はまあ簡單に埒を明ければ、一家を成した人と思へば好い。或は何も他に待たずに生きられる人と思へば好い。室生は大袈裟に形容すれば、日星河岳前にあり、室生犀星茲にありと傍若無人に尻を据ゑてゐる。あの尻の据ゑかたは必しも容易に出來るものではない。ざつと周圍を見渡した所、僕の知つてゐる連中でも大抵は何かを恐れてゐる。勿論外見は恐れてはゐない。内見も——内見と言ふ言葉はないかも知れない。では夫子自身にさへ己は無畏だぞと言ひ聞かせてゐる。しかしやはり肚の底には多少は何かを恐れてゐる。この恐怖の有無になると、室生犀星は頗る強い。世間に氣も使はなければ、氣を使はれようとも思つてゐない。庭をいぢつて、話を書いて、芋がしらの水差しを玩んで——つまり前にも言つたやうに、日月星辰前にあり、室生犀星茲にありと魚眠洞の洞天に尻を据ゑてゐる。僕は室生

と親んだ後この點に最も感心したのみならずこの點に感心したことを少からず幸福に思つてゐる。先頃「高麗の花」を評した時に詩人室生犀星には言ひ及んだから、今度は聊か友人――と言ふよりも室生の人となりを記すことにした。或はこれも室生の爲に「こりや」と叱られるものかも知れない。

（大正十三年十二月）

瀧田哲太郎氏

瀧田君はいつも肥つてゐた。のみならずいつも赤い顏をしてゐた。夏目先生の瀧田君を金太郎と呼ばれたのも當らぬことはない。しかしあの目の細い所などは寧ろ菊慈童にそつくりだつた。

僕は大學に在學中、瀧田君に初對面の挨拶をしてから、ざつと十年ばかりの間可也親密につき合つてゐた。瀧田君に鮭鮓の御馳走になり、烈しい胃痙攣を起したこともある。又雲坪を論じ合つた後、蘭竹を一幅貰つたこともある。實際あらゆる編輯者中、僕の最も懇意にしたのは正に瀧田君に違ひなかつた。しかし僕はどういふ訣か、未だ嘗て瀧田君とお茶屋へ行つたことは一度もなかつた。瀧田君は恐らくは僕などは話せぬ人間と思つてゐたのであらう。

瀧田君は熱心な編輯者だつた。殊に作家を煽動して小說や戲曲を書かせることには獨特の妙を具へてゐた。僕なども始終瀧田君に僕の作品を襃められたり、或は又苦心の餘になつた先輩の作品を見せられたり、いろいろ鞭撻を受けた爲にいつの間にかざつと百ばかりの短篇小說を書いて

しまつた。これは僕の瀧田君に何よりも感謝したいと思ふことである。僕は又中央公論社から原稿料を前借する爲に時々瀧田君を煩はした。何でも始めに前借したのは十圓前後の金だつたであらう。僕はその金にも困つた揚句、確か夜の八時頃に瀧田君の舊宅を尋ねて行つた。瀧田君の舊居は西片町から菊坂へ下りる横町にあつた。僕はこの家を尋ねたことは前後にたつた一度しかない。が、未だに門内か庭かに何か白い草花の澤山咲いてゐたのを覺えてゐる。

瀧田君は本職の文藝の外にも書畫や骨董を愛してゐた。僕は今人の作品の外にも、椿岳や雲坪の出來の善いものを幾つか瀧田君に見せて貰つた。勿論僕の見なかつたものにもまだ逸品は多いであらう。が、僕の見た限りでは瀧田コレクションは何と言つても今人の作品に優れてゐた。尤も僕の鑑賞眼は頗る瀧田君には不評判だつた。「どうも芥川さんの美術論は文學論ほど信用出來ないからなあ。」――瀧田君はいつもかう言つて僕のあき盲を嗤つてゐた。

瀧田君が日本の文藝に貢獻する所の多かつたことは僕の贅するのを待たないであらう。しかし當代の文士を擧げて瀧田君の世話になつたと言ふならば、それは故人に佞するとも、故人に信たる言葉ではあるまい。成程僕等年少の徒は度たび瀧田君に厄介をかけた。けれども瀧田君自身も亦恐らくは德田秋聲氏の如き、或は田山花袋氏の如き、僕等の先輩に負ふ所の少しもない訣では

なかつたであらう。

僕は瀧田君の訃を聞いた夜、室生君と一しよに悔みに行つた。瀧田君は所謂觀魚亭に北を枕に橫はつてゐた。僕はその顏を見た時に何とも言はれぬ落莫を感じた。それは僕に親切だつた友人の死んだ爲と言ふよりも、況や僕に寛大だつた編輯者の死んだ爲と言ふよりも、寧ろ唯あの瀧田君と言ふ、大きな情熱家の死んだ爲だつた。僕は中陰を過ごした今でも瀧田君のことを思ひ出す度にまだこの落莫を感じてゐる。瀧田君ほど熱烈に生活した人は日本には滅多にゐないのかも知れない。

（大正十四年十一月）

瀧田哲太郎氏 ヌ

瀧田君に初めて會つたのは夏目先生のお宅だつたであらう。が、生憎その時のことは何も記憶に殘つてゐない。

瀧田君の初めて僕の家へ來たのは僕の大學を出た年の秋、――僕の初めて「中央公論」へ「手巾」といふ小説を書いた時である。瀧田君は僕にその小説のことを「ちよつと皮肉なものですな」といつた。

それから瀧田君は二三箇月おきに僕の家へ來るやうになつた。

×

或年の春、僕は原稿の出來ぬことに少からず屈託してゐた。瀧田君はその時僕のために谷崎潤一郎君の原稿を示し、（それは實際苦心の痕の歷々と見える原稿だつた。）大いに僕を激勵した。僕はこのために勇氣を得てどうにかかうにか書き上げる事が出來た。

僕の方からはあまり瀧田君を尋ねてゐない。いつも年末に催されるといふ瀧田君の招宴にも一度席末に列しただけである。それは確震災の前年、——大正十一年の年末だつたであらう。僕はその夜田山花袋、高島米峰、大町桂月の諸氏に初めてお目にかかることが出來た。

×

僕は又瀧田君の病中にも一度しか見舞ふことが出來なかつた。瀧田君は昔夏目先生が「金太郎」と諢名した瀧田君とは別人かと思ふほど憔悴してゐた。が、僕や僕と一しよに行つた室生犀星君に畫帖などを示し、相變らず元氣に話をした。

瀧田君に最後に會つたのは今年の初夏、丁度ドラマ・リイグの見物日に新橋演舞場へ行つた時である。小康を得た瀧田君は三人のお孃さんたちと見物に來てゐた。僕はその顏を眺めた時、思はず「ずゐぶんやせましたね」といつた。この言葉はもちろん瀧田君に不快を與へたのに違ひなかつた。瀧田君は僕と一しよにゐた佐佐木茂索君を顧みながら、「芥川さんよりも痩せてゐますか？」といつた。

×

瀧田君の訃に接したのは、十月二十七日の夕刻である。僕は室生犀星君と一しよに瀧田君の家へ悔みに行つた。瀧田君は庭に面した座敷に北を枕に横はつてゐた。死顏は前に會つた時より昔

の瀧田君に近いものだつた。僕はそのことを奥さんに話した。「これは水氣が來てをりますから、……綿を含ませたせゐもあるのでございませう。」——奥さんは僕にかういつた。

瀧田君についてはこの外に語りたいこともない訣ではない。しかし匆卒の間にも語ることの出來るのはこれだけである。

（大正十四年十一月）

夏目先生と瀧田さん

私がまだ赤門を出て間もなく、久米正雄君と一ノ宮へ行つた時でした。夏目先生が手紙で「毎木曜日にワルモノグヒが來て、何んでも字を書かせて取つて行く」といふ意味のことを云つて寄越されたので、その手紙を後に瀧田さんに見せると、之はひどいと云つて夏目先生に詰問したので、先生が瀧田さんに詫びの手紙を出された話があります。當時夏目先生の面會日は木曜だつたので、私達は晝遊びに行きましたが、瀧田さんは夜行つて玉版箋などに色々のものを書いて貰はれたらしいんです。だから夏目先生のものは隨分澤山持つてゐられました。書畫骨董を買ふこと

が熱心で、瀧田さん自身話されたことですが、何も買ふ氣がなくて日本橋の中通りをぶらついてゐた時、埴輪などを見附けて一時間とたたない中に千圓か千五百圓分を買つたことがあるさうです。まあすべてがその調子でした。震災以來は身體の弱い爲もあつたでせうが蒐集癖は大分薄らいだやうです。最後に會つたのはたしか四五月頃でしたか、新橋演舞場の廊下で誰か後から僕の名を呼ぶのでふり返つて見ても暫く誰だか分らなかつた。あの大きな身體の人が非常に瘦せて小さくなつて顏にかすかな赤味がある位でした。私はいつも云つてゐたことですが、瀧田さんは、德富蘇峰、三宅雄二郎の諸氏からずつと下つて僕等よりもつと年の若い人にまで原稿を通じて交涉があつて、色々の作家の逸話を知つてゐられるので、もし今後中央公論の編輯を誰かに讓つて閑な時が來るとしたら、それらの追憶錄を書かれると非常に面白いと思つてゐました。

（大正十四年十一月）

大町桂月氏

——鴨獵——

大町先生に最後にお目にかかつたのは、大正十三年の正月に、小杉未醒、神代種亮、石川寅吉の諸君と品川沖へ鴨獵に往つた時である。何でも朝早く本所の一ノ橋の側の船宿に落合ひ、そこから發動機船を仕立てさせて大川をくだつたと覺えてゐる。小杉君や神代君は何れも錚々たる狩獵家である。おまけに僕等の船の船頭の一人も矢張り獵の名人だといふことである。しかしかかる禽獸殺戮業の大家が三人も揃つてゐる癖に、一羽もその日は鴨は獲れない。いや、鴨たると鵜たるを問はず品川沖におりてゐる鳥は僕等の船を見るが早いか、忽ち一齊に飛び立つてしまふ。桂月先生はこの鴨の獲れないのが大いに嬉しいと見えて、「えらい、このごろの鴨は字が讀めるから、みんな禁獵區域へ入つてしまふ」などと手を叩いて笑つてゐた。しかもまた、何だか頭巾に似た怪しげな狐色の帽子を被つて、口髭に酒の滴を溜めて傍若無人に笑ふのだから、それだけでも鴨は逃げてしまふ。

かういふやうな仕末で、その日はただ十時間ばかり海の風に吹かれただけで、鴨は一羽も獲れずしまつた。しかし、鴨の獲れない事を痛快がつてゐた桂月先生も、もう一度、一ノ橋の河岸へあがると、酔ひもすこし醒めたと見え「僕は子供に鴨を二羽持つて歸ると約束をしてきたのだが、どうにかならないものかなあ、何でも子供はその鴨を學校の先生にあげるんださうだ」と云ひだした。そこで黐で獲つた鴨を、近所の鳥屋から二羽貰つて來させることにした。すると小杉君が、「鐵砲疵が無くつちやいけねえだらう、ここで一發づつ穴をあけてやらうか」と云つた。

けれども桂月先生は、子供のやうに首をふりながら、「なに、これでたくさんだ」と云ひ云ひその黐だらけの二羽の鴨を古新聞に包んで持つて歸つた。

（大正十四年十二月）

剛才人と柔才人と

佐佐木君は剛才人、小島君は柔才人、兎も角どちらも才人です。僕はいつか佐佐木君と歩いてゐたら、佐佐木君が君に突き當つた男へケンツクを食はせる勢を見、少からず驚嘆しました。實際その時の佐佐木君の勢は君と同姓の蒙古王の子孫かと思ふ位だつたのです。小島君も江戸つ兒ですから、啖呵を切ることはうまいやうです。しかし小島君の喧嘩をする圖などはどうも想像に浮びません。それから又どちらも勉強家です。佐佐木君は二三日前にここにゐましたが、その間も何とか云ふピランデロの芝居やサラア・ベルナアルのメモアの話などをし、大いに僕を啓發してくれました。小島君も和漢東西に通じた讀書家です。これは小島君の小説よりも寧ろ小島君のお伽噺に看取出來ることと思ひます。最後にどちらも好い體で(これは僕が病中故、特にさう思ふのかも知れず。)長命の相を具へてゐます。いづれは御兩人とも年をとると、佐佐木君は頰に髯をはやし、小島君は總入れ齒をし、「どうも當節の青年は」などと話し合ふことだらうと思ひます。

そんな事を考へると、不愉快に日を暮らしながらも、ちよつと明るい心もちになります。（湯河原にて）

（大正十五年一月）

島木赤彦氏

島木さんに最後に會つたのは確か今年(大正十五年)の正月である。僕はその日の夕飯を齋藤さんの御馳走になり、六韜三略の話だの早發性痴呆の話などをした。御馳走になつた場所は外でもない。東京驛前の花月である。それから又齋藤さんと割り合にすいた省線電車に乘り、アララギ發行所へ出かけることにした。僕はその電車の中にどこか支那の少女に近い、如何にも華奢な女學生が一人坐つてゐたことを覺えてゐる。

僕等は發行所へはひる前にあの空罎を山のやうに積んだ露路の左側へ立ち小便をした。念の爲に斷つて置くが、この發頭人は僕ではない。僕は唯先輩たる齋藤さんの高教に從つたのである。

發行所の下の座敷には島木さん、平福さん、藤澤さん、高田さん(?)、古今書院主人などが車座になつて話してゐた。あの座敷は善く言へば蕭散としてゐる。お茶うけの蜜柑も太だ小さい。僕は殊にこの蜜柑にアララギらしい親しみを感じた。(尤も胃酸過多症の爲に一つも食へなかつた

のは事實である。)
島木さんは大分憔悴してゐた。從つて双目だけ大きい氣がした。話題は多分刊行中の長塚節全集のことだつたであらう。島木さんは談の某君に及ぶや、苦笑と一しよに「下司ですなあ」と言つた。それは「下」の字に力を入れた、頗る特色のある言ひかただつた。僕は某君には會つたことは勿論、某君の作品も讀んだことはない。しかし島木さんにかう言はれると、忽ち下司らしい氣がし出した。
それから又島木さんは後ろ向きに坐つたまま、ワイシャツの裾をまくり上げ、醫學博士の齋藤さんに神經痛の注射をして貰つた。(島木さんは背廣を着てゐたからである。)二度目の注射は痛かつたらしい。島木さんは腰へ手をやりながら、「齋藤君、大分こたへるぞ」などと常談のやうに聲をかけたりした。この神經痛と思つたものが實は後に島木さんを殺した癌腫の痛みに外ならなかつたのである。
二三箇月たつた後、僕は土屋文明君から島木さんの訃を報じて貰つた。それから又「改造」に載つた齋藤さんの「赤彦終焉記」を讀んだ。齋藤さんは島木さんの末期を大往生だつたと言つてゐる。しかし當時も病氣だつた僕には少からず悄然の感を與へた。その感銘の殘つてゐたからであらう。僕は明けがたの夢の中に島木さんの葬式に參列し、大勢の人々と歌を作つたりした。「まなこつ

ぶらに腰太き柿の村びと今はあらずも」——これだけは夢の覺めた後もはつきりと記憶に殘つてゐた。上の五文字は忘れたのではない。恐らくは作らずにしまつたのであらう。僕はこの夢を思ひ出す度に未だに寂しい氣がしてならないのである。

　魂はいづれの空に行くならん我に用なきことを思ひ居り

これは島木さんの述懷ばかりではない。同時に又この文章を書いてゐる病中の僕の心もちである。（十五・九・二）

犬養健氏

犬養君の作品は大抵讀んでゐるつもりである。その又僕の讀んだ作品は何れも手を拔いたところはない。どれも皆丹念に出來上つてゐる。若し缺點を擧げるとすれば、餘り丹念すぎる爲に暗示する力を缺き易い事であらう。

それから又犬養君の作品はどれも皆柔かに美しいものである。かう云ふ柔かい美しさは一寸他の作家達には發見出來ない。僕はそこに若々しい一本の柳に似た感じを受けてゐる。

いつか僕は仕事をしかけた犬養君に會つた事があつた。その時僕の見た犬養君の顏は（若し失禮でないとすれば）女人と交つた後のやうだつた。僕は犬養君を思ひ出す度にかならずこの顏を思ひ出してゐる。同時に又犬養君の作品の如何にも丹念に出來上つてゐるのも偶然ではないと思つてゐる。

（昭和二年六月）

內田百間氏

內田百間氏は夏目先生の門下にして僕の尊敬する先輩なり。文章に長じ、兼ねて志田流の琴に長ず。

著書「冥途」一卷、他人の麾下に立たざる特色あり。然れども不幸にも出版後、直に震災に遭へるが爲に普く世に行はれず。僕の遺憾とする所なり。內田氏の作品は「冥途」後も作必ずしも少からず。殊に「女性」に掲げられたる「旅順開城」等の數篇は戛々たる獨創造の作品なり。然れどもこの數篇を讀めるものは(僕の知れる限りにては)室生犀星、萩原朔太郎、佐佐木茂索、岸田國士等の四氏あるのみ。これ亦僕の遺憾とする所なり。天下の書肆皆新作家の新作品を市に出さんとする時に當り、內田百間氏を顧みざるは何故ぞや。僕は佐藤春夫氏と共に、「冥途」を再び世に行はしめんとせしも、今に至つて微力その效を奏せず。內田百間氏の作品は多少俳味を交へたれども、その夢幻的なる特色は人後に落つるものにあらず。こは恐らくは前記の諸氏も僕と聲を同じ

うすべし。内田百間氏は今早稻田ホテルに在り。誰か同氏を訪うて作品を乞ふものなき乎。僕は單に友情の爲のみにあらず、眞面目に内田百間氏の詩的天才を信ずるが爲に特にこの悪文を草するものなり。

（昭和二年七月）

雜記

葬儀記

離れで電話をかけて、皺くちやになつたフロツクの袖を氣にしながら、玄關へ來ると、誰もゐない。客間を覗いたら、奥さんが誰だか黑の紋付を着た人と話してゐた。が、そこと書齋との堺には、さつきまで柩の後に立ててあつた、白い屛風が立つてゐる。どうしたのかと思つて、書齋の方へ行くと、入口の所に和辻さんや何かが二三人かたまつてゐた。中にも勿論大ぜいゐる。丁度皆が、先生の死顏に、最後の別れを惜んでゐる時だつたのである。

僕は、岡田君のあとについて、自分の番が來るのを待つてゐた。もう明くなつた硝子戸の外には、霜よけの藁を着た芭蕉が、何本も軒近くならんでゐる。書齋でお通夜をしてゐると、何時もこの芭蕉が一番早く、うす暗い中からうき上つて來た。——そんな事をぼんやり考へてゐる中に、やがて人が減つて書齋の中へはいれた。

書齋の中には、電燈がついてゐたのか、それとも蠟燭がついてゐたのか、それは覺えてゐない。

が、何でも、外光だけではなかつたやうである。僕は、妙に改まつた心もちで、中へはいつた。さうして、岡田君が禮をした後で、柩の前へ行つた。

柩の側には、松根さんが立つてゐる。さうして右の手を平にして、それを臼でも挽く時のやうに動かしてゐる。禮をしたら、順順に柩の後を廻つて、出て行つてくれと云ふ合圖だらう。

柩は寢棺である。のせてある臺は三尺ばかりしかない。側に立つと、眼と鼻の間に、中が見下された。中には、細くきざんだ紙に南無阿彌陀佛と書いたのが、雪のやうにふりまいてある。先生の顏は、半ば頰をその紙の中に埋めながら、靜に眼をつぶつてゐた。丁度蠟ででもつくつた、面型のやうな感じである。輪廓は、生前と少しもちがはない。が、どこか容子がちがふ。脣の色が黑んでゐたり、顏色が變つてゐたりする以外に、どこかちがつてゐる所がある。僕はその前で、殆無感動に禮をした。「これは先生ぢやない。」そんな氣が、強くした。（これは始から、さうであつた。現に今でも僕は誇張なしに先生が生きてゐるやうな氣がして仕方がない。）僕は、柩の前に一二分立つてゐた。それから、松根さんの合圖通り、後の人に代つて、書齋の外へ出た。

所が、外へ出ると、急に又先生の顏が見たくなつた。何だかよく見て來るのを忘れたやうな心もちがする。さうして、それが取り返しのつかない、莫迦な事だつたやうな心もちがする。僕はよつぽど、もう一度行かうかと思つた。が、何だかそれが恥しかつた。それに感情を誇張してゐ

るやうな氣も、少しはした。「もう仕方がない」――さう、思つてとうとうやめにした。さうしたら、いやに悲しくなつた。

外へ出ると、松岡が「よく見て來たか」と云ふ。僕は、「うん」と答へながら、嘘をついたやうな氣がして、不快だつた。

青山の齋場へ行つたら、靄が完く晴れて、葉のない櫻の梢にもう朝日がさしてゐた。下から見ると、その櫻の枝が、丁度鐵網のやうに細く空をかがつてゐる。僕たちはその下に敷いた新しい蓆の上を歩きながら、みんな、體を反らせて、「やつと眼がさめたやうな氣がする」と云つた。

齋場は、小學校の教室とお寺の本堂とを、一つにしたやうな建築である。丸い柱や、兩方の硝子窓が、甚みすぼらしい。正面には一段高い所があつて、その上に朱塗の曲祿が三つ据ゑてある。それが、その下に、一面に並べてある安直な椅子と、妙な對照をつくつてゐた。「この曲祿を、書齋の椅子にしたら、面白いぜ」――僕は久米にこんな事を云つた。久米は、曲祿の足をなでながら、うんとか何とかいい加減な返事をしてゐた。

齋場を出て、入口の休所へかへつて來ると、もう森田さん、鈴木さん、安倍さん、などが、かんかん火を起した爐のまはりに集つて、新聞を讀んだり、駄辯を振つたりしてゐた。新聞に出て

ゐる先生の逸話や、内外の人の追憶が時時問題になる。僕は、和辻さんに貰つた「朝日」を吸ひながら、爐のふちへ足をかけて、ぬれた靴から煙が出るのを、ぼんやり、遠い所のものを見るやうに眺めてゐた。何だか、みんなの心もちに、どこか穴の明いてゐる所でもあるやうな氣がして、仕方がない。

そのうちに、葬儀の始まる時間が近くなつて來た。「そろそろ受附へ行かうぢやないか。」――氣の早い赤木君が、新聞を抛り出しながら、「行」の所へ獨特のアクセントをつけて云ふ。そこでみんな、ぞろぞろ、休所を出て、入口の兩側にある受附へ分れ分れに、行く事になつた。松浦君、江口君、岡君が、こつちの受附をやつてくれる。向ふは、和辻さん、赤木君、久米と云ふ顏ぶれである。その外、朝日新聞社の人が、一人づつ兩方へ手傳ひに來てくれた。

やがて、靈柩車が來る。續いて、一般の會葬者が、ぽつぽつ來はじめた。休所の方を見ると、人影が大分ふえて、その中に小宮さんや野上さんの顏が見える。中幅の白木綿を藥屋のやうに、フロツクの上からかけた人がゐると思つたら、それは宮崎虎之助氏だつた。

始めは、時刻が時刻だから、それに前日の新聞に葬儀の時間が間違つて出たから、會葬者は存外少からうと思つたが、實際はそれと全く反對だつた。愚圖愚圖してゐると、會葬者の宿所を、帳面につけるのも間に合はない。僕はいろんな人の名刺をうけとるのに忙殺された。

すると、どこかで「死は嚴肅である」と云ふ聲がした。僕は驚いた。この場合、こんな芝居じみた事を云ふ人が、僕たちの中にゐるわけはない。そこで、休所の方を覗くと、宮崎虎之助氏が、椅子の上へのつて、傳道演說をやつてゐた。僕はちよいと不快になつた。が、あまり宮崎虎之助らしいので、それ以上には腹も立たなかつた。接待係の人が止めたが、やめないらしい。やつぱり右手で盛なジェスチュアをしながら、死は嚴肅であるとか何とか云つてゐる。

が、それも程なくやめになつた。會葬者は皆、接待係の案内で、齋場の中へはいつて行く。葬儀の始まる時刻が來たのであらう。もう受附へ來る人も、あまりない。そこで、帳面や香奠を始末してゐると、向ふの受附にゐた連中が、揃つてぞろぞろ出て來た。さうして、その先に立つて、赤木君が、しきりに何か憤慨してゐる。聞いて見ると、誰かが、受附係は葬儀のすむまで、受附に殘つてゐなければならんと云つたのださうである。至極尤な憤慨だから、僕も早速これに雷同した。さうして皆で、受附を閉ぢて、齋場へはいつた。

正面の高い所にあつた曲彔は、何時の間にか一つになつて、それへ向ふをむいた宗演老師が腰をかけてゐる。その兩側にはいろいろな樂器を持つた坊さんが、一列にづつと並んでゐる。奧の方には、柩があるのであらう。夏目金之助之柩と書いた幡が、下の方だけ見えてゐる。うす暗いのと香の煙とで、その外は何があるのだかはつきりしない。唯花輪の菊が、その中で堆く、白い

ものを重ねてゐる。――式はもう誦經がはじまつてゐた。

僕は、式に臨んでも、悲しくなる氣づかひはないと思つてゐた。さう云ふ心もちになるには、あまり形式が勝つてゐて、萬事が大仰に出來すぎてゐる。――さう思つて、平氣で、宗演老師の秉炬法語を聞いてゐた。だから、松浦君の泣き聲を聞いた時も、始めは誰かが笑つてゐるのではないかと疑つた位である。

所が、式がだんだん進んで、小宮さんが伸六さんと一しよに、弔辭を持つて、柩の前へ行くのを見たら、急に瞼の裏が熱くなつて來た。僕の左には、後藤末雄君が立つてゐる。僕の右には、高等學校の村田先生が坐つてゐる。僕は、何だか泣くのが外聞の惡いやうな氣がした。けれども、涙はだん／＼流れさうになつて來る。僕の後に久米がゐるのを、僕は前から知つてゐた。だからその方を見たら、どうかなるかもしれない。――こんな曖昧な、救助を請ふやうな心もちで、僕は後をふりむいた。すると、久米の眼が見えた。が、その眼にも、涙が一ぱいにたまつてゐた。僕はとうとうやりきれなくなつて、泣いてしまつた。隣にゐた後藤君が、けげんな顏をして、僕の方を見たのは、未だによく覺えてゐる。

それから、何がどうしたか、それは少しも判然しない。唯久米が僕の肘をつかまへて、「おい、あつちへ行かう」とか何とか云つた事だけは、記憶してゐる。その後で、涙をふいて、眼をあい

ら、僕の前に掃き溜めがあつた。何でも、齋場とどこかの家との間らしい。掃き溜めには、卵の殼が三つ四つすててあつた。

少したつて、久米と齋場へ行つて見ると、もう會葬者が大方出て行つた後で、廣い建物の中はどこを見ても、がらんとしてゐる。さうして、その中で、埃のにほひと香のにほひとが、むせつぽく一しよになつてゐる。僕たちは、安倍さんのあとで、御燒香をした。すると、又、涙が出た。

外へ出ると、ふてくされた日が一面に霜どけの土を照らしてゐる。その日の中を向ふへ突きつて、休所へはいつたら、誰かが蕎麥饅頭を食へと云つてくれた。僕は、腹がへつてゐたから、すぐに一つとつて口へ入れた。そこへ大學の松浦先生が來て、骨上げの事か何か僕に話しかけられたやうに思ふ。僕は、天とうも蕎麥饅頭も癪にさはつてゐた時だから、甚無禮な答をしたのに相違ない。先生は手がつけられないと云ふ顏をして、歸られたやうだつた。あの時の事を今思ふと、少からず恐縮する。

涙の乾いた後には、何だか張合ない疲勞ばかりが殘つた。會葬者の名刺を束にする。弔電や宿所書きを一つにする。それから、葬儀式場の外の往來で、柩車の火葬場へ行くのを見送つた。

その後は、唯、頭がぼんやりして、眠いと云ふ事より外に、何も考へられなかつた。

（大正五年十二月）

樗牛の事

一

中學の三年の時だつた。三學期の試驗をすませた後で、休暇中讀む本を買ひつけの本屋から、何冊だか取りよせた事がある。夏目先生の虞美人草なども、その時その中に交つてゐたかと思ふ。が、其中でも一番大部だつたのは、樗牛全集の五冊だつた。

自分はその頃から非常な濫讀家だつたから、一週間の休暇の間に、それらの本を手に任せて讀み飛した。勿論樗牛全集の一卷、二卷、四卷などは、讀みは讀んでもむづかしくつて、よく理窟がのみこめなかつたのに違ひない。が、三卷や五卷などは、相當の興味を以て、しまひまで讀み通す事が出來たやうに記憶する。

その時、始めて樗牛に接した自分は、あの名文から甚よくない印象を受けた。と云ふのは、中學生たる自分にとつて、どうも樗牛は嘘つきだと云ふ氣がしたのである。

それには外にもいろいろ理由があつたらうが、今でも覺えてゐるのは、あの「わが袖の記」や何

かの美しい文章が、如何にも空々しく感ぜられた事である。あれには樗牛が月夜か何かに、三保の松原の羽衣の松の下へ行つて、大に感慨悲慟する所があつた。あすこを讀むと、どうも樗牛は、好い氣になつて流せる涙を、ふんだんに持ち合せてゐたやうな心もちがする。或は持ち合せてゐなくつても、文章の上だけで臆面もなく滂沱の觀を呈し得たやうな心もちがする。その得意になつて、泣き落してゐる所が、甚自分には感心出來なかつた。人を欺くか、己を欺くか、どこかで嘘をつかなければ、到底ああ大袈裟には、おいおい泣ける訣のものぢやない。――そこで、自分は一も二もなく樗牛を嘘つきだときめてしまつたのである。だからそれ以來、二度とあの「わが袖の記」や何かを讀まうと思つた事はない。

それから大學を卒業するまで、約十年近くの間、自分は全く樗牛を忘れてゐた。ニイチエを讀んだ時も思ひ出さなかつたのは、自分ながら少々不思議な氣もするが、事實であつて見れば、勿論どうすると云ふ訣にも行かない。所が卒業後間もなく、赤木桁平君と一しよに飯を食つたら、君が突然自分をつかまへて樗牛論を辯じ出した。さうして先覺者だとか何とか云つて、いろいろ樗牛を褒め立てた。が、自分は依然として樗牛は嘘つきだと確信してゐたから、先覺者でも何でも彼は嘘つきだからいかんと云つて、どうしても赤木君の說に服さなかつた。その時は遂にそれぎりで、樗牛はえらいともえらくないともつかずにしまつたが、殆ど十年近くも讀んだ事のない

樗牛を又覗いて見る氣になつたのは、全くこの議論のおかげである。

自分はその後間もなく、秋の夜の電燈の下で、書棚の隅から樗牛全集をひつぱり出した。五冊揃へて買つた本が、今はたつた二冊しかない。あとは大方賣飛ばすか、借しなくすかしてしまつたのであらう。が、幸、その二冊の中には、あの「わが袖の記」のはひつてゐる五卷がある。自分はその一冊を紫檀の机の上へ開いて、靜に始から讀んで行つた。

無論そこには、厭味や涙があつた。いや、詠歎そのものさへも、既に時代と交渉がなくなつてゐたと云つても差支へない。が、それにも關らず、あの「わが袖の記」の文章の中にはどこか樗牛と云ふ人間を彷彿させるものがあつた。さうしてその人間は、迂餘曲折を極めた七めんだうな辭句の間に、やはり人間らしく苦しんだりもがいたりしてゐた。だから樗牛は、嘘つきだつた訣でも何でもない。唯中學生だつた自分の眼が、この樗牛の裸の姿をつかまへそくなつただけである。自分は樗牛の慟哭には微笑した。が、その最もかすかな吐息には、幾度も同情せずにゐられなかつた。――日は遠く海の上を照してゐる。海は銀泥を湛へたやうに、廣々と凪ぎつくして、息をする程の波さへ見えない。その日と海とを眺めながら、樗牛は砂の上に蹲つて、生と云ふ事を考へる。死と云ふ事を考へる。或は又藝術と云ふ事を考へる。が、樗牛の思索は移つて行つても、周圍の景物には更に變化らしい變化がない。暖い砂の上には、やはり船が何艘も眠つてゐる。さ

つきから倦まずにその上を飛んでゐるのは、大方この海に多い鷗であらう。と思ふと又、向うに日を浴びてゐる漁夫の翁も、相不變網をつくらふのに餘念がない。かう云ふ風景を眺めてゐると、病弱な樗牛の心の中には、永遠なるものに對する惝怳が汪然として湧いて來る。日も動かない。砂も動かない。海は――目の前に開いてゐる海も、さながら白晝の寂寞に聞き入つてでもゐるかの如く、雲母よりも眩い水面を凝然と平に張りつめてゐる。樗牛の吐息はこんな瞬間に、始めて彼の胸から溢れて出た。――自分はかう云ふ樗牛を想像しながら、長い秋の夜を、何時までもその文章に對してゐた。が、同情は昔とちがつて、惜しげもなくその美しい文章に注がれるが、しかも樗牛と自分との間には、まだ何かが挾まつてゐる。それは時代であらうか。いや、それは唯、時代ばかりであらうか。――自分はかう自分に問ひかけた時、手もとにない樗牛の本が改めて又讀みたかつた。それを今まで讀まずにゐるのは、從つてこの間に明白な答を與へ得ないのは、全く自分の怠慢である。さう云へば今年の秋も、もう何時か小春になつてしまつた。

二

丁度それと反對なのは、龍華寺にある樗牛の墓である。

始め、龍華寺へ行つたのは中學の四年生の時だつた。春の休暇の或日、確、靜岡から久能山へ行

つて、それからあすこへまはつたかと思ふ。生憎の吹き降りで、不二見村の往還から寺の門まで行く路が、文字通り靴を沒する程ぬかつてゐた。が、その春雨に濡れた大覇王樹が、青い杓子をべたべたのばしながら、もの靜な庫裡を後にして、夏目先生の「草枕」の一節を思ひ出させたのは、今でも歴々と覺えてゐる。それから急な石段を墓の所へ登ると、菫が澤山咲いてゐた。いや、墓の上にも、誰がやつたのだか、その菫を束にしたのが二つ三つ載せてあつた。墓はあの通り白い大理石で「吾人は須く現代を超越せざるべからず」が、「高山林次郎」と云ふ名と一しよに、鮮な鑿の痕を殘してゐる。自分はその滑な石の面に、ちらばつてゐる菫の花束を如何にも樗牛にふさはしい手向の花のやうに眺めて來た。その後、樗牛の墓と云ふと、必ず自分の記憶には、この雨にぬれてゐる菫の紫が四角な大理石と一しよに髣髴されたものである。これは更に自分の思ひ出したくない事であるが、恐らくその時の自分は、如何にも偉大な思想家の墓前を訪ふらしい、思はせぶりな感傷に充ち滿ちてゐた事だらうと思ふ。事によるとその後で「龍華寺に詣づるの記」位は、惻々たる哀怨の辭を列ねて、書いた事があるかも知れない。

所がこの頃になつて、あの近所を通つた序に、ふと樗牛の事を思ひ出して、又龍華寺へ出かけて行つた。その日は夏の晴天で、脂臭い蘇鐵の匂が寺の庭に充滿してゐる頃だつたが、例の急な石段を登つて、山の上へ出て見ると、殆ど意外だつた位、あの大理石の墓がくだらなく見えた。

どうも貧弱で、いやに小さくまとまつてゐて、その上又甚輕佻浮薄な趣がある。これぢや賴もしくないと思つて、雜木の涼しい影が落ちてゐる下へ、くたびれた尻を据ゑた儘、やや暫く見てゐたが、やはりくだらないと云ふ心もちは取消しやうがない。第一、側に立つてゐる日本風の御堂との對照ばかりでも、悲慘な滑稽の感じが先に立つてしまふ。その上荒れはてた周圍の風物が、四方からこの墓の威嚴を害してゐる。一山の蟬の聲の中に埋れながら、自分は昔、春雨に濡れてゐるこの墓を見て、感に堪へたと云ふ事が何だか噓のやうな心もちがした。と同時に又、何だか地下の樗牛に對して氣の毒なやうな心もちがした。不二山と、大蘇鐵と、さうしてこの大理石の墓と――自分は十年ぶりで「わが袖の記」を讀んだのとは、全く反對な索漠さを感じて、匆々龍華寺の門を後にした。爾來今日に至つても、二度とあの氣の毒な墓に詣でようと云ふ氣は樗牛に對しても起す勇氣がない。

しかし怪しげな、國家主義の連中が、彼等の崇拜する日蓮上人の信仰を天下に宣傳した關係から、樗牛の銅像なぞを建設しないのは、まだしも彼にとつて幸福かも知れない。――自分は今では、時々こんな事さへ考へるやうになつた。

鑑定

三圓で果亭の山水を買つて來て、書齋の床に掛けて置いたら、遊びに來た男が皆その前へ立つて見ちや「贋物ぢやないか」と輕蔑した。瀧田樗陰君の如きも、上から下までずつと眼をやつて、「いけませんな」と喝破してしまつた。が、こちらは元來怪しげな書畫を掘り出して來る事を以て、無名の天才に敬意を拂ふ所以だと心得てゐるんだから、「僕は果亭だから懸けて置くのぢやない。畫の出來が好いから懸けて置くのだ」と號して、更に辟易しなかつた。けれどもこの山水を贋物だと稱する諸君子は、悉くこれを自分の負惜しみだと盲斷した。のみならず彼等の或者は「兎に角無名の天才は安上りで好いよ」などと云つて、いやににやにや笑ひさへした。ここに至る以上自分と雖も、聊か三圓の果亭の爲に辯ずる所なきを得ない。

抑鑑定家なるものはややもすると蟲眼鏡などをふり廻して、我々素人を嚇かしにかかるが、元來彼等は書畫の眞贋をどの位まで正確に見分ける事が出來るかと云ふと、彼等も人間である以

上、決して全智全能と云ふ次第ぢやない。何となれば彼等の判斷を下すべきものはその書畫の眞贋である。或は眞贋に關する範圍內での巧拙である。所がその眞贋なり巧拙なりの鑑定は何時でも或客觀的標準の定規を當てると云ふ訣に行かう筈がない。たとへば落款とか手法とか乃至紙墨などと云ふ物質的材料を巧に眞似たものになると、その眞贋を鑑定するものは殆ど一種の直覺の外に何もないと云ふ事に歸着してしまふ。が、如何に鋭敏な直覺を備へてゐたにした所で、唯過去に於て或書家なり畫家なりがその書畫を作つたと云ふ事實だけの問題になつたら、鑑定家にして占者を兼ねない限り、到底見分けなんぞはつきはしまい。現にこの間も何とか云ふ男の作つた贋物の書畫は、作者自身も眞贋を辨じなかつたと云つてゐるぢやないか。よし又それ程巧妙を極めた贋物でないにしても鑑定家に良心のある限り、眞とも贋とも決定出來ない中間色の書畫が出て來るのは自然である。して見れば鑑定家なるものは、或種類の書畫に限り、我々同樣更に眞贋の判別は出來ないと云つても差支ない。そこで翻つて三圓の果亭を見ると、斷じて果亭だと言明する事が出來ないにしても、同樣に又斷じて果亭でないとも言明する事の出來ないものである。旣に然るからはこれを果亭と認めて壁間にぶら下げたのにしろ、毛頭自分の不名譽になる事ぢやない。況んや自分は唯、無名の天才に敬意を表する心算で——

辯じてここまで來ると、大抵の男は「わかつたよ、もう無名の天才は澤山だ」と云つた。澤山な

ちこれで切り上げるが、世間には自分の如く怪しげな書畫を玩んで無名の天才に敬意を拂ふの士が存外多くはないかと思ふ。それらの士は、俗惡なる新畫に巨萬の黄金を抛つて顧みない天下の富豪に比べると、少くとも趣味の獨立してゐる點で尊敬に價する人々である。そこで自分は聊かそれらの士と共に、眞贋の差別に煩はされない淸興の存在を主張したかつたから、ここにわざわざ以上の饒舌を活字にする事を敢てした。所謂竹町物を商ふ骨董屋が廣告に利用しなければ幸甚である。

「バルタザアル」の序

自分も多くの青年がするやうに、始めて筆を執つたのは西洋小說の飜譯だつた。當時第三次新思潮の同人だつた自分は、その飜譯の原文をアナトオル・フランスの短篇に求めた。「バルタザアル」の一篇がそれである。

今、新小說記者の請に應じて、自分はこの譯文を再剞劂に附する事となつたが、それにつけても思ひ出すのは、まだ無名の青年だつた新思潮同人の昔である。その頃はたとひ如何なる大作を書いたにした所で、天下の大雜誌が我々同人の原稿を買ふ事などは絕對になかつた。が、今ではこの片々たる舊稿さへ、二度も日の目を見る機會を得たのである。公平か、不公平か、自分は唯往時を追懷して、苦笑を洩すより外に仕方がない。

時代は遠慮なく推移するものである。だから恐らくは自分の小說の如きも、活字にさへ、容易にならない時が遲かれ早かれ來るのに相違ない。が、自分はその時もやはり現在のやうに苦笑を洩

して、一切を雲煙の如く見ようと思ふ。その外に自分は時代に對する禮儀を心得てゐないからである。

生溫いとも、不徹底とも、或は又煮え切らないとも、評するものは勝手に評するが好い。自分は唯その前にも、同じ苦笑の一擲を與へようと思つてゐるものである。

（大正八年六月）

龍村平藏氏の藝術

現代はせち辛い世の中である。このせち辛い世の中に、龍村平藏さんの如く一本二千圓も三千圓もする女帶を織つてゐると云ふ事は或は時代の大勢に風馬牛だと云ふ非難を得るかも知れない。いや、中には斯る贅澤品の爲に、生産能力の費される事を憤慨する向きもありさうである。が、その女帶が單なる女帶に止まらなかつたら――工藝品よりも寧ろ藝術品として鑑賞せらるべき性質のものだつたら、如何に現代が明日の日にも、米の飯さへ食へなくなりさうな、せち辛い世の中であるにもせよ、一概に贅澤品退治の鼓を鳴らして、龍村さんの事業と作品とを責める訣には行くまいと思ふ。この意味に於て私は、惡辣無双に切迫した時勢の手前も遠慮なく、堂々と龍村さんの女帶を天下に推稱出來る事を、この上もなく喜ばしく思はない訣には行かないのである。

と云つて勿論私は、特に織物の鑑賞に長じてゐる次第でも何でもない。ましてその方面の歷

史的或は科學的知識に至つては、猶更不案内な人間である。だから龍村さんの女帶が、滔々たる當世の西陣織と比較して、――と云ふよりは呉織綾織から川島甚兵衞に至るまで、上下二千年の織工史を通じて、如何なる地歩を占むべきものか、その邊の消息に至つては、毫もわからぬと云ふ外はない。從つて私の推稱が其影の薄いものになる事は、龍村さんの爲にも、私自身の爲にも遺憾千萬な次第であるが、同時に又それだからこそ、私は御同業の藝術家諸君を妄に貶しめる無禮もなく、安んじて龍村さんの女帶を天下に推稱する事が出來るのである。これは御同業の藝術家諸君の爲にも、惹いては私自身の爲にも、御同慶の至りと云はざるを得ない。

龍村さんの帶地の多くは、その獨特な經緯の組織を文字通り縱横に活かした結果、蒔繪の如き、堆朱の如き、螺鈿の如き、金唐革の如き、七寶の如き、陶器の如き、乃至は竹刻金石刻の如き、種々雜多な藝術品の特色を自由自在に捉へてゐる。が、私の感服したのは、單にそれらの藝術品を模し得た面白さばかりではない。もしその以外に何もなかつたなら、近來諸方に頻出する、油繪具を使はない洋畫同樣な日本畫の如く、私は唯好奇心を動かすだけに止まつたであらう。けれども龍村さんの帶地の中には、それらの藝術品の特色を巧に捉へ得たが爲に、織物本來の特色がより豐富な調和を得た。殆ど甚深微妙とも形容したい、恐るべき藝術的完成があつた。私は何よりもこの藝術的完成の爲に、頭を下げざるを得なかつたのである。遠慮なく云へば、鉅萬の市價

を得た足利時代の能衣裳の前よりも、この前には更に潔く、頭を下げざるを得なかつたのである。

私が龍村さんを推稱する理由は、この感服の外に何もない。が、この感服は私にとつて嚴乎として嚴たる事實である。だから私は以上述べた私の經驗を提げて、廣く我東京日日新聞の讀者諸君に龍村さんの藝術へ注目されん事を希望したい。殊に「日日文藝」と緣の深い文壇の諸君子には、諸君子と同じく藝術の爲に、焦慮し、惡鬪し、絕望し、最後に一新生面を打開し得た、その尊敬すべきコンフレエルの事業に、一層の留意を請ひたいと思ふ。何故と云へば私の知つてゐる限りで、屢諸君子の間に論議される天才の名に價するものには、まづ第一に龍村平藏さんを數へなければならないからである。

（大正八年十一月）

俳畫展覽會を觀て

俳畫展覽會へ行つて見たら、先づ下村爲山さんの半折が、皆うまいので驚いた。が、實を云ふと、うまい以上に高いのでも驚いた。尤もこれは爲山さんばかりぢやない。諸先生の俳畫に對して、皆多少は驚いたのである。かう云ふと、諸先生の畫を輕蔑するやうに聞えるかも知れないが、決してさう云ふつもりぢやない。それより寧ろ、頭のどこかに俳畫と云ふものと、値段の安いと云ふ事とを結びつけるものが、豫め存在したと云つた方が適當である。

但し中には畫そのものがくだらなくつて、しかも頗る高價なものも全くなかつた訣ぢやない。が、あれは餘りまづすぎるので、人に買はれると、醜を後世に殘すから、わざと誰も買はないやうな、高い値段づけをつけたんだらうと推察した。唯、さう云ふ畫が二三點既に賣約濟になつてゐたのは、誰よりも先づ描いた人自身が遺憾だつたのに違ひない。

それから句佛上人が、畫を描かせてもやはり器用なのに敬服した。上人は「勿體なや祖師は紙衣の五十年」と云ふ句を作つた人である。が、上人の俳畫は勿論祖師でも何でもないから、更に

紙衣なんぞは着てゐない。皆この頃の寒空を知らないやうに、立派な表装を着用してゐる。

その次に參考品の所で、淺井默語先生の畫を拜見した。これは非賣品だから、値段に脅されない丈でも、甚だ安全なものである。が、そんなことを眼中に置かないでも、鳳凰や羅漢なんぞは、至極結構な出來だと思ふ。あの位達者で、しかもあの位氣品のある所は、それこそ本式に敬服の外はない。

最後に夏目漱石先生の南山松竹を見て、同じく又敬意を表した。先生は生前、「己は畫でも津田に頭を下げさせるやうなものを描いてやる」と力んでゐられたさうである。そこで津田青楓さんに御相談申し上げるが、技巧は兎も角も、氣品の點へ行くと、先生の畫の中には、あなたが頭を御下げになつても、恥しくないものがありやしませんか。これは私自身が頭を下げるから、さうして平生あなたがかう云ふ問題には公明正大な事をよく承知してゐるから、それで伺つて見たいと思ふ。

前に書き忘れたが、鳴雪翁の書も面白く拜見した。昔、初午に稻荷へ行くと、よく鳥居をくぐる途に地口の行燈がならんでゐた。あれはその行燈の繪を髣髴させる所が甚だ風流である。

まだいろいろ思ひついた事があるが、目下多忙の際だから、これだけで御免を蒙りたい。

（大正七年十一月）

西洋畫のやうな日本畫

中央美術社の展覽會へ行つた。

行つて見ると三つの室に、七十何點かの畫が並んでゐる。それが皆日本畫である。しかし唯の日本畫ぢやない。いづれも經營慘憺の餘になつた、西洋畫のやうな日本畫である。まづ第一に絹や紙へ、日本繪具をなすりつけて、よくこれ程油繪じみた效果を與へる事が出來たものだと、その點に聊か敬意を表した。

そこで素人考へに考へて見ると、かう云ふ畫を描く以上、かう云ふ畫の作者には、自然がかう云ふ風に見えるのに違ひない。逆に云へばかう云ふ風に自然が見えればこそ、かう云ふ畫が此處に出來上つたのだから、一應は至極御尤もである。が、素人はかう云ふ畫を見ると、何故これらの畫の作家は、繪具皿の代りにパレットを、紙や絹の代りにカンヴアスを用ひないかと尋ねたくなる。その方が作者にも便利なら、僕等素人の見物にも難有くはないかと尋ねたくなる。

しかしこれらの畫の作者は、「我々には自然がかう見えるのだ。かう見えると云ふ意味は、西洋畫風にと云ふ意味ぢやない。我々の日本畫風にと云ふ意味だ」と、立派な返答をするかも知れない。よろしい。それも心得た。が、これらの畫の中には、どう考へても西洋畫と選ぶ所のない畫が澤山ある。たとへば吉田白流氏の「奧州路」の如き、遠藤教三氏の「嫩葉の森」の如き、乃至穴山義平氏の「盛夏」の如きは、皆この類の作品である。もし「我々の日本畫風」が、かう云ふものであるとすれば、それは遺憾ながら僕なぞには、餘り結構なものとは思はれない。まづ冷酷に批評すると、本來剃刀で剃るべき髭を、薙刀で剃つて見せたと云ふ御手柄に感服するだけである。さうして一應感服した後では、或は剃刀を使つた方が、もつとよく剃れはしなかつたらうかと尋ねたくなるだけである。

尤も七十何點かの畫が、悉くこの種類だと云ふ次第ぢやない。たとへば畠山錦成氏の「貴美子」の如きは、少くともかう云ふ西洋かぶれの弊は受けてゐない作品である。如何に奇抜がつた所が、せめて此處までは漕ぎつけてゐないと、どうも僕等素人には、ちと新しい日本畫としてのレエゾン・デエトルが覺束ないかと思ふ。もつと書きたい事もないではないが、何しろ原稿を受け取りに來た人が、玄關に待つてゐる始末だから、今度はまづこの邊で御免を蒙る事にする。惡口は岡目八目の然らしむる所以だと大目に見て頂きたい。（九・七・十八）

近頃の幽靈

西洋の幽靈――西洋と云つても英米だけだが、その英米の小說に出て來る、近頃の幽靈の話でも少ししませう。少し古い所から勘定すると、英吉利には名高い「オトラントの城」を書いたウオルポオル、ラドクリツフ夫人、マテユリン(この人の「メルモズ」は、バルザツクやゲエテにも影響を與へたので有名だが)、「僧」を書いて僧ルイズの渾名をとつたルイズ、スコツト、リツトン、ボツグなどがあるし、亞米利加にはポオやホウソオンがあるが、幽靈――或は一般に妖怪を書いた作品は今でも存外少くない。殊に歐洲の戰役以來、宗教的感情が彌漫すると同時に、いろいろ戰爭に關係した幽靈の話も出て來たやうです。戰爭文學に怪談が多いなどは、面白い現象に違ひないでせう。何しろ佛蘭西のやうな國でさへ、丁度昔のジアン・ダアクのやうに、グレエル・フエルシヨオと云ふ女が出て、基督や天使を目のあたりに見る。ポアンカレエやクレマンソオがその女を接見する。フオツシユ將軍が信者になる。――と云ふやうな次第だから、小說の方へも超

自然の出來事が盛にはひつて來たのは當然です。この種の小說を讀んで見ると、中々奇拔な怪談がある。これは亞米利加が歐洲の戰役へ參加した後に出來た話ですが、ワシントンの幽靈が亞米利加獨立軍の幽靈と一しよに大西洋を橫斷して祖國の出征軍に一臂の勞を貸しに行くと云ふ小說がある。(Harrison Rhodes: Extra Men) ワシントンの幽靈は振つてゐませう。さうかと思ふと、佛蘭西の女の兵隊と獨逸の兵隊とが對峙してゐる、獨逸の兵隊は虜にした幼兒を楯にして控へてゐる。其時戰死した佛蘭西の男の兵隊が、――女の兵隊の御亭主達の幽靈が、霧のやうに殺到して獨逸の兵隊を逐ひ散らしてしまふ、と云つた筋の話もある。(Frances Gilchrist Wood: The White Battalion) 兎に角種類の上から云ふと、近頃の幽靈を書いた小說の中では、旣にこの方面專門の小說家さへ出てゐる位。(Arthur Machen など)戰爭物が目立つてゐるやうです。
種類の上の話はこの位にするが、一般に近頃の小說では、幽靈――或は妖怪の書き方が、餘程科學的になつてゐる。決してゴシツク式の怪談のやうに、無暗に血だらけな幽靈が出たり骸骨が踊りを踊つたりしない。殊に晩近の心靈學の進步は、小說の中の幽靈に驚くべき變化を與へたやうです。キツプリング、ブラツクウツド、ビイアスと數へて來ると、どうも皆其机の抽斗には心靈學會の研究報告がはひつてゐさうな心持がする。殊にブラツクウツドなどは(Algernon Blackwood)御當人が旣にセオソフイストだから、どの小說も悉く心靈學的に出來上つてゐる。この人

の小説に「ジョン・サイレンス」と云ふのがあるが、そのサイレンス先生なるものは、云はば心靈學のシヤアロツク・ホオムス氏で、化物屋敷へ探檢に行つたり惡靈に憑かれたのを癒してやつたりする、それを一々書き並べたのが一篇の結構になつてゐる訣です。それから又「双子」と云ふ小説がある。これは極短い物ですが、双子が一人になつてしまふ。——と云つたのでは通じないでせう、双子が體は二つあつても、魂は一つになつてしまふ。一人に二人分の性格が出來ると同時に、他の一人は白痴になつてしまふ。その徑路を書いたものですが、外界には何も起らずに、内界に不思議な變化の起る所が、頗る巧妙に書いてある。これなどはルイズやマテユリンには、到底見られない離れ業です。序にもう一つ例を擧げると、ウエルスが始めて書いたとか云ふ第四の空間があつて、何かの拍子に其處へはひると、當人はちやんと生きてゐても、この世界の人間には姿が見えない。云はば日本の神隱しに、新解釋を加へたやうなものです。これはその後ビイアスが、第四の空間へはひる刹那までも、簡勁に二三書いてゐる。殊に或少年が行方知れずになる。尤も或る所までは雪の中に、はつきり足跡が殘つてゐる。が、それぎりどうしたか、後にも先にも行つた容子がない。唯、母親が其處へ行くと、聲だけ聞えたと云ふなどは、一二枚の小品だがあはれた氣がする。ビイアスは無氣味な物を書くと、少くとも英米の文壇では、ポオ以後第一人の觀のある男ですが、(Ambrose Bierce)御當人も第四の空間へでも飛びこんだのか、メキシコか

何處かへ行く途中、杳として行方を失つた儘、わからずしまひになつてゐるさうです。
幽靈――或は妖怪の書き方が變つて來ると同時に、その幽靈――或は妖怪にも、いろいろ變り種が殖えて來る。一例を擧げるとブラックウッドなどには、エレメンタルスと云ふやつが、時々小說の中へ飛び出して來る。これは火とか水とか土とか云ふ、古い意味の元素の靈です。エレメンタルスの名は元よりあつたでせうが、その活動が小說に現れ出したのは、近頃の事に違ひありますまい。ブラックウッドの「柳」と云ふ小說を讀むと、ダニウブ河へボオト旅行に出かけた二人の青年が、河の中の洲に茂つてゐる柳のエレメンタルスに惱まされる。――エレメンタルスの描寫は兎も角も、夜鶯の所は器用に書いてあります。この柳の靈なるものは、かすかな銅鑼のやうな聲を立てる所までは好いが、三十三間堂のお柳などとは違つて、人間を殺しに來るのださうだから、中々油斷はなりません。その外にまだ何とも得體の知れない妙な物の出て來る小說がある。妙な物と云ふのは、聲も姿もない、その癖觸覺には觸れると云ふ、要するにまあ妙な物です。これはド・モウパッサンのオオラあたりが粉本かも知れないが、私の思ひ出す限りでは、英米の小說中、この種の怪物の出て來るのが、まづ二つばかりある。一つはビイアスの小說だが、この怪物が通ることは、唯草が動くので知れる。尤も動物には見えると見えて、犬が吠えたり、鳥が逃げたりする、しまひに人間が絞め殺される。その時居合せた男が見ると、その怪物と組み合つた

人間は、怪物の體に隱れた所だけ、全然形が消えたやうに見えた、――と云つたやうな工合です。(The Damned Thing)もう一つはこれも月の光に見ると、顏は皺くちやの敷布か何かだつたと云ふのだから、新工夫には違ひありません。

この位で御免蒙りますが、西洋の幽靈は一體に、骸骨でなければ着物を着てゐる。裸の幽靈と云ふのは、近頃になつても一つも類がないやうです。尤も怪物には裸も少くない。今のオオブリエンの怪物も、確毛むくじやらな裸でした。その點では幽靈は、人間より餘程行儀が好い。だから誰か今の内に裸の幽靈の小說を書いたら、少くともこの意味では前人未發の新天地を打開した事になる筈です。

(大正十一年一月)

〔談話〕

伊東から

拜啓。小生は、元來新聞の編輯に無經驗なるものに御座候へども文藝上の作品は文藝欄に載るものと心得居り候。然るに四月十三日の時事新報(靜岡版)は文藝上の作品を文藝欄以外に揭げ居り候。それは「けふの自習課題」と申すものに之有候。

小學四年。さくらの花はどんなくみたてになつてゐますか？

小學五年。花崗岩はどんな鑛物から出來てゐますか？

小學六年。海藻の效用をのべなさい。

これは勿論詩と存じ候。殊に櫻の花の「くみたて」などと申す言葉は稚拙の妙言ふべからず候。

何か編輯上の手違ひとは存じ候へども、爾來かかる作品は文藝欄へお收め下され度、切望の至りに堪へず候。右差し出がましき次第ながら御注意までに申し上げ候。頓首。

四月十三日　伊東にて

佐佐木茂索様　　　　芥川龍之介

二伸。小生と同じ宿に十二三歳の少女有之、腎臓病とか申すことにて、蠟のやうな顏色を致し居り候。付き添ひ居り候は母親にや、但し餘り似ても居らぬ五十恰好の婦人に御座候。小生、今朝ふと應接室へ參り候所、この影の薄き少女、籐のテエブルの上へのしかかり、熱心に「けふの自習課題」を讀み居り候。定めし少女も小生と同樣、櫻の花や花崗石や潮の滴る海藻を想ひ居りしことと存じ候。これは決して臆測には無之、少女の顏を一瞥致し候はば、誰にも看取出來ることに御座候。小生は勿論「けふの自習課題」の作者に藝術的嫉妬を感じ候。然れども恍惚たる少女の顏には言ふ可からざる幸福を感じ候。御同樣文筆に從ひ居り候上は一行にてもかかる作品を書き度、若し又新聞の文藝欄にもかかる作品のみ載ることと相成り候はば、如何ばかり快からんなどとも存じ候。早早。

（大正十二年四月）

大正十二年九月一日の大震に際して

一　大震雜記

一

大正十二年八月、僕は一游亭と鎌倉へ行き、平野屋別莊の客となつた。僕等の座敷の軒先はずつと藤棚になつてゐる。その又藤棚の葉の間にはちらほら紫の花が見えた。八月の藤の花は年代記ものである。それぱかりではない。後架の窓から裏庭を見ると、八重の山吹も花をつけてゐる。

山吹を指すや日向の撞木杖　　一游亭

（註に曰、一游亭は撞木杖をついてゐる。）

その上又珍らしいことは小町園の庭の池に菖蒲も蓮と咲き競つてゐる。

葉を枯れて蓮と咲ける花あやめ　　一游亭

藤、山吹、菖蒲と數へて來ると、どうもこれは唯事ではない。「自然」に發狂の氣味のあるのは

疑ひ難い事實である。僕は爾來人の顏さへ見れば、「天變地異が起りさうだ」と云つた。しかし誰も眞に受けない。久米正雄の如きはにやにやしながら、「菊池寛が弱氣になつてね」などと大いに僕を嘲弄したものである。

僕等の東京に歸つたのは八月二十五日である。大地震はそれから八日目に起つた。

「あの時は義理にも反對したかつたけれど、實際君の豫言は中つたね。」

久米も今は僕の豫言に大いに敬意を表してゐる。さう云ふことならば白狀しても好い。――實は僕も僕の豫言を餘り信用しなかつたのだよ。

二

「濱町河岸の舟の中に居ります。櫻川三孝。」

これは吉原の燒け跡にあつた無數の貼り紙の一つである。「舟の中に居ります」と云ふのは眞面目に書いた文句かも知れない。しかし哀れにも風流である。僕はこの一行の中に秋風の舟を家と賴んだ幇間の姿を髣髴した。江戸作者の寫した吉原は永久に還つては來ないであらう。が、兎に角今日と雖も、かう云ふ貼り紙に洒脫の氣を示した幇間のゐたことは確かである。

三

大地震のやつと靜まつた後、屋外に避難した人人は急に人懷しさを感じ出したらしい。向う三軒兩隣を問はず、親しさうに話し合つたり、煙草や梨をすすめ合つたり、互に子供の守りをしたりする景色は、渡邊町、田端、神明町、――殆ど至る處に見受けられたものである。殊に田端のポプラア倶樂部の芝生に難を避けてゐた人人などは、背景にポプラアの戰いでゐるせゐか、ピクニツクに集まつたのかと思ふ位、如何にも樂しさうに打ち解けてゐた。

これは夙にクライストが「地震」の中に描いた現象である。いや、クライストはその上に地震後の興奮が靜まるが早いか、もう一度平生の恩怨が徐ろに目ざめて來る恐しささへ描いた。するとポプラア倶樂部の芝生に難を避けてゐた人人もいつ何時隣の肺病患者を驅逐しようと試みたり、或は又向うの奧さんの私行を吹聽して歩かうとするかも知れない。それは僕でも心得てゐる。しかし大勢の人人の中にいつにない親しさの湧いてゐるのは兎に角美しい景色だつた。僕は永久にあの記憶だけは大事にして置きたいと思つてゐる。

四

僕も今度は御多分に洩れず、燒死した死骸を澤山見た。その澤山の死骸のうち最も記憶に殘つてゐるのは、淺草仲店の收容所にあつた病人らしい死骸である。この死骸も炎に燒かれた顏は目鼻もわからぬほどまつ黑だつた。が、湯帷子を着た體や瘦せ細つた手足などには少しも燒け爛れた痕はなかつた。しかし僕の忘れられぬのは何もさう云ふ爲ばかりでない。燒死した死骸は誰も云ふやうに大抵手足を縮めてゐる。けれどもこの死骸はどう云ふ訣か、燒け殘つたメリンスの布團の上にちやんと足を伸ばしてゐた。手も亦覺悟を極めたやうに湯帷子の胸の上に組み合はせてあつた。これは苦しみ悶えた死骸ではない。靜かに宿命を迎へた死骸である。もし顏さへ焦げずにゐたら、きつと蒼ざめた脣には微笑に似たものが浮んでゐたであらう。

僕はこの死骸をもの哀れに感じた。しかし妻にその話をしたら、「それはきつと地震の前に死んでゐた人の燒けたのでせう」と云つた。成程さう云はれて見れば、案外そんなものだつたかも知れない。唯僕は妻の爲に小說じみた僕の氣もちの破壞されたことを憎むばかりである。

五

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寬はこの資格に乏しい。

戒嚴令の布かれた後、僕は卷煙草を啣へたまま、菊池と雜談を交換してゐた。尤も雜談とは云

ふものの、地震以外の話の出た訣ではない。その内に僕は大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇さうだと云つた。すると菊池は眉を擧げながら、「譃だよ、君」と一喝した。僕は勿論さう云はれて見れば、「ぢや譃だらう」と云ふ外はなかつた。しかし次手にもう一度、何でも〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだと云つた。菊池は今度は眉を擧げると、「譃さ、君、そんなことは」と叱りつけた。僕は又「へええ、それも譃か」と忽ち自說（？）を撤回した。

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシェヴィツキと〇〇〇〇との陰謀の存在を信ずるものである。もし萬一信じられぬ場合は、少くとも信じてゐるらしい顏つきを裝はねばならぬものである。けれども野蠻なる菊池寬は信じもしなければ信じる眞似もしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄したと見るべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警團の一員たる僕は菊池の爲に惜まざるを得ない。

尤も善良なる市民になることは、――兎に角苦心を要するものである。

六

僕は丸の内の燒け跡を通つた。此處を通るのは二度目である。この前來た時には馬場先の濠に何人も泳いでゐる人があつた。けふは――僕は見覺えのある濠の向うを眺めた。濠の向うには藥

研なりに石垣の崩れた處がある。崩れた土は丹のやうに赤い。崩れぬ土手は青芝の上に不相變松をうねらせてゐる。其處にけふも三四人、裸の人人が動いてゐた。何もさう云ふ人人は醉興に泳いでゐる訣ではあるまい。しかし行人たる僕の目にはこの前も丁度西洋人の描いた水浴の油畫か何かのやうに見えた。今日もそれは同じである。いや、この前はこちらの岸に小便をしてゐる土工があつた。けふはそんなものを見かけぬだけ、一層平和に見えた位である。

僕はかう云ふ景色を見ながら、やはり歩みをつづけてゐた。すると突然濠の上から、思ひもよらぬ歌の聲が起つた。歌は「懐しのケンタッキイ」である。歌つてゐるのは水の上に頭ばかり出した少年である。僕は妙な興奮を感じた。僕の中にもその少年に聲を合せたい心もちを感じた。少年は無心に歌つてゐるのであらう。けれども歌は一瞬の間にいつか僕を捉へてゐた否定の精神を打ち破つたのである。

藝術は生活の過剩ださうである。成程さうも思はれぬことはない。しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の過剩である。僕等は人間たる尊厳の爲に生活の過剩を作らなければならぬ。更に又巧みにその過剩を大いなる花束に仕上げねばならぬ。生活に過剩をあらしめるとは生活を豐富にすることである。

僕は丸の内の焼け跡を通つた。けれども僕の目に觸れたのは猛火も亦焼き難い何ものかだつた。

二　大震日錄

八月二十五日。

一游亭と鎌倉より歸る。久米、田中、菅、成瀨、武川など停車場へ見送りに來る。一時ごろ新橋着。直ちに一游亭とタクシイを驅り、聖路加病院に入院中の遠藤古原草を見舞ふ。古原草は病殆ど癒え、油畫具など弄び居たり。風間直得と落ち合ふ。聖路加病院は病室の設備、看護婦の服裝等、淸楚甚だ愛すべきものあり。一時間の後、再びタクシイを驅りて一游亭を送り、三時ごろやつと田端へ歸る。

八月二十九日

暑氣甚し。再び鎌倉に遊ばんかなどとも思ふ。薄暮より惡寒。檢溫器を用ふれば八度六分の熱あり。下島先生の來診を乞ふ。流行性感冒のよし。母、伯母、妻、兒等、皆多少風邪の氣味あり。

八月三十一日。

病聊か快きを覺ゆ。床上「澀江抽齋」を讀む。嘗て小說「芋粥」を艸せし時、「殆ど全く」なる語を用ひ、久米に笑はれたる記憶あり。今「抽齋」を讀めば、鷗外先生も亦「殆ど全く」の語を用ふ。

一笑を禁ずる能はず。

九月一日。

午ごろ茶の間にパンと牛乳を喫し了り、將に茶を飮まんとすれば、忽ち大震の來るあり。母と共に屋外に出づ。妻は二階に眠れる多加志を救ひに去り、伯母は又梯子段のもとに立ちつつ、妻と多加志とを呼んでやまず。旣にして妻と伯母と多加志を抱いて屋外に出づれば、更に又父と比呂志とのあらざるを知る。婢しづを、再び屋内に入り、倉皇比呂志を抱いて出づ。父亦庭を回つて出づ。この間家大いに動き、歩行甚だ自由ならず。屋瓦の亂墜するもの十餘。大震漸く靜まれば、風あり、面を吹いて過ぐ。土臭殆ど噎ばんと欲す。父と屋の内外を見れば、被害は屋瓦の墜ちたると石燈籠の倒れたるのみ。

圓月堂、見舞ひに來る。泰然自若たる如き顏をしてゐれども、多少は驚いたのに違ひなし。病を力めて圓月堂と近鄰に住する諸君を見舞ふ。途上、神明町の狹斜を過ぐれば、人家の倒壞せるもの數軒を數ふ。また月見橋のほとりに立ち、遙かに東京の天を望めば、天、泥土の色を帶び、焰煙の四方に飛騰するを見る。歸宅後、電燈の點じ難く、食糧の乏しきを告げんことを惧れ、蠟燭米穀蔬菜罐詰の類を買ひ集めしむ。

夜また圓月堂の月見橋のほとりに至れば、東京の火災愈猛に、一望大いなる熔鑛爐を見るが

如し。田端、日暮里、渡邊町等の人人、路上に椅子を据ゑ疊を敷き、屋外に眠らんとするもの少からず。歸宅後、大震の再び至らざるべきを說き、家人を皆屋内に眠らしむ。電燈、瓦斯共に用をなさず。時に二階の戸を開けば、天色常に燃ゆるが如く紅なり。

この日、下島先生の夫人、單身大震中の藥局に入り、藥劑の棚の倒れんとするを支ふ。爲めに出火の患なきを得たり。膽勇、僕などの及ぶところにあらず。夫人は澀江抽齋の夫人いほ女の生れ變りか何かなるべし。

九月二日。

東京の天、未だ煙に蔽はれ、灰燼の時に庭前に墜つるを見る。圓月堂に請ひ、牛込、芝等の親戚を見舞はしむ。東京全滅の報あり。又横濱竝びに湘南地方全滅の報あり。鎌倉に止まれる知友を思ひ、心頻りに安からず。薄暮圓月堂の歸り報ずるを聞けば、牛込は無事、芝は焦土と化せりと云ふ。姉の家、弟の家、共に全燒し去れるならん。彼等の生死だに明らかならざるを憂ふ。

この日、避難民の田端を經て飛鳥山に向ふもの、陸續として絕えず。田端も亦延燒せんことを惧れ、妻は兒等の衣をバスケツトに收め、僕は漱石先生の書一軸を風呂敷に包む。家具家財の荷づくりをなすも、運び難からんことを察すればなり。人慾素より窮まりなしとは云へ、存外又あきらめることも容易なるが如し。夜に入りて發熱三十九度。時に○○○○○○○あり。僕は頭

重うして立つ能はず。圓月堂、僕の代りに徹宵警戒の任に當る。脇差を横たへ、木刀を提げたる狀、彼自身宛然たる〇〇〇なり。

三　大震に際せる感想

地震のことを書けと云ふ雜誌一つならず。何をどう書き飛ばすにせよ、さうは註文に應じ難ければ、思ひつきたること二三を記してやむべし。幸ひに孟浪を咎むること勿れ。

この大震を天譴と思へとは澁澤子爵の云ふところなり。誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。脚に疵あるは天譴を蒙る所以、或は天譴を蒙れりと思ひ得る所以なるべし。されど我は妻子を殺し、彼は家すら燒かれざるを見れば、誰か又所謂天譴の不公平なるに驚かざらんや。不公平なる天譴を信ずるは天譴を信ぜざるに若かざるべし。否、天の蒼生に、――當世に行はるる言葉を使へば、自然の我我人間に冷淡なることを知らざるべからず。

自然は人間に冷淡なり。大震はブウルジョアとプロレタリアとを分たず。猛火は仁人と潑皮とを分たず。自然の眼には人間も蚤も選ぶところなしと云へるトゥルゲネフの散文詩は眞實なり。のみならず人間の中なる自然も、人間の中なる人間に愛憐を有するものにあらず。大震と猛火と

は東京市民に日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめたり。もし救護にして至らざりしとせば、東京市民は野獸の如く人肉を食ひしやも知るべからず。

日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめし境遇の慘は恐るべし。されど鶴と家鴨とを——否、人肉を食ひしにもせよ、食ひしことは恐るるに足らず。自然は人間に冷淡なればなり。人間の中なる自然も又人間の中なる人間に愛憐を垂るることなければなり。鶴と家鴨とを食へるが故に、東京市民を獸心なりと云ふは、——惹いては一切人間を禽獸と選ぶことなしと云ふは、畢竟意氣地なきセンティメンクリズムのみ。

自然は人間に冷淡なり。されど人間なるが故に、人間たる事實を輕蔑すべからず。人間たる尊嚴を抛棄すべからず。人肉を食はずんば生き難しとせよ。汝とともに人肉を食はん。人肉を食うて腹鼓然たらば、汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後に尙餘力あらば、風景を愛し、藝術を愛し、萬般の學問を愛すべし。

誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。僕の如きは兩脚の疵、殆ど兩脚を中斷せんとす。されど幸ひにこの大震を天譴なりと思ふ能はず。況んや天譴の不公平なるにも呪詛の聲を擧ぐる能はず。唯姉弟の家を燒かれ、數人の知友を死せしめしが故に、已み難き遺憾を感ずるのみ。我等は皆歎くべし。歎きたりと雖も絕望すべからず。絕望は死と暗黑とへの門なり。

同胞よ。面皮を厚くせよ。「カンニング」を見つけられし中學生の如く、天譴なりなどと信ずること勿れ。僕のこの言を做す所以は、澁澤子爵の一言より、滔滔と何でもしやべり得る僕の才力を示さんが爲なり。されどかならずしもその爲のみにはあらず。同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以來の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ。

四　東京人

東京に生まれ、東京に育ち、東京に住んでゐる僕は未だ嘗て愛鄕心なるものに同情を感じた覺えはない。又同情を感じないことを得意としてゐたのも確かである。

元來愛鄕心なるものは、縣人會の世話にもならず、舊藩主の厄介にもならない限り、云はば無用の長物である。東京を愛するのもこの例に洩れない。兎角東京東京と難有さうに騷ぎまはるのはまだ東京の珍らしい田舍者に限つたことである。――さう僕は確信してゐた。

すると大地震のあつた翌日、大彥の野口君に遇つた時である。僕は一本のサイダアを中に、野口君といろいろ話をした。一本のサイダアを中にと云ふと、或は氣樂さうに聞えるかも知れない。しかし東京の大火の煙は田端の空さへ濁らせてゐる。野口君もけふは元祿袖の紗の羽織な

どは着用してゐない。何だか火事頭巾の如きものに雲龍の刺つ子と云ふ出立ちである。僕はその時話の次手にもう續續罹災民は東京を去つてゐると云ふ話をした。

「そりやあなた、お國者はみんな歸つてしまふでせう。――」

野口君は言下にかう云つた。

「その代りに江戸つ兒だけは殘りますよ。」

僕はこの言葉を聞いた時に、ちよいと或心强さを感じた。それは君の服裝の爲か、空を濁らせた煙の爲か、或は又僕自身も大地震に怯えてゐた爲か、その邊の消息ははつきりしない。しかし兎に角その瞬間、僕も何か愛鄕心に似た、勇ましい氣のしたのは事實である。やはり僕の心の底には幾分か僕の輕蔑してゐた江戸つ兒の感情が殘つてゐるらしい。

五　廢都東京

加藤武雄様。東京を弔ふの文を作れと云ふ仰せは正に拜承しました。又おひきうけしたことも事實であります。しかしいざ書かうとなると、匆忙の際でもあり、どうも氣乘りがしませんから、この手紙で御免を蒙りたいと思ひます。

應仁の亂か何かに遇つた人の歌に、「汝も知るや都は野べの夕雲雀揚るを見ても落つる涙は」と云ふのがあります。丸の內の燒け跡を步いた時にはざつとあゝ云ふ氣がしました。水木京太氏などは銀座を通ると、ぽろぽろ涙が出たさうであります。(尤も全然センティメンタルな氣もちなしにと云ふ斷り書があるのですが)けれども僕は「落つる涙は」と云ふ氣がしたきり、實際は涙を落さずにすみました。その外不謹愼の言葉かも知れませんが、ちよいともの珍しかつたことも事實であります。

「落つる涙は」と云ふ氣のしたのは、勿論こんなにならぬ前の東京を思ひ出した爲であります。しかし大いに東京を惜しんだと云ふ訣ぢやありません。僕はこんなにならぬ前の東京に餘り愛惜を持たずにゐました。と云つても僕を江戶趣味の徒と速斷してはいけません、僕は知りもせぬ江戶の昔に依依戀戀とする爲には餘りに散文的に出來てゐるのですから。僕の愛する東京は僕自身の見た東京、僕自身の步いた東京なのです。銀座に柳の植つてゐた、汁粉屋の代りにカフエの殖えない、もつと一體に落ち着いてゐた、――あなたもきつと知つてゐるでせう、云はば麥稈帽はかぶつてゐても、薄羽織を着てゐた東京なのです。その東京はもう消え失せたのですから、同じ東京とは云ふものの、何處か折り合へない感じを與へられてゐました。それが今燒土に變つたのです。僕はこの急劇な變化の前に俗惡な東京を思ひ出しました。が、俗惡な東京を惜しむ氣もち

は、――いや、丸の内の焼け跡を歩いた時には惜しむ氣もちにならなかつたにしろ、今は惜しんでゐるのかも知れません。どうもその邊はぼんやりしてゐます。僕はもう俗惡な東京にいつか追憶の美しさをつけ加へてゐるやうな氣がしますから。つまり一番確かなのは「落つる涙は」と云ふ氣のしたことです。僕の東京を弔ふ氣もちもこの一語を出ないことになるのでせう。「落つる涙は」、――これだけではいけないでせうか？

何だかとりとめもない事ばかり書きましたが、どうか惡しからず御赦し下さい。僕はこの手紙を書いて了ふと、僕の家に充滿した焼け出されの親戚故舊と玄米の夕飯を食ふのです。それから提燈に蠟燭をともして、夜警の詰所へ出かけるのです。以上。

六　震災の文藝に與ふる影響

大地震の災害は戰爭や何かのやうに、必然に人間のうみ出したものではない。ただ大地の動いた結果、火事が起つたり、人が死んだりしたのにすぎない。それだけに震災の我我作家に與へる影響はさほど根深くはないであらう。すくなくとも、作家の人生觀を一變することなどはないであらう。もし、何か影響があるとすれば、かういふことはいはれるかも知れぬ。

災害の大きかつただけにこんどの大地震は、我我作家の心にも大きな動搖を與へた。我我ははげしい愛や、憎しみや、憐みや、不安を經驗した。在來、我我のとりあつかつた人間の心理は、どちらかといへばデリケエトなものである。それへ今度はもつと線の太い感情の曲線をゑがいたものが新に加はるやうになるかも知れない。勿論その感情の波を起伏させる段取りには大地震や火事を使ふのである。事實はどうなるかわからぬが、さういふ可能性はありさうである。

また大地震後の東京は、よし復興するにせよ、さしあたり殺風景をきはめるだらう。そのために我我は在來のやうに、外界に興味を求めがたい。すると我我自身の內部に、何か樂みを求めるだらう。すくなくとも、さういふ傾向の人は更にそれを强めるであらう。つまり、亂世に出合つた支那の詩人などの隱棲の風流を樂しんだと似たことが起りさうに思ふのである。これも事實として豫言は出來ぬが、可能性はずゐぶんありさうに思ふ。

前の傾向は多數へ訴へる小說をうむことになりさうだし、後の傾向は少數に訴へる小說をうむことになる筈である。卽ち兩者の傾向は相反してゐるけれども、どちらも起らぬと斷言しがたい。

七　古書の燒失を惜しむ

今度の地震で古美術品と古書との滅びたのは非常に殘念に思ふ。表慶館に陳列されてゐた陶器類は殆ど破損したといふことであるが、その他にも損害は多いにちがひない。然し古美術品のことは暫らく措き古書のことを考へると黒川家の藏書も燒け、安田家の藏書も燒け大學の圖書館の藏書も燒けたのは取り返しのつかない損害だらう。商賣人でも村幸とか淺倉屋とか吉吉だとかいふのが燒けたからその方の罹害も多いにちがひない。個人の藏書は兎も角も大學圖書館の藏書の燒かれたことは何んといつても大學の手落ちである。圖書館の位置が火災の原因になりやすい醫科大學の藥品のあるところと接近してゐるのも宜敷くない。休日などには圖書館に小使位しか居ないのも宜しくない、(その爲めに今度のやうな火災にもどういふ本が貴重かがわからず、從つて貴重な本を出すことも出來なかつたらしい。)書庫そのものの構造のゾンザイなのも宜敷くない。それよりももつと突き詰めたことをいへば、大學が古書を高閣に束ねるばかりで古書の覆刻を盛んにしなかつたのも宜敷くない。徒らに材料を他に示すことを惜んで竟にその材料を烏有に歸せしめた學者の罪は鼓を鳴らして攻むべきである。大野洒竹の一生の苦心に成つた洒竹文庫の燒け失せた丈けでも殘念で堪らぬ。「八九間雨柳」といふ士朗の編んだ俳書などは勝峯晉風氏の文庫と天下に二冊しかなかつたやうに記憶してゐるが、それも今は一冊になつてしまつた訣だ。

(大正十二年九月)

鸚鵡

——大震覺え書の一つ——

これは御覽の通り覺え書に過ぎない。覺え書を覺え書のまま發表するのは時間の餘裕に乏しい爲である。或は又その外にも氣持の餘裕に乏しい爲である。しかし覺え書のまま發表することに多少は意味のない訣でもない。大正十二年九月十四日記。

本所橫網町に住める一中節の師匠。名は鐘太夫。年は六十三歲。十七歲の孫娘と二人暮らしなり。

家は地震にも潰れざりしかど、忽ち近隣に出火あり。孫娘と共に兩國に走る。携へしものは鸚鵡の籠のみ。鸚鵡の名は五郎。背は鼠色、腹は桃色。藝は錺屋の槌の音と「ナアル」（成程の略）といふ言葉とを眞似るだけなり。

兩國より人形町へ出づる間にいつか孫娘と離れ離れになる。心配なれども探してゐる暇なし。

往來の人波。荷物の山。カナリヤの籠を持ちし女を見る。待合の女將かと思はるる服裝。「こちとらに似たものもあると思ひました」といふ。その位の餘裕はあるものと見ゆ。

鎧橋に出づ。町の片側は火事なり。その側に面せる顏、燒くるかと思ふほど熱かりし由。又何か落つると思へば、電線を被へる鉛管の火熱の爲に熔け落つるなり。この邊より一層人に押され、度たび鸚鵡の籠も潰れずやと思ふ。鸚鵡は始終狂ひまはりて已まず。

丸の内に出づれば日比谷の空に火事の煙の揚がるを見る。警視廳、帝劇などの燒け居りしならん。やつと楠の銅像のほとりに至る。芝の上に坐りしかど、孫娘のことが氣にかかりてならず。大聲に孫娘の名を呼びつつ、避難民の間を探しまはる。日暮。遂に松のかげに横はる。隣りは店員數人をつれたる株屋。空は火事の煙の爲、どちらを見てもまつ赤なり。鸚鵡、突然「ナアル」といふ。

翌日も丸の内一帶より日比谷迄、孫娘を探しまはる。「人形町なり兩國なりへ引つ返さうといふ氣は出ませんでした」といふ。午ごろより饑渴を覺ゆること切なり。やむを得ず日比谷の池の水を飮む。孫娘は遂に見つからず。夜は又丸の内の芝の上に横はる。鸚鵡の籠を枕べに置きつつ、人に盜まれはせぬかと思ふ。日比谷の池の家鴨を食らへる避難民を見たればなり。空にはなほ火事の明りを見る。

三日は孫娘を斷念し、新宿の甥を尋ねんとす。櫻田より半藏門に出づるに、新宿も亦燒けたりと聞き、谷中の檀那寺を手賴らばやと思ふ。饑渴愈甚だし。「五郎を殺すのは厭ですが、、おったら食はうと思ひました」といふ。九段上へ出づる途中、役所の小使らしきものにやつと玄米一合餘りを貰ひ、生のまま嚙み碎きて食す。又つらつら考へれば、鸚鵡の籠を提げたるまま、檀那寺の世話にはなられぬやうなり。卽ち鸚鵡に玄米の殘りを食はせ、九段上の濠端よりこれを放つ。薄暮、谷中の檀那寺に至る。和尙、親切に幾日でもゐろといふ。

五日の朝、僕の家に來る。未だ孫娘の行く方を知らずといふ。意氣な平生のお師匠さんとは思はれぬほど憔悴し居たり。

附記。新宿の甥の家は燒けざりし由。孫娘は其處に避難し居りし由。

解嘲

一

中村武羅夫君

これは君の「隨筆流行の事」に對する答である。僕は暫く君と共に天下の文藝を論じなかつた爲めか、君の文を讀んだ時に一撃を加へたい欲望を感じた。乃ち一月ばかり遲れたものの、聊か君の論陣へ返し矢を飛ばせる所以である。どうかふだんの君のやうに、怒髮を天に朝せしめると同時に、內心は君の放つた矢は確かに手答へのあつたことを滿足に思つてくれ給へ。

君は「凡そ藝術と云ふ藝術で、淸閑の所產でないものはない筈だ」と云つてゐる。又「藝術などといふものはその本來の性質からして、淸閑の所產であるべきものだとは思ふ」と云つてゐる。僕も亦君の駁した文の中に、「隨筆は淸閑の所產である。少くとも僅かに淸閑の所產を誇つてゐた文藝の形式である」と云つた。これは勿論隨筆以外に淸閑は入らんと云つた訣ではない。「僅かに淸閑の所產を誇つてゐた」と云ふのも事實上の問題に及んだだけである。まことに淸閑は藝術の

鑑賞竝びにその創作の上には必要條件の一つに數へられなければならぬ。少くとも好都合の條件の一つに數へられなければならぬ筈である。この點は僕も君の說に少しも異議を述べる必要はない。同時に又君も僕の說に異議を述べる必要はない筈である。

次に中村君はかう云つてゐる。「芥川氏は淸閑は金の所産だと言ふ。が（中略）金のあるなしにかかはらず、現在のやうな社會的環境の中では淸閑なんか得られないのである。金があればあるで忙しからう。金がなければないで忙しからう。淸閑を得られる得られないは、金の有無よりも、寧ろ各自の心境の問題だと思ふ。」すると淸閑なんか得られないと云つたのは必しも君の說の全部ではない。心境は兎に角金以外に多少の淸閑を與へるのである。これも亦僕には異存はない。僕は君の駁した文の中にも、「淸閑を得る前には先づ金を持たなければならない。或は金を超越しなければならない」とちやんと斷つてある筈である。

しかし中村君は不幸にも淸閑を可能ならしめる心境以外に、淸閑を不可能ならしめる他の原因を認めてゐる。「しかしもつと根本的なことは、社會的環境だと思ふ。電車や自動車や、飛行機の響きを聞き、新聞雜誌の中に埋もれながら、たとへ金があつたところで、昔の人人が浸つた「淸閑」の境地なんか、とても得られるわけがない。」これは中村君のみならず、屢識者の口から出た、山嶽よりも古い誤謬である。古往今來社會的環境などは一度も淸閑を容易にしたことは

ない。二十世紀の中村君は自動車の音を氣にしてゐる。しかし十九世紀のショウペンハウエルは馭者の鞭の音を氣にしてゐる。更に又大昔のホメエロスなどは轔轔たる戰車の音か何かを氣にしてゐたのに違ひない。つまり古人も彼等のゐた時代を一番騷がしいと信じてゐたのである。いや、事實はそれ所ではない。自動車だの電車だの飛行機だのの音は、——或は現代の社會的環境は寧ろ清閑を得る爲の必要條件の一つである。かう云ふ社會的環境の中に人となつた君や僕はかう云ふ社會的環境の外に安住の天地のある訣はない。寂寞も清閑を破壞することは全然喧騷と同じことである。もし譃だと思ふならば、アフリカの森林に拋り出された君や僕を想像して見給へ。勇敢なる君はホッテントットの酋長の王座に登るかも知れない。が、ひと月とたたないうちに不幸なる酋長中村武羅夫の發狂することも亦明らかである。

中村君は更に「それでは清閑の無いやうな現代の生活からは、藝術を望むことは出來ないかと云ふと、私は必しもさうではないと思ふのである。藝術なんか、その內容でも形式でも、どんな時代のどんな境地からでも生れるやうに、流通自在のものである。（中略）時代時代に依つてどしどし變つて行つて、一向差支へないのである」と云つてゐる。藝術は御裁可に及ばずとも、變遷してしまふのに違ひない。その點は君に同感である。が、同感であると云ふ意味は必しも各時代の藝術を、いづれもその時代の藝術であるから、平等に認めると云ふ意味ではない。レオナルド・

ダ・ヴィンチの作品は十五世紀の伊太利の藝術である、未來派の畫家の作品は二十世紀の伊太利の藝術である。しかしどちらも同樣に尊敬するなどと云ふことは、――これは勿論斷らずとも、當然中村君も同感であらう。

しかし又君はかう云つてゐる。「それと同じやうに、隨筆だつて、やつぱり「枕の草紙」とか「つれづれ草」とか、淸少納言や兼好法師の生きた時代には、ああした隨筆が生れ、また現在の時代には、現在の時代に適應した隨筆の出現するのは已むを得ない。(僕曰、勿論である)夏目漱石の「硝子戶の中」なども、藝術的小品として、隨筆の上乘なるものだと思ふ。(僕曰、頗る僕も同感である)ああ云ふのはなかなか容易に望めるものではない。觀潮樓や、斷腸亭や、漱石や、あれはあれで打ち留めにして置いて、岡榮一郞氏、佐佐木味津三氏などの隨筆でも、それはそれで新らしい時代の隨筆で結構ではないか。」君の言に贊成する爲にはまづ「硝子戶の中」と岡、佐佐木兩氏の隨筆との差を時代の差ばかりにしてしまはなければならぬ。それはまあ日ごろ敬愛する兩氏のことでもあるしするから、時代の差ばかりにしても差支へはない。が、大義の存する所、親を滅するを顧みなければ、必しもさうばかりは云はれぬやうである。況や兩氏の作品にもはるかに及ばない隨筆には如何に君に促されたにもせよ、到底讚辭を奉ることは出來ない。(次手にちよつとつけ加へれば、中村君は古人の隨筆の佳所と君の所謂「古來の風趣」とを同一視してゐるやうであ

る。が、僕の「枕の草紙」を愛するのは「古來の風趣」を愛するのではない。少くとも「古來の風趣」ばかりを愛してゐないのは確かである。）

最後に君は「何うせ隨筆である。そんなに難かしく考へない方が好い。あんまり出たらめは困るけれども、必しも風格高きを要せず、名文であることを要せず、博識なるを要せず、凝ることを要しない。素朴に、天眞爛漫に、おのおのの素質に依つて、見たり、感じたり、考へたりしたことが書いてあれば、それでよろしい」と云つてゐる。それでよろしいには違ひない。しかし問題は中村君の「あんまり出たらめは困るけれども」と云ふ、その「あんまり」に潜んでゐる。「あんまり出たらめ」の困ることは僕も亦君と變りはない。唯君は僕よりも寬容の美德に富んでゐるのである。

なほ次手に枝葉に亙れば、中村君は「近來隨筆の流行漸く盛んならんとするに當つて、隨筆を論ずる者、必ず一方に永井荷風氏や、近松秋江氏を賞揚し、一方に若い人人のそれを嘲笑する傾向がある。（中略）世間が夙に認めてゐることを、尻馬に乘つて、屋上屋を架して見たつて、何の手柄にもならない」と云つてゐる。これも同感と云ふ外はない。就中「若い人人」の中に僕も加へてくれるならば、一層同感することは確かである。

しかし君の「隨筆の流行といふことを、人人にはつきり意識させたのは、中戸川吉二氏の始めた、

雜誌「隨筆」の發刊が機緣になつて居ると思ふ。(中略)しかし隨筆と云ふものが、芥川氏や、その他の諸氏の定義して居るやうに難かしいものだとすると、(中略)到底隨筆專門の雜誌の發刊なんか、思ひも及ばないことになる」と云ふのは聊か矯激の言である。雜誌「隨筆」は必しも理想的隨筆ばかり掲載せずとも好い。現に君の主宰する雜誌「新潮」を讀んで見給へ。時には多少の舊潮をも掲載してゐることは事實である。

中村武羅夫君

僕は大體君の文に答へ盡したと信じてゐる。が、もう一言つけ加へれば、僕の隨筆を論じた文も理路整然としてゐた次第ではない。僕は「淸閑を得る前にはまづ金を持たなければならない。或は金を超越しなければならない。これはどちらも絶望である」と云つた。ではなぜどちらも絶望であるか? これは僕の厭世主義の「かも知れない」を「である」と云ひ切らせたのである。君は僕を憐んだのか、不幸にもこの虛を衝かなかつた。論敵に憐まれる不愉快は夙に君も知つてゐる筈である。もし君との論戰の中に少しでも敵意を感じたとすれば、この點だけは實に業腹だつた。

以上。

二

新潮二月號所載藤森淳三氏の文（宇野浩二氏の作と人とに關する）によれば、宇野氏は當初輕蔑してゐた里見弴氏や芥川龍之介に、色目を使ふやうになつたさうである。が、里見氏は姑く問はず、事の僕に關する限り、藤森氏の言は當つてゐない。宇野氏も色目を使つたかも知れぬが、僕も又盛に色目を使つた。いや、僕自身の感じを云へば、寧ろ色目を使つたのは僕ばかりのやうにも思はれるのである。

藤森氏の文は大家たる宇野氏に何の痛痒も與へぬであらう。だから僕は宇野氏の爲にこの文を艸する必要を見ない。

しかし新らしい觀念や人に色目も使はぬと云ふことは退屈そのものの證據である。同時に又僕の恥づるところである。すると色目を使つたと云ふ、常に潑剌たる生活力の證據は宇野氏の獨占に委すべきではない。僕も亦分け前に與るべきである。或は僕一人に與へらるべきである。然るに偏頗なる藤森氏は宇野氏にのみかう云ふ名譽を與へた。如何に脫俗した僕と雖も、嫉妬せざるを得ない所以である。

かたがた僕は小閑を幸ひ、色目の辯を艸することとした。

（大正十三年四月）

正岡子規

×

北原さん。

「アルス新聞」に子規のことを書けと云ふ仰せは確に拜誦しました。子規のことは仰せを受けずとも書きたいと思つてゐるのですが、今は用の多い爲に到底書いてゐる暇はありません。が、何でも書けと云はれるなら、子規に關する夏目先生や大塚先生の談片を紹介しませう。これは子規を愛する人人には間に合せの子規論を聞かせられるよりも興味のあることと思ひますから。

×

「墨汁一滴」だか「病牀六尺」だかどちらだかはつきり覺えてゐません。しかし子規はどちらかの中に夏目先生と散歩に出たら、先生の稻を知らないのに驚いたと云ふことを書いてゐます。或時この稻の話を夏目先生の前へ持ち出すと、先生は「なに、稻は知つてゐた」と云ふのです。では子

規の書いたことは譃だつたのですかと反問すると「あれも譃ぢやないがね」と云ふのです。知らなかつたと云ふのもほんたうなら、知つてゐたと云ふのもほんたうと云ふのはどうも少し可笑しいでせう。が、先生自身の説明によると、「僕も稻から米のとれる位のことはとうの昔に知つてゐたさ。それから田圃に生える稻も度たび見たことはあるのだがね。唯その田圃に生えてゐる稻は米のとれる稻だと云ふことを發見することが出來なかつたのだ。つまり頭の中にある稻と眼の前にある稻との二つをアイデンティファイすることが出來なかつたのだがね。だから正岡の書いたことは一概に譃とも云はなければ、一概にほんたうとも云はれないさ」！

×

それから又夏目先生の話に子規は先生の俳句や漢詩にいつも批評を加へたさうです。先生は勿論子規の自負心を多少業腹に思つたのでせう。或時英文を作つて見せると――子規はどうしたと思ひますか？ 恬然とその上にかう書いたさうです。――ヴェリイ・グッド！

×

これは大塚先生の話です。先生は歸朝後西洋服と日本服との美醜を比較した講演か何かしたさ

うです。すると直接先生から聞いたかそれとも講演の筆記を讀んだか、兎に角その說を知つた子規は大塚先生にかう云つたさうです。――

「君は人間の立つてゐる時の服裝の美醜ばかり論じてゐる。坐つてゐる時の服裝の美醜も幷せて考へて見なければいかん。」わたしのこの話を聞いたのは大塚先生の美學の講義に出席してゐた時のことですが、先生はにやにや笑ひながら「それも後に考へて見ると、子規はあの通り寢てゐたのですから、坐つた人間ばかり見てゐたでせうし、わたしは又外國にゐたのですから、坐らない人間ばかり見てゐましたし」と御尤もな註釋をもつけ加へたものです。

ではこれで御免蒙ります。それからこの間お出になつた方にもちよつと申し上げて置いたのですが、どうか「子規全集」の豫約者の中にわたしの名前を加へて置いて下さい。以上。

（大正十三年四月）

案頭の書

一　古今實物語

一

大阪の畫工北瑢の著はせる古今實物語と云ふ書あり。前後四卷、作者の筆に成れる插畫を交ふ。格別稀覯書にはあらざれども、聊か風變りの趣あれば、そのあらましを紹介すべし。

古今實物語は奇談二十一篇を收む。その又奇談は怪談めきたれども、實は少しも怪談ならず。たとへば「幽靈二月堂の牛王をおそるる事」を見よ。

「今西村に兵右衛門と云へる有徳なる百姓ありけるが、かの家にめし使ふ女、みめかたち人にすぐれ、心ざまもやさしかりければ、主の兵右衛門おりおり忍びかよひける。此主が女房、妬ふかき者なるが、此事をもれ聞きて瞋恚のほむらに胸をこがし、奴をひそかにまねき、『かの女を殺すべし、よく仕了せなば金銀あまたとらすべし』と云ひければ、この男も驚きしが、元來慾心ふ

かき者なれば、心安く受合ひける。(中略)下女(中略)何心なくあぜづたひに行く向うの方、すすきのかげより思ひがけなく、下男横だきにして池中へなげ入れける。(中略)

「日も西山にかたむき、折ふししよぼ〳〵雨のふるをいとはず、夜歩きをたのしみにうでこきする男、曽我宮へ日參。此所を通りけるに、池の中より『もし〳〵』と呼びかくる。誰ならんと立ちとまれば、いぜんの女池の中よりによつと出で、『男と見かけ賴み申し度き事あり』と云はせもはてず、狐狸のしはざか、人にこそより目にもの見せんと腕まくりして立ちかかれば、『いやいやさやうの者にあらず。我は今西村の兵右衞門に奉公致すものなるが、しかじかのことにてむなしく成る。あまりになさけなきしかたゆへ、怨みをなさんと一念此身をはなれず今宵かの家にゆかんと思へど主つねづね觀音を信じ、門戸に二月堂の牛王を押し置きけるゆゑ、死靈の近づくことかなはず(中略)牛王をとりのけたまはらば、生々世々御恩』と、世にくるしげにたのみける。

「かのもの不敵のものなれば(中略)そのところをしへたまへ。のぞみをかなへまゐらせんと、あとにつきていそぎゆく。ほどなく兵右衞門が宅になれば、女の指圖にまかせ、何かはしらず守り札ひきまくり捨てければ、女はよろこび戸をひらき、家へ入るよと見えしが臥してゐたる女房ののどにくひつき、難なくいのちをとりて、おもてをさして逃げ出でける。(中略)

「女走りいでゝ(中略)此上ながらとてものことにいづくへなりと連れゆきてたまはれと、背につ

きはなれぬうち、家内にわかにさわぎ立ち、やれ何者のしわざなるぞ、提灯松明と、上を下へとかへすにぞ、以前の男も心ならず足にまかせて逃げゆきしが、思はずもわが家にかへり、(中略)ひとり住みの身なれば、誰れとがむるもののもなけれど、幽靈を連れかへりそゞろに氣味わるく、「のふ／＼のぞみはかなひし上は、いづかたへもゆきたまへ、(中略)」と、心のうちに念佛をとなへけるこそをかしけれ。

「幽靈もしばしはさしうつむきてゐたりしが、(中略)怨めしと思ふかたきをかみころし、一念散ずるときは泉下へもゆくべきに、いまだ此土にとどまることのふしんさよと心をつけて見るに、さして常にかはることもなし。(中略)それより一つ二つとはなし合ふに、いよ／＼幽靈にあらざるにきはまりける。(中略)男も定まる妻もなければと、つひ談合なりてそこを立ちのき、大阪にしるべありてひきこしける。兵右衛門がかたにはかゝることゝは露しらず、本妻と下女が修羅の苦患をたすけんと御出家がたの金儲けとなりけるとなり。」

この話は珍しき話にあらず。鈴木正三の同一の怪談を發見し得べし。唯北琛はこの話に現實主義的なる解釋を加へ、超自然を自然に飜譯したり。そはこの話に止らず、安珍淸姬の話を飜譯したる「紀州日高の女山伏を殺す事」も然り、葛の葉の話を飜譯したる、「畜類人と契り男子を生む事」も然り。鐵輪の話を飜譯したる「妬女貴布禰明神に祈る事」も然り。殊に最後の一篇は嫉妬の

鬼にならんと欲せる女、「こは有がたきおつげかな。わが願成就とよろこび、其まま川へとび入りける」も、「ころしも霜月下旬の事なれば、（中略）四方は白たへの雪にうづみ、川風はげしくして、身體氷にとぢければ、手足もこごへ、すでに息絶へんとせし時、」いつしか姑心を忘れしと云ふ、誰かこの殘酷なる現實主義者の諧謔に失笑一番せざるものあらん。

二

更に又「孝子黄金の釜を掘り出し娘の事」を見よ。

「三八といへる百姓は一人の母につかへて、至孝ならぶものなかりける。或年の霜月下旬の頃、母筍を食し度由のぞみける。もとより貧しき身なれども、母の好みにまかせ、朝夕の食事をととのへすすむといへ共この筍はこまりはてけるが、（中略）蓑笠ひきかづき、二三丁ほど有所の、藪を心當に行ける。積る朽葉につもる雪、かきのけ／＼さがせども、（中略）ああ天我をほろぼすかと泪と雪に袖をぬらし、是非なく／＼も歸る道筋、細からげの小桶壹つ、何ならんと取上げ見れば、孝子三八に賜ると書付はなけれ共、まづ蓋をひらけば、内よりによつと鹽竹の子、金もらうたよりうれしく、（中略）女房にかくこしらすれば、同じ心の姑思ひ、手ばやに鹽だし鰹かき、即時に羹となしてあたへける。其味生なるにかはる事なく、母もよろこび大方ならず、いか成人のこ

こに落せしや、是又壹つのふしぎ也。

「しかるにかほど孝心厚き者なれ共、拵げばかせぐほど貧しく成り、次第〳〵に家をとろへ、今は朝夕のけぶりさへたえ〴〵に成りければ、三八女房に云ふやう、(中略)ふたりが中にまうけし娘ことし十五まで育てぬれ共、(中略)かれを都の方へつれ行き、勤奉公とやらんをさせ、給銀にて一拵して見んと思ふはいかにと尋ぬるにぞ、わらはも疾くよりさやうには思ひ候へ共、(中略)と答へける。(中略)三八は身ごしらへして、娘うちつれ出でにける。名にしおふ難波の大湊、先此所へと心ざし、少しのしるべをたづね、それより茶屋奉公にいだしける。(中略)扨此娘、(中略)つとめに出る其日より、富豪の大臣かかり、早速に身うけして、三八夫婦母おやも大阪へ引きとり、有りしにかはる暮と成り、三八夏は蚊帳の代りにせし身を腰元共に床を扇がせ、女房は又姑にあたへし乳房を虎屋が羊羹にしかへ、氷から鯉も古めかしと、水晶の水舟に朝鮮金魚を泳かせて樂しみ、是至孝のいたす所なり。」

天は孝子に幸福を與へず。孝子に幸福を與へしものは何人かの遺失せる鹽竹の子のみ。或は身を賣れる一人娘のみ。作者の俗言を冷笑するも亦悪辣を極めたりと云ふべし。予はこの皮肉なる現實主義に多少の同情を有するものなり。唯唯作者の論理的頭腦は殘念にも餘り尚銳ならず。「餓鬼聖靈會を論ずる事」の如き、「寺僧病人問答の事」の如き、或は又「佛者と儒者渡唐大神を論ずる

事」の如き、論理の筆を弄したるものは如何に贔屓眼に見るにせよ、概ね床屋の親方の人生觀を講釋すると五十歩百歩の間にあるが如し。因に云ふ。「古今實物語」は寶暦二年正月出板、土閒然の漢文の序あり。書肆は大坂南本町一丁目村井喜太郎、「古今百物語」、「當世百物語」號と同年の出板なりしも一興ならん乎。

二　魂膽色遊懷男

「魂膽色遊懷男」はかの「豆男江戸見物」のプロトタイプなり。予の家に藏するは卷一、卷四の二冊なれども、大豆右衛門の冒險にはラブレエを想はしむるものなきにあらず。

大豆右衛門は洛東山科の人なり。その母「鹽の長次にはあらねど、夢中に馬を呑むと見て、懷胎したる子なるゆへ」大豆右衛門と稱せしと云へば、この名の由つて來る所は必しも多言するを要せざるべし。大豆右衛門、二十三歳の時、「さねかづら取りて京の歴々の女中方へ賣べしと逢坂山にわけ登り」しが、偶玉貌の仙女と逢ひ、一粒の金丹を服するを得たり。「ありがたくおし頂きてのむに、忽ち其身雪霜の消ゆる如くみぢみぢとなつて、芥子人形の如くになれり。」これは人倫の交りを不可能ならしむるに似たれども、仙女の説明する所によれば、「色里にても又は町家の歴々

の奥がたにても、心のままにあはれるなり。(中略)汝があふて見度と思ふ女のねんごろにする男の懐の中に入れば、その男の魂ぬけ出、汝假に其男に入れかはりて、相手の女を自由にする事、又なき樂しみにあらずや」と云へば、頗る便利なる轉身と云ふべし。爾來大豆右衛門、色を天下に漁すと雖も、迷宮に似たる人生は容易に幸福を與ふるものにあらず。たとへば巻一の「姉の異見耳痛櫻木枕」を見よ。

「臺所より飛びあがり、奥の方を心がけ、襖のすこし明きたるあひよりそつと下りて大座敷へ出、(中略)唐更紗の暖簾あげて、長四疊の間を過ぎ、一だんたかき小座敷あつて、有明の火明らかに、是ぞ此家の旦那殿の寢所ならめと腰障子をすこしつきやぶりて、是より入つて見れば夫婦枕をならべて、前後も知らず連れ節の鼾に、(中略)先内儀の顔をさし覗いて見れば、其美しさ此器量で三十ばかりに見ゆれば、卅五六でもあるべし。(中略)男は三十一二に見えて、成程強さうな生れつき。扨は此女房の美しいに思ひつきて、我より二つ四つも年のいたをもたれしか、但入り聟か、(中略)と亭主が懐にはいればそのまま魂入れ替り、(中略)さあ夢さましてもてなしやと云へば、此女房目をさまし、肝のつぶれた顔して、あたりへ我をつきのけ、起きかへつて、コレ氣ちがひ、爰を内ぢやと思ひやるか、夜の更けぬ先に往にや〳〵と云ふに、面白うもない歌留多をうつてゐて夜を更かし、今からは往なれまい、旦那殿も大津祭に行かれて留守ぢやほどに、泊つてなりと

行きやと、兄弟の忝けなさは何の遠慮もなく一所に寝るを、姉をとらまへ輕忽な、こりや畜生の行儀か。こちや畜生になる事は厭ぢやいの。(中略)多聞悪いと疊を叩いて腹を立てる。扨は南無さん姉ぢやさうた、是は粗相千萬、(中略)と後先揃はぬ事を云ふて、又本の夜着へこそこそはいつて、寝るより早く其處を立ち退き、(下略)」(この項未完)

(大正十三年六月)

リチャアド・バアトン譯「一千一夜物語」に就いて

一

リチャアド・バアトン(Richard Burton)の譯した「一千一夜物語」――アラビヤン・ナイツは、今日まで出てゐる英譯中で先づ一番完全に近いものであるとせられてゐる。勿論、バアトン以前に出た譯本も數あつて、一々擧げる遑も無い程であるが、先づ「一千一夜物語」を歐羅巴に紹介した最初の譯本は一七〇四年に出たアントアン・ガラン(Antoine Galland)教授の佛譯本である。これは勿論完譯ではない。ただ甚だ愛誦するに足る抄譯本と云ふ位のものである。ガラン以後にも手近い所でフォスタア(Foster)だとかブッセイ(Bussey)だとかいろいろ譯本の無い譯ではない。併し何れも譯語や文體は佛蘭西臭味を漂はせた、まづ少年讀物と云ふ水準を越えないものばかりである。

ガラン教授から一世紀の後――即ち一八〇〇年以後の主なる譯者を列擧して見ると、大體下の通りである。

1. Dr. Jonathan Scott. (1800)
2. Edward Wortley. (1811)
3. Henry Torrens. (1838)
4. Edward William Lane. (1839)
5. John Pane. (1885)

トレンズの譯本は、在來のもののやうに英佛臭味を帶びないもので、其の點では一歩を進めたものであるが、譯者が十分原語に通曉してゐなかつたし、殊に埃及やシリヤの方言などを全く知らなかつた爲に、憾むらくは所期の點に達し得なかつた。而も十分の一位で中絶して居るのは、甚だ惜むべきことである。

レエンの譯本――日本へは最も廣く流布してゐる。殊にボオン(Bohn)叢書の二卷ものは、本郷や神田の古本屋でよく見受けられる――は底本としたバラク(Bulak)版が元々省略の多いものであり、其の上に二百ある話の中から半分の百だけを譯出したもので、隨つて殘りの百話の中に却つて面白いものが有ると云ふやうな訣で、お上品に出來過ぎて了つて、應接間向きの趣向は好いとしても、慊らないこと夥しい。お負けに、レエンは一夜一夜を章別にした上に、或章は註の中に追入れて了つたり、詩を散文に譯出したり又は全然捨てて了つたりして居るし、兒戲に類

する誤譯も甚だ多いと云ふ次第。

次にペエン――フランソア・ヴィヨン(François Villon)の詩を英譯した――の「一千一夜物語」の譯は、舊來のものに比べると格段に優れてゐる。話の數もガラン譯の四倍あり其の他のもの三倍はあるが、手の屆かぬ所が無いでもない。しかし兎も角好譯であるが、私版を五百部刊行しただけで、遂に希覯書の中に這入つて了つた。ただ一つ特記すべきことは、卷頭にバアトンへの獻詞が附いてゐることである。

バアトンの譯本も、一千部の限定出版で、容易に手に入り難い。出版當時十ポンドであつたものが、今日では三十ポンド内外の市價を唱へられてゐるのは、「一千一夜物語」愛好者の爲に聊か氣の毒である。尤も此のバアトン譯の剽竊版(Pirate Edition)が亞米利加で幾つも出來てゐるが、中身は何うだらうか。

バアトンの譯本の表題は左の通り。

A PLAIN AND LITERAL TRANSLATION OF THE ARABIAN NIGHTS ENTERTAINMENTS, NOW ENTITLED THE BOOK OF THE THOUSAND NIGHTS AND A NIGHT WITH INTRODUCTION EXPLANATORY NOTES ON THE MANNERS AND CUSTOMS OF MOSLEM MEN AND A TERMINAL ESSAY UPON THE

巻數は補遺共十八冊で、出版所はバアトン倶樂部、一八八五年から一八八八年へかけて刊行されてゐる。

譯者バアトン並びにバアトン譯本の次第は次々に話すこととしませう。

二

譯者バアトンは東方諸國を跋渉した英吉利の陸軍大尉であるが、本の方を中心にしてお話すると、バアトンの譯本の成立ちは、第一巻の「譯者の序言」と第十一巻の「一千一夜物語の傳記並に其の批評者の批評」とに收められて居る。

抑もバアトンが此の飜譯を思ひ立つたのは、アデン在留の醫師ジョン・スタインホイザアと一緒に、メヂヤ、メッカを旅行した時のことで、バアトンが第一巻を此のスタインホイザアに獻じてゐるのを以て視ても、二人の道中話がどんなであつたかは分る。

其の旅行は一八五二年の冬のことで、其の途中で、バアトンはスタインホイザアと亞剌比亞のことをいろいろ話してゐる中に、おのづと話題が「一千一夜物語」に移つて行つて、とうとう二人の口から、「一千一夜物語」は子供の間に知れ渡つてゐるにも拘はらず本當の値打が僅かに亞剌比

亞語學者にしか認められてゐないと云ふ感慨が洩れて出た。それから話が一歩進んで、何うしても完全な飜譯が出したいと云ふことに纏まり、スタインホイザアが散文を、バアトンが韻文を譯出する筈に決して、別れた。

それから兩人は互に文通して、勵まし合つてゐたが、幾くも無くスタインホイザアが瑞西のベルンで卒中で斃れて了つた。スタインホイザアの稿本は散逸して、バアトンの手に入つたものは僅かであつた。

その後バアトンは、西部亞弗利加や南亞米利加に客寓中、獨り稿を繼いで行つた。其の間に於ける彼の胸中は、「他人目には何うか知らないけれども、自分では何よりの慰藉と滿足との泉であつた」と云ふ彼自身の言葉が盡して居る。

斯くて稿を畢つて、一八七九年の春から淸書に取掛つて行つたが、一八八二年の冬、或雜誌に、ジョン・ペインの譯本が刊行されると云ふ豫告が出た。バアトンが之を知つたのは、恰も西部亞弗利加の黃金海岸へ遠征しようと云ふ間際であつた。乃でペインに「小生も貴君と同樣の事業を企て居り候へども、貴君の旣に之を完成されたるは結構千萬の儀にて、先鞭の功は小生より御讓り可申云々」と云ふ手紙を送つた。その中にペインの譯本が出た。で、バアトンは一時中止した。

バアトンが又續けて言つて居る。「東部亞弗利加のゼイラに一箇月間滯在してゐた時にも、ソマ

リイを横斷の陣中でも、此の「一千一夜」が何の位自分を慰めて呉れたか解らない」と。

然らば此のバアトンの譯本は、歐洲の天地を遠く離れて、而も瘴煙蠻雨の中で生れたもので、恰もタイチに赴いたゴオガンの繪と好對照である。

一八八四年に、バアトンはトリエストに滯在中、最初の二卷を脫稿した。

茲で問題は印刷部數である。或學者が曰ふ、「百五十部乃至二百五十部で宜しからう」と。其の學者と謂ふのは、本文を十六萬部も刷つて、六シルリングの廉價本より五十ギニイの高價本まで賣り盡した男である。又或出版業者は「五百部がよい」と云つた。ただ素人の一友人だ「二千から三千がよい」と勸めた。バアトンも迷つた末、一千部に決めた。

バアトンはそれから知人未知人を問はず、買ふらしい人の表を作つて、廣告を配つた。其の要綱は、全十冊、一冊一ギニイ、各冊とも代金は本と引換へのこと、廉價版は發行しない、一千部限り印行、十八箇月内に完結の豫定、と云ふ規定であつた。廣告配布數は二萬四千で、その費用は百二十六ポンド掛つた。返事の來たのは八百通。

翌年バアトンは英國に歸つて着々と事を進めてゐると、八百の豫約はとうとう二千に殖えた。中には「差當り第一卷を見本として送られ度、氣に入り候はば引續いて願上候」といふ素見客もあつた。

之に送つたバアトンの返事は、「先づ十ギニイ送金有之度、その上にて一冊御申込になるとも全十冊御申込になるとも御勝手に候」と。其れから取次業者連中は、安く踏倒さうと思つて種々畫策をやつた。又、本を受取つても金を拂はない連中も廿人位あつた。

バアトンは最初から取次業者を眼中に置かず、危險を冒して自分で刊行しようと企てたのである。知名の文學者なり又文學團體の協賛を希望したけれども、誰れ一人應じなかつた。バアトンの計畫を嘲笑した「印刷タイムス」の如きもあつた。「バ氏の此の事業に關係して居る筈の某々の氏名が譯本に載つて居らぬ。印刷者の手落ちならば正に罰金を課すべきである。又「一千一夜物語」の完譯は風俗上許し難い。縱令ひ私版であるとしても、公衆道徳を傷ける處ある以上はバ氏に罰金を課するが至當だ」と云ふやうな調子であつた。バアトンは此の挑戰に應じて「出版者は著者自身である。斯かる類の書を出版業者の手に移すことは不快の至りで、著者自身の手に依つて、東洋語學者並びに考古學者の爲に出版するのである」と發表した。

三

バアトンの「一千一夜物語」十七卷の中、七卷は補遺である。その第十卷の終りに「Terminal Essay が附いてゐて、此の物語の起源、亞剌比亞の風俗、歐羅巴に於ける譯本等が精しく討究さ

れてゐる。殊に亞剌比亞並びに東方諸國の風俗に關する論文は、學術上の貴い研究資料であると共に、專門家ならぬ者にも頗る興趣あるものである。

バアトンは本文を、一話一話に分けないで、原文通り一夜一夜に別けてゐる。又、韻文は散文とせずに韻文に譯出してゐる。之を以て觀てもバアトンが如何に原文に忠實であつたかは推察出來ると思ふ。

例へば、亞剌比亞人の形容を其儘飜譯して居るのに非常に面白いものがある。男女の抱擁を「釦が釦の孔に嵌まるやうに一緒になつた」と敍してある如き其の一つである。又、バクダッドの宮室庭園を寫した文章の如きは、微に入り細を穿つて居つて、光景見るが如きものがある。第三十六夜(第二卷)の話にある Harunal-Rashid の庭園の描寫などは其の好例である。

バアトンは又基督教的道德に煩はされずして、大膽率直に東洋的享樂主義を是認した人で、隨つて其の譯本も在來の英譯「一千一夜物語」とは甚だ趣を異にしてゐる。例へば、第二百十五夜(第三卷)に Budur 女王の歌ふ詩に次ぎの如きものがある。

The penis smooth and round was made with anus best to match it,
Had it been made for cunnus' sake it had been formed like hatchet !

併し槪して言ふと、下がかつた事も、原文が無邪氣に堂々と言ひ放つてゐるのを其儘譯出して

あるから、近代の小説中に現はれる Love scene よりも婬褻の感を與へない。
脚註が亦頗る細密なるものである。而も其の註が尋常一様のものでなく、バアトン一流のものである。單に語句の上のみでなく、事實上の研究にも及んでゐる。例へば Shahriyar 王の妃が黒人の男を情夫にする條の註を見ると、亞剌比亞の女が好んで黒人の男子を迎へるのは他ではない。亞剌比亞人の penis は歐羅巴人のよりも短い。然るに黒人のは歐羅巴人のよりも更に長く、且つ黒人のは膨脹律が少なくて duration が長い。其の爲めに亞剌比亞女が黒人を情夫に持つのであるといふ類である。現にバアトンが計測した黒人の penis は平均長さ何吋だ抔と註してある。（未完）

（大正十三年七月）

（談話）

蒐書

元來僕は何ごとにも執着の乏しい性質である。就中蒐集と云ふことには小學校に通つてゐた頃、昆蟲の標本を集めた以外に未嘗熱中したことはない。從つてマッチの商標は勿論、油壺でも、看板でも、乃至古今の名家の書畫でも必死に集めてゐる諸君子には敬意に近いものを感じてゐる。時には多少の嫌惡を交へた驚嘆に近いものを感じてゐる。

書籍も亦例外ではない。僕も亦商賣がら多少の書籍を藏してゐる。が、それも集めたのではない。寧ろおのづから集まつたのである。もし集めた書籍であるとすれば、其處に何か全體に通ずる脈絡を具へてゐなければならぬ。しかし僕の架上の書籍は集まつた書籍である證據に、頗る糅然紛然としてゐる。脈絡などと云ふものは藥にしたくもない。

では全然無茶苦茶かと云ふと、必しも亦さうではない。少くとも僕の架上の書籍は僕の好みを示してゐる。或はいろいろの時期に於ける好みの變遷を示してゐる。その點では——僕と云ふも

のを示してゐる點では僕の作品と選ぶ所はない。僕は以前架上の書籍を買ひ入れた年月の順に記し、その書籍の持ち主の一生の變化を暗示する小品を書いて見ようかと思つた。が、西洋人の書いたものに餘り似寄りの話を見た爲、とうとうそれなりになつてしまつた。それなりになつてしまつたのは勿論天下の爲に幸福である。しかし架上の書籍なるものの鏡のやうに持ち主を映すことは兎に角何か懷しい、さもなければ何か氣味の惡い事實であると云はなければならぬ。(この故に賣り立てに「さしもの」をするのは他人の作品に筆を入れるのと同じ位道德的に不都合である。)蒐集家のみの知る喜びや悲しみはかう云ふ僕には惠まれてゐない。何しろ本屋をひやかしてゐたり、或はカタロオグを讀んでゐたりする内に目にとまつたものを買ふのであるから、感激も頗る薄い訣である。大金は勿論出したことはない。

是でも本道樂の話になるかどうか、其邊は僕にも疑問である。

(大正十三年七月)

日本小說の支那譯

上海の商務印書館から世界叢書と云ふものが出てゐる。その一つが「現代日本小說集」である。これに輯めてあるのは國木田獨步、夏目漱石、森鷗外、鈴木三重吉、武者小路實篤、有島武郎、長與善郎、志賀直哉、千家元麿、江馬修、江口渙、菊池寛、佐藤春夫、加藤武雄、僕、この十五人、三十篇である。このうち、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、江口渙、菊池寛の五人のは、魯迅君の譯で、その外は皆、周作人君の譯である。そして、胡適校としてある。

千九百二十二年五月於北京、——と云ふ周作人君の序文によれば、「日本の小說は、二十世紀に於て驚異すべき發達をし、國民的文學の精華となつたばかりでなく、幾多の有名な著作は又、世界的價値を持つやうになつた。その點は歐洲現代の文學と比較するに足る位であるが、唯文字の關係によつて、日本の小說を飜譯することは、歐洲人には甚だ容易でない。その爲めにあまり世界に知られずにゐる。しかし支那は日本と種々の關係があり、支那人は日本を知る必要もあれば、

亦、日本を知る便利もある。そこでこの飜譯集を出した」と云ふことである。猶又「これ等の小說を選擇した標準は、日本の現代の小說を紹介すると云ふ點にあるけれども、十五人の作家を選んだのは、大半個人的趣味によつた」とも云つてゐる。も一つ次手に紹介すれば「この外にもまだ、島崎藤村、里見弴、谷崎潤一郎、加能作次郎、佐藤俊子等の如き幾多の作家があつて、本來選に入るべきであるけれども、時間と能力との關係によつてこの集に收めることの出來なかつたのは甚だ遺憾である」とも云つてゐる。

飜譯は、僕自身の作品に徵すれば、中々正確に譯してある。その上、地名、官名、道具の名等には、ちやんと註釋をほどこしてある。

例へば、「羅生門」の中では、

帶刀——古時的官、司追捕、糺彈、裁判、訴訟等事。

平安朝——西曆七九四年以後約四百年間。

等の類である。尤もこの註には、多少妥當を缺いたものもないではない。

例へば、加藤武雄君の「鄉愁」のうちに、デコ坊(凸哥兒)を註して、

Dekkobō——原意是前額凸出的小兒、後來只當作一種親愛的諢名。

と云ふのは好い。しかし「山の手」を註して、

山手――原意是近山的地方、此處却專指東京本郷一帶高地、……云々

と云ふのは少し大雜把である。牛込の矢來は、本郷一帶の高地にははいらない筈である。けれどもこれは、白壁の微瑕を數へる爲めにあげたのではない。たとひ妥當を缺いたとしても、これ程僅かしか缺かないと言ふことを示す爲めにあげたのである。

卷頭に周作人君の序文のあることは既に述べたが、卷末には各作家に關する短かい紹介を附錄として添へてある。これも先づ要領を得てゐると言はなければならぬ。例へば、武者小路實篤は――千八百八十五年に生れ、「白樺派」の中心人物となり、近來日向に「新しき村」を建設し、耕讀主義を實行す。彼の著作は單純眞率、技巧を施さず、自ら清新の氣を具ふ。極めて人を感動せしむる力量あり。彼は「彼が三十の時」(千九百十五年)の序の中に、嘗つてかう言つてゐる。下略。

等の類である。

これを現代の日本に行はれる西洋文藝の飜譯書に比べてもあまり遜色はないのに違ひない。もつと詳しく紹介すれば面白いかも知れないが、少し面倒くさくなつたからこれだけに止めることにする。

(大正十四年三月)

日本の女

一

ここに面白い本がある。本の名は「ジャパン」で、發行されたのは一八五二年である。著者はチヤアレス・マックファアレエンといひ、日本に來たことはないが、頗る日本に興味をもつた人である。少くとも、興味をもつたと稱する人である。「ジャパン」は、この人が、ラテン、ポルトガル、スペイン、イタリイ、フランス、オランダ、ドイツ、イギリス等の文獻から、日本に關する記事をあつめ、それを集大成したものである。それ等の文獻は、一五六〇年から一八五〇年の間のものをあつめたものであるが、著者がかういふ題目、即ち、日本に興味をもち出したのは、兵站總監ジエエムス・ドラマンドといふ人のおかげだつたらしい。なんでも、このドラマンドなる人は、若い時に實業に從事して、イギリス人であるにも拘らず、オランダ人といふ名前の下に日本にも數年住んでゐた。著者マックファアレエンは、ブライトンで、このドラマンドに會ひ、その、日本に關する書物の蒐集を見せて貰つた。ドラマンドは、著者にそれ等を貸したばかりでなく、

いろいろ、日本の事情などを話して聞かした。著者はそれ等の談話をも參照して、この「ジャパン」といふ本を書きあげたのである。猶、ついでにつけ加へれば、このドラマンドといふ人は、名高い小說家スモレットの曾姪を細君にしてゐて、そのまた細君は、甚だ文學好きだつたといふことである。

この本はかういふ因緣の下に出來あがつたものであるから到底實際日本の土を踏んだ旅行家の紀行ほど正確ではない。現に銅版の插繪なども朝鮮の風俗を日本の風俗として、すまして入れてゐるくらゐである。しかしそれだけに今日のわれわれから見ると一種の興味のない訣ではない。例へば日本の皇帝は煙管を澤山もつてゐて、毎日違つた煙管で煙草をのむなどといふことを眞面目に記載してゐるのは頗る御愛嬌といはなければならぬ。この本の中に日本の女を紹介し且つ論じた一章がある。それを今ざつと紹介して見ようと思ふ。

女が社會的にどういふ地位を占めてゐるかといふことは、著者マックファレンによれば、文明の高低をはかる眞の尺度であるが、日本の女の社會的地位は、如何なる他の東洋諸國よりも、數等高い。日本の女は、他の東洋諸國の女のやうに、幽閉同樣の憂き目を見てゐない。相當の社會的待遇を受けてゐるのみならず、その父や夫の遊樂にあづかることも出來るものである。妻の貞操や處女の童貞の如きは、全然、彼等の名譽の觀念に一任されてゐるが、不貞の妻などといふ

ものは、殆んど一人もゐないといつてもいい。尤もこれは、貞操を破つたが最後、直ちに死を受けるといふ事實のために、一層嚴守されてゐることは事實である。

日本では、一番身分の高いものから、一番身分の低いものに至るまで、誰でも必ず學校教育を受ける。傳ふるところによれば、日本國中の學校の數は、世界中のどの國の學校の數よりも多いといふことである。且つまた、農夫並びに貧民さへ、少くとも讀むことは出來るといふことである。從つて、女の教育も男の教育と同じやうに完備してゐる。現に、日本で非常に有名な詩人、歴史家、その他の著述家等のうちには、女も非常に多いくらゐである。

金持ちや貴族の間では、男は槪して、女ほど貞操を守らない。しかし、母や妻である女が、純潔に生涯を送ることは最も確實である。それは、日本に傳へられる種々の物語に徴しても、また、大勢の旅行家の見聞した事實に徴しても、疑ふ餘地はないといはなければならぬ。

日本の女は、何よりも、不名譽を恥ぢるものである。屈辱を被つたために自殺した女の話は、枚擧し難いといつてもよい。下の物語は、かういふ事實を立證するに足るものである。——

或る身分のある男が、旅行に出た。その留守にまた、或る貴族が、彼れの(即ち、身分のある男の)妻に横戀慕をした。が、彼れの妻は、その貴族の誘惑に陷らなかつたばかりでなく、さんざん侮辱を加へさへした。しかし、その貴族は暴力を用ひたか、或ひはまた、謀略を用ひたかして、

とにかく、その女の貞操を破つてしまつた。そこへ夫が歸つて來た。彼れの妻はいつものやうに、愛情をもつて夫を迎へた。しかし、その態度の中には、何か、嚴として犯すべからざるところがあつた。夫はその態度を不思議に思つて、いろいろ問ひただして見たけれども、彼れの妻は、どういふ訣か、かう答へるばかりだつた、——「どうか明日まで、何事もおたづね下さいますな。明日になれば私は私の親戚やこの町の重な方々に來て頂いて、その前で、一切の事情を申しあげます。」

さて翌日になると、客は續々として、夫の家へ集まつて來た。その客の中には、彼れの妻をはづかしめた貴族もまた、混つてゐた。客は皆、その家の屋根にある露臺で、饗應を受けた。そのうちに御馳走が濟むと、彼れの妻は立ちあがつて、彼女の被つた屈辱を公にした。のみならず、熱烈に、夫にかういつた。——「私はあなたの妻となる資格を失つたものでございます。どうか私を殺して下さいまし。」

夫をはじめ、そこにゐた客は皆、彼れの妻をなだめ、彼女には何も罪はない、彼女はただその貴族の犠牲になつたばかりである、といつた。彼れの妻は、彼等一同に深い感謝の意を示した。それから、夫の肩にすがつて、胸もさけるほど慟哭した。しかし、突然夫に接吻したと思ふと、その次の瞬間には、夫の手を振りはらひながら露臺の端へ驅けて行くが早いか、遙か下へ身を投

げてしまつた。

けれども、彼れの妻は凌辱を被つたことは公にしても、誰が凌辱を加へたかといふことには、公にしなかつた。そのために、凌辱を加へた貴族は、夫や客の騷いでゐる間にそつと露臺の階段を下つた。そして自殺した彼女の死骸のそばで、武士らしく、立派に切腹した。この切腹といふのは、日本の國民的自殺法であつて、腹の上を、彼れ自身十文字に切つて往生するのである。

「ジヤパン」の著者マツクフアレエンによれば、これは、ランドオルの追憶記といふものにある話だどいふことである。實際、日本にかういふ話があるかどうかは、私にはわからない。ちよつと考へて見たところでは、徳川時代の小說や戲曲の中にも、同じ話は見當らないやうである。或ひは、九州かどこかの田舍に、ほんたうにあつた話かも知れない。けれども、屋根の上の露臺で宴會を開いたり、日本の武士の女房が、御亭主に接吻したりするのは、いかにも西洋人らしくて面白い。尤も、面白いといつて笑つてしまへば簡單であるが、昔の日本人の西洋を傳へたのも、やはり同じくらゐ間違つてゐることを思へばあまりいい氣になつて、西洋人ばかり笑つてゐられぬことは事實である。いや、西洋どころではない。隣國の支那のことを傳へたのでも、このくらゐの間違ひは家常茶飯である。早い話が、近松門左衛門の「國姓爺」の中に描かれてゐる人物や風景を讀んで見れば、やはり、日本とも支那ともつかぬ、甚だ奇妙な代物である。

マツクフアレエンは、この外にもう一つ、如何に日本の女が偉いかを示す話を擧げてゐる。――「チユウヤといふ偉い武士が、彼れの友達のジオシツといふものと共に、皇帝に對する陰謀を企てたことがある、このチユウヤの妻は、才色兼備の女だつた。チユウヤの陰謀は五十年間祕密に計畫された後、とうとう、チユウヤの失策のために、露顯することになつた。そして政府は、チユウヤ並びにジオシツを逮捕せよといふ命令を出した。當時の事情に從へば、少くとも、チユウヤを生捕にすることは、絶對に、政府には必要だつた。そのためには、どうしても、不意打ちを喰はせなければならなかつた。そこで、捕手はチユウヤの門の前で『火事だ、火事だ』といふ聲をあげた。チユウヤは火事を見屆けるために、門の外に走り出した。捕手はそれを襲擊した。しかしチユウヤは、勇敢に戰つて、捕手を二人斬り殺した。けれども、とうとう多勢に無勢で、捕手のために逮捕されてしまつた。チユウヤの妻は、その間に、格鬪の音を聞いて、早くも捕手の向つたことをさとり、夫の重要書類を火の中に投げ込んだ。その書類には、陰謀の一味たる貴族などの名前も載つてゐたのである。チユウヤの妻のおちついてゐたことは、今日でも、日本中の驚嘆の的になつてゐる。そのために女の判斷力並びに決斷力をほめる場合には、チユウヤの妻のやうだといふくらゐである。」

このチユウヤは、勿論、丸橋忠彌であり、ジオシツは由井正雪である。これもマツクフアレエ

ンに從へば、やはり、ランドオルの追憶記に出てゐる話らしい。「ジャパン」の著者マックファアレエンの傳へた日本の女は、殆んどユウトピアの女である。如何に一八六〇年代の日本の女でも、處女や妻の貞操がそれほど立派に保たれたといふことは、信用出來ないのに違ひない。これも、マックファアレエンの馬鹿正直を笑つてしまへばそれだけであるが、外國の風俗人情を傳へる場合には、今日でも多少かういふ喜劇の行はれやすいのは事實である。この間も何かの新聞に何んとか女史が、アメリカの女學生の生活を天使の生活のやうに吹聽してゐたが、あの記事なども、半世紀後のアメリカ人の目に觸れたらば、やはり、マックファアレエンの「ジャパン」と同じやうに、一笑に附せられるに相違ない。

二

サア・ラザフオオド・オルコックの「日本における三年間」は、マックファアレエンの本とくらべると、餘程、日本の眞相を正確に傳へるものである。これは上下二卷で、千八百六十三年、ニユウヨオクのハアバア書肆から出てゐる。插繪も澤山あり、その中にはまた、蕙齋の漫畫などを複製したものも澤山ある。

第一に著者サア・ラザフオオド・オルコックは、マックファアレエンのやうに、机の上で日本を

想像したのではない。この本の標題の示すとほり、三年間日本に住んでゐる。

第二は、サア・オルコックは、マックファレンのやうに無學ではない。相當に學問もあり、殊に、當時流行のミルの哲學などにも通じてゐる。そのために、日本で見聞した種々の事件に對しても、それぞれ、彼れ自身の見解を下してゐる。その見解の中には、今日はわれわれを微笑せしめるものもあるけれども、傾聽すべきもののもないわけではない。これがまた、マックファレンの本などには、全然見られぬ特色である。

サア・オルコックは、徳川幕府の末年に日本に駐劄した、イギリスの特命全權公使である。その日本駐劄中には、井伊大老も櫻田門外で刺客の手に斃れてゐる。西洋人も何人か浪士のために殺されてゐる。

といふと人事のやうに聞えるが、サア・オルコックの住んでゐた品川の東禪寺にも浪士が斬込んで、何人かの死傷を生じた事件もある。その上、サア・オルコックは、富士山へ登つたり、熱海の溫泉へはいつたり、可なり旅行も試みてゐる。かういふ風に、内外共多事の幕末の日本に住み、且つまた、江戸にばかりゐずに方々歩き廻つたのであるから、サア・オルコックの日本紀行の興味の多いのは偶然ではない。

尤も、サア・オルコックの日本紀行は、ロテイやキプリングのそれのやうに、藝術的色彩には

富んでゐない。例へば淺草を描くにしても、ロテイの「日本の秋」の中の淺草のやうに、目のあたりに、黄ばんだ銀杏だの、紅い伽藍だのが浮んで來ないことは事實である。しかし前にもいつたやうに、その見聞した事件に對する見解は、なかなかおもしろい。

例へば、サア・オルコックは、或る田舍家の緣先で、ばあさんが子供に灸をすゑてゐるのを見て、「われわれ人間は、古今を問はず、東西を問はず、架空の幸福を得るために、自ら肉體を苦しめることを好むものである」と嘆息してゐる。また、或る山を越える時に、ふと鶯の聲を聽いて、「鶯の聲はナイチンゲエルの聲に似てゐる。日本の傳說によれば、日本人は鶯に音樂を教へたといふことである。これはもし事實とすれば驚くべきことに違ひない。なぜといへば、日本人は自ら音樂を解しないのだから。」と嘲つてゐる。

これ等は微笑せずにはゐられぬ見解であるが、櫻田門外の變に際して日本人の復讐崇拜を論じ、忠臣藏の芝居などの民衆に與へる影響を論じたあたりは、なかなかおもしろい議論である。が、あまり横道にはいると、本題にはいるに手間取るから、その紹介は後の機會に讓ることにしたい。しかし、その前に「日本における三年間」の大體を紹介するために、サア・オルコックのはじめて長崎へはいつた時の印象を披露すれば、ざつと下のとほりである。——

「雨の降つてゐる中に長崎の港へ船のはいつたのは、六月の四日(千八百五十九年)である。この

港は、もう何度も、日本へ來た旅行家の筆に殘つてゐる。しかし、曇つた空の下に見ても、全然美しさのないわけではない。港へはいるのに從つて、いくつもの島が目の前へ浮んで來る。その島にはまた、繪のやうに美しいのも多い。

「船がずつと灣の中へはいると、長崎の街がむかうに横たはつてゐるのが見える。長崎の街は、幾つも連つた小山の裾にある。そして、木の茂つた小山の原へ、可なり高く匐ひあがつてゐる。右に見えるのは出島である。出島は扇の形をした、低い土地である。それが陸の方へ扇の柄を向けて、海の中へ突き出してゐる。出島には長い、廣い一條の街路が通り、兩側には、ヨオロツパ風の二階家がならんでゐる。見たところは、いかにも小じんまりしてゐる。(中略)

「灣そのものの、第一印象は、頗る、ノオルウエイの峽灣に似てゐる。殊に、ノオルウエイの首府クリスチヤニアにはいるところに似てゐる。尤も峽灣は、長崎の灣より美しい。長崎の灣も小山は水際からすぐに聳え立つて、そのまた小山には、鬱々と松が茂つてゐる。しかし上陸して見ると、植物はノオルウエイよりも遙かに熱帶的である。柘榴だの、柿だの、椰子だの、竹だのもある。がまた、いいいくちなしだの、椿だのも茂つてゐる。あたりまへの齒朶も到る所にある。木蔦も壁にからんでゐる。道ばたには薊も澤山ある。」

まあかういふ調子である。さて、その日本の女を論ずるのを見ると、サア・オルコツクによれ

ば、日本の女の社會的地位とか、男子との關係とかいふものは、古來常に賞讃されてゐる。しかし、實際、その賞讃に値するかどうか、疑はしいといはなければならぬ。私は(サア・オルコック)ここで、日本人が國民として、他の國民よりも不道德かどうかといふ問題にはいるつもりはない。けれども日本では、父が、賣淫のために娘を賣つたり、或ひは雇はせたりしても、法律はこれを罰しないのである。のみならず、それを認可するのである。且つまた、彼等の隣人さへも、全然、彼等を批難しない。かういふ國に健全なる道德的感情が存在するといふことは、私の信じられぬところである。

なるほど、日本には奴隷の制度はない。農奴や奴隷や家畜のやうに賣買される事はない。(尤も、ないといふのは半面の眞理にとどまつてゐる。なぜといへば、日本の娘は一定の年限内といふもの、とにかく法律の定めるところにより、人身賣買を行ふからである。して見ると男や少年も多分賣買されるのに相違ない。)しかし、妾を蓄へる制度が存在する以上、家庭の神聖が保たれぬことは、何人にも見易い道理である。

かういふ國民的罪惡の害毒は、何によつて緩和されるか、それは差當り發見出來ない。しかしその緩和劑の一部は、たしかに支那におけるやうに、子に對する母の權威が非常に強いことにあるやうである。

日本の女は商品同樣に扱はれ、彼等の意思も顧みられず、彼等の女としての權利も顧みられず、夫に賣られるものである。且つまた夫の在世中は、家畜或は奴隷のやうに扱はれるものである。しかし子供に對する絶對の權威は、いやしくも子供に關する限り、母としての日本の女を、男よりも高い位地に据ゑるために、幾分この害毒が緩和されるのである。恐らくはミカドの位にさへ、女が上ることの出來るといふのは、かういふ例の一つであらう。

實際また、女のミカドといふものは、古今に少くはないのである。たしかに日本の女の位置は、家畜や奴隷のやうに賣買されるにも拘らず、存外辛抱の出來る點もないではないらしい。しかしこの點に關しては、まだいろいろ調べて見なければ、はつきりした判斷を下すことは出來ない。また、親子の間の情愛も相當にあるやうである。とにかく日本人には、愛兒的器官も發達してゐるのに違ひない。

サア・オルコツクの日本婦人は、とにかく、マツクフアレエンのそれよりも、正鵠を得てゐる。日本の女の社會的地位は、サア・オルコツクの日本に駐剳した時代、卽ち嘉永萬延以來あまり進步してはゐないらしい。

しかし、サア・オルコツク以前の西洋人が、日本の女を讚美したのは、客觀的に日本の女の社會的地位や何かを觀察した上讚美したのかどうか、疑問である。それよりはむしろ、日本の女を

實際ラシヤメンにして見た結果、正直だつたり、忠實だつたりしたために、大いに感謝の意を生じたのかも知れない。

これは德川幕府の初年の話であるが、肥前平戸をイギリス人の引揚げる時にも、彼れ等は日本人の女房に、大いに依々戀々としたといふことである。すると、サア・オルコツクもラシヤメンを一人もつてゐたらば、必ずしも、日本の女を輕蔑すること、かくの如きには至らなかつたかも知れない。けれどもそのために、日本の女に對する正當に近い見解を得ることの出來たのは、少くとも後代の讀書子には幸福であるといはなければならぬ。

私は先年支那へ遊んだ時、楊子江を溯る船の中で、或るノオルウエイ人と一緒になつた。彼れは、支那の女の社會的地位の低いのに憤慨してゐた。

何んでも彼れの話によれば、直隷河南の大饑饉の際には、支那人は牛を賣るよりも先に女房を賣りに來たといふことである。それにも拘らず、このノオルウエイ人は、妻としての支那人乃至日本人を雲の上までほめ上げてゐた。現に彼れは、同船のアメリカ人の夫婦と、そのためにはげしい論戰を開いたくらゐである。すると男といふものは、理窟の如何に拘らず、とにかく、內心では妻として——サア・オルコツクの言葉を用ゐれば、家畜或ひは奴隷としての女に、讃嘆の情を禁じ得ないものらしい。卽ち、婦人運動が婦人自身の手を俟つほかに、成功する見込みがない

所以(ゆゑん)である。

（大正十四年五月）

才一巧亦不二

ヴォルテエルが子供の時は神童だつた。

處が、或る人が、

「十で神童、十五で才子、二十過ぎれば並の人、といふこともあるから、子供の時に悧巧でも大人になつて馬鹿にならないとは限らない。だから神童と云はれるのも考へものだ」と云つた。

すると、それを聞いたヴォルテエルが、その人の顔を眺めながら、

「おぢさんは子供の時に、さぞ悧巧だつたでせうね」

と云つたといふことがある。

これと全然同じ話が支那にもある。

北海の孔融が矢張り神童だつた。

處が、大中大夫陳煒といふものが矢張り、

「子供の時悧巧でも大人になつて馬鹿になるものがある」
と云つたのを孔融が聞いて、
「あなたも定めて子供の時は神童だつたでせう」と云つた。
孔融は三國時代の人であるが、この話が十八世紀のフランスに傳はつて、ヴオルテエルの逸話になつたとは考へられない。すると、神童といふものは、期せずして東西同じやうに、相手の武器を奪つて相手をへこませることを心得てゐるものとみえる。

（大正十四年九月）

病中雜記

一　毎年一二月の間になれば、胃を損じ、腸を害し、更に神經性狹心症に罹り、鬱々として日を暮らすこと多し。今年も亦その例に洩れず。ぼんやり置炬燵に當りをれば、氣違ひになる前の心もちはかかるものかとさへ思ふことあり。

二　僕の神經衰弱の最も甚しかりしは大正十年の年末なり。その時には眠りに入らんとすれば、忽ち誰かに名前を呼ばるる心ちし、飛び起きたることも少からず。又古き活動寫眞を見る如く、黃色き光の斷片目の前に現れ、「おや」と思ひしことも度たびあり。十一年の正月、上と僕に會ひて「死相がある」と言ひし人ありしが、まことにそんな顏をしてをりしなるべし。

三　「墨汁一滴」や「病牀六尺」に「腦病を病み」云々とあるは神經衰弱のことなるべし。僕は少

時正岡子規は腦病などに罹りながら、なぜ俳句が作れたかと不思議に思ひし覺えあり。「昔を今になすよしもがな」とはいにしへ人の歎きのみにあらず。

四　月餘の不眠症の爲に〇・七五のアダリンを常用しつつ、枕上子規全集第五卷を讀めば、俳人子規や歌人子規の外に批評家子規にも敬服すること多し。「歌よみに與ふる書」の論鋒破竹の如きは言ふを待たず。小說戲曲等を論ずるも、今なほ僕等に適切なるものあり。こは獨り僕のみならず、佐藤春夫も亦力說する所。

五　子規自身の小說には殆ど見るに足るものなし。然れども子規を長生せしめ、更に小說を作らしめん乎、伊藤左千夫、長塚節等の諸家の下風に立つものにあらず。「墨汁一滴」や「病牀六尺」中に好箇の小品少からざるは既に人の知る所なるべし。就中「病牀六尺」中の小提灯の小品の如きは何度讀み返しても飽かざる心ちす。

六　人としての子規を見るも、病苦に面して生悟りを衒はず、歎聲を發したり、自殺したがつたりせるは當時の星菫詩人よりも數等近代人たるに近かるべし。その中江兆民の「一年有半」を評

せる言の如き、今日これを見るも新たなるものあり。

七　然れども子規の生活力の横溢せるには驚くべし。子規はその生涯の大半を病牀に暮らしたるにも關らず、新俳句を作り、新短歌を詠じ、更に又寫生文の一道をも拓けり。しかもなほ力の窮まるを知らず、女子教育の必要を論じ、日本服の美的價値を論じ、内務省の牛乳取締令を論ず。殆ど病人とは思はれざるの看あり。尤も當時のカリエス患者は既に腦病にはあらざりしたるべし。（一月九日）

八　何ゆゑに文語を用ふる乎と皮肉にも僕に問ふ人あり。僕の文語を用ふるは何も氣取らんが爲にあらず。唯口語を用ふるよりも數等手數のかからざるが爲なり。こは恐らくは僕の受けたる舊式教育の祟りなるべし。僕は十年來口語文を作り、一日十枚を越えたることは（一枚二十行二十字詰め）僅かに二三度を數ふるのみ。然れども文語文を作らしめば、一日二十枚なるも難しとせず。「病中雜記」の文語文なるも僕にありてはやむを得ざるなり。

九　僕の體は元來甚だ丈夫ならざれども、殊にこの三四年來は一層脆弱に傾けんが如し。その

原因の一つは明らかに卷煙草を無暗に吸ふことなり。僕の自治寮にありし頃、同室の藤野滋君、屢僕を嘲つて曰、「君は文科にゐる癖に卷煙草の味も知らないんですか?」と。僕は今や卷煙草の味を知り過ぎ、反つて斷煙を實行せんとす。當年の藤野君をして見せしめば、僕の進步の長足なるに多少の敬意なき能はざるべし。因に云ふ、藤野滋君はかの夭折したる明治の俳人藤野古白の弟なり。

十　第一の手紙に曰、「社會主義を捨てん乎、父に叛かん乎、どうしたものでせう?」更に第二の手紙に曰、「原稿至急願上げ候。」而して第三の手紙に曰、「あなたの名前を拜借して×××氏を攻撃しました。僕等無名作家の名前では效果がないと思ひましたからどうか惡しからず。」第三の手紙を書ける人はどこの誰ともわからざる人なり。僕はかかる手紙を讀みつつ、日々腹ぐすり「げんのしやうこ」を飮み、靜かに生を養はんと欲す。不眠症の癒えざるも當然なるべし。

十一　僕は昨夜の夢に古道具屋に入り、青貝を嵌めたる硯箱を見る。古道具屋の主人曰、「これは安土の城にあつたものです。」僕曰、「蓋の裏に何か橫文字があるね。」主人曰、「これはヂキタミンと云ふ字です。」安土の城などの現はれしは「安土の春」を讀みし爲なるべし。こは寧ろ滑稽な

れど、夢中にも薬の名の出づるは多少のはかなさを感ぜざる能はず。

十二　僕の日課の一つは散歩なり。藤木川の岸を徘徊すれば、孟宗は黄に、梅花は白く、春風殆ど面を吹くが如し。偶路傍の大石に一匹の蠅のとまれるあり。我家の庭に蠅を見るは毎年五月初旬なるを思ひ、茫然とこの蠅を見守ること多時。僕の病體、五月に至らば果して舊に復するや否や。

（大正十五年二月―三月）

一人の無名作家

七八年前のことです。加賀でしたか能登でしたか、なんでも北國の方の同人雜誌でした。今では、その雜誌の名も覺えて居ませんが、平家物語に主題を取つて書いた小說の載つてゐるのを見たことがあります。その作者は、おそらく青年だつたらうと思ひます。

その小說は、三回に分れて居りました。

一は、平家物語の作者が、大原御幸のところへ行つて、少しも筆が進まなくなつて、困り果てて居るところで、そのうち、突然、インスピレエションを感じて、――甍破れては霧不斷の香を焚き、樞落ちては月常住の灯を挑ぐ――と、云ふところを書くところが、書いてありました。

それから二は、平家物語の註釋者のことで、この註釋者が、今引用した――甍破れては……のところへ來て、その語句の出所などを調べたり考へたりするけれども、どうしても解らないので、俺などはまだ學問が足りないのだ、平家物語を註釋する程に學問が出來て居ないのだと言つて、

慨歎して筆を擱くところが書いてありました。

、三は現代で、中學校の國語の先生が、生徒に大原御幸の講義をしてゐるところで、先生が、この――霧不斷の香を焚き……と云ふやうな語句は、昔からその出所も意味も解らないものとされて居ると云ふと、席の隅の方に居た生徒が「そこが天才の偉いところだ」と、獨言のやうに呟くところが書いてありました。

今はその青年の名も覺えて居りませんが、その作品が非常によかつたので、今でもそのテエマは覺えてゐるのですが、その青年の事は、折々今でも思ひ出します。才を抱いて、埋もれてゆく人は、外にも澤山ある事と思ひます。

（大正十五年三月）

東西問答

問　現代の作家に就いて、比較上の問題ですが、東洋種と西洋種とに區別したら如何なものでせうか。

答　それは東洋種と西洋種とに分けられるかも知れない。けれども多少の西洋種を交へて居ないものは殆んどないと云つてもいいだらう。たとへば久保田万太郎君なぞは、純日本種の作家のやうに思はれて居るが、久保田君の小説には、プロロオグと横文字に題を書いたのがある。勿論作品そのものの中にも、多分に三田文學流の西洋種を交へて居る。先づ比較的西洋種を交へない作家と云へば、德田秋聲氏位のものだらうと思ふ。

問　葛西善藏氏はどうですか。

答　葛西善藏氏も、西洋種の交りは少いと思ふ。

問　それでは、東洋種の作家の作品の要素をお伺ひしたいのです。

答　それは難問だね。ここに云ふ東洋種と云ふ意味は、西洋種の交つて居ないと云ふ事だ。即ち消極的に云つたものに過ぎない。それを積極的にどう云ふ特色のあるものが、東洋種になるかと云ふ事になると、三考も四考もしなければならない。それはお互ひに面倒だし、まあ見合せる事にしよう。ただ徳田秋聲氏や葛西善藏氏の作品には、官能的にも思想的にも、西洋人にかぶれたと云ふ痕跡が少い。それ丈けは安全に云ひ得られるかと思ふ。

×

問　風流に就いて御意見を。

答　風流と云ふ事をどう解釋するかは、文人墨客の風流は、先づ日永の遊戲である。南畫南畫と云ふけれど、二三の天才をのぞいた外は、大部分下らないものと云つて差支へない。僕はああ云ふ風流を弄びたくない。僕の尊敬する東洋趣味は、(前の東洋種と混合してはいけない)人麻呂の歌を生み、玉腕の蘭を生み、芭蕉の句を生んだ精神である。煎茶の宗匠や、漢詩人などの東洋趣味と、一緒にされて堪るものではない。

問　佐藤春夫氏は風流を感覺だと云ひ、久米正雄氏はそれを意志だと云つて居ますが、それに就いてのお考は如何でせうか。

答　それは感覺と云ふ言葉の意味や、意志と云ふ言葉の意味を、はつきり制限して貰はないと、

僕にはどちらにも左袒出來ない。あらゆる藝術は感覺的である、同時に又あらゆる藝術は、意志的である。だから、風流は意志だと云ふ說も、ある意味では成立つと同時に、風流は感覺だと云ふ說も、矢張りある意味ではなりたつだらう。僕はまだ兩氏の議論を讀んで居ない。兩氏はどの位感覺と意志とを別のものにして、論ずる事が出來たかそれを見る時を樂しみにして居る。

問　行爲を主としたものと、心境を主としたものとの差別が文藝上には、ありませんでせうか。

答　主として事件を書いたものと、主として心境を書いたものの差別は、あると思ふ。

問　それで、事件を主としたものが西洋的に、心境を主としたものが東洋的と云へるでせうか。

答　水滸傳でも、槍の權三でも、皆事件を主にして居る。しかし矢張り東洋的である。ゲエテの「さ迷へる人の歌」のやうなものは、心境を主として居る。しかし矢張り西洋的である。心境と事件とか云ふやうなものでは、東洋と西洋の區別を、大ざつぱにさへ出來ないと思ふ。要するにその作者次第だと思ふ。

×

問　將來の日本の文藝はどうなるでせうか。西洋的になるでせうか。又東洋的になるでせうか。

答　それはどつちになるかわからない。しかしこれだけは確實である。若し將來、西洋人が日本

の文藝を珍重するとすれば、東洋的の文藝を珍重するだらう。例へば、形容の言葉にしても、「孔雀のやうに傲慢な女」と云ふのは日本人には新しい感じを與へても、西洋人には新しい感じを與へない。逆に、「瓜實顏の女」と云ふのは、日本人には珍しくないが、西洋人には珍しいだらう。一つの形容の言葉に就いて云はれる事は、作品全體に就いても云はれる事である。

（大正十五年五月）

〔談話〕

又一說？

改造社の古木鐵太郎君の言ふには、「短歌は將來の文藝からとり殘されるかどうか？」に就き、僕にも何か言へとのことである。僕は作歌上の素人たる故、再三古木君に斷つたところ、素人なればこそ尋ねに來たと言ふ、卽ちやむを得ずペンを執り、原稿用紙に向つて見るに、とり殘されさうな氣もして來れば、とり殘されぬらしい氣もして來る。

まづ明治大正の間のやうに偉い歌よみが澤山ゐれば、とり殘したくともとり殘されぬであらう。そこで將來も偉い詩人が生まれ、その詩人の感情を盛るのに短歌の形式を用ふるとすれば、やはりとり殘されぬのに相違ない。するととり殘されるかとり殘されぬかを決するものは未だ生まれざる大詩人が短歌の形式を用ふるかどうかである。

偉い詩人が生まれるかどうかは誰も判然とは保證出來ぬ。しかしその又偉い詩人が短歌の形式を用ふるかどうかは幾分か見當のつかぬこともない。尤も僕等が何かの拍子に四つ這ひになつて

見たいやうに、未だ生まれざる大詩人も何かの拍子に短歌の形式を用ふる氣もちになるかも知れぬ。しかしそれは例外とし、まづ一般に短歌の形式が將來の詩人の感情を盛るに足るかどうかは考へられぬ筈である。

然るに元來短歌なるものは格別他の抒情詩と變りはない。變りのあるのは三十一文字に限られてゐる形式ばかりである。若し三十一文字と云ふ形式に限られてゐる爲に、その又形式に纏綿した或短歌的情調の爲に盛ることは出來ぬと云ふならば、それは明治大正の間の歌よみの仕事を無視したものであらう。たとへば齋藤氏や北原氏の歌は前人の少しも盛らなかつた感情を盛つてゐる筈である。しかし更に懷疑的になれば、明治大正の間の歌よみの短歌も或は猪口でシロツプを嘗めてゐるとも言はれるかも知れぬ。かう云ふ問題になつて來ると、素人の僕には見當がつかない。唯僕に言はせれば、たとへば齋藤氏や北原氏の短歌に或は猪口でシロツプを嘗めてゐるものがあるとしても、その又猪口の中のシロツプも愛するに足ると思ふだけである。

尤も物盛なれば必ず衰ふるは天命なれば、餘り明治大正の間に偉い歌よみが出過ぎた爲にそれ等の人人の耄碌したり死んでしまつたりした後の短歌は月並みになつてしまふかも知れぬ。それを將來の文藝からとり殘されると云ふ意味に解釋すれば、或はとり殘されることもあるであらう。

これは前にも書いたやうに作歌上の素人談義たるのみならず、古木君を前にして書いたもの故、

讀者も餘り當てにせずに一讀過されんことを希望してゐる。（十五・五・二十四・鵠沼にて）

亦一説？

大衆文藝は小説と變りはない。西洋人が小説として通用させてゐるものにも大衆文藝的なものは澤山あるやうだ。唯僕は大衆文藝家が自ら大衆文藝家を以て任じてゐるのは考へものだと思つてゐる。その爲に大衆文藝は興味本位——ならばまだしも好い。興味以外のものを求めないやうになるのは考へものだと思つてゐる。大衆文藝家ももつと大きい顔をして小説家の領分へ斬りこんで來るが好い。さもないと却つて小説家が(小説としての威厳を捨てずに)大衆文藝家の領分へ斬りこむかも知れぬ。都々逸は抒情詩的大衆文藝だ。北原白秋氏などの俚謠は抒情詩的小衆文藝だ。都々逸詩人を以て任じてゐては到底北原氏などに追ひつくものではない。次手に云ふ。今の小説が面白くないから、大衆文藝が盛んになつたと云ふのは譃だ。古往今來小説などを面白がる人は澤山ゐない。少くとも講談の讀者ほど澤山ゐない。その又小説の少數の讀者も二十代には小説を讀み、三十代には講談を讀んでゐる。(その原因がどこにあるかは別問題として)大衆文藝が

盛んになつたのはほんたうに小說に飽き足らないよりも、講談に飽き足らない讀者を開拓した爲だ。

（大正十五年六月）

小說の讀者

僕の經驗するところによれば、今の小說の讀者といふものは、大抵はその小說の筋を讀んでゐる。その次ぎには、その小說の中に描かれた生活に憧憬を持つてゐる。これには時々不思議な氣持がしないことはない。

現に僕の知つてゐる或る人などは隨分經濟的に苦しい暮らしをしてゐながら、富豪や華族ばかり出て來る通俗小說を愛讀してゐる。のみならず、この人の生活に近い生活を書いた小說には全然興味を持つてゐない。

第三には、第二と反對に、その次ぎには讀者自身の生活に近いものばかり求めてゐる。

僕はこれらを必ずしも惡いこととは思つてゐない。この三つの心持ちは、同時に僕自身の中にも存在してゐる。僕は筋の面白い小說を愛讀してゐる。それから僕自身の生活に遠い生活を書いた小說も愛讀しないことはない。最後に、僕自身の生活に近い小說を愛讀してゐることは勿論で

ある。

然し、それらの小說を鑑賞する時に、僕の評價を決定するものは必ずしも、それらの氣持ではない。若し僕が(讀者として)世間の小說の讀者と違つてゐるとするならば、かう云ふ點にあると思つてゐる。では何が僕の評價を決定するかと云へば感銘の深さとでも云ふほかはない。それには筋の面白さとか、僕自身の生活に遠いこととか、或はまた僕自身の生活に近いこととか云ふことも勿論、幾分か影響してゐるだらう。然しそれらの影響のほかに未だ何かあることを信じてゐる。

この何かに動かされる讀者の一群が、つまり讀書階級と呼ばれるのである。或は文藝的知識階級と呼ばれるのである。

かう云ふ階級は存外狹い。おそらくは、西洋よりも一層狹いだらう。僕は今、かう云ふ事實の善惡を論じてゐるのではない。唯事實として一寸話すだけである。

(昭和二年三月)

賣文問答

編輯者　わたしの方の雜誌の來月號に何か書いて貰へないでせうか？
作家　駄目です。この頃のやうに病氣ばかりしてゐては、到底何も書けはしません。
編輯者　其處を特に賴みたいのですが。

この間に書かば一卷の書をも成すべき押問答あり。

作家　――と云ふやうな次第ですから、今度だけは不承して下さい。
編輯者　困りましたね。どんな物でも好いのですが、――二枚でも三枚でもかまひません。あなたの名さへあれば好いのです。
作家　そんな物を載せるのは愚ぢやありませんか？　讀者に氣の毒なのは勿論ですが、雜誌の爲にも損になるでせう。羊頭を掲げて狗肉を賣るとでも、惡口を云はれて御覽なさい。
編輯者　いや、損にはなりませんよ。無名の士の作品を載せる時には、善ければ善い、惡けれ

ば惡いで、責任を負ふのは雜誌社ですが、有名な大家の作品になると、善惡とも責任を負ふものは、何時もその作家にきまつてゐますから。

作家　それぢやたほ更引き受けられないぢやありませんか?

編輯者　しかしもうあなた位の大家になれば、一作や二作惡いのを出しても、聲名の下ると云ふ患もないでせう。

作家　それば五圓や十圓盗まれても、暮しに困らない人がある場合、盗んでも好いと云ふ論法ですよ。盗まれる方こそ好い面の皮です。

編輯者　盗まれると思へば不快ですが、義捐すると思へばかまはんでせう。

作家　冗談を云つては困ります。雜誌社が原稿を買ひに來るのは、商賣に違ひないぢやありませんか?　それは或主張を立ててゐるとか、或使命を持つてゐるとか、看板はいろいろあるでせう。が、損をしてまでも、その主張なり使命なりに忠ならんとする雜誌は少いでせう。賣れる作家ならば原稿を貰ふ、賣れない作家ならば頼まれても買はない、――と云ふのが當り前です。して見れば作家も雜誌社には、作家自身の利益を中心に、斷るとか引き受けるとかする筈ぢやありませんか?

編輯者　しかし十萬の讀者の希望も考へてやつて貰ひたいのですが。

作家　それは子供瞞しのロマンティシズムですよ。そんな事を眞に受けるものは、中學生の中にもゐないでせう。
編輯者　いや、わたしなどは誠心誠意、讀者の希望に副ふつもりなのです。
作家　それはあなたはさうでせう。讀者の希望に副ふ事は、同時に商賣の繁昌する事ですから。
編輯者　さう考へて貰つては困ります。あなたは商賣商賣と仰有るが、あなたに原稿を書いて貰ひたいのも、商賣氣ばかりぢやありません。實際あなたの作品を好んでゐる爲もあるのです。
作家　それはさうかも知れません。少くともわたしに書かせたいと云ふのは、何か好意も交つてゐるでせう。わたしのやうに甘い人間は、それだけの好意にも動かされ易い。書けない書けないと云つてゐても、書ければ書きたい氣はあるのです。しかし安請合をしたが最期、碌な事はありません。わたしが不快な日に遇はなければ、必あなたが不快な日に遇ひます。
編輯者　人生意氣に感ずと云ふぢやありませんか？　一つ意氣に感じて下さい。
作家　出來合ひの意氣ぢや感じませんね。
編輯者　そんなに理窟ばかり云つてゐずに、是非何か書いて下さい。わたしの顏を立てると思つて。
作家　困りましたね。ぢやあなたとの問答でも書きませう。

編輯者　やむを得なければそれでもよろしい。ぢや今月中に書いて貰ひます。

覆面の人、突然二人の間に立ち現る。

覆面の人　（作家に）貴樣は情ない奴だな。偉らさうな事を云つてゐるかと思ふと、もう一時の責塞ぎに、出たらめでも何でも書かうとしやがる。おれは昔バルザツクが、一晩に素破らしい短篇を一つ、書き上げる所を見た事がある。あいつは頭に血が上ると、脚湯をしては又書くのだ。あの凄まじい精力を思へば、貴樣なぞは死人も同樣だぞ。たとひ一時の責塞ぎにもしろ、なぜあいつを學ばないのだ？　（編輯者に）貴樣も心がけはよろしくないぞ。見かけ倒しの原稿を載せるのは、亞米利加でも法律問題になりかかつてゐる。ちつとは目前の利害の外にも、高等な物のある事を考へろ。

編輯者も作家も聲を出す事能はず、茫然と覆面の人を見守るのみ。

〔未定稿〕

序跋

「春城句集」の序

予は俳句に關しては、全く門外漢である。從つて、予が室賀君のこの句集に序を書くと云ふ事は、自ら揣らざるものだと云はれても仕方がない。

しかし、予は室賀君の生活に關してなら、幾分の知識を持つてゐる。その知識は、室賀君の藝術に親まうとする人にとつて、或は多少の興味があるかも知れない。もしそれが興味に止らず、多少の利益があるとすれば、予がその知識によつて、この序を書くと云ふ事は、幾分でも自ら揣らないと云ふ非難を免れる事が出來ようかと思ふ。

室賀君の職業は行商である。だから晝は車をひいて、雜貨類を商つて歩く。その時の君を見たものには、この血色の好い、軀幹の長大な行商人が、春城句集の作者である事は、確かに意外な發見であらう。まして、大きな麥藁帽子の下にある鋭い眼が、トルストイを讀み、ドストイエフスキーを讀む眼だと云ふ事に、氣のつくものは一人もあるまい。君はその職業によつて、月々の

衣食に資するだけの金を得れば、その月の行商はそれで休んでしまふ。さうしてその時間を擧げて、書を讀むのと、句を作るとに費してしまふ。「アンナ・カレニナ」や「罪と罰」は、かくして君の讀破する所となつた。室賀君にとつて、心の饑は、肉の饑とひとしく、苦しいのに相違ない。

室賀君はこの心の饑に迫られて、久しい以前に基督教の信仰を求めた。さうして今は、内村鑑三氏の門下にある信徒の一人となつてゐる。君が行商を以て職業とするのも、單に肉の饑を充たす爲ばかりでないと云ふ事は、この間の消息に徴しても知れる事であらう。

予はジアン・クリストフを讀んだ時、クリストフの伯父に當る、ゴットフリイドと云ふ行商人が出て來る度に、屢々室賀君の事を思ひ出した。素朴な、力強い信仰に於ても、君は正にゴットフリイドの亞流である。少年のクリストフは、この敬虔な行商人によつて、「銀色の霧が地ときらめく水との上に漂つてゐる」中に、蛙の聲と蟋蟀の聲と鶯の聲とがつくり出す、「自然」の微妙な曲節に耳を開いて貰ふ事が出來た。この句集の著者と讀者の間にも、かう云ふ關係が起り得るかどうか――それは門外漢なる予の知る所ではない。が、もし起り得るとすれば、さうしてそれが君の生活の直下なる表現の結果であるとすれば、その生活の一斑を傳へた予は、この上もなく滿足である。

大正六年十月廿一日

「桂月全集」第八巻の序

桂月先生の文章は、淡々たる事白湯の如し。先生の文章を愛するもの、少年の學生に尠からず。然れども、天下の少年中、眞に先生の文章を解し、その妙所に味到するもの、一人と雖も有りや否や。僕の見る所を以てすれば、先生の文章を知るものは、必ず少年の學生にあらず、一人前の士人に多からむ。雲門の糊餅、趙州の茶、いづれもその味を解せんとせば、痛棒熱喝を喫せざるべからず。桂月の白湯、豈に味到し易からむや。

今や桂月全集成り、大方に知己を待たんと欲す。眞に宜しきを得たりと言ふべし。僕の、先生の爲に賀せんとする所以、蓋しこの一事にあり。先生が幾卷賣文の錢、春醪を沽ふに足るにあらず。

大正十年七月

「菊池寛全集」の序

スタンダアルとメリメとを比較した場合、スタンダアルはメリメよりも偉大であるが、メリメよりも藝術家ではないと云ふ。云ふ心はメリメよりも、一つ一つの作品に渾成の趣を與へなかつた、或は與へる才能に乏しかつた、と云ふ事實を指したのであらう。この意味では菊池寛も、文壇の二三子と比較した場合、必しも卓越した藝術家ではない。たとへば彼の作品中、繪畫的效果を收むべき描寫は、屢、破綻を來してゐるやうである。かう云ふ傾向の存する限り、微細な效果の享樂家には如何なる彼の傑作と雖も、十分の滿足を與へないであらう。

ショオとゴオルスウアアズイとを比較した場合、ショオはゴオルスウアアズイよりも偉大であるが、ゴオルスウアアズイよりも藝術家ではないと云ふ。云ふ心の大部分は、純粹な藝術的感銘以外に作者の人生觀なり、世界觀なり兎に角或思想を吐露するのに、急であると云ふ意味であらう。この限りでは菊池寛も、文壇の二三子と比較した場合、謂ふ所の生一本の藝術家ではない。

たとへば彼が世に出た以來、テエマ小說の語が起つた如きは、この間の消息を語るものである。かう云ふ傾向の存する限り、繪畫から傳說を驅逐したやうに、文藝からも思想を驅逐せんとする、藝術上の一神論には、菊池の作品の大部分は、十分の滿足を與へないであらう。

この二點のいづれかに立てば、菊池寬は藝術家かどうか、疑問であると云ふのも困難でない。しかしこの二つの「藝術家」と云ふ言葉は、それぞれ或限定に據つた言葉である。第一の意味の「藝術家」たる資格は、たとへばメリメと比較した場合、スタンダアルにも旣に乏しかつた。第二の意味の「藝術家」たる資格は、もつと狹い立ち場の問題である。して見れば菊池寬の作品を論ずる際、これらの尺度にのみ據らうとするのは、妥當を缺く非難を免れまい。では菊池寬の作品には、これらの割引を施した後にも、何か著しい特色が殘つてゐるか？　彼の價値を問ふ爲には、まづ此處に心を留むべきである。

何か著しい特色？　――世間は必ずわたしと共に、幾多の特色を數へ得るであらう。彼の構想力、彼の性格解剖、彼のペエソス、――それは勿論彼の作品に、光彩を與へてゐるのに相違ない。しかしわたしはそれらの背後に、もう一つ、――いや、それよりも遙かに意味の深い、興味のある特色を指摘したい。その特色とは何であるか？　それは道德的意識に根ざした、何物をも容赦しないリアリズムである。

菊池寛の感想を集めた「文藝春秋」の中に、「現代の作家は何人でも人道主義を持つてゐる。同時に何人でもリアリストたらざる作家はない。」と云ふ意味を述べた一節がある。現代の作家は彼の云ふ通り大抵この傾向があるのに相違ない。しかし現代の作家の中でも、最もこの傾向の著しいものは、實に菊池寛自身である。彼は作家生涯を始めた時、イゴイズムの作家と云ふ貼り札を受けた。彼が到る所にイゴイズムを見たのは、勿論このリアリズムに裏書きを與へるものであらう。が、彼をしてリアリストたらしめたものは、明らかに道德的意識の力である。砂の上に建てられた舊道德を壞つて、巖の上に新道德を築かんとした內部の要求の力である。わたしは以前彼と共に、善とか美とか云ふ議論をした時、かう云つた彼の風貌を未だにはつきりと覺えてゐる。「そりや君、善は美よりも重大だね。僕には何と云つても重大だね。」——善は實に彼にとつては、美よりも重大なものであつた。彼の爾後の作家生涯は、その善を探求すべき勞作だつたと稱しても好い。この道德的意識に根ざした、リアリスティックな小說や戲曲、——現代は其處に、恐らくは其處にのみ、彼等の代辨者を見出したのである。彼が忽ち盛名を負つたのは、當然の事だと云はなければならぬ。

彼は第一高等學校に在學中、「笑へるイブセン」と云ふ題の下に、バアナアド・ショオの評論を草した。人は彼の戲曲の中に、愛蘭土劇の與へた影響を數へる。しかしわたしはそれよりも先に、

の影響を數へ上げたい。ショオの戯曲と云はず小說と云はず、彼の觀照に方向を與へた、ショオの言葉に從へば、「あらゆる文藝はジアナリズムである。」から云ふ意識があつたかどうか、それは問題にしないでも好い。が、菊池はショオのやうに、細い線を選ぶよりも、太い線の畫を描いて行つた。その畫は微細な效果には乏しいにしても、大きい情熱に溢れてゐた事は、我々友人の間にさへ打ち消し難い事實である。(天下に作家仲間の友人程、手厳しい鑑賞家が見出されるであらうか?)この事實の存する限り、如何に割引きを加へて見ても、菊池の力量は爭はれない。菊池はParnassusに住む神々ではないかも知れぬ。が、その力量は風貌と共に宛然Pelionに住む巨人のものである。

が、容赦のないリアリズムを用ひ盡した後、菊池は人間の心の何處に、新道德の礎を築き上げるのであらう? 美は既に捨ててしまつた。しかし眞と善との峯は、まだ雲霧をかぶつた儘深谷を隔ててゐるかも知れぬ。菊池の前途もこの意味では艱險に富んでゐさうである。巴里や倫敦を見て來た菊池、――それは會つても會はないでも好い。わたしの一番會ひたい彼は、その峯々に亙るべき、不思議の虹を仰ぎ見た菊池、――我々の知らない智慧の光に、遍照された菊池ばかりである。

(大正十一年三月)

「文藝趣味」の序

「文藝趣味」の序に換ふる未定稿の辭書の一部

凡例　發音ノ假名ノ儘ナルハ別ニ標セズ。轉呼シテ發音スルモノニハ振假名ヲ附ク。
――標アルモノハ和語。＝標アルモノハ漢語ト知ルベシ。

ばう―きやく（名）　忘却　ワスルルヿ。失念。タトヘバ「銀座ニ柳アリシヿヲ忘却ス」、「忘却シ難キハ我等ノ學生時代ナリ」ノ如シ。

はう―くわう（名）　彷徨　ユキサマヨフヿ。ウロウロスルヿ。タトヘバ「濱町河岸ヲ彷徨ス」ノ如シ。

はう―げん（名）　放言　思ノ儘ナルヿヲ言ヒ散ラスヿ。大言。タトヘバ「我等ハ藝術ノ爲ノ藝術ニ殉ゼンナドト放言ス」ノ如シ。

ばう―ぜん（副）　茫然　據ル所ナキ狀、又ハ感動シテ思案ナキ狀ナドニイフ語。タトヘバ「我等ハ自由劇場ノ Tintagiles ヲ觀ハテタル後、茫然タルヿ久シカリキ」ノ如シ。

はうーふつ（副）　彷彿　サモ似タル意ニイフ語。タトヘバ「一枚ノ廣重ハ百年ノ江戸ヲ彷彿タラシム」、「永井荷風ノ佛蘭西物語ヲ讀メバ、彷彿トシテ巴里ニ遊ブニ似タリ」ノ如シ。

はうーらつ（名）　放埒　行ヲ修メズシテ、恣ニ遊樂ニ耽ルヿ。タトヘバ「我等ハ何時カ放埒ヲ止メ、家庭ニ老來ヲ歎ゼントス」ノ如シ。

はえーぎは（名）　生際　額ナドノ髪ノ生エタル際。タトヘバ「我等ノ生際モ禿ゲソメタリ」ノ如シ。

はかーじるし（名）　墓標　墓ノ上ノ木石ノ標。タトヘバ「コノ『文藝趣味』ハヒトリ汝ノミナラズ、我等ノ青春ノ墓標ナリ」ノ如シ。

はくーしき（名）　博識　諸ノ學藝ヲ博ク學ビテ知レルヿ。タトヘバ「汝ハ法律ノ學ヲ修メ、兼ネテ江戸ノ藝術ヲ究メ、又 Rococo ノ藝術ヲ愛ス、博識羨ムニ堪ヘタリ」ノ如シ。

ばくーしゆ（名）　麥酒　びいるニ同ジ。タトヘバ「汝ハ伯林ニ仕スルヿ四年、麥酒ノ爲ニ肥ルト共ニ、聞見亦愈多キヲ加フ」ノ如シ。

はしーだて（名）　樹梯　梯子ヲ立テカクルヿ。タトヘバ「コノ『文藝趣味』ハ我贔屓眼ヲ以テセザルモ、啻ニ好書タルニ止マラズ、又天下ノ詩人ヲシテ Parnassus 山上ノ神々ト共ニ逍遙セシムル樹梯ナリ」ノ如シ。

はしーづま（名）　愛妻　愛シキ妻。イトホシキ妻。タトヘバ「汝ハ日本ニ止マル事數月、ソノ新婚ノ愛妻ト共ニ、更ニ又伯林ニ赴カントス」ノ如シ。

はしりーがき（名）　走書　手早クスラスラト書クコト。タトヘバ「我今『文藝趣味』ノ爲ニ走書ノ序文一篇ヲ艸シ、併セテ汝ヲ送ラント欲ス。庶幾クハ健在ナレ」ノ如シ。

はたーとよきち（名）　秦豐吉、帝國大學獨逸法律科ヲ卒業シタル三菱會社員兼素人賣文業者、本職ノ手腕ハ知ラザレドモ、文章ノ才ハ一家ヲ成スニ足ルモノアリ。同窓ノ友久米正雄、芥川龍之介等、皆ソノ才ニ推服ス。叔父ニ名優松本幸四郎アリ。以テソノ風貌ヲ想見スベシ。

大正十三年四月二十八日

「春の外套」の序

昨日の流行は拵らへぬ小說である。畫の具も乾かないスケッチである。けれども今日の流行は明らかに拵らへた小說である。ヴァアニッシュのかかつた油畫である。佐佐木茂索君の作品はこの點に今日の流行と一致する特色を具へてゐる。君の作品を支配するものは人生記錄の生なましさではない。いづれもちやんと仕上げを施した、たるみのない畫面の美しさである。

しかし又昨日の流行は所謂「餘裕のない小說」である。せつぱつまつた人生のせつぱつまつた一斷面である。けれども今日の流行は――いや、今日の流行も所謂「餘裕のない小說」である。佐佐木茂索君の作品はこの點に今日の流行と一致しない特色を具へてゐる。君の作品の主題は勿論、作品の中の一情景さへ少しも動きのとれぬものではない。いづれも春雲の去來するやうに、小面憎い餘裕に富んだものである。

昨日の流行に反したものは夏目先生の筆に成つた所謂「餘裕のある小說」である。今日の流行に

反するものも佐佐木茂索君の筆に成つた所謂「餘裕のある小説」である。しかし佐佐木君の作品は夏目先生の作品のやうに蒼老の趣には饒かではない。その代りに爭ふべからざる近代的な匂を漂はせてゐる。昔、ヴェルレエンは「作詩術」の中に「色彩よりも寧ろ陰影を」と言つた。佐佐木茂索君の作品は一面には餘裕に富んでゐると同時に、他面には又纖細を極めた情緒のニュアンスに溢れてゐる。これは君の作品を除いた所謂「餘裕のある小説」には、殆ど見出し難い特色である。わたしの君の作品を評して、近代的な匂を云々と言つたのは必しも妄りに言を立てたのではない。

佐佐木君の作品の特色は勿論これだけには盡きないであらう。が、わたしは少くとも上に擧げた二三の特色を著しいものと信じてゐる。佐佐木君は第一の短篇集「春の外套」の成るに當り、わたしに一篇の序を徴した。卽ちわたしの信ずる所を記し、聊か大方の讀者の爲に便にしたいと思つた所以である。

大正十三年十一月九日夜

「未翁南甫句集」の序

御雨氏の句集の出るよし、室生君から承り、祝着に存じて居ります。わたしは句を學ぶことも淺く、又御雨氏の作品を拜見する機會も少いものですから、今度お出しになる句集に就いては何も申し上げることは出來ません。しかし昨十三年の首夏、室生君を尋ねかたがた始めて金澤に一週間を送り、御雨氏にも何かと御世話になつたことはわたしの一生の追憶のうちでも最も愉快なものの一つになつて居ります。あの時わたしは御雨氏の外にも室生君や小畠貞一君と何とか言ふお茶屋へ行き「草餅」や「蝸牛」の句を作りました。派手な色彩の多い中に瘦軀鶴の如き桂井さんの句を楽じてゐられる姿は未だにはつきりと覺えて居ります。太田さんも、わたしは私かに太田さんを酒客だらうと思つてゐましたが、殆んど杯をとられないのには少からず意外の感をなしました。恰幅の好い太田さんのサイダアのコップを前にしたまま、筆を持つて考へてゐられる容子もやはり忘れることは出來ません。忘れることの出來ないと言へばあのお茶屋から出て來た時、

何處か昔寂びた家並みの空に薄い月の出てゐたのも忘られぬことの一つになりました。わたしの庭は今竹の落葉に毎日雨ばかり降つて居ります。金澤も定めし若葉は老い、あさくさやの店は杏を盛り、犀川の水は增して居りませう。かう言ふことは御雨氏の句集に何の關係もないものかも知れません。けれどもわたしには金澤を思ふことは即ち御雨氏を思ふことですから聊か曾遊の記憶を記してわたしの序に代へることにしました。

大正十四年七月四日

「蕪村全集」の序

わたしはあなたの蕪村全集を人一倍切に待つてゐます。それは勿論わたしと言ふ個人の問題に違ひありません。しかし廣い世の中にはわたしに似た考へを持つてゐる人も全然ない訣ではありますまい。わたしはその爲に序文の替りに、なぜ切に待つてゐるかを申し上げることにしたいと思ひます。

わたしもまづ世間並みに蕪村の畫や俳諧のどう言ふものかを知つてゐます。のみならず蕪村の生涯のどう言ふものかをも知つてゐます。しかし蕪村は蕪村となる爲にどう言ふ道を踏んで來たかは唯頗る漠然と想像してゐるのに過ぎません。

蕪村は一代の天才であります。天才を天才として認めるだけでも勿論悪いとは申しません。が、一代の天才とは言へ、蕪村も一朝一夕に蕪村になつた訣ではありますまい。わたしはその精進の跡をもはつきり知りたいと思つてゐます。

蕪村は蕪村となる爲にどう言ふ道を踏んで來たか、それは前にも書いたやうに唯頗る漠然とならば、几董の編した蕪村句集からも想像出來ない訣ではありません。又確かに春泥集の序には蕪村自身も其角、嵐雪、素堂、鬼貫等に參したことを書いてゐたかと思ひます。けれどもその間の消息を機微に亙つて捉へる爲にはどうしてもあなたの蕪村全集のやうに發句、連句、俳文、尺牘等を剩さず一冊に集錄した本に據る外はありません。しかもあなたの蕪村全集に從來活字にならなかつた新材料の多いと言ふことは、一層この目的に添ふ訣であります。

わたしはあなたの蕪村全集を得たらば、かう言ふ智的好奇心の爲に夜長をも忘れるのに違ひありません。それは智慧の輪と言ふ玩具を貰つた子供の喜びと同じことであります。どうかこの子供じみたわたしの喜びを笑つて下さい。が、たとひ子供じみてゐても、わたしの喜びは時として白雲の中に古人を見るの情と變りのないことも忘れないで下さい。

大正十四年九月八日

芥川龍之介

頴原退藏様

「笑ひきれぬ話」の序

「……劇場は Mlle. Quinault の要求に從ひ、或年上の女優から娘の役を取り上げることにした。するとその女優は憤つて叫んだ。――いくら何でもひどすぎます、四十年もあたしの勤めてゐた娘の役を取り上げると言ふのは！……」

　これは今讀みかけた横文字の本の中の一節である。「笑ひきれぬ話」と言ふのは必しも畑耕一君の短篇集の題であるばかりではない。人間界の話は不幸にも大抵は「笑ひきれぬ話」である。が、「笑ひきれぬ話」を捉へることは誰にでも出來る藝道ではあるまい。畑君はそれを易々と、しかも立派にやつてのけた。卽ち僕の畑君の爲にちよつと提燈を持つ所以である。

大正十四年十月十日

「新作仇討全集」の序

時。現代の或秋の夜。
處。大阪の或市街。右にカフェあり。
巻煙草を啣へたる直木三十三、支那服を着、(但し帽はかぶらず。)合財袋をぶら下げ、漫然と左より出で來る。三十三の舞臺の中央に來るや、編笠をかぶれる數十名の武士たち、影の如く左右より立ち現る。

武士たちの一人。待て。
三十三。(悠然と――と言ふよりはつまらなさうに)何だ?
武士たちの一人。その方は直木三十三だな?
三十三。さうだよ。
武士たちの一人。さうだよとは緩怠至極。その方は我々を見忘れまいがな?

三十三。さあ、どうだか怪しいものだ。何だか聲には聞き覺えもあるが、……
武士たちの一人。（編笠を投げすて）身共は荒木又右衞門。
他の一人。（同上）身共は堀部安兵衞。
他の一人。（同上）身共は榊原健吉。
他の一人。（同上）身共は宮本武藏。
他の一人。（同上）身共は岩見重太郎。

その他の武士たちも口々に名乘れども、やかましきのみにて姓名明らかたらず。

荒木又右衞門。我々は皆その方の爲に傳說の生命を奪はれたものだ。ここで遇つたが百年目、さあ、尋常に勝負をしろ。（つめよる。）
三十三。（呆れたやうに）莫迦だな、貴樣たちは。（武士たちを見まはし）まるで location でも始まりさうぢやないか。
又右衞門。何、ロケ、ロ、ロ、ロケ……
三十三。ロケエション！
又右衞門。（中學生のやうに）ロケエション。
三十三。よし。ロケエションつて言ふのは活動寫眞を撮影することだ。そこでだね、荒木又右衞

門！

又右衞門。（思はず）何です？

三十三。お前はついこの間までは伊賀越えばかりしてゐたんだらう。それがここへ來られたのは誰のおかげだと思つてゐるんだ？

又右衞門。（悄氣て）そりやあなたのおかげですが、……

三十三。ぢやおとなしくひつこんでゐろ。

堀部安兵衞。ひつこんでゐろとは無禮千萬。その儀ならば斯く言ふ安兵衞が、（刀を拔く）高田の馬場の昔通り、……

三十三。（微苦笑）譃をつくなよ。何人も斬らなかつた癖に。

安兵衞。（絕望して）ああ、知つてゐやがつたつけ。

榊原健吉。（冷然と）では榊原健吉が參らう。

三十三。何、榊原健吉？　おい、又右衞門、ちよつとこの合財袋を持つてゐてくれ。（又右衞門に合財袋を渡し、ポケットより手帖、鉛筆等をとり出す。）おい、安兵衞、ちよつとその刀を貸してくれ！

安兵衞。（愕然と）關の孫六をですか？

三十三。（じれつたさうに）鉛筆を削るんだ。（安兵衛の刀をひつたくる。）そこでお前は幕末第一の劍客榊原健吉に違ひないね？

健吉。（大いに滿足して）如何にも。して何か御用かな？

三十三。お前にはまだ聞きたいことがあるんだ。（安兵衛の刀を抛り出し、手帖をひろげて見て）暗いな。ここは。街燈でも立つてゐりや好いのに。

安兵衛。（刀を拾ふ。）あすこにカフエがありますがね。へへへへへ。

三十三。ぢやあすこへ行かう。（行きかけて又立ちどまり、他の武士たちへ大聲に）貴樣たちはまだ文句があるのか？　文句があるんなら言つて見ろ。貴樣たちにhumanityを與へてやつたのは一體誰だと思つてゐるんだ？

菊池寛、澤田正二郎と共に右よりせかせか出て來る。

菊池寛。よう、直木！　しつかり！

菊池等、後ろを見かへりつつ左へ入る。

三十三。（少してれて）どうだ、まだ不服があるかい？

武士たち一同。（口々に）いや、もう少しも、……どう致しまして、……これは皆安兵衛の酒の上で、……どうも飛んだ失禮を、……面目次第も、……平にどうか、……等、等、等。

三十三。ぢやみんな一しよに來い。コクテエルの一杯も飮ませてやるから。
又右衞門。（心配さうに）しかし大へんな人數ですが……
三十三。（又右衞門から合財袋を受けとる。）勘定は輿文社に拂はせるさ。
　三十三、數十名の武士たちと共に意氣揚々とカフエへ入る。

大正十四年十一月二十四日夜半

「道芝」の序

久保田万太郎氏は僕の先輩である。小說家としても、俳人としても、同じ中學の卒業生としても、――かう云ふ先輩の作品を云々するのは禮を失してゐるかも知れない。しかし又或は久保田氏の後輩を遇するのに厚いことを顯す所以にもなるであらう。僕はその爲にこの句集に數行の序を作ることにした。

久保田氏は元來東京と云ふ地方的色彩の强い作家である。この特色を指摘したのは何も僕に始まるのではない。詩人兼批評家たる福士幸次郎氏に始まるのである。しかもそれは福士氏の指摘したよりも或は更に强いものかも知れない。

東京と云ふ地方的色彩の强い作家は久保田氏の外にも多いであらう。けれども東京中の東京の人々、――江戶時代の影の落ちた下町の人々を直寫したものは久保田氏の外には少いであらう。

現に下町の人々は久保田氏の小說や戲曲の中に彼等自身を感じてゐる。かう云ふのは決して形容ではない。單に如何とも出來ない事實である。（從つて又久保田氏の小說や戲曲は彼等以外の人々には通じない時さへないことはない。）しかし……

しかし僕の言ひたいのは久保田氏の小說や戲曲の特色ではない。久保田氏の發句の特色である。久保田氏の發句は季題並みに分ければ、所謂人事の句が頗る多い。のみならず所謂天文や地理の句も大抵は人間を、――生活を、――下町の匂を漂はせてゐる。のみならず度たび東京の町の名や店の名を用ひてゐる。（東京の方言を用ひてゐることは特筆するのにも及ばないであらう。）

　　藥研堀

大又の柳に夏も老いにけり

襟卷や亡き秋月が人となり

　　馬場孤蝶先生におくる

水の谷の池うめられつ空に凧

それから久保田氏の發句は餘人の發句よりも抒情詩的である。かう云ふ心もちは久保田氏に度たび「淋し」とか「あはれ」とか云ふ言葉を十七字の中に用ひさせるのであらう。が、最も情味に富んでゐるのは必しも特にそれ等の言葉を用ひたものには限つてゐない。

新参の身にあかあかと灯りけり

もち古りし夫婦の箸や冷奴

最後に久保田氏は下五字の中に「けり」と使ふことを好んでゐる。この句集の中の發句は百五十句を越えてゐない。が、「けり」を使つた發句は四十二句に及んでゐる。これも亦恐らくは久保田氏の詠歎を欲する爲に生じたのであらう。若し伊藤左千夫の歌を彼自身の言葉のやうに「叫び」の歌であるとすれば、久保田氏の發句は東京の生んだ「歎かひ」の發句であるかも知れない。

久保田氏の發句は一言に言へば千九百年以後の東京人の發句、——しかも常にその背後に小説家兼戯曲家たる久保田氏を感じさせる發句である。かう云ふ特色の著しい發句に佳作のあることは言はずとも善い。しかし久保田氏は旅中にあつてもやはり依然たる傘雨亭である。

桑畑へ不二の尾消ゆる寒さかな

僕は夜更けに電燈の下に一氣にこの悪文を艸した。尤もまだ何か言ひたいことの殘つてゐるやうにも感じてゐる。しかしペンを取り上げて見ると、格別何も言ひたいことはない。そこでペンを抛つのに當り、次手に發句を一つ作つて久保田氏の一笑を博することにした。

冴え返る隣の屋根や夜半の雨

昭和二年四月四日

「我が日我が夢」の序

宇野浩二君の「我が日我が夢」に序するのに當り、先づ僕の述べたいのは君の諧謔的抒情詩の存外理解されてゐないことである。宇野君はいつも笑ひ聲に滿ちた筆を走らせてゐる爲に往々戲作者などと混同され易い。しかし君の諧謔的抒情詩は君以前にはなかつたものである。(恐らくは又君以後にもないことであらう。)宇野君はいつか君自身の抒情詩を輕蔑する口ぶりを洩らしてゐた。勿論君の輕蔑するか否かは自由であるのに違ひない。けれどもかう云ふ特色は確かに宇野君以前には誰も持つてゐない特色である。讀者はこの本の中に度々常談にぶつかるであらう。同時に常談の後ろにある戀愛家の歎聲にもぶつかるであらう。

それから僕の述べたいのは宇野君の文藝的地位である。君はこの諧謔的抒情詩の爲に所謂「文藝の本道」を踏んでゐないやうに見られ易い。僕は所謂「文藝の本道」とは何であるかを疑つてゐる。が、たとひ宇野君は所謂「文藝の本道」を外れてゐたとしても、それは君の患ひとするに足り

ない。「正にして雅ならざるもの」よりも「正ならずして雅なるもの」を高位に置いて顧みなかつた芥舟學書編の作者の見識は文藝の上にも通用するであらう。僕は宇野君の「正なること」よりも「雅なること」を目標に進んで行けば善いと思つてゐる。

最後に僕の述べたいのは僕も亦一度宇野君と一しよにこの本の中の女主人公――夢子に會つてゐることである。夢子は實際宇野君の抒情詩を體現したのに近い女だつた。僕はこの悪文を作りながら、甲斐の駒ケ嶽に下りた雪やもう散りかかつた紅葉と一しよに夢子を作つた數年前の宇野浩二君を思ひ出してゐる。宇野君は未だにあの時代の元氣を持つてゐるかも知れない。しかし僕はいつの間にかすつかり無精になつてしまつた。「夢子」は女主人公の名だつたばかりではない。或は又僕等の夢の人間に落ちたものだつたのであらう。

昭和二年五月七日

「心の王國」の跋

菊池が本を出すから、跋を書けと云ふ註文である。あんまり跋を書くやうな人柄でもないから、始は「うん、書けたら書かう」位な事で、好い加減に一時を糊塗して置いた。が、二度目に催促された時、翻つて又考へて見ると、自分の跋を著書の尻へ食附けて、滿足に感ずる人間は、天下に菊池の外は一人もないかも知れない。或はさうまで謙遜しなくとも、自分がその著書の尻に喜んで跋を食附け得る人間は、これ又現在の所では、天下に菊池の外は一人もないかも知れない。既にさうだとすれば跋を書く事は、彼にとつて滿足であるばかりでなく、自分にとつても亦愉快である。そこでその時は、言下に「よし、ぢや早速書かう」と快諾した。

が、書く前に豫め、御注意を願ひたい事が、一つある。と云ふのは菊池が自分にとつて、最も善い友だちたるに間違ひはないが、同時に自分は作家としての菊池にとつても、最も善い批評家だと己惚れてゐる次第ではない。いや、又吾家の窓を開いて見た廬山が、飽くまでも唯、吾家の

窓を開いて見た廬山である限り、元來が己惚れたくも、己惚れられる性質のものではないのである。だから自分が菊池の作品をつかまへて、兎角の饒舌を弄したからと云つて、直にそれが菊池の本來の面目だなどと早合點をして頂きたくない。今にも眼光炬の如き大批評家が現れて、「古往今來菊池の如き天才は、稀に見る所である。芥川龍之介の如きは、足もとにも及ばなかつたこと讃嘆すれば――まあ當分、そんな大批評家などは現れなくつても、一向差支へはない。自分は唯、自分が菊池に對して千古の鐵案を下すものではないと云ふ事を、御承知願へさへすれば滿足である。

そこで本文にとりかかるが、菊池の作品をずつと見渡すと、先眼につく特色は、云ふまでもなくそこに働いてゐる理智である。彼は絶えず辛辣な理智の眼鏡の曇りを拭つて、彼の前に出沒去來する百般の人事現象を、どこまでも解剖して倦む事を知らない。敬吉が女と心中したと云へば、氣の毒だなとか、羨しいねとか云ふより先に果して氣の毒がつて然る可きものか、或は羨しがつて然る可きものかを、海の中にはひつてまで詮索する。同樣に若杉裁判長が犯罪人に對して、寛大だと云つても、一應裁判長自身の腹の底を點檢して見ない中は、容易に頌徳表を奉つたりなんぞはしない。だから彼は蟲の好い情緒に瞞着されて、螢火を見ながら腐草を見ないやうな失態を醸す事は稀である。たとひ一時は瞞着されても、すぐ又例の理智の眼鏡からその曇りを拭つてし

まふ。拭つてしまふばかりか、さう云ふ場合には、其の瞞着した情緒に對して、手ひどい復讐さへも試みる。現に英國航空隊の將校たちの如きは、仇敵たるイムメルマン大尉の爲に、盛大な葬式を擧行した時、反つてヒロイックな感動を受けた菊池によつて、「お前たちの棺の舁き方は、まるでトロフイイを舁いでゐるやうぢやないか」と、冷酷な一撥を浴びせかけられた。勿論かう云ふ一撥の前に、自ら顧みて後めたい思をするのは、獨り彼等將校たちばかりではない。

そこで菊池の作品に臨むと、勢、恰も曇天の風景のやうな、蕭索たる視野が開けて來る。どこを見ても、悲しむべき我の矛盾の暗い影がさしてゐない所はない。或はイゴイズムの寒い風が、人面を吹くばかりである。折角愛嬌のある新聞の賣子がゐたと思へば、それは華客に嘘をついて、金をせしむる少年であつた。同時に又暴虐無道の忠直卿がゐたから、これこそ鼓を鳴らしてその惡を責めようと思ふと、暴虐無道なのは殿樣よりも寧、周圍の家來たちらしい。おまけにその家來たちも、どう考へたつて、彼等自身は、忠臣なのだから厄介である。茫々として是非を失すと云ふ語があるが、正にこの暗憺たる世界には、是非を照すべき天日の炳たる光明がさしてゐない。忠直卿も、新聞の賣子も、ひとしく冷かな空氣の中に、目くら犬の如くうろついてゐる、東西を忘れた行人である。

もし菊池の作品の特色が、ここに盡きてゐるとしたら、自分はさまで彼の提灯を持つ氣が起ら

ずにしまつたかも知れない。が、幸、彼の理智はここに止つてゐなかつた。或は彼の理智と云ふよりも、彼の生活意志がこの世界に安住し得なかつたと云ふべきのかも知れない。兎に角ここまで押しつめた彼の理智は、すべての人情が凍てつかない前に、際どい曲折を作つて一轉した。彼は原因を去つて、結果に眼を注いだのである。更に一歩を進めれば、結果をも放擲して、道程に眼を注いだのである。たとへば尊む可き獻身の火が燃え上つてゐる場合にしても、その原因に着目すれば、時にはイゴイズムの醜い餘燼が存在してゐないものでもない。が、その火の與へる光と熱とを忘却して、徒に獻身を輕蔑するのは、神は知らず、少くとも人生に對してはすむまじき閑餘の惡戯である。いや、光と熱とは忘却しても、そこに閃いてゐる火焔そのものは、永久に美しかるべき筈ではないか。道德は勿論推移する。今日我々が生命を賭して爭ふものも、明日は泥土に委して顧みないやうになるかも知れない。が、その生命を賭して爭ふ事その事は、當に我々が尊敬の眼を放つて、仰望するに價するものである。

ここに至つて、曇天の風景のやうな、蕭索たる菊池の作品の視野の中には、一道の幽光がさして來た。悲しむべき我の矛盾の影も、前のやうに暗くはない。イゴイズムの風も脈々たる暖さを吹くやうになつた。だから屋根の上に氣違ひが立つてゐても、今は手を叩いて笑ふ訣には行かない。啓吉が大島紬を貰つて喜んでゐても、「お前は恩人が死んだから、貰へたんぢやないか」とは、

義理にも冷罵するのが氣の毒である。たとひここにさして來た光は、折り重つた雲霧を透して、僅に下界へ流れ出したのだから、秋日の如く朗らかに遍照する所はないにしても、既に以前の如く人をして是非の丁字巷頭に迷はせるやうな惧はない。さうして自分の如きは、特に菊池の作品を照らしてゐる、この一道の幽光を懷しく思ふものである。と共に、又その幽光を滲み出させた滿天の雲霧の影にも、作家としての彼の手腕を尊重したいと思ふものである。

自分は跋を書けといふ菊池の命令に應じて、以上の如く彼の作品の特色を指摘した。が、天下にはこの跋を讀んで、「何だ、平凡極まるぢやないか」と、罵倒する人もゐるかも知れない。しかしこの跋を著書の尻へ食附ける事が、菊池にとつても滿足であり、自分にとつても愉快である以上、さう云ふ人もあの「愛嬌者」の中の啓吉の如く、笑つて自分を赦して貰ひたいと思ふ。相互に「善事を爲したと云ふ快感」を賣捌き合つてゐる上から云へば、菊池も自分も同じやうに、「本當に世の中の愛嬌者」の一人だからである。

（大正七年六月）

「井月句集」の跋

空谷下島先生の「井月の句集」が出るさうである。何しろ井月は草廬さへ結ばず、乞食をしてゐたと云ふのだから、その句を一々集めると云ふ事は、それ自身容易な業ではない。私はまづ編者の根氣に、敬服せざるを得ないものである。

井月の句集を開いて見ると、惡句も決して少くはない。天明の遺音は既に絶え、明治の新調は未起らなかつた時代は、彼にも薫習を及ぼしたのである。しかし山嶽の高さを云ふものは、最高峯の高さを計らなければならぬ。井月は時代に曳きずられながらも、古俳諧の大道は忘れなかつた。「咲いたのは動いてゐるや蓮の花」以下、集中に散見する彼の作句は、この間の消息を語るものである。しかも亦彼の書技は、「幻住庵の記」等に至ると、入神と稱するをも妨げない。私は第二に烱眼の編者が、この巨鱗を網にした事を愉快に思はずにはゐられないのである。

が、私の編者に負ふ所は、これのみに盡きてゐるのではない。昔天竺の鹿頭梵志は、善く髑髏

を觀察し、手を以て之を撃つては、死の因緣を明らかにした。たとへば、「是男子なり。衆病集つて百節酸痛し、命終を取る。是人死して三惡趣に墮つ」の類である。しかし世尊が試みに、優陀延比丘の髑髏を與へて見たら、彼は唯茫然として、「男に非ず女に非ず。亦生を見ず。亦斷を見ず。亦同胞往來するを見ず。」と、殆ど答へる所を知らなかつた。無余涅槃に入つてゐた比丘は、「無終無始、亦生死無く、亦八方上下適くべき所無し」だつた爲、梵志の神識も及ばなかつたのである。これは優陀延に限つた事ではない。井月の髑髏を撃たせて見ても、梵志はやはり喟然として、止むより外はなかつたであらう。このせち辛い近世にも、かう云ふ人物があつたと云ふ事は、我々下根の凡夫の心を勇猛ならしむる力がある。編者は井月の句と共に、井月を傳して謬らなかつた。私が最後に感謝したいのは、この一事に存するのである。

（大正十年十月）

「一茶句集」の後に

一茶句集今日一讀過。一讀過、畢に慊焉たり。

一茶の句は主觀句なり。元祿びとの句も主觀句なり。元祿びとと一茶と異るは、人生觀上の差違なるべし。元祿びとの人生は、自然に對する人生なり。一茶の人生は現世なり。今人の所謂「生活」なり。一茶を元祿びとと異らしむるは、この一點にありと云ふも誇張ならず。「明月や池をめぐりて夜もすがら」とは芭蕉が明月の吟なれども、一茶は同じ明月にも「明月や江戸のやつらが何知つて」と、氣を吐かざるを得ざりしにあらずや。

現世に執するの俳人、一茶の外にも少しとせず。談林江戸座の俳人中には、或は數指を屈するものあるべし。但彼等は一茶の如く、娑婆苦を吟ずるの道に出でず。出づるも彼の如く深刻なる能はず。一茶をして獨步せしむる所以なり。一茶も亦好漢たらずとせず。

されど人生に對する態度より云へば、一は生活を謳歌し、一は生活に苦惱せるにも關らず、一

茶には談林江戸座の或者と、一味相通ずる特色あり。これ流俗も亦一茶を愛する所以、必しも一茶の爲に賀すべからず。

既に元祿びとの句境あり。又一茶等の句境あり。その間の折衷を試みしもの、即ち所謂月並みなり。月並みは膚淺を意味するのみにあらず。又隣の隱居の如き人生觀を交ふるを云ふなり。

更に人生に對する態度より云へば、元祿びとの法燈は、天明びとこれを繼ぎたりと云ふとも、一茶これを繼ぎたりと云ふべからず。天明びとは一茶よりも、直ちに自然に參したればなり。但夜半亭の屋高きか、俳諧寺の塔高きか、未疑なきにあらず。

一茶には如上の特色あり。當世の人の一茶を愛する、亦故なきにあらずと云ふべし。石川啄木その歌集に題して「悲しき玩具」と云ふ。俳諧は恐らく一茶にも「悲しき玩具」に過ぎざりしならん。一茶啄木の態度を以てせば、句を作り歌を作るは、委曲を盡して憾みたき事、終に小說を作るに若かず。予が句を讀み歌を讀むは、悲にあらず喜にあらず、人天相合する處、油然として湧く事雲の如き、無上の法味を嘗めんが爲なり。試みに芭蕉を見よ。「秋深き隣は何をする人ぞ。」這裡何處にか「生活」ある。ヴエルレエンの語を用ふれば、「詩とはこれのみ、他は悉文學」にあらずや。一茶の句境未この醍醐を知らず。予の慊焉たる所以なり。

（大正十一年一月）

「若冠」の後に

時。紀元前六世紀の中葉。
處。天竺拘薩羅國の王宮。
若い王が一人、梵天の像の前に祈つてゐる。

「梵天よ！
「我は我が饗宴に飽けり。我に饑渴を知らしめ給へ。
「我は我が婇女に飽けり。我に孤獨を知らしめ給へ。
「我は我が蓮華に飽けり。我に塵垢を知らしめ給へ。
「我は我が珠玉に飽けり。我に窮乏を知らしめ給へ。
「我は我が拘薩羅國に飽けり。我に異域を知らしめ給へ。

「我は我が心に飽けり。我に他の心を知らしめ給へ。
「梵天よ！　大いなる梵天よ！
「我は我が快樂に飽けり。我に苦痛を知らしめ給へ。……」

時。現代。
處。東京市外田端の或家。
平木二六が一人、コップと石竹の花とを持つてはひつて來る。それからそのコップに石竹の花を活け、机に向つて何か書きつづける。コップに映つた二六の顏は拘薩羅國の王と少しも變らない。……

（大正十四年七月）

書籍批評

「續晉明集」讀後

「讀晉明集」二卷は勝峯晉風氏の解說と遠藤蓼花氏の校訂とを加へた几董句稿の第二編である。(古今書院出版)僕はこの書を讀んでゐるうちにかういふ文章を發見した。發見といふのは大袈裟かも知れない。現に勝峯氏も解說のうちにちやんとその件を引用してゐるが僕の心もちからいへば、正に發見にちがひなかつた。

「僭丈艸は蕉門十哲の一人なり。而して句々秀透を見ず。蓋この序文においては群を出づといふべし。支考許六に及ばざるものなり。」(原文は漢文である。)

僕はこの文章に逢著した時、發見の感をなしたといつた。なしたのは必ずしも偶然ではない。几董は其角を崇拜した餘り、晉明と號した俳人である。几董の面目はそれだけでも彷彿するのに苦まないであらう。が、丈艸を輕蔑してゐたことは一層その面目を明らかにするものといはなければならぬ。

許六はその「自得發明の辨」にかう云ふ大氣焔を吐いてゐる――「第二年の追善、深川はせを庵に述べたり。予自畫の像を書せたる故に、その前書をして、

髱の霜無言の時の姿かな

とせし也。（中略）誰一人秀たる句も見えずさせてはかなきこころざしにてあはれなり。

なき人の裾をつかめば納豆かた　嵐雪

師の追善にかやうのたわけを盡くす嵐雪が俳諧も世におこたはれて口すぎをする、世上面白からぬことなり。」（中略）

これは大氣焔にも何にもせよ、正に許六の言の通りである。しかし五老井主人以外に、誰も先師を憶ふの句に光焔を放つたものはなかつたのであらうか？　第二年の追善かどうかはしばらく問はず、下にかかげる丈艸の句は確にその種類の尤なるものである。いや、僕の所信によれば、寧ろ許六の悼亡よりも深處の生命を捉へたものである。

芭蕉翁の墳にまうでてわが病身をおもふ

陽炎や墓よりそとにすむばかり

尤も許六も丈艸を輕蔑してゐたわけではない。

「丈艸が器よし。花實ともに大方相應せり。」

とは「同門評」の言である。しかし支考を「器もつともよし」といひ、其角を「器きはめてよし」といつたのを思ふと、甚だ重んじなかつたといはなければならぬ。けれども丈艸の句を檢すれば、その如何にも澄澈した句境は其角の大才と比べて見ても、おのづから別乾坤を打開してゐる。

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月
春雨やぬけ出たままの夜着の穴
木枕の垢や伊吹にのこる雪（前書略）
谷風や青田を廻る庵の客
町中の山や五月の上り雲（美濃の關にて）
小屏風に山里すずし腹の上
夜明まで雨吹く中や二つ星
蜻蛉の來ては蠅とる笠の中（旅中）
病人と撞木に寢たる夜寒かな
鷄頭の晝をうつすやぬり枕
屋根葺の海をふりむく時雨かな
榾の火や曉がたの五六尺

手當り次第に拔いて見ても丈艸の句はかういふ風に波瀾老成の妙を得てゐる。たとへば「木枕の垢や伊吹にのこる雪」を見よ。この殘雪の美しさは誰か丈艸の外に捉へ得たであらう？　けれども几董は悠々と「句々秀透を見ず」と稱してゐる。更にまた「支考許六に及ばざる者なり」と稱してゐる。

「續晉明集」の俳諧史料上の價値は既にこの書の本文の終に河東碧梧桐氏もいひ及んでゐる。しかしそれは俳諧史家以外に或は興味を與へないかも知れない。が、几董の面目は――天明の俳人の多い中にも正に蕪村の衣鉢を傳へた一人の藝術家の面目は歷々とこの書に露はれてゐる。これは僕等俳諧を愛し俳諧を作るものにとつては會心の事といはなければならぬ。即ち「續晉明集」を同好の士にすすめる所以である。（一三・七・一四）

「高麗の花」讀後

「高麗の花」は室生犀星君の新著である。といふよりも寧ろ第三の室生犀星君の新著である。第一の室生犀星君は「抒情小曲集」といふ詩集を書いた。第二の室生犀星君は、「愛の詩集」といふ詩集を書いた。第三の室生犀星君は「忘春詩集」と言ふを書いた。「高麗の花」は最後に擧げた「忘春詩集」の詩人の新著である。「古い古い日本のならはしをいつの間にか心にやどしてゐる」室生犀星君の新著である。

第一の室生犀星君は末梢神經を裸にした、感傷癖の多い青年である。この青年は手に觸れるものを――或ひは精神的觸手に觸れるものを美しい數篇の小曲に變じた。が大いなるロシア文學の颶風は忽ち荒あらしい人生の路上へこの青年を抛り出した。第二の室生犀星君の丁度黎明の寒さに似た或痛々しい感激の中に苦悶を歌ひ上げたのはその時である。或ひは苦悶を征服した歡喜を歌ひ上げたのはその時である。

燃えるものは高揚する
苦悶は人心を打つ
必ず打つ

第二の室生犀星君はその後家庭の生活の中に、——「ひきずり落した天國」の中に幸福な休息を享樂した。「第二の愛の詩集」は明らかにかういふ休息をもの語つてゐる。同時にまた小說家室生犀星君の目をさましたことを物語つてゐる。しかし詩人室生犀星君も春を感ずる球根のやうにいつか少しづつ變化してゐた。「忘春詩集」はこの變化のかすかに香を放つた黃水仙である。

わが性はつねに
ひらたく美しからぬ庭石をながめ
そをわが家にはこび
日ねもすながめあかぬなり
竹の葉すこしく植ゑ
そのかたへに語ることなき生きものの
石一つ坐りゐるよ。——

「高麗の花」の室生犀星君は——第三の室生犀星君はかう言ふ心境の持ち主である。かう言ふと

室生犀星君の心境は所謂文人の心境に等しいやうに思はれるかも知れない。しかし室生犀星君は三度の轉身を閲した後も、素朴な、しかも纎細な詩人の面目を保つてゐる。成程詩中の景情は東洋的色彩に富んでゐるであらう。が、何處までも遊戯に墮せず、生々しい魂の肌身に感じた獨得の表現を失はないのは天下の斷腸亭と比較してもなほおのづから孤峯頂上に草庵を構へたかと思ふ位である。

白い高麗の香合が一つと
その他には何も置いてない、
……………
この高麗は梅花一點の内に沈んで
わたり一寸くらゐであるのに机の上いつぱいにひろげてゐる。
古い高麗人の威嚴は丁々と胸を打つて來るのだ。

便宜上もう一度繰かへせば、「高麗の花」は第三の室生犀星君の新著である。が、室生犀星君の過去生は全然姿を隱した訣ではない。第一の室生犀星君はたとへば「庭さき」の一篇の中に「まばらにあたたかく眠つてゐる」雪の媚態を歌つてゐる。第二の室生犀星君も――たとへば、「洋燈」の一篇は、何處か「愛の詩集」の中の諸篇をおもはせずには措かぬであらう。

みんなこの洋燈のしたへあつまつてくれ。
　そして今夜は快く何か食べてゐてくれ。
　わたしはちよつと賑やかな通りへいつてすぐに戻つてくるほどに。
　みんな暗い家のなかを明るくし穏かな話をしてゐてくれ。

けれども如何に「愛の詩集」とは著るしい對照を示してゐるであらう！　「愛の詩集」の幸福は氷のやうに輝かしい幸福である。が、「洋燈」の幸福は實際ランプの光りのやうにもの靜かに優しい幸福である。僕は「高麗の花」を讀んでこの一篇に到つた時、室生犀星君の半生をふりかへらぬ訣には行かなかつた。のみならず君の大踏歩の跡をうらやまぬ訣には行かなかつた。即ち「高麗の花」を紹介する序に、聊か「抒情小曲集」や「愛の詩集」の昔にも筆墨を費したゆゑんである。

（大正十三年十月）

「鏡花全集」に就いて

「鏡花全集」の出づるにあたり、僕も參訂者の資格を離れた一批評家として言を立てれば、第一に鏡花先生の作品は屢或議論を含んでゐる。これは天下の鏡花贔屓には或ひは異端の說かも知れない。しかし先生の作品は、――殊に先生の長篇は大抵或議論を含んでゐる。「風流線」、「通夜物語」、「婦系圖」、――篇々皆然りと言つても好い。その又議論は大部分詩的正義に立つた倫理觀である。この倫理觀を捉へ得ぬ讀者は徒らに先生の作品に江戸傳來の俠氣のみを見出だすであらう。けれども僕の信ずる所によれば、この倫理觀は先生の作品を全硯友社の現實主義的作品の外に立たせるものである。のみならず又硯友社以外の自然主義的作品の外にも立たせるものである。

たとへば尾崎紅葉の「多情多恨」や「金色夜叉」を先生の作品とくらべて見るがよい。前者は或ひは措辭の上に後者のプロトタイプを持つてゐるであらう。しかし先生の倫理觀に至つては全然紅葉の知らざる所である。自然主義の先生と相容れなかつたのもやはり措辭の爲ばかりではない。

現に自然主義的文壇は小栗風葉氏の作品にさへ自然主義のレッテルを貼り、更にまた永井荷風氏の作品にもおなじレッテルを貼らうとした。しかも畢に先生の作品を同臭味のものとしなかつたのは、この詩的圓光を帶びた先生の倫理觀に堪へなかつたのである。

この倫理觀の夙に先生の作品を色づけてゐたことは、「貧民倶樂部」(これは今度はじめて集に入つた初期の作品の一つである。)の一篇に現れてゐる。「貧民倶樂部」の女主人公お丹の說破する所によれば、慈善は必ずしも善ではない。その貴族富豪の徒に自己辯護の機會を與ふるかぎり、斷じて惡といはなければならぬ。貧民はたとひ饑ゑるにしても、結束して慈善を却ける所に未來の幸福を見出だす筈である。かういふ倫理觀の僕に興味のあるのはひとり上記の理由によるのみではない。これは明治廿何年かの先生の倫理觀たるにとどまらず、同時にまた大正何年かのプロレタリアの倫理觀ではないであらうか?……

のみならずこの倫理觀は先生の愛する超自然的存在、――幽靈や妖怪にも及んでゐる。尤も先生の初期の作品は必ずしも惡靈を避けなかつた訣ではない。「湯女の魂」の蝙蝠の如きはこの惡靈の尤なるものである。しかしその後の超自然的存在はいつか倫理的に向上した。「深沙大王」の禿げ佛、「草迷宮」の惡左衞門等はいづれも神祕の薄明りの中にわれわれの善惡を裁いてゐる。彼等の手にする罪業の秤は如何なる倫理學にも依るものではない。ただわれわれの心情に訴へる詩的

正義に依るばかりである。それにもかかはらず――といふよりも寧ろその爲に彼等は他に類を見ない、美しい威厳を具へ出した。「天守物語」はかういふ作品の最も完成した一つである。われわれの文學は「今昔物語」以來、超自然的存在に乏しい訣ではない。且また近世にも「雨月物語」等の佳作のあることは事實である、けれども謠曲の後ジテ以外に誰がこの美しい威厳を彼等の上に與へたであらうか？

第二に先生の作品は獨特の措辭に富んでゐる。これは多言するを待たないかも知れない。ただ僕の信ずる所によれば、先生の文章は世間一般の獨特とするよりも獨特である。先生のやうに一篇の作品のうちに口語を用ひ、文語を用ひ、漢詩漢文の語を用ひ、更にまた名詞等を用ふる作家は明治大正の間にないばかりではない。若し他に匹を求めんとすれば、恐らくは謠曲を獨造した室町時代の天才だけであらう。この特色もまた先生をあらゆる文壇的陣營の外に立たせることになつたのは勿論である。第三に――第三以下を論ずることは紙面の都合上見合せなければならぬ。

しかし上に述べた兩特色だけでも優に先生を殺すに足るものである。異を却け同を愛することは文壇も世間と變りはない。敢然と一代の風潮にさからふからには、たとひ命に別條はないにもせよ、われわれの文壇的存在は危ふいものと覺悟しなければならぬ。けれども畢に文壇は先生を殺すことに失敗した。「鏡花全集」十五巻は先生の勝利を示すものである。これは天下の鏡花贔屓

の意を強うする所以ばかりではない。詩的正義を信ぜざること、僕の如き冷血漢も大いに意を強うする所以である。卽ちこの惡文を草し、僕の一家言を公にすることにした。若しそれ先生の作品を論じてプロレタリアの倫理觀などに及んだ爲に先生の苦笑を買ふとすれば、「本是山中人、愛說山中話」――先生の寬容を待つ外はない。（修善寺にて）

（大正十四年三月）

人及び藝術家としての薄田泣菫氏

薄田泣菫氏及び同令夫人に獻ず

序文

人及び詩人としての薄田泣菫氏を論じたものは予の著述を以て嚆矢とするであらう。只不幸にも「サンデイ毎日」の紙面の制限を受ける爲に多少の省略を加へたのは頗る遺――序文以下省略。

第一部　人としての薄田泣菫氏

一　薄田泣菫氏の傳記

「泣菫詩集」の卷末の「詩集の後に」の示してゐる通り、薄田泣菫氏は備中の國の人である。試みに備中の國の地圖を開いて見れば――以下省略。

二　薄田泣菫氏の性行

薄田泣菫氏の「茶話」は如何に薄田氏の諧謔に富み、皮肉に長じてゐるかを語つてゐる。この天成の諷刺家に一篇の諷刺詩もなかつたのは殆ど奇蹟と言は――二以下省略。

三　薄田泣菫氏の風采

薄田泣菫氏は希臘の神々のやうに常に若い顔をしてゐる。けれども若い顔をして一代の詩人になつてゐることは勿論不似合と云はなければならぬ。「泣菫詩集」の巻頭に著者の肖像の掲げてないのは明らかに薄田氏自身も亦この缺點を知つてゐるからであらう。しかしその薄田氏の罪でないことは苟くも――三以下省略。

第二部　詩人としての薄田泣菫氏

一　敍事詩人としての薄田泣菫氏

敍事詩人としての薄田泣菫氏は處女詩集たる「暮笛集」に既にその鋒芒を露はしてゐる。しかし

その完成したのは「二十五絃」以後と云はなければならぬ。予は今度「葛城の神」「天馳使の歌」「雷神の賦」等を讀み往年の感歎を新にした。試みに誰でもそれ等の中の一篇――たとへば「天馳使の歌」を讀んで見るが好い。天地開闢の昔に遡つたミルトン風の幻想は如何にも雄大に描かれてゐる。日本の詩壇は薄田氏以來一篇の敍事詩をも生んでゐない。少くとも薄田氏に比するに足るほど、藝術的に完成した一篇の敍事詩をも生んでゐない。この一事を以てしても、詩人としての薄田氏の大は何びとにも容易に首肯出來るであらう。予は少時「葛城の神」を讀み、予も亦いつかかう言ふ敍事詩の詩人になることを夢みてゐた。のみならずいつか「葛城の神」の詩人に敎へを受けることを夢みてゐた。第二の夢は幸にも今日では旣に事實になつてゐる。しかし第一の夢だけは――以下省略。

二　抒情詩人としての薄田泣菫氏

昨年の或夜、予の或友人、――實は久保田万太郎氏は何人かの友人と話してゐる時に「ああ大和にしあらましかば」を暗誦し、數行の後に胴忘れをした。すると或年下の友人は恰もそれを待つてゐたかのやうに、忽ちその先を暗誦したさうである。抒情詩人としての薄田泣菫氏の如何に一代を風靡したかはかう言ふ逸話にも明かであらう。しかし薄田氏の抒情詩は「ああ大和にしあら

ましかば」「望郷の歌」に至る前に夙に詩壇を動かしてゐる。予は「ゆく春」の世に出た時――二以下 省略。

三　先覺者としての薄田泣菫氏

薄田泣菫氏を古典主義者としたのは勿論詩壇の喜劇である。成程薄田氏は餘人よりも古語を用ひたのに違ひない。しかし古語を用ひた爲に薄田氏を古典主義者と呼ぶならば、「海潮音」の譯者上田敏をもやはり古典主義者と呼ばなければならぬ。薄田氏の古語を用ひたのは必ずしも柿本人麿以來の古典的情緒を歌つたからではない。それよりも寧ろ予等の祖國に珍しい情緒を歌つたからである。詩壇はかう言ふ薄田氏に古典主義者の名を與へながら、しかも恬然と薄田氏の拓いた一條の大道に從つて行つた。この大道はまつ直にラファエル前派の峯を登り、象徵主義の原野へ通じてゐる。薄田氏は豫言者モオゼのやうにその原野の土を踏まなかつたかも知れない。けれども確に眼底には「夕くれなゐの明らみの黄金の岸」を見てゐたのである。予は今度「白羊宮」を讀み、更にこの感を――三以下 省略。

(イ)人——薄田泣菫氏の明治三十年以來詩人、小說家、戲曲家等を作れるは枚擧すべからず。その主なるものは下の如し。(但しアイウエオ順)芥川龍之介。——(イ)以下省略。

(ロ)詩並びに散文。——明治二十九年或は三十年に雜誌「新著月刊」に「花密藏難見」を發表す。明治三——(ロ)以下省略。

附錄二　著者年譜

(但し逆編年順)大正十四年二月、「泣菫詩集」を上梓す。發行所大阪毎日新聞社。——附錄二以下省略。

(大正十四年四月)

「太虚集」讀後

我我を支配する迷信のうち、最も牢固たるものの一つは脂肪に對する迷信である。由來肥胖の漢は瘦癯の夫よりも鈍重のやうに信ぜられ易い。が、その當にならぬことは敏感を極めたSainte-Beuveの體重に徵してもわかることである。僕の信ずる所によれば、島木さんも亦この例に洩れない。尤も島木さんは御自身でも「のろま」を以て任ずる人である。しかしそれは抑損の辭か、或は英雄人を欺く辣手段であると思はなければならぬ。その證據には島木さんは到底「のろま」には作られぬ歌を何首も「太虚集」中に示してゐる。

玉きはる命かよわし久びさに今日つきにける玉章の文字（土田耕平飯山に病みて未だ歸らず）

うち日さす都少女の黑髮は隅田川べの土に散りばふ（關東震災）

これ等の歌を作ることは如何に鍛錬を重ねたとしても、到底「のろま」には成し得るものではない。しかし又古今の才子にもせよ、これ等の歌を作る爲には鍛錬を要することは確かである。若

し夫れ島木さんの鍛錬に至つては——無用の筆墨を費すよりも先に「太虚集」の歌を一瞥すれば好い。

山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり（有明温泉）

朝づく日とほるを見れば茂山のはざまに靄はのこりたるらし（をりをり）

ふる雨に音するばかりこの山の櫟若葉はひらきけるかも（山の湯）

これ等の歌の僕などに猛烹極煉の功を感ぜしめないのは即ち島木さんの鍛錬の綿密を極めてゐる爲であらう。若し又かう言ふ平實のうちに超逸の趣を藏した歌も鍛錬を待たずに出來るとすれば——愈島木さんは「のろま」ではない。しかし島木さんを考へるに、（僕はいつも作品よりも作家を考へずにはゐられぬものである。）島木さんをして「のろま」の名を僣（?）せしめるものは脂肪に對する迷信の外にも一つには又牛に對する偶像崇拜の祟りである。牛は「のろま」であると共に強いことも一通りではない。その爲に現代の拜牛教徒はいつか「のろま」を目するのに強いことの必須條件としてゐる。島木さんは決して「のろま」ではない。が、島木さんの強いことは誰でも疑はない所である。是に於て乎島木さんはおのづから「のろま」の稱を得たのであらう。「太虚集」中の歌も益良夫さびた剛徳に富んでゐることはやはり筆墨を費さずとも好い。唯この天資剛健なること、信濃の山山に似た島木さんにして燥裂の病を生じなかつたのは白汗百回底の勇猛を極め

た島木さんの精進の功德である。

　　つぎつぎに過ぎにし人を思ふさへはるけくなりぬ我のよはひは（夜坐）

かう言ふ丈の高い歌はしぶとくも（と言ふより言ひかたはない。）精進を續けて來た島木さんにして始めて成し得るのであらう。

　　我さへや遂に來ざらむ年月のいやさかり行く奧津城どころ（左千夫忌）

この如何にも堂堂としたうちに沈痛な響きの籠つた味ひも煙火を食らふものの知らざる所である。これ等の歌は必ずしも「太虛集」中の絕唱ではないかも知れない。しかし僕はこれ等の歌に、――蒼勁を極めたこれ等の歌に最も敬禮の念を生ずるものである。では最も敬禮の念を生ぜぬのはどう言ふ歌かと問はれれば、――答へることは問ふことほど容易ではない。のみならず島木さんは高下を問はず、「太虛集」中の歌と言ふ歌に並み並みならぬ完成を與へてゐる。が、强ひて一首を擧げれば、この歌などは美しいだけに反つて多少の危さを孕んでゐるのではないであらうか？

　　冬菜まくとかき平らしたる土明かしもの幽けきは晝ふけしなり

島木さんは現代の日本に於ける最も完成した作家の一人である。街頭の犬は何と吠えてもこの事實だけは嚴として動かすことは出來ない。若し島木さんをして盛唐に生ぜしめたとしても、「太虛集」は必ず長安の市上に三千部以上賣れたことであらう。僕の言を信ぜぬものは、――少くとも

常談と思ふものは、試みに韋蘇州の五言絶句を島木さんの歌に比べて見るが好い。島木さんの氣格の古に入つてゐることはおのづから瞭然となる筈である。

わたる日の光寂しもおしなべて紅葉衰ふる古國原に(明日香)

菰樓日登眺　流蔵暗蹉跎　坐厭淮南守　秋山紅樹多(登樓)

景情はもとより同一ではない。が、沈着靜逸の氣はおのづから彼此相通じてゐる。島木さんも盛唐に生まれたとすれば、――少くとも「太平洋會議」「くさぐさの歌」等により、島流しぐらゐにはなつたのに違ひない。かたがた島木さんの歌を讀んで、官卑く祿薄かつた海彼岸の詩人に及んだ所以である。妄評萬死。

(大正十四年七月)

「ふゆくさ」讀後

僕等第三次「新思潮」の同人中、まつ先に一家の風格を成したものは菊池寛でも、久米正雄でも、山本有三でも、豊島與志雄でもない。「ふゆくさ」の作者土屋文明である。「牧場の兄弟」以前の久米の作品、「女親」以前の山本の作品、「恩人」以前の豊島の作品等はいづれも大正二三年頃の土屋の作品ほど完成してゐない。況や菊池や僕などは土屋が「山上相聞」や「白楊花」の連作を作つてゐた時にも、まだ暗中摸索の境から殆ど一歩も出ずにゐたものである。

僕は當時土屋文明と誰か若い歌人の歌を論じ合つたことを覺えてゐる。土屋はその時僕の爲に、東洋的抒情詩を對象とするや、如何に僕の鑑賞眼は幾多の誤差を生ずるかと言ふことを、――つまり談一たび歌に及ぶや、如何に僕は莫迦になるかと言ふことを頗る雄辯に説明した。僕が今日柿本人麻呂とか乃至は藤澤古實とか言ふ、入らざる名前を覺えるやうになつたのは一にその老婆心切なる土屋の説明のおかげである。(と言ふのは必しも土屋ほどの敎師は滅多にあるまいと言ふ

意味ではない。寧ろ僕ほど覺えの好い生徒は信州松本の女學校にも一人もゐなかつたらうと言ふ意味である。）のみならず僕はこの說明の爲にいつか土屋の歌を讀み出し、從つて或は親と雖も知らぬ土屋の面目をも感ずるやうになつた。

土屋文明は赤い顏をして、帽子のブラッシュに似た口髭を生やして、時によれば胸毛までも公表しかねぬ荒御魂である。が、それは外見だけに過ぎない。本來は何ごとにも感じ易い、同時に又恐らくは傷き易い、「なほ下つゆの乾かざる落葉の中のりんだうの花」の如き、或は又「白砂に淸き水引き植ゑならぶわさび」の花の如き和御魂である。土屋はかう言ふ僕の言葉に或は不服を唱へるかも知れない。けれども「ふゆくさ」の歌の存する限り、――いや、四字中三字までもひの音をまつ直に並べた「ふゆくさ」の名の存する限り、勿論僕は如何なる異議にも再考の餘地を與へぬつもりである。

「ふゆくさ」の三百八十首の歌は少くとも僕には和御魂土屋文明を示すものである。或は和御魂土屋文明の精進の跡を示すものである。僕は前に「新思潮」の同人中、まつ先に一家の風格を成したものは土屋文明であると言つた。しかし和御魂土屋文明は必しも天下の歌人中最も完成した一人ではない。或時は和御魂に安んずる餘り、危く甜俗に流れようとしたり、或時は又和御魂に安んずることを恐れる餘り、すんでに板俗に墜ちようとしてゐる。けれども和御魂に安んじて、し

かも和御魂に安んじたかつた時には、――その先は土屋などに聞かせずとも好い。兎に角僕はそんな時には神田の大火事を見損なつた時の腹立たしさに近い心もちを感じた。

かたむける麓の原の村二つ家立ちひくく土につきたり（富士見高原）

暫く一首だけを抄するとしても、この歌などは殘念ながら、多少土屋に敬意を拂つて然るべき滋味があるやうである。若し又ないと言ふ人があれば、――土屋のうぬ惚れを煽り立てることは勿論僕の好む所ではない。しかし萬一ないと言ふ人があれば、僕は更に二三十首の歌に就き、いつでも論戰に應ずるつもりである。

土屋は天下の歌人中、最も完成した一人ではない。が「ふゆくさ」は一卷の中に幾つかの殼を破つてゐる。のみならず「ふゆくさ」の卷尾の歌及び「ふゆくさ」以後の歌は何か寂しい輕みを帶びた、新らしい心境へ移りかかつてゐる。土屋ばかりずんずん進歩するのは決して僕には愉快ではない。しかし土屋も苦行してゐるのは小氣味よくも又愉快である。

これは恐らくは僕のみに限らず、第三次「新思潮」の同人は誰も皆僕と同感であらう。今この惡文を草し了るのに當り、はるかに言を土屋文明に寄せる。命のあるうちは戰はうや。

（大正十四年九月）

平田先生の飜譯

國民文庫刊行會の「世界名作大觀」の第一部の十六册の――どうも少し長い。が、兎に角國民文庫刊行會の「世界名作大觀」の第一部の十六册の大部分は平田禿木先生の飜譯である。平田先生にはまだ一度しか御目にかかつたことはない。が、好男子で、もの優しくて、美しい聲をしてゐて――要するに如何にも往年の「文學界」同人の一人らしい、甚だ瀟洒とした先生である。この瀟洒とした先生が國民文庫刊行會の「世界名作大觀」の第一部の十六册の大部分を飜譯したと言ふことは少くとも僕には神祕だつた。元來瀟洒としたなどと言ふ感じは精力を想はせるものではない。しかし平田先生の飜譯を見れば、デイケンズ、サツカレエ、ラム、メレデイス、ジエエムス、ハアデイイ、ワイルド、コンラツド等を網羅してゐる。僕は飜譯することは勿論唯一通り意味をとるのにさへ、これ等の中の或るものには、――たとへば「エゴイスト」(メレデイス)には辟易した。それをかかる瀟洒とした先生が何册も飜譯したと言ふことは――平田先生には或は失禮かも知れ

ない、けれども正直に白狀すれば、確に僕は今更のやうに、人は見かけによらぬものだと思つた。

これだけの飜譯をすることは勿論容易ならぬ仕事である。殊に平田先生のやうに眞劍に飜譯することは愈容易ならぬ仕事である。僕の信ずる所によれば、我々日本人は日本語の中にも無數の英語を用ひてゐる癖に存外英吉利文藝に親んでゐない。なぜ又親んでゐないかと言へば、一つは英語の普及してゐる爲に却て英吉利文藝を輕視することであり、もう一つは又不幸にも英吉利は丁度前世紀末の文藝的中心にならなかつた爲に自然と英吉利文藝を等閑に附し易いことである。しかし前世紀末の英吉利文藝は必ずしも光彩に乏しい訣ではない。ペエタアの如き、ワイルドの如き、ショウの如き、ムウアの如き、幾多の才人が輩出してゐる。のみならずたまたま前世紀末の文藝的中心ではなかつたにもしろ、その爲にヴイクトリア王朝を始め、歷代の英吉利文藝を顧みないのは餘りに手輕すぎると言はなければならぬ。現に一ディケンズを以てしても、その澎湃たる人道的精神の影響はトルストイやドストエフスキイにも及んでゐるではないか？若し夫れ英語の普及してゐる爲に英吉利文藝を輕視するに至つては石や砂の普及してゐる爲に日本アルプスを輕視するのと選ぶ所はない。第一意味をとるだけでも、メレデイス、ジエエムス、ペエタア等の英吉利文藝の峯々に攀づることは好い加減の語學力では出來ぬことである。平田先生の飜譯はかう言ふ我々日本人にかう言ふ英吉利文藝を紹介する上に大益のあるのは言ふを待たない。實

はこの飜譯のある爲に（おまけに原文さへついてゐると言ふから）「デエヴイツド・カツパアフイルド」「チヤンス」「テス」等を語學の教科書に用ひることは不可能になりはしないかと思ふ位である。

　僕の平田先生の飜譯を讀んだのは「ヴアニテイ・フエエア」（虛榮の市）と「エゴイスト」（我意の人）とだけである。が、讀んだ所を以て讀まない所を推すとすれば、今度の「テス」や「チヤンス」の飜譯も定めし立派なものであらうと思ふ。元來後學僕の如きものは先生の飜譯を云々する資格のないものに違ひない。が、萬一先生の仕事も如何はしい世間並みの飜譯と同樣に扱はれた日には心外だと思ひ、敢てこの惡文を草することにした。次手を以て平田先生の高免を得れば幸甚である。

（大正十四年）

「輪廻」讀後

長篇小說「輪廻」は先輩森田草平氏の十年ぶりの作品である。のみならず四六判の本にしても六百十七ペエヂといふ大作である。森田氏は前後三年間、この作品を書き上げるために全幅の精神を傾けたらしい。現に「比較的力を籠めた作としては「煤煙」「自敍傳」それから直ぐにこの作といふやうな氣がしてゐる。或ひは「煤煙」も「自敍傳」もない、ただこの作だけといふやうな氣もする」とは、森田氏自身のいふ所である。如何に森田氏がこの作品を一生の記念碑にしてゐるかはそれだけでも容易にうかがはれるであらう。

「輪廻」は一部の戀愛小說であるが、ただの戀愛小說ではない。悲劇的な親子の關係を背景に控へた戀愛小說である。森田氏は「輪廻」の主人公迪也の父を天刑病者にした。のみならず迪也を母のお繁と土居との不義の子にした。從つて迪也は天刑病者の血を受けてゐないにも拘らず、ただその家の子であるために小夜子との戀愛にも破れなければならぬ。尤も森田氏は迪也のために公

然と世間を非難してはゐない。しかし迪也の抒情詩的嗟嘆は同時にまた對社會的抗議である。讀者は「輪廻」の至る所にこの抗議の聲を耳にするであらう。

「いづれにしても……おれはこれから家といふ重荷を背負つて世の中に立つのだ……おれはこの家の子であることを恥てはならない。」

かういふ迪也親子の悲劇を縱に「輪廻」をつらぬくものとすれば、横に「輪廻」を裏づけるものは「番太」階級の悲劇である。森田氏はやはりこの階級のためにも代辯者の地位には立つてゐない。ただおのづからなる代辯者——この階級の娘に生まれたお粂を描いてゐるばかりである。或はお粂を中心にした一家族を描いてゐるばかりである。かれ等並びにかれ等の生活の描寫は迪也親子の場合ほど悲劇的效果は與へぬにもせよ、第九回、第十回、第十一回等にわたり、それぞれ出色の文字に富んでゐる。實際又「輪廻」に登場する比較的多數の人物中、單に最も興味のある性格の持主を擧げるとすれば、讀者は何人も第一の指をお粂に屈するのをためらはぬであらう。僕もまた「輪廻」を讀んでゐるうちにこの十九から身を賣つた女に——しかも道德的に健全な女に何度も微笑せずにはゐられなかつた。

「輪廻」の手法はどこを取つて見ても、綿密そのもののやうに出來上つてゐる。森田氏は一情景を細叙する上に如何なる手數もをしまなかつたらしい。たとへば迪也と小夜子との田舍の小料理

屋に身を隱すあたりは(第二十五回及び二十六回)水彩畫的な趣に富んだ、のびのびと美しい一節である。が、森田氏はかういふ中にも丹念に小夜子の鼻にたまつた汗の粒を描いてゐる。尤もこの細叙主義は必ずしも常に有效ではない。いや、僕は森田氏にしてもつと筆かずを減らしたならば、却つて精彩を生じた場合も多くはなかつたかと思つてゐる。現に疎描した土居の隱居の存外鮮かに浮き出してゐるのもその證據になりはしないであらうか?

しかし「輪廻」はそれ等の外にも著しい特色をそなへてゐる。僕は「輪廻」を讀み終つた後、勿論迪也に憐憫を感じた。が、かれの兩親には更に一層の憐憫を感じた。かれ等はかれ等自身のためには終始一言も辯じてゐない。けれども僕はかれ等の姿に或最も人間的な欲望――わが子の理解と同情とを求める親ごころを感ぜずにはゐられなかつた。これは或は森田氏には有難迷惑の讃辭だかも知れない。しかし未だに僕の心に深い痕跡を殘してゐるのは何よりも先にこの效果である。この妙に東洋的な、骨身にこたへて來るさびしさである。僕はこのさびしさを感じただけでも「輪廻」を讀んだことを悔いなかつた。妄評多罪。(二月二十三日)

(大正十五年)

「猪・鹿・狸」

僕の養母の話によれば、幕末には銀座界隈にも狸の怪のあつたといふことである。酒に醉つた經師屋の職人が一人(或は親方だつたかも知れない)折か何かぶらさげながら、布袋屋の横町へさしかかると、いゝ犬が一匹道ばたに寢てゐた。犬は職人が通りかかるが早いか、突然尾でも踏まれたやうにきやんと途方もない大聲を出した。職人は勿論びつくりした。するといつか下げてゐた折も足もとの犬も見えなくなつてゐた。これは狸が折を盜むために職人を化したとかいふ噂だつた。

……

今日の銀座界隈に狸のゐないことは勿論である。いや、早川孝太郎さんの「猪・鹿・狸」(郷土研究社出版)の教へるところによれば、遠江の國横山にさへ狸の人を化すことはだんだん稀になつて行くらしい。しかしその話だけは未だに澤山殘つてゐる。のみならずそれは人跡の少い山澤の氣を帶びてゐるだけに經師屋の職人の話よりも底氣味の惡いものを含んでゐる。

――或男が日暮方に通りかかると、道の傍の石に腰をかけてゐる人があつた。かたはらへ寄つて見たら、それが男だか女だか、又前向きだか後向きだか薩張り分らなんださうである。――かういふ話は、世間に多い怪談より餘程無氣味である。尤も「猪・鹿・狸」はその標題の示す樣に狸の話ばかり書いたものではない。同時に又前に擧げたやうに氣味の惡い話ばかり書いたものでもない。僕はこの本を讀んでゐるうちに、時々如何にも横山じみた美しい光景にも遭遇した。

――又自分の村の山口某は山中の杣小屋へ、村から飛脚に立つた時途中の金床平の高原で夥しい鹿を見たといふた。(中略)金床平へ掛かつた時は、八月十五夜の滿月が晝のやうに明るかつたさうである。見渡す限り廣々とした草生へ掛かつて、初めて鹿の群を見た時は、びつくりしたといふ。丸で放牧の馬のやうに、何十とかず知れぬ鹿が月の光を浴びて一面に散らかつてゐたさうである。人間の行くのも知らぬ氣に平氣で遊んでゐたのは恐ろしくもあつたが、見物でもあつた。中には道の中央に立ふさがつたり、脇から後を見送つてゐるのもあつた。――

かういふ鹿の大群の話に、フロオベエルの「サン・ジユリアン」の狩の一節を思ひ出すものは僕ばかりではないかも知れない。「猪・鹿・狸」は民俗學の上にも定めし貢獻する所の多い本であらう。しかし僕の如き素人にも、その無氣味さや美しさは少からず魅力のある本である。僕は實際近頃にこのくらゐ愉快に讀んだ本はなかつた。卽ち「オピアム・エツクス」をのむ合ひ間にちよつ

とこの紹介を草することにした。若し僕の未知の著者も僕の「おせつかい」をとがめずにくれれば仕合せであると思つてゐる。（一五・一一・二七）

「庭苔」讀後

僕は今大阪にゐます。從つて又岡麓さんの歌集「庭苔」も手もとに持つてゐません。しかし「庭苔」を讀んだ時の印象だけははつきり殘つてゐます。

「アララギ」に載つてゐる歌は大抵東京人の歌ではありません。が、岡さんの歌だけは例外です。いや、これは岡さんの歌ばかりではない、高田浪吉さんの歌もそのお仲間でせう。高田さんの歌は東京人の所謂「まち」の人のうたつた歌です。僕は彼是二十まで本所に住んでゐましたから、何か高田さんの歌を見る度に親しみを感じずにはゐられません。同時に又正直に白狀すれば、藝術的自己嫌惡に陷つてゐる時には反つて不滿も生じ易いのです。(どうか高田さんは僕の言葉を身うちのものの我儘と思つて下さい。)しかし岡さんの歌は僕のやうに溝板を踏んで育つたものの歌ではありません。それだけに僕には高田さんの歌よりも親しみに終始することも出來るのです。

東京人の歌であるかないかと云ふことは勿論その歌の藝術的價値には何も關係はありません。

が、兎に角紛れない特色であるとは言はれるでせう。

僕は今大阪にゐます。大阪に？——しかし近年の東京は餘り大阪と變りません。東京の料理を滅ぼした大阪は東京の建築さへ滅ぼしてゐます。若し今日の東京に二十年前の東京らしい、——或は明治時代の東京らしい、落ち着いた町々を求めるとすれば、あの大地震の時の火事を免かれた山の手の町々の裏通りだけでせう。僕は「庭苔」を讀んでゐるうちに度たびこの東京を感じました。殊に「しもたや」の塀の外に黄ばんだ梧桐の落葉などの風に吹かれてゐる町々の景色を、それから又塀の中に傳統的な喜劇や悲劇を靜かに演じてゐる人々の姿を。

これは或は「庭苔」の批評にはならないものかも知れません。が、その邊は門外漢の言葉として大目に見て頂ければ幸甚です。

即興

この家や火事にもあはで庭の苔

（昭和二年六月）

「獄窓から」を讀んで

僕は和田久太郎君に會つたことはない。又社會運動家としての君のこともごくぼんやりとしか知つてゐない。かういふ君を論ずるのは、僕のほかに人も多いであらう。僕はただ和田君の雜筆や俳句や歌を集めた「獄窓から」といふ本を讀み、この本のうちに現れた君のことをちよつと紹介したいのである。

和田君はその書簡の中に（堺利彦宛・八月十九日）かういふことを書いてゐる。

——先達つて讀んだ、玄耳庵支那叢書「興亡」の中の、徽宗帝最期の場面の處に、「この地方（均州）は、死人があれば必ず屍を火でたき、半燒きになつた頃、定りの石坑の中へ投げ込んで置く。そして置いて、その穴の中の水で燈油を製する。」……これを讀んでフト思ひ出したのは、先年歐洲戰爭の最中に、ドイツ軍が死體から油をとるといふ事が日本の思想界に憤慨を起させて、「惡魔の所業だ!!」「人道の敵だ!!」と、やかましく論ぜられたことです。そして貴君と高畠素之君とは、

それ等の人々の、エセ人道主義を嘲笑つて「流石にドイツだ!!　徹底してゐて面白い。戰爭で生きた人間を平氣で殺す人道主義者が、死體から油をとるのを悪魔といふんだから滑稽だ!!」と大いに皮肉られた、あの事をです。……處で、こんどこの本を讀みながら僕のフト感じた事は「支那人といふ奴は、隨分慘酷なことを平氣でやるものだナー」といふにあつたのです。……だが、理性は、それを決して悪いことだとは考へないのです。けれども、その理性にそむくセンチメンタルな氣持があつて、「慘酷だ!!」と叫ぶんです。……

×

和田久太郎君は、この書簡の中に、君の心臟を現してゐる。しかも社會運動家でも何でもないわれわれに近い心臟をあらはしてゐる。僕はここに理性の力を云々しようとは思つてゐたい。又和田君の心臟を云々しようとも思つてゐない。ただこの心臟の持ち主は、同時にまた唯物主義的に鋭い頭腦の持ち主だつた。これは勿論和田君には悲劇的な矛盾である。しかし同時代に生れ合はせたわれわれに共通する矛盾である。和田君はこの矛盾を持つてゐるために必ずしも人を加へないかも知れない。けれどもとにかくわれわれには少からず親しみを加へるのである。

×

和田君は前にもいつたやうに、俳句や歌を作つてゐる。しかし巧拙といふ上では歌は到底俳句

に如かない。それは「句作のおもひ出」の教へるやうに、十三の歳から句作してゐた和田君には當然といはなければならぬ。和田君はあのしぶとかつた俳諧寺一茶を愛してゐる。が、君の俳句はどれを見ても一茶のやうに辛辣ではない。その代りに一茶よりもやさしみを持つてゐる。(僕は「獄窓から」の中にある俳句だけは殘らず讀んでしまつた。)君の獄中の生活は、成程君の俳句の中にも暗い影を投げてゐるのであらう。實際又「くびれくびれ南京蟲の食ひかす」などといふ作は悲愴であるのに違ひない。けれどもそこにさへ感ぜられるものは一茶の圖太さには遠いものである。

×

和田久太郎君は恐らくは君の俳句の巧拙など念頭に置いてはゐないであらう。僕もまた、獄中にゐる君の前に俳談をする勇氣のないものである。しかし君の俳句は、幸か不幸か僕を動かさずには措かなかつた。僕は前にもいつたやうに、何も和田君のことは知つてゐない。けれども僕は「獄窓から」を讀み、遠い秋田の刑務所の中にも天下の一俳人のゐることを知つた。

のどの中へ薬塗るなり雲の峯
五月雨やあか重りする獄の本
麥飯の虫ふえにけり土用雲
しんかんとしたりやな蚤のはねる音

かういふ俳句を作るものは和田君の外にはないであらう。僕は或は和田君のかういふ俳句を作ることも排悶のためかと思つてゐる。しかし君の才力や修練は「排悶のため」を超越してゐる。僕は「獄窓から」を前にしたまま、一氣にこの短い文章を草した。これもまたわれわれ――「怠惰なる日の怠惰なる詩人」たちにはやはり排悶のためになるからである。

（昭和二年三月）

雜俎

文學好きの家庭から

私の家は代々御奥坊主だつたのですが、父も母も甚だ特徴のない平凡な人間です。父には一中節、圍碁、盆栽、俳句などの道樂がありますが、いづれもものになつてゐさうもありません。母は津藤の姪で、昔の話を澤山知つてゐます。その外に伯母が一人ゐて、それが特に私の面倒を見てくれました。今でも見てくれてゐます。家中で顏が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通點の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出來たかどうかわかりません。

文學をやる事は、誰も全然反對しませんでした。父母をはじめ伯母も可也文學好きだからです。その代り實業家になるとか、工學士になるとか云つたら反つて反對されたかも知れません。

芝居や小說は隨分小さい時から見ました。先の團十郎、菊五郎、秀調なぞも覺えてゐます。私が始めて芝居を見たのは、團十郎が齋藤內藏之助をやつた時ださうですが、これはよく覺えてゐ

ません。何でもこの時は内藏之助が馬を曳いて花道へかかると、棧敷の後で母におぶさつてゐた私が、嬉しがつて、大きな聲で「あゝうまえん」と云つたさうです。二つか三つ位の時でせう。小說らしい小說は、泉鏡花氏の「化銀杏」が始めだつたかと思ひます。尤もその前に「倭文庫」や「妙々車」のやうなものは卒業してゐました。これはもう高等小學校へ入つてからです。

私と創作

——「煙草と惡魔」の序に代ふ——

　材料は、從來よく古いものからとつた。そのために、僕を、としよりの骨董いぢりのやうに、いかものばかり探して歩く人間だと思つてゐる人がある。が、さうではない。僕は、子供の時にうけた舊弊な教育のおかげで、昔からあまり、現代に關係のない本をよんでゐた。今でも、讀んでゐる。材料はその中から目つかるので何も材料をさがす爲にばかりよむのではない。（勿論さがす爲によんでも、惡いとは思はないが。）

　が、材料はあつても、自分がその材料の中へはいれなければ、――材料と自分の心もちとが、ぴつたり一つにならなければ、小說は書けない。無理に書けば、支離滅裂なものが出來上る、僕はあせつて何度もさう云ふ莫迦な目に遇つた。唯、弱るのは、その一つになる時が、何時來るかわからない事である。材料を手に入れて、すぐさうなる事もあるし、材料を持つてゐる事を殆ど忘れた時分になつて、やつとさうなる事もある。飯を食つてゐる時でも、本を讀んでゐる時でも、

後架にゐる時でもかまはない。その時は、眼の先が明くなつたやうな心もちがする。

そこで、書くものが出來ると、早速書きはじめる。時間は午前中と夜の六時頃から十二時頃までが、一番働き易い。夜の十二時すぎになると、その時は夢中になつて書いてゐても、あくる日見て、いや氣のさす事がよくある。日で云ふと風の吹く日がいけない。季節は、十月から四月頃が、いいやうだ。場所は、靜で、或程度まで明くさへあれば、何處でも差支へない。

書き出すとよく、癇癪が起る。尤もこれは、起るやうな周圍の中に置かれてあるから、起るので、さもなかつたら、起らないのにちがひない。少くとも餘程穩な心もちでゐられさうに思はれる。が、從來どうもさう行かなかつたから、ものを書く時は、よく家のものをどなりつけた。

癇癪を起さない限り、書く事はずんずん書ける。時によると、字を書いてゐる暇が面倒臭い事もある。もし間へれば、手あたり次第、机の上の本をあけて見る。さうすると、大抵二頁か三頁よむ中に、書けるやうになつてくる。本は何でも差支へない。子供の時から字引きをよむ癖があるから、デイクソンの熟語辭書なんどをよむ事もある。尤も、書くと云つても、消す事も、書く中へ入れて云ふのだから書き上げた枚數と時間との割合から云へば、寧ろ遲筆の方にはいるらしい。消す方は別して未練なく消す。それでもまだ消し足りなさうな氣がするが。

書いてゐる時の心もちを云ふと、拵へてゐると云ふ氣より、育ててゐると云ふ氣がする。人間

でも事件でも、その本來の動き方はたつた一つしかない。その一つしかないものをそれからそれへと見つけながら書いて行くと云ふ氣がする。一つそれを見つけ損ふと、もうそれより先へはすすまれない。すすめば、必ず無理が出來る。だから、始終注意を張り詰めてゐなければならない。はりつめてゐても、僕などは、まだ見のがしてしまふ。それが兎に角苦しい。

それから文章にも、可也くだらなく神經をなやませる。これは僕には時と場合でとても使へない語があつたり、句の調子が妙に氣になつたりするのだから、仕方がない。たとへば柳原と云ふ町の名前でも、一面にそこいらが綠になるやうな氣がして、その綠に折合ふやうな外の色の語がない以上、どうしても使ふ氣にはなれない。これだけは、實際祟られたと云ふ氣がしてゐる。

書いてしまふと、何時でもへとへとになる。書くだけはもう當分御免を蒙らうと云ふ氣になる。が、一週間も何も書かずにゐると、やつぱりさびしくつて、いけない。何かしら書いて見たくなる。さうして又、前の順序をくり返す。この調子では、これにも死ぬ迄祟られさうである。

書いたものは、活字でよむと、多くの場合いやになる。今までは何時でも、書き方より、こんな物の見方では救はれないと云ふ氣が、痛切にして、云はば書いてゐる時より、ふだんの生活そのものに、愛憎がつかしたくなるのである。それから先は、二度目に見て、見直す場合と、愈〻惡くなる場合とあるが、これはその時々によつてわからない。

（大正六年六月）

一番氣乘のする時

僕は一體冬はすきだから十一月十二月皆好きだ。好きといふのは、東京にゐると十二月頃の自然もいいし、また町の容子もいい。自然の方のいいといふのは、かういふ風に僕は郊外に住んでゐるから餘計そんな感じがするのだが、十一月の末から十二月の初めにかけて、夜晩く外からたんど歸つて來ると、かう何ともしれぬ物の臭が立ち籠めてゐる。それは落葉のにほひだか、霧のにほひだか、花の枯れるにほひだか、果實の腐れるにほひだか、何んだかわからないが、まあいいにほひがするのだ。そして寢て起きると木の間が透いてゐる。葉が落ち散つたあとの木の間が朗かに明くなつてゐる。それに此處らは百舌鳥がくる。鵯がくる。たまに鶺鴒がくることもある。田端の音無川のあたりには冬になると何時も鶺鴒が來てゐる。それがこの庭までやつてくるのだ。夏のやうに白鷺が空をかすめて飛ばないのは物足りないけれども、それだけのつぐなひは十分あるやうな氣がする。

町はだんだん暮近くなつてくると何處か物々しくなつてくる。ざわめいてくる。あすこが一寸愉快だ。ざわめいて來て愉快になるといふことは、酸漿提灯がついてゐたり樂隊がゐたりするのも賑かでいいけれども、僕には、それが賑かなだけにさういふ時は暗い寂しい町が餘計眼につくのがいい。たとへば須田町の通りが非常に賑かだけれど、一寸梶町青物市場の方へ曲るとあすこは暗くて靜かだ。さういふ處を何かの拍子で歩いてゐると、「鍋燒」だとか「火事」だとかいふ俳句の季題を思ひ出す。ことに極くおしつまつて、もう門松がたつてゐるさういふ町を歩いてゐると、ちよつと久保田万太郎君の小說のなかを歩いてゐるやうな氣持でいい氣持だ。

十二月は僕は何時でも東京にゐて、その外の場處といつたら京都とか奈良とかいふ甚だ平凡な處しかしらないんだけども、京都へ初めて往つた時は十二月で、その時分は、七條の停車場も今より小さかつたし、烏丸の通だの四條の通だのがずつと今より狹かつた。でさういふ古ぼけた京都を知つてゐるだけだが、その古ぼけた京都に滯在してゐる間に二三度時雨にあつたことをおぼえてゐる。殊に下賀茂の糺の森であつた時雨は、丁度朝燒がしてゐるとすぐに時雨れて來たんで、甚だ風流な氣がしたのを覺えてゐる。時雨といへば矢張り其時、奈良の春日の社で時雨にあひ、その時雨の霽れるのをまつ間お神樂をあげたことがあつた。それは古風な大和琴だの笋だのと、

ふ樂器を鳴らして、緋の袴をはいた小さな——非常に小さな——巫女が舞ふのが、矢張り優美だつたといふ記憶がのこつてゐる。勿論其時分は春日の社も今のやうに修復が出來なかつたし、全體がもつと古ぼけてきたなかつたから、それだけよかつたといふ訣だ。さういふ京都とか奈良とかいふ處は度々ゆくが、冬といふとどうもその最初の時の記憶が一番鮮かなやうな氣がする。

それから最近には鎌倉に住つて横須賀の學校へ通ふやうになつたから、東京以外の十二月にも親しむことが出來たといふわけだ。その時分の鎌倉は避暑客のやうな種類の人間が少いだけでも非常にいい。ことに今時分の鎌倉にゐると、人間は日本人より西洋人の方が冬は高等であるやうな氣がする。どうも日本人の貧弱な顏ぢや毛皮の外套の襟へ頤を埋めても埋め榮えはしないやうな氣がする。東淸鐵道あたりの從業員は、日本人と露西亞人とで冬になるとことにエネルギイの差が目立つといふことをきいてゐるが、今頃の鎌倉を濶步してゐる西洋人を見るとさうだらうと思ふ。

もつとも小說を書くうへに於ては、寧ろ夏よりは十一月十二月もつと寒くなつても冬の方がいいやうだ。また書く上ばかりでなく、書くまでの段取を火鉢にあたりながら漫然と考へてゐるには今頃が一番いいやうだ。新年號の諸雜誌の原稿は大抵十一月一杯または十二月のはじめへかか

る。さういふものを書いてゐる時は、他の人は寒いだらうとか何とかいつて氣にしてくれるけれども、書き出して脂が乘れば煙草を喫むほかは殆ど火鉢なんぞを忘れてしまふ。それにその時分は襖だの障子だのがたて切つてあるものだから、自分の思想や情緒とかいふものが、部屋の中から遁出してゆかないやうな安心した處があつてよく書ける。もつともよく書けるといつても、それは必ずしも作の出來榮には比例しないのだから、勿論新年號の小說は何時も傑作が出來るといふ訣にはゆかない。

（大正六年）

はつきりした形をとる爲めに

中村さん。

私は目下例の通り斷り切れなくなつて、引き受けた原稿を、うんうん云ひながら書いてゐるので、あなたの出された問題に應じる丈、頭を整理してゐる餘裕がありません。そこへあなたのよこした手紙をよみかけた本の間へ挾んだきり、ついどこかへなくなしてしまひました。だから、私には答ふべき問題の性質そのものも、甚だ漠然としてゐる訣です。

が、大體あなたの問題は「どんな要求によつて小説を書くか」と云ふ樣な事だつたと記憶してゐます。その要求を今便宜上、直接の要求と云ふ事にして下さい。さうすれば、私は至極月並に、「書きたいから書く」と云ふ答をします。之は決して謙遜でも、駄法螺でもありません。現に今私が書いてゐる小說でも、正に判然と書きたいから書いてゐます。原稿料の爲に書いてゐない如く、天下の蒼生の爲にも書いてゐません。

ではその書きたいと云ふのは、どうして書きたいのだ――あなたはかう質問するでせう。が、夫は私にもよくわかりません。唯私にわかつてゐる範圍で答へれば、私の頭の中に何か混沌たるものがあつて、それがはつきりした形をとりたがるのです。さうしてそれは又、はつきりした形をとる事それ自身の中に目的を持つてゐるのです。だからその何か混沌たるものが一度頭の中に發生したら、勢いやでも書かざるを得ません。さうするとまあ、體のいい恐迫觀念に襲はれたやうなものです。

あなたがもう一歩進めて、その渾沌たるものとは何だと質問するなら、又私は窮さなければなりません。思想とも情緒ともつかない。――やつぱりまあ渾沌たるものだからです。唯その特色は、それがはつきりした形をとる迄は、それ自身になり切らないと云ふ點でせう。でせうではない。正にさうです。この點だけは、外の精神活動に見られません。だから(少し横道にはいれば)私は、藝術が表現だと云ふ事はほんたうだと思つてゐます。

まづ大體こんな事が、私に小説を書かせる直接な要求です。勿論間接にはまだ色々な要求があるでせう。或はその中に、人道的と云ふ形容詞を冠らせられるやうなものも交つてゐるかも知れません。が、それはどこまでも間接な要求です。私は始終、平凡に、通俗に唯書きたいから書いて來ました。今後も又さうするでせう。又さうするより外に、仕方がありません。

まだこの外、あなたの手紙には、態度とか何とか云ふ語があつたやうです。或はなかつたかも知れませんが、もしあつたとすれば、その答は、私が直接の要求を「書きたいから書く」事に置いたので、略わかるでせう。それから又、問題が私にはつきりしてゐない爲に私の答へた所でも、あなたの要求された所と一致しなかつたかも知れません。それも不悪大目に見て置いて下さい。以上

（大正六年十月）

イズムと云ふ語の意味次第

イズムを持つ必要があるかどうか。かう云ふ問題が出たのですが、實を云ふと、私は生憎この問題に大分關係のありさうな岩野泡鳴氏の論文なるものを讀んでゐません。だからそれに對する私の答も、幾分新潮記者なり讀者なりの考と、焦點が合はないだらうと思ひます。

實を云ふとこの問題の性質が、私にはよくのみこめません。イズムと云ふ意味や必要と云ふ意味が、考へ次第でどうにでも曲げられさうです。又それを常識で一通りの解釋をしても、イズムを持つと云ふ事がどう云ふ事か、それもいろいろにこじつけられるでせう。

それを差當り、我我が皆ロマンティケルとかナトゥラリストとかになる必要があるかと云ふ、通俗な意味に解釋すれば、勿論そんな必要はありません。と云ふよりも寧それは出來ない相談だと思ひます。元來さう云ふイズムなるものは、便宜上後になつて批評家に案出されたものなんだから、自分の思想なり感情なりの傾向の全部が、それで蔽れる譯はないでせう。全部、蔽れたけ

ればそれを肩書にする必要はありますまい。(尤もそれが全部でなくとも或著しい部分を表してゐる時、批評家にさう云ふイズムの貼札をつけられたのを許容する場合にはありませう。又許容しない事がよろしくない場合もありませう。これは何時か生田長江氏が、論じた事があつたと思ひますが。)

又そのイズムと云ふ意味をひつくり返して、自分の内部活動の全傾向を或イズムと名づけるなら、この問題は答を求める前に、消滅してしまひます。それからその場合のイズムに或名前をくつつけて、それを看板にする事も、勿論必要とは云はれますまい。

又もう一つイズムと云ふ語を或思想上の主張と飜譯すれば、この場合もやはり前と同じ事が云はれませう。

唯、必要と云ふ語に、幾分でも自他共便宜と云ふ意味を加へれば、まるで違つた事が云はれるかも知れません。それなら私は口を噤んだ方がいいでせう。一つにはイズムの提唱に無經驗な私は、さう云ふ便宜を明にしてゐませんから。

(大正七年五月)

永久に不愉快な二重生活

中村さん。

問題が大きいので、ちよいと手輕に考をまとめられませんが、ざつと思ふ所を云へばかうです。元來藝術の内容となるものは、人としての我々の生活全容に外ならないのだから、二重生活と云ふ事は、第一義的にはある筈がないと考へます。

が、それが第二義的な意味になると、いろいろむづかしい問題が起つて來る。生活を藝術化するとか、或は逆に藝術を生活化するとか云ふ事も、そこから起つて來るのでせう。

あなたの手紙にあつた藝術家の職業問題などは、それを更に一歩皮相な方面へ移して來ての問題だと思ひます。

だから「物心兩面に於ける人としての生活と、藝術家としての生活の關係交渉」と云つても、それぞれの意義に相當な立場をきめてかからないと、折角の議論は混亂するより外にありますまい。

所で私は前にも云つたやうに、今さう云ふ問題を辯じてゐる暇がない。そこが、強ひて何か云はなければならないとなると、職業として私は英語を教へてゐるから、生憎それに起る二重生活が不愉快で、しかもその不愉快を超越するのは全然物質的の問題だが、それが現代の日本では當分解決されさうもない以上、永久に我々はこの不愉快な生存を續けて行く外はないと云ふ位な、甚平凡な事になつてしまひます。

これでよかつたら、どうか諸家の解答の中へ加へて下さい。以上。

（大正七年十月）

一つの作が出來上るまで

――「枯野抄」――「奉教人の死」――

或る一つの作品を書かうと思つて、それが色々の徑路を辿つてから出來上がる場合と、直ぐ初めの計畫通りに書き上がる場合とがある。例へば最初は土瓶を書かうと思つてゐて、それが何時の間にか鐵瓶に出來上がることもあり、又初めから土瓶を書かうと思ふと土瓶がそのまま出來上がることもある。その土瓶にしても蔓を籐にしようと思つてゐたのが竹になつたりすることもある。私の作品の名を上げて言へば「羅生門」などはその前者であり、今ここに話さうと思ふ「枯野抄」「奉教人の死」などはその後者である。

その「枯野抄」といふ小說は、芭蕉翁の臨終に會つた弟子達、其角、去來、丈艸などの心持を描いたものである。それを書く時は「花屋日記」といふ芭蕉の臨終を書いた本や、支考だとか其角だとかいふ連中の書いた臨終記のやうなものを參考とし材料として、芭蕉が死ぬ半月ほど前から死ぬところまでを書いてみる考であつた。勿論、それを書くについては、先生の死に會ふ弟子の心

持といつたやうなものを私自身もその當時痛切に感じてゐた。その心持を私は芭蕉の弟子に借りて書かうとした。ところが、さういふ風にして一二枚書いてゐるうちに、沼波瓊音氏が丁度それと同じやうな小說（?）を書いてゐるのを見ると、今迄の計畫で書く氣がすつかりなくなつてしまつた。

そこで今度は、芭蕉の死骸を船に乘せて伏見へ上ぼつて行くその途中にシインを取つて、そして、弟子達の心持を書かうとした。それが當時（大正七年の九月）の「新小說」に出る筈になつてゐたのであつたが、初めの計畫が變つたので、締切が近づいてもどうしても書けなかつた。原稿紙ばかり無駄にしてゐる間に締切の期日がつい來てしまつて甚だ心細い氣がした。その時の「新小說」の編輯者は今「人間」の編輯をしてゐる野村治輔君で、同君が私の書けない事に非常に同情してくれて、その原稿がなかつたら實際困つたでもあらうが、心よく翌月號に延ばしてくれた。それから直ぐにその號のために書き出したが、その頃、私の知つてゐる人が蕪村の書いた「芭蕉涅槃圖」――それは佛畫である――を手に入れた。それが前に見て置いた川越の喜多院にある「芭蕉涅槃圖」よりは大きさも大きかつたし、それに出來も面白かつた。それを見ると、私の計畫が又變つた。で、今度はその「芭蕉涅槃圖」からヒントを得て、芭蕉の病床を弟子達が取り圍んでゐるところを書いて漸く初めの目的を達した。

かういふ風に持つてまはつたのは先づ珍しいことで、大抵は筆を取る前に考へて、その考へた通りに書いて行くのが普通である。その普通といふのは主に短いものを書く場合で、長いものになると書いてゐる中に、作中の人間なり事件なりが豫定とは違つた發展のしかたをすることが往往ある。

　神様がこの世界を造つたものならば、どうしてこの世の中に惡だの悲しみがあるのだらうと人人はよく言ふが、神様も私の小說と同じやうに、この世界を拵へて行くうちに、世界それ自身が勝手に發展して思ふ通りに行かなかつたかも知れない。

　それは冗談であるけれども、さういふ風に人物なり事件なりが豫定とちがつて發展をする場合、ちがつた爲めに作品がよくなるか、わるくなるかは一概に言へないであらうと思ふ。併し、ちがふにしても、凡そちがふ程度があるもので、馬を書かうと思つたのが馬蠅になつたといふことはない。まあ牛になるとか羊になるとかいふ位である。併し、もう少し大筋を離れたところになると、書いてゐるうちに色々なことを思ひつくので、隨分ちがふことがある。例へば「奉敎人の死」といふ小說は、昔のキリスト敎徒たる女が男になつてゐて、色々の苦しい目に逢ふ。その苦しみを堪へしのんだ後に死んだが、死んで見たらば始めて女であつたことがわかつたといふ筋である。その小說の仕舞のところに、火事のことがある。その火事のところは初めちつとも書く氣がしな

かつたので、只主人公が病氣か何んかになつて、靜かに死んで行くところを書くつもりであつた。ところが、書いてゐるうちに、その火事場の景色を思ひついてそれを書いてしまつた。火事場にしてよかつたか惡かつたかは疑問であるけれども。

（大正九年三月）

風變りな作品に就いて

「貴君の作品の中で、愛着を持つてゐらつしやるものか、好きなものはありませんか」と云はれると、一寸困る。さういふ條件の小說を特別に選り出す事は出來ないし、又特別に取扱はなくてはならない小說があるとも思へない。第一、自分の小說といふものを考へた時に、その澤山な小說の行列の中から、特に、私が小說で御座ると名乘つて飛び出して來るものも見當らない。かう云ひ切つて了ふと、折角の御尋ねに對する御返事にはならないから、さう大袈裟な問題として取扱はないで、僕の書いた小說の中で、一寸風變りなものを二つ拔き出して見ることにする。

自分の小說は大部分、現代普通に用ひられてゐる言葉で書いたものである。例外として、「奉敎人の死」と「きりしとほろ上人傳」とがその中に這入る。兩方とも、文祿慶長の頃、天草や長崎で出た日本耶蘇會出版の諸書の文體に倣つて創作したものである。

「奉敎人の死」の方は、其宗徒の手になつた當時の口語譯平家物語にならつたものであり、「きり

しとほろ上人傳」の方は、伊曾保物語に倣つたものである。倣つたといつても、原文のやうに甘くは書けなかつた。あの簡古素朴な氣持が出なかつた。

「奉教人の死」の方は、日本の聖教徒の逸事を仕組んだものであるが、全然自分の想像の作品である。「きりしとほろ上人傳」の方は、セント・クリストフの傳記を材料に取入れて作つたものである。

書き上げてから、讀み返して見て、出來不出來から云へば、「きりしとほろ上人傳」の方が、いいと思ふ。

「奉教人の死」を發表した時には面白い話があつた。あれを發表したところ、隨分いろいろな批評をかいた手紙が舞ひ込んで來た。中には、その種本にした、切利支丹宗徒の手になつた、ほんものの原本を藏してゐると感違ひをし、五百圓の手附金を送つて、買入れ方を申込んだ人があつた。氣毒でもあつたが可笑しくもあつた。

その後、長崎の浦上の天主教會のラゲといふ僧侶に出會つたことがあつた。その際、ラゲさんと「きりしとほろ上人傳」の話を交した。ラゲさんは、自分の生國が、クリストフが嘗て居住してゐた土地であるといふ話し等が出たので、一寸因緣をつけて考へたものであつた。

將來どんな作品を出すかといふ事に對しては、恐らく、誰でも確かな答へを與へることは出來

ないだらうと思ふ。小說などといふものは、他の事業とは違つて、プログラムを作つて、取りかかる訣にはゆかない。併し、僕は今後、ますます自分の博學ぶりを、或は才人ぶりを充分に發揮して、本格小說、私小說、歷史小說、花柳小說、俳句、詩、和歌等、等と、その外知つてるものを敎へてくれれば、なんでもかきたいと思つてゐる。

壺や皿や古畫等を愛玩して時間が餘れば、昔の文學者や畫家の評論も試みたいし、盛んに他の人と論戰もやつて見たいと思つてゐる。

斯くの如く、僕の前途は遙かに渺茫たるものであり、大いに將來有望である。

（大正十四年十二月）

文章と言葉と

文章

僕に「文章に凝りすぎる。さう凝るな」といふ友だちがある。僕は別段必要以上に文章に凝つた覺えはない。文章は何よりもはつきり書きたい。頭の中にあるものをはつきり文章に現したい。僕は只それだけを心がけてゐる。それだけでもペンを持つて見ると、滅多にすらすらと行つたことはない。必ずごたごたした文章を書いてゐる。僕の文章上の苦心といふのは（もし苦心といひ得るとすれば）そこをはつきりさせるだけである。他人の文章に對する注文も僕自身に對するのと同じことである。はつきりしない文章にはどうしても感心することは出來ない。少くとも好きになることは出來ない。つまり僕は文章上のアポロ主義を奉するものである。

僕は誰に何といはれても、方解石のやうにはつきりした、曖昧を許さぬ文章を書きたい。

言葉

五十年前の日本人は「神」といふ言葉を聞いた時、大抵髪をみづらに結ひ、首のまはりに勾玉をかけた男女の姿を感じたものである。しかし今日の日本人は――少くとも今日の青年は大抵長ながと顋髯をのばした西洋人を感じてゐるらしい。言葉は同じ「神」である。が、心に浮かぶ姿はこの位すでに變遷してゐる。

なほ見たし花に明け行く神の顔（葛城山）

僕はいつか小宮さんとかういふ芭蕉の句を論じあつた。子規居士の考へる所によれば、この句は諧謔を弄したものである。僕もその說に異存はない。しかし小宮さんはどうしても莊嚴な句だと主張してゐた。畫力は五百年、書力は八百年に盡きるさうである。文章の力の盡きるのは何百年位かかるものであらう？

問者に答ふ

一　「中央公論」徹宵作文の感を問ふ

僕はこの問題に答ふる資格乏しきものなり。その理由は一つは餘り徹夜をしたことなき故なり。その理由の二つは詩人らしき感受性に乏しき故なり。

されども強ひて感ずるところを云はんか、深夜と云ふ感じのするのは十時と十二時との間なり。この間は電燈の光も落ち着き、鐵瓶のたぎりも澄み、何か森とした氣になること多し。讀書や執筆は勿論、話に一番油が乘るのもやはりこの間にあるやうなり。

十二時より後は殆ど夜と云ふ感じさへせず。されどもとより晝にてはなし。まづ晝を男性、夜を女性とすれば、中性の時間と云ふ感じなり。この間は心も平板になり、焦躁とか興奮とかは催せども、前のやうに冴えたる氣もちにはならず。廿三の頃には屋の棟さへ、三寸下るなどと云ひ慣したれど、僕には下つた屋の棟さへ、上り兼ねないと思はるるなり。

夜明けは常に平凡なり。云はば一番手輕なる現實暴露としか感ぜられず。

以上大體を述べたれど、十二時過ぎの感じには唯一つ例外あり。それは或三月の夜、約束の原稿を書き居りしが、どうも一箇所思ふやうに書けず、動きのとれぬ氣もちに住せし最中、突然一番鷄の聲を耳にせしことなり。この時はまことに德山の棒を打たれし如き心地したり。但し幸ひに貰ひ冠る勿れ。書けぬところは鷄を聞いても、やはりとうとう書けざりしと記憶す。

（大正十二年三月）

二 「文章倶樂部」東京に關する感想を問ふ

——變化の激しい都會——

僕に東京の印象を話せといふは無理である。何故といへば、ある印象を得るためには、印象するものと、印象されるものとの間に、ある新鮮さがなければならない。ところが、僕は東京に生れ、東京に育ち、東京に住んでゐる。だから、東京に對する神經は痲痺し切つてゐるといつてもいい。從つて、東京の印象といふやうなことは、殆ど話すことが出來ないのである。

しかし、ここに幸ひなことは、東京は變化の激しい都會である。例へばつい半年ほど前には、石の擬寶珠のあつた京橋も、このごろでは、西洋風の橋に變つてゐる。そのために、東京の印象といふやうなものが、多少は話せないわけでもない。殊に、僕の如き出不精なものは、それだけ變化にも驚き易いから、幾分か話すたねも殖えるわけである。

――住み心地のよくないところ――

大體にいへば、今の東京はあまり住み心地のいいところではない。例へば、大川にしても、僕が子供の時分には、まだ百本杭もあつたし、中洲界隈は一面の蘆原だつたが、もう今では如何にも都會の川らしい、ごみごみしたものに變つてしまつた。殊にこの頃出來るアメリカ式の大建築は、どこにあるのも見にくいもののみである。その外、電車、カフェ、並木、自動車、何れもあまり感心するものはない。

しかし、さういふ不愉快な町中でも、一寸した硝子窓の光とか、建物の軒蛇腹の影とかに、美しい感じを見出すことがある。まあ、僕などはこんなところにも都會らしい美しさを感じなければ外に安住するところはない。

——廣重の情趣——

尤も、今の東京にも、昔の錦繪にあるやうな景色は全然なくなつてしまつたわけではない。僕はある夏の暮れ方、本所の一の橋のそばの共同便所へ入つた。その便所を出て見ると、雨がぽつぽつ降り出してゐた。その時、一の橋と竪川の水の色とは、そつくり廣重だつたといつてもいい。しかし、さういふ景色にぶつかることは、まあ、非常に稀だらうと思ふ。

——郊外の感じ——

次手に郊外のことを言へば、概して、郊外は嫌ひである。嫌ひな理由の第一は、妙に宿場じみ、新開地じみた町の感じや、所謂武藏野が見えたりして、安直なセンティメンタリズムが厭なのである。さういふものの、僕の住んでゐる田端もやはり東京の郊外である。だから、あんまり愉快ではない。

（大正十三年）

三　「新家庭」旅行と女人に關する感想を問ふ

たとへばお隣の奥さんにどう云ふ香水を使つてゐるとか、どう云ふ顏の男を愛するとか、どう云ふ溫泉場へ行きたいとか、——そんなことを得得と話されてごらんなさい。あなたがたは多分その話に少しも耳を假さないでせう。中には奥さんの厚かましいのに腹を立てるかたもあるかも知れません。しかし小說家とか音樂家とか或は又畫家とかがさう云ふ問題を辯じ立てると、あなたがたは甚だ面白さうに如何なる饒舌をも謹聽するのです。

これは何によるのでせうか？　勿論我我藝術家なるものはお隣の奥さんに比べると、幾分か面白いことも話せるでせう。しかしまだその外にも理由のない訣ではありますまい。あなたがたはお隣の奥さんよりも藝術家なるものに興味を持つてゐる。興味を持つてゐるものの云ふことだから、自然と謹聽することにもなるのでせう。わたしもあなたがたに興味を持たれるのは愉快でないことはありません。けれども是非を考へれば、さう云ふ興味は間違つてゐます。間違つた興味を持たれることは御免を蒙る外はありません。

我我藝術家なるものは實はお隣の奥さんとあまり變らない人間なのです。もし天から降臨した

やうに手前味噌を上げる藝術家があれば、その人は莫迦か氣違ひか或は法螺吹きとお思ひなさい。それは小說を作つたり、畫を描いたりはするでせう。けれどもそんな手腕のあるのは靴屋が靴を拵へたり、パン屋がパンを燒いたりするのと異つたところはないのです。靴屋に香水の好みを訊いたり、パン屋に女性觀を尋ねたりするのも、或は面白い暇つぶしでせう。しかし面白い暇つぶし以上に取りえのあることではありません。

のみならず興味を持ちすぎると、とんでもないことになり兼ねません。と云ふ意味は、興味から尊敬に移つた時を指すのです。動物園の山椒の魚にしろ、興味を持つてゐる間は別に危險は起りません。しかし山椒の魚を尊敬すれば、――どんなことになるか知りませんが、兎に角碌なことは起らないでせう。鰐を尊敬したエジプト人は人間さへ鰐に食はせました。

元來我我藝術家なるものは小說家たり音樂家たると同時に、父たり夫たる人間です。小說家たり音樂家たる點では、何か傑作を殘してゐる限り、尊敬される資格を持つてゐるでせう。しかし父たり夫たる點では必しも尊敬に價するかどうか、甚だ怪しいのに違ひありません。いや古來の天才にさへ、父や夫として考へれば、輕蔑に價する人人も多いのです。勿論父や夫として考へれば、輕蔑に價するからと云つて、さう云ふ人人の作品を一笑に付してしまふのは間違つてゐるに違ひありません。古來の天才は俗人の爲に度たびさう云ふ目に遇はされました。けれども傑作

ゐます。況やこれと云ふ作品もないのに、唯小說家たり音樂家たり或は又畫家たるが故に、尊敬がああるからと云つて、さう云ふ人人に人格全體を神のやうに尊敬するのもやはり同じ位間違つてしたりされたりするのは不合理の非難を免れません。

わたしは英雄崇拜にしろ、或は天才崇拜にしろ、あらゆる偶像崇拜を好みません。同時に偶像崇拜へ導き易いセンティメンタリズムも嫌ひです。役者崇拜の過ぎ去つた今日、尾上菊五郎の吐いた痰を大事さうに紙に包み、尾上菊五郎樣の痰と書いたとか云ふ封建時代の令孃は跡を斷つてゐるでせう。しかしクライスラアの穿いたスリッパアは珍重する人がないとも限りません。わたしはさう云ふ莫迦莫迦しい傾向を掃蕩したいと思つてゐるのです。ですから女と旅行とか云ふ「新家庭」記者の出した題にも、何かお隣の奥さんよりも面白いことを云ひ得ない限り自說を吹聽する氣になりません。しかしお隣の奥さんよりも面白いことを考へ出すのは、出來ないとは云ひませんが、億劫なことは事實です。するとわたしの所信を守れば、何も云はずにゐるべきでせう。けれども「新家庭」記者の辣腕は何か云ふべく餘儀なくさせたのです。何か云ふべく餘儀なくさせられたとなると、女のことだの旅行のことだのの外にも、少しは世道人心に益のあることを加へずにはゐられません。その爲に以上辯じた通り、わたしの旅行と女の話などに耳を傾ける愚を戒めました。

わたしは旅行家ではありません。西洋は勿論、東洋も支那を少し見物しただけです。日本國內も知つてゐるのは京都とか長崎とか云ふ二三の都會、並びに槍ケ嶽とか駒ケ嶽とか云ふ二三の山山の外にはありません。長崎に行つた時には或藝者に都々逸に似たものを書いて見せた爲に新聞に艶名を傳へられました。それから木曾に行つた時にも、或友だちや二三の藝者と活動寫眞を見物した爲に、やはり新聞に嘲弄されました。この時はわたしもその友だちも赤い土耳古帽をかぶつてゐたとか傳へられたと云ふことです。勿論どちらも虛聞ですが、念の爲にこれだけは御承知下さい。艶名を馳せる時はあるかも知れません。しかし赤い土耳古帽だけはこの後も永久にかぶらないでせう。

（大正十二年七月）

四　「婦人畫報」如何なる女人を好むかを問ふ

吾吾の眼に映じた女の顏などと云ふのは容易にしやべられるものではない。第一この問題は私にはどういふ顏の女に興味をもつかといふことだから、大問題でないことは確かである。然しど

んな些細なことでも偉い人のことならば興味がある。例へばナポレオンは如何なる帽子を好んだとか、ゲエテは如何なる齒磨を使つたとかいふならば、私でもまた知りたいと思ふ。しかしこれは上記の通り偉い人に限つたことである。偉くない人、例へば隣の家主はどういふ石鹼を使つたかといふやうな事は、獨り私のみならず、誰も知りたいと思ふものはあるまい。だからこの問題に答へる爲めには、私も亦偉い人だといふ自惚をもつ事が必要である。さういふ自惚をもたぬ以上答へられぬことになる。これが容易に返事の出來ない第一の理由である。

しかしかういふ自惚をもたぬとも、この問ひに答へる方法はないでもない。其はこの問ひに適合するやうな素晴しい名文を作る事である。さうすればそれが名文であるといふそのこと自身に價値がある訣であるから、必しも私は偉い人たるを要しない。否さういふ名文を書き得る限り、私も偉い人だといふことになる。現に支那では李笠翁などが女の肌とか顏とかいふことだけに就て滔滔數百言を竝べて居る。

しかしこの名文を書くことも、能力は暫く措き、現在の私にはその時がない。これが私のこの問題に答へ兼ねる第二の理由である。つまり私は非凡な自惚を持つか、非凡な文章を草するか、この何れかに依る外はこの問題に答へられない。ではこの二つの中どちらが容易かといふに、勿論自惚の方が容易である。

然し唯一つ困ることには、何如に自惚て見たところが、この問ひに答ふると同時に、忽ちその自惚は消滅して了ふ。もし譃だと思つたらナポレオンが威風凛凛と帽子の講釋をして居たり、ゲエテが神のやうに悠悠と齒磨の說明をして居る心を想像してみるがいい。その時の彼等はモスクワの大火を眺めたり、フアウストを書いて居る時の彼等よりも威嚴のないことは確かである。さういふ滑稽な位置に立ち乍ら、然も眞面目にこの問題を論ずるのは如何に自惚の多い私と雖も容易につとまる藝當ではない。してみればこの問ひに答ふることは結局不可能といふことになりさうである。

記者――あなたは均整のある顏と均整のない顏とはどちらに興味をおもちになりますか。

答――僕はどちらかといへば整つた顏に興味をもちます。しかし生來表情に乏しい、整つた顏は嫌ひなのです。さういふ以上、整はぬ顏でも表情次第では整つた顏よりも好きだといふことになるのですから、整つた顏がすきか整はぬ顏が好きか、はつきりしたところは何うか分らないのです。

記者――婦人の顏の型はどんなのがお好きですか。

答――圓い顏が好きになつた後には、必ず長い顏が好きになります。その逆も僕には眞理のやうです。然し大體は瓜實顏が好きです。

記者――智的な顏と、情的な顏とは何れが魅力を感じられますか。

答――僕はいい顏だと思ふと智情意皆兼ね備はつて居るやうに見えます。そして後ではいつも失望ばかりして居るのです。

五 「新潮」月評の存廢を問ふ

私は存在する方がいいと思ふ。いいといふ理由は、ああいふものがあつた方が、兎に角反響なのだから、書く方でも、張合ひがあるだらう。それは文壇のための理由だが、僕自身の理由からいふと、ああいふ批評を讀むと、批評家の頭とか、教養の程度とかが、可也露骨に見えるから愉快である。(尤も、自分の作品が惡く言はれてゐる時は、あまり愉快でもないが。)

しかし、月評を存在させるとすれば、總括的な月評と、その月の注目すべき作品のみの批評の二つにして、その總括的な月評は、新聞社文藝部なり雜誌社なりの現在六號活字でやつてゐる程度に讓つて、後はその他のいろいろな批評家が、その月の著しい作品に就て論じる方がよくはないかと思ふ。

また、一つの新聞なり、雜誌なりの專屬批評家を作つたらどうかといふ問題になれば、色色考

へるべきこともあるけれども、それが實際、現代で實行出來るかどうか、頗る疑問な點があるから、この方面の說は先づ控へよう。

日本では、雜誌に出た作品は批評家の問題になるけれども、本の形になつて出たものは一向問題にならない。それにしても、「暗夜行路」と「桐畑」とは、どつちが名作かは、姑く措き「暗夜行路」が問題にされて、「桐畑」が問題にならないのは不公平だと思ふ。

新聞雜誌は、もつと、本の方面を開拓するがいい。

（大正十一年一月）

六　「新潮」文壇沈滯の所以を問ふ

文壇は沈滯してゐる——と言つて惡ければ沈滯してゐる觀があることは事實らしい。その原因は何處にあるかといふと、縱令全部ではないにしても、一部は作家と批評家との間にギャップのあるといふところに歸着しはしないかと思ふ。

僕は「時事」も「讀賣」も讀まず、纔かに寄贈される文藝雜誌へ眼を通してゐるくらゐのものだから、あまり確かなことも言へないが、兎に角、今の批評家はその考へ方の上に、可也作家とはか

け離れた點があるやうに思ふ。

例へば、自然主義なり、人道主義なりの盛時には、作家も批評家も、ある同じ主張を中心に贊否いづれかの動き方をしてゐた。それが今の文壇にはない。作家はおのおの自分の仕事に骨を折つてゐる。そのまた骨の折り方も、各作家の間に共通點があるといふよりも、各作家に獨特な境地を拓いてゐるのが多い。ところが、批評家は少くとも大體に於ては個個の作家の立場に立ち入つた詮議をしなければ、縱令顯著でないにせよ、各作家に一貫する藝術上の傾向にも沒交渉である。これは作家が批評を追ひ越してゐるのか、批評家が作家を追ひ越してゐるのか、どちらかは斷言しにくいかも知れない。然し、さういふギャップのある事だけは疑ひない事實ではないかと思ふ。

そのために、批評と創作とは、始終、別の平面を歩いてゐる。つまり、文壇の活動にまとまりがついてゐない。この雜然としてゐるところが如何にも、だらしのない感じを與へるのであらう。さう云ふ原因の存する限り、作家と批評家と歩調が一になりさへすれば、沈滯の觀の一部だけは消滅してしまふ筈である。それには作家か批評家か、どちらか、その一方が他方へ追ひつくまで進歩するか、或は一方が墮落するか、この二つの外に出る途はない。しかし、どちらにしろ、墮落することは難有くないから、なるべくは進歩することにしたいものである。

――面倒臭いから、簡單にぶちまけてしまへば、文壇の沈滯の大部分は批評家に人のゐないためである。

（大正十一年七月）

七　「新潮」大正十一年度の計畫を問ふ

僕は秋になると、よく田端を散歩するが、方方の家に、葉鷄頭、菊、コスモスなどの咲いてゐるのが羨ましくてしやうがない。毎年種子を蒔かうとは思ひ乍ら、忘れてゐるから、來年こそは、さういふ草花の種子をさかんに蒔いて、家の周圍を草花だらけにしようと思つてゐる。

×

今年は旅行したり、生活も忙しかつたりして、身體も惡くなつてゐるから、來年は頭も身體も、ゆつくり養生したい。殊に身體をもう少し丈夫にしたい。醫者に、僕なんどは、骨粉を食つた方がいいと言はれてゐるから、骨粉を食はうと思つてゐる。それから體操もやらうと思つて、この間、新らしい瑞典式體操を教はつた。

×

田端の表具屋へ表具を頼みに行つたら、そこの表具屋に、高村光太郎氏の書がかかつてゐた。大へんうまいと思つた。それにつけても、自分は字がまづいから、來年は手習でもやらうと思つてゐる。ただ手習といつても、うまい字を書くといふよりも、字のくづし方を覺える程度の手習である。だから、來年から僕の手紙を貰ふ人は「草訣百韻歌」でも知つてゐないと讀めないから、氣をつけてゐてもらひたい。

×

創作もいろいろしようと思つてゐる。

（大正十年十二月）

世の中と女

今の世の中は、男の作つた制度や習慣が支配してゐるから、男女に依つては非常に不公平な點がある。その不公平を矯正する爲には、女自身が世の中の仕事に關與しなければならぬ。唯、不公平と云ふ意味は、必ずしも、男だけが得をしてゐると云ふ意味ではない。いや、どうかすると、私には女の方が得をしてゐる場合が多いやうに見える。たとへば相撲である。我々は、女の裸體は滅多に見られないけれども、女は、相撲を見にゆきさへすれば、何時でも逞しい男の裸體を見ることが出來る。これは女が得をして男が損をしてゐる場合であると思ふ。

相撲の話で思出したが、何時か「人間」といふ雜誌の表紙の繪を、二枚、警視廳の役人に見せたところが、一つの繪は女の裸體畫だから許可することは出來ない。もう一つの繪は、男の裸體畫だから表紙にしても可い、と云ふことになつた。所が、その繪は兩方とも女の裸體畫で、一方を男の裸體畫と思つたのは祝福すべき役人の誤りだつた。

まださう云ふ皮相の問題ばかりでなく、男女關係の場合などでも、男は何時も誘惑するもの、女は何時も誘惑されるものと、世の中全體は考へ易い。が、實際は存外、女の誘惑する場合も……言葉で誘惑しないまでも、素振で誘惑する場合が多さうである。

かう云ふ點は、現在、男のやつてゐる仕事を女もやるやうになつたらば、男の寃罪を晴すことが出來るかも知れない。私は、こんな意味で女が世の中の仕事に關係するのも惡くないと思つてゐる。つまり、女は女自身、男と生理的及び心理的に違つてゐる點を強調することに依つてのみ、世の中の仕事に加はる資格が出來ると思ふ。

もしさうでなく、男も女も違はないと云ふ點のみを強調したらそれは唯、在來、男の手に行はれた仕事が、一部分、男のやうな女の手に行はれると云ふのに過ぎないから、結局、世の中の進歩にならないと思ふ。

又世の中の仕事に關與するとなると、女に必然に女らしさを失ふやうに思ふ人がある。が、私はさうは思はない。成程、在來の女らしい型は壞れるかも知れない。しかし、女らしさそのものは無くならない筈だ。

かう云ふ例を使つては女性に失禮かも知れないけれども、狼は人間に飼はれると犬になるには違ひない。しかし、猫にならないことは確である。在來の女の型は失つても、女らしさは失はれ

ないことは、猫、犬が泥棒を見ると食ひ付くやうなものであるだらうと思ふ。
しかし、これは大義名分の上に立つた議論である。もし夫れ私一人の好みを云へば、やはり、犬よりは狼が可い。子供を育てたり裁縫したりする優しい牝の白狼が可い。

（大正十年二月）

「假面」の人々

學生時代の僕は第三次並びに第四次「新思潮」の同人と最も親密に往來してゐた。元來作家志望でもなかつた僕のとうとう作家になつてしまつたのは全然彼等の惡影響である。全然?――尤も全然かどうかは疑問かも知れない。當時の僕は彼等以外にも早稻田の連中と交際してゐた。その連中もやはり清淨なる僕に惡影響を及ぼしたことは確かである。

その連中と云ふのは外でもない。同人雜誌「假面」を出してゐた日夏耿之介、西條八十、森口多里の諸君である。僕は一二度山宮允君と一しよに、赤い笠の電燈をともした西條君の客間へ遊びに行つた。日夏君や森口君は勿論、先生格の吉江孤雁氏に紹介されたのもその客間である。當時どう云ふ話をしたか、それはもう殆ど覺えてゐない。唯いつか怪談の出た晩、人つ子一人通らない雨降りの大久保を歸つて來るのに辟易したことを覺えてゐる。

しかしその後は吉江氏を始め、西條君や森口君とはずつと御無沙汰をつづけてゐる。唯鎌倉の

大町にゐた頃、日夏君も長谷に居を移してゐたから、君とは時々往來した。當時の日夏君の八疊の座敷は御同樣借家に住んでゐた爲、すつかり障子をしめ切つた後でも、床の間の壁から陣々の風の吹きこんで來たのは滑稽である。けれども鎌倉を去つた後は日夏君ともいつか疎遠になつた。諸君は皆健在らしい。日夏君は時々中央公論に詩に關する長論文を發表してゐる。あの原稿を書いてゐる部屋へはもう床の間の風なども吹きこんで來ないことであらう。

（大正十三年五月）

娼婦美と冒險

貴問に曰、近來娼婦型の女人增加せるを如何思ふ乎と。然れども僕は娼婦型の女人の增加せる事實を信ずる能はず。尤も女人も家庭の外に呼吸する自由を捉へたれば、當代の女人の男子を見ること、猛獸の如くならざるは事實なるべし。こは勿論娼婦型の女人の增加せる結果と言ふこと能はず。又產兒を免るべき科學的方法並びに道德的論も略完全に具りたれば當代の女人の必しも交合を恐れざるは事實なるべし。若し今日の社會制度に若干の變化を生じたる後、あらゆる童子の養育は社會の責任になり了らん乎、この傾向の今日よりも一層增加するは言ふを待たず。然れども畢に交合は必然に產兒を伴ふ以上、男子には冒險でも何でもなけれど、女人には常に生死を賭する冒險たるを免れざるべし。若し常に生死を賭する冒險たるを免れずとせば、絕對に交合を恐れざるは常人の善くする所にあらざるなり。よし又天下の女人にして悉交合を恐れざること、入浴を恐れざるが如きに至るも、それは少しも娼婦型の女人の增加せる結果と言ふこと能はず。何

となれば娼婦型の女人は啻に交合を恐れざるのみならず、又實に恬然として個人的威嚴を顧みざる天才を具へざる可らざればなり。教坊十萬の妓は多しと雖も、眞に娼婦型の女人を求むれば、恐らくは甚だ多からざる可し。天下も亦教坊と等しきのみ。旦に呉客の夫人となり、暮に越商の小星となるも、豈悉く病的なる娼婦型の女人と限る可けんや。この故に僕は娼婦型の婦人の增加せる事實を信ずる能はず。況や貴問に答ふるをや。聊か所思を記して拙答に代ふ。高免を蒙らば幸甚なり。

（大正十三年十一月）

わが俳諧修業

小學校時代。――尋常四年の時に始めて十七字を並べて見る。「落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな」。鏡花の小說など讀みゐたれば、その羅曼主義を學びたるなるべし。

中學時代。――「獺祭書屋俳話」や「子規隨筆」などは讀みたれど、句作は殆どしたることなし。

高等學校時代。――同級に久米正雄あり。三汀と號し、朱鞘派の俳人なり。三汀及びその仲間の仕事は詩に於ける北原白秋氏の仕事の如く、俳諧にアムプレショニスムの手法を用ひしものなれば、面白がりて讀みしものなり。この時代にも句作は殆どせず。

大學時代。――略ぼ前時代と同樣なり。

教師時代。――海軍機關學校の教官となり、高濱先生と同じ鎌倉に住みたれば、ふと句作をして見る氣になり、十句ばかり玉斧を乞ひし所、「ホトトギス」に一句御採用になる。その後引きつづき、二三句づつ「ホトトギス」に載りしものなり。但しその頃も既に多少の文名ありしかば、十句中二三句づつ雜詠に載るは虛子先生の御會釋ならんと思ひ、少々尻こそばゆく感ぜしことを忘れず。

作家時代。――東京に歸りし後は小澤碧童氏の鉗鎚を受くること一方ならず。その他一游亭、折柴、古原艸等にも恩を受け、おかげさまにて幾分か明を加へたる心地なり、尤も新傾向の句は二三句しか作らず。つらつら按ずるにわが俳諧修業は「ホトトギス」の厄介にもなれば、「海紅」の世話にもなり、宛然たる五目流の早じこみと言ふべし。そこへ勝峯晋風氏をも知るやうになり、七部集なども覗きたれば、愈鵺の如しと言はざるべからず。今日は唯一游亭、魚眠洞等と閑に俳諧を愛するのみ。俳壇のことなどはとんと知らず。又格別知らんとも思はず。たまに短尺など送つて句を書けと云ふ人あれど、短尺だけ恬然ととりつ離しにして未だ嘗書いたことなし。この俳壇の門外漢たることだけは今後も永久に變らざらん乎。次手を以て前掲の諸家の外にも、碧梧

桐、鬼城、蛇笏、天郎、白峯等の諸家の句にも恩を受けたることを記しおかん。白峯と言ふは「ホトトギス」にやはり二三句づゝ句の載りし人なり。

（大正十三年）

學校友だち

これは學校友だちのことと言ふも、學校友だちの全部のことにあらず。只冬夜電燈のもとに原稿紙に向へる時、ふと心に浮かびたる學校友だちのことばかりなり。

上瀧嵬　これは、小學以來の友だちなり。嵬はタカシと訓ず。細君の名は秋茱。秦豐吉、この夫婦を南畫的夫婦と言ふ。東京の醫科大學を出、今は厦門の何とか病院に在り。人生觀上のリアリストなれども、實生活に處する時には必しもさほどリアリストにあらず。西洋の小說にある醫者に似たり。子供の名を汸と言ふ。上瀧のお父さんの命名なりと言へば、一風變りたる名を好むは遺傳的趣味の一つなるべし。書は中々巧みなり。歌も句も素人並みに作る。「新内に下見おろせば燈籠かな」の作あり。

野口眞造　これも小學以來の友だちなり。吳服屋大彥の若旦那。但し餘り若旦那らしからず。品行方正にして學問好きなり。自宅の門を出る時にも、何か出かたの氣に入らざる時にはもう一

度家へ引返し、更に出直すと言ふ位なれば、神經質なること想ふべし。小學時代に僕と冒險小說を作る。僕よりもうまかりしかも知れず。

西川英次郎　中學以來の友だちなり。僕も勿論秀才なれども西川の秀才は僕の比にあらず。東京の農科大學を出、今は鳥取の農林學校に在り。諢名はライオン、或はライ公と言ふ。容貌、營養不良のライオンに似たるが故なり。中學時代には一しよに英語を勉強し、「獵人日記」、「サッフオ」、「ロスメルスホルム」、「タイイス」の英譯などを讀みしを記憶す。その外柔道、水泳等も西川と共に稽古したり。震災の少し前に西洋より歸り、舶來の書を悉燒きたりと言ふ。リアリストと言ふよりもおのづからセンティメンタリズムを脫せるならん。この間鳥取の柿を貰ふ。お禮にバトラアの本をやる約束をしてまだ送らず。尤も柿の三分の一は澁柿なり。

中原安太郎　これも中學以來の友だちなり。諢名は狸、されども顏は狸に似ず。性格にも狸と言ふ所なし。西川に伯仲する秀才なれども、世故には西川よりも通ぜるかも知れず。菊池寬の作品の――殊に「父歸る」の愛讀者。東京の法科大學を出、三井物產に入り、今は獨立の商賣人なり。實生活上にも適度のリアリズムを加へたる人道主義者。大金儲したる時には僕に別莊を買つてくれる約束なれど、未だに買つてくれぬ所を見れば、大した收入もなきものと知るべし。

山本喜譽司　これも中學以來の友だちなり。同時に又姻戚の一人なり。東京の農科大學を出、

今は北京の三菱に在り。重大ならざる戀愛上のセンティメンタリスト。鈴木三重吉、久保田万太郎の愛讀者なれども、近頃は餘り讀まざるべし。風采瀟洒たるにも關らず、存外喧嘩には負けぬ所あり。支那に棉か何か植ゑてゐるよし。

恒藤恭　これは高等學校以來の友だちなり。舊姓は井川。冷靜なる感情家と言ふものあらば、恒藤は正にその一人なり。京都の法科大學を出、其處の助教授か何かになり、今はパリに留學中。僕の議論好きになりたるは全然この辛辣なる論理的天才の薫陶による。句も作り、歌も作り、小說も作り、詩も作り、畫も作る才人なり。尤も今はそんなことは知らぬ顏をしてゐるのに相違なし。僕は大學に在學中、雲州松江の恒藤の家にひと夏居候になりしことあり。その頃恒藤に煽動せられ、松江紀行一篇を作り、松陽新報と言ふ新聞に寄す。僕の恬然と本名を署して文章を公にせる最初なり。細君の名は雅子、君子の好逑と稱するは斯る細君のことなるべし。

秦豐吉　これも高等學校以來の友だちなり。松本幸四郎の甥。東京の法科大學を出、今はベルリンの三菱に在り、善良なる都會的才人。あらゆる僕の友人中、最も女に惚れられるが如し。尤も女に惚れられても、大した損はする男にあらず。永井荷風、ゴンクウル、歌麿等の信者なりしが、この頃はトルストイなどを擔ぎ出すことあり。僕にアストラカンの帽子を呉れる約束あれども、未だに何も送つて呉れず。文を行るに自由なることは文壇の士にも稀なるべし。「ストリン

トベリイの最後の戀は二三日に譯了せりと言ふ。

藤岡藏六　これも高等學校以來の友だちなり。東京の文科大學を出、今は法政大學か何かに在り。僕の友だちも多けれども、藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし。藤岡の常に損をするは藤岡の惡き訣にあらず。只藤岡の理想主義者たる爲なり。それも藤岡の祖父に當る人は川ばたに蹲まれる乞食を見、さぞ寒からうと思ひし餘り、自分も襦袢一枚になりて嚴冬の緣側に坐り込みし爲、とうとう風を引いて死にたりと言へば、先祖代々猛烈なる理想主義者と心得べし。この理想主義を理解せざる世間は藤岡を目して辣腕家と做す。滑稽を通り越して氣の毒なり。天下の人は何と言ふとも、藤岡は斷じて辣腕家にあらず。欺かし易く、欺かされ易き正直一圖の學者なり。僕の言を疑ふものは、試みにかう考へて見るべし。――芥川龍之介は才人なり。藤岡藏六は芥川龍之介の舊友なり、その舊友に十五年來欺されてゐる才人ありや否や。(藤岡藏六の先輩知己は大抵哲學者や何かなるべければ、三段論法を用ふること斯くの如し。)

その他菊池寛、久米正雄、山本有三、岡榮一郎、成瀨正一、松岡讓、江口渙等も學校友だちなり。然れども是等の友だちのことは既に一度以上書いてゐるか、少くとも諸公百年の後には何か書かせられる間がら故、此處には書かざることとすべし。只次手に書き加へたきは忘れ難き亡友のことなり。

大島敏夫　これは小學時代の友だちなり。僕も小學時代には頭の大いなる少年なりしも、大島の頭の大いなるには一歩も二歩も遜りしを記憶す。園藝を好み、文藝をも好みしが、二十にもならざるうちに腸結核に罹りて死せり。何處か老成の風ありしも夭折する前兆なりしが如し。尤も僕は氣の毒にも度たび大島を泣かせては、泣蟲泣蟲とからかひしものなり。

平塚逸郎　これは中學時代の友だちなり。屢僕と見違へられしと言へば、長面瘦軀なることは明らかなるべし。ロマンテイックなる秀才なりしが、岡山の高等學校へはひりし後、腎臟結核に罹りて死せり。平塚の父は畫家なりしよし、その最後の作とか言ふ大幅の地藏尊を見しことあり。病と共に失戀もし、千葉の大原の病院にたつた一人絶命せし故、最も氣の毒なる友だちなるべし。一時中學の書記となり、自炊生活を營みし時、「夕月に鰺買ふ書記の細さかな」と自ら病軀を嘲りしことあり。失戀せる相手も見しことあれども、今は如何になりしや知らず。

（大正十四年一月）

田端人

この度は田端の人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧ろ僕の師友なりと言ふべし。

下島勳　下島先生はお醫者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と號し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老來トルストイでも何でも讀み、論戰に勇なるは敬服すべし。僕の書畫を愛する心は先生に負ふ所少からず。なほ次手に吹聽すれば、先生は時々夢の中に化けものなどに追ひかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の膽、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。

香取秀眞　香取先生は通稱「お隣の先生」なり。先生の鑄金家にして、根岸派の歌よみたることは斷る必要もあらざるべし。僕は先生と隣り住みたる爲、形の美しさを學びたり。勿論學んで悉したりとは言はず。且又先生に學ぶ所はまだ澤山あるやうなれば、何ごとも僕に盜めるだけは盜み置かん心がまへなり。その爲にも「お隣の先生」の御壽命のいや長に長からんことを祈り奉る。

香取先生にも何かと御厄介になること多し。時には叔父を一人持ちたる氣になり、甘つたれることもなきにあらず。

小杉未醒　これも勿論年長者なり。本職の油畫や南畫以外にも詩を作り、句を作り、歌を作る。呆れはてたる器用人と言ふべし。和漢の武藝に興味を持つたり、テニスや野球をやつたりする所は豪傑肌のやうなれども、荒木又右衛門や何かのやうに精悍一點張りの野蠻人にはあらず。僕などは何か災難に出合ひ、誰かに同情して貰ひたき時には、まづ未醒老人に綿々と愚痴を述べるつもりなり。尤も實際述べたことは幸ひにもまだ一度もなし。

鹿島龍藏　これも親子ほど年の違ふ實業家なり。少年西洋に在りし爲、三味線や御神燈を見ても遊蕩を想はず、その代りに艶きたるランプ・シエエドなどを見れば、忽ち遊蕩を想ふよし。書、篆刻、謠、舞、長唄、常盤津、歌澤、狂言、テニス、氷辷り等通ぜざるものなしと言ふに至つては、誰か啞然として驚かざらんや。然れども鹿島さんの多藝なるは僕の尊敬するところにあらず。僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」なり。鹿島さんの如く、熟して敗れざる底の東京人は今日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし。僕は東京と田舍とを兼ねたる文明的混血兒なれども、東京人たる鹿島さんには聖賢相親しむの情――或は狐狸相親しむの情を懷抱せざる能はざるものなり。鹿島さんの再び西洋に遊ばんとするに當り、活字を以て一言を餞す。あんまりラン

プ・シエエドなどに感心して來てはいけません。

室生犀星　これは何度も書いたことあれば、今更言を加へずともよし。只僕を僕とも思はずして、「ほら、芥川龍之介、もう好い加減に猿股をはきかへなさい」とか、「そのステッキはよしなさい」とか、入らざる世話を燒く男は餘り外にはあらざらん乎。但し僕をその小言の前に降參するものと思ふべからず。僕には室生の苦手なる議論を吹つかける妙計あり。

久保田万太郎　これも多言を加ふるを待たず。やはり僕が議論を吹つかければ、忽ち敬して遠ざくる所は室生と同工異曲なり。なほ次手に吹聽すれば、久保田君は酒客なれども、（室生を呼ぶ時は呼び捨てにすれども、久保田君は未だに呼び捨てに出來ず。）海鼠腸を食はず、からすみを食はず、況や烏賊の黑作り（これは僕も四五日前に始めて食ひしものなれども）を食はず。酒客たらざる僕よりも味覺の進歩せざるは氣の毒なり。

北原大輔　これは僕よりも二三歳の年長者なれども、如何にも小面の憎い人物なり。幸にも僕と同業ならず。若し僕と同業ならん乎、僕はこの人の模倣ばかりするか、或はこの人を殺したくなるべし。本職は美術學校出の畫家なれども、なほ僕の苦手たるを失はず。只僕は捉へ次第、北原君の藏家底を盜み得るに反し、北原君は僕より盜むものなければ、畢竟得をするは僕なるが如し。これだけは聊か快とするに足る。なほ又次手につけ加へれば、北原君は底抜けの酒客なれど

も、座さへ酔うて崩したるを見ず。纔に平生の北原君よりも手輕に正體を露すだけなり。かかる時の北原君の眼はその俊爽の色あること、畫中の人も及ばざるが如し。北原君の作品は後代恐らくは論ずるものあらん。然れども眼は必ずしも論ずるものありと言ふべからず、卽ち北原君の小面憎さを說いて醉眼に至る所以なり。

（大正十四年二月）

結婚難並びに戀愛難

あなたがたはゼライイドの話を知つてゐますか？　ゼライイドは美しい王女です。何でも文獻に徵すれば、足は蠟石の如く、腿は象牙の如く、臍は眞珠貝の孕める眞珠の如く、腹は雪花石膏の甕の如く、乳房は百合の花束の如く、頸は白鳩の如く、髮は香草の如く、目は宮殿の池の如く、鼻は城門の櫓の如くだつたと言ふのですから、萬人に一人もない美人だつたのでせう。このゼライイドも年ごろになるにつけ、誰か然るべき相手を定めて結婚することになりました。これは若し日本だつたとすれば、親戚とか知人とか乃至女學校の校長とか、甚だ當てにならぬ人物に媒介を賴む所だつたでせう。又西洋だつたとすれば、母親とか姉とかを參謀にし、未來の夫をつかまへる策戰計畫を立てたかも知れません。しかしゼライイドは王女だつた上に大へん賢い生れつきでしたから、彼女自身の目がねにかなつた王子か宰相の子を選ぶことにしました。次に揭げる候補者表はゼライイドの結婚に志した後、三年七ケ月十六日の間に出來上つたものだと言ふことで

す。原文は「東洋文庫」の「アラビア」の部のZの百三十八號文書にありますから、篤學のかたは讀んで御覽なさい。ここには唯人名などを除いた大略だけを寫すことにしませう。
第一號　印度の王子。體格は頗る堂堂としてゐる。が、餘り聰明ではない。一度などは象を山と間違へ、もう少しで踏み殺されようとしたと言ふことである。
第二號　ペルシアの王子。女のやうに美しい代りに荒淫も亦甚しいさうである。現在でも妃六百人、姬嬪二千三百人、女奴隷は何萬人あるか、誰一人見當さへつかないらしい。
第三號　ゼライイド自身の國の宰相の子。年のまだ若い癖に學問と才智とに富んでゐる。しかし背むしに生まれついたのは如何にも殘念と言はなければならぬ。
第四號　バビロニア王。金銀珠玉を貯へてゐることは或は世界第一であらう。唯憾むらくは殘虐を好み、屢侍女の耳などを削いでは玉葱と一しよに食ふさうである。
第五號　支那の王子。ペルシアの王子に勝るとも劣らぬほどの好男子らしい。けれども大の無精ものと見え、鼻涕をかむのさへ宦官たちにかんで貰ふと言ふことである。
第六號　リディア王の宰相の子。別にこれと言ふ缺點はない。が、先妻や側室の子が二十五人あり、その中の一人は兩脚とも鷄になつてゐると言ふ怪物である。
第七號　メディア王の宰相の子。武勇に富んでゐると言ふ評判である。しかし今は借金の爲に

父親の首も賣り兼ねないらしい。

第八號　ユダヤ王の宰相の子。詩や音樂に巧みださうである。けれども男色を好んでゐるから、到底結婚などはしたいであらう。

第九號　エヂプトの王子。容貌も美しいし、學問にも富んでゐるし、その上弓を引かせては誰も並ぶもののないと言ふことである。この王子と結婚するのならば、沙漠の長旅も樂しいかも知れない。あしたにも早速兩陛下に、――今しがた聞いた所によれば、王子は生憎水浴中に鰐に食はれてしまつたさうである。

第十號　魔神の王ヂアン・ベン・ヂアン。居所不明。

勿論候補者は必しもこれだけと言ふ訣ではありません。現に「東洋文庫」の「アラビア」の部のZの百三十八號文書は實に二百八十人の候補者の名を舉げてゐます。が、畢竟どの候補者もゼライイドの希望に副はなかつたのでせう。ゼライイドは毎日侍女を相手に、柘榴やサフランの花の咲いた王宮の中に暮らしてゐました。しかし我我を支配する戀愛はこの美しいアラビアの王女をも捉へない筈はありません。或月の澄み渡つた晩、ゼライイドは彼女の戀人と一しよにそつと王宮を抜け出しました。アラビアの戀愛至上主義の詩人、「大いなる」デヂアアルはかう彼女のことを歌つてゐます。――

ゼライイドよ！　沙漠の薔薇よ！
君の戀人は幸ひなるかな！
君は君の戀人の杖、
君は君の戀人の齒、
君の戀人は惠まれたるかな！
　おう、ゼライイドよ！　沙漠の泉よ！

「君の戀人の杖」や「君の戀人の齒」は多少妙に聞えるかも知れません。が、美しいゼライイドの戀人は――あなたがたはどんな男だつたと思ひますか？　美しいゼライイドの戀人は行年七十六とか言ふ、醜い黒ん坊の奴隷だつたのです。

（大正十四年六月）

變遷その他

變遷

萬法の流轉を信ずる僕と雖も、目前に世態の變遷を見ては多少の感慨なきを得ない。現にいつか垣の外に「茄子の苗や胡瓜の苗、……デギタリスの苗や高山植物の苗」と言ふ苗賣りの聲を聞いた時にはしみじみ時好の移つたことを感じた。が、更に驚いたのはこの頃ふと架上の書を緣側の日の光に曝した時である。僕は從來衣魚と言ふ蟲は決して和本や唐本以外に食はぬものと信じてゐた。けれども千九百二十五年の衣魚は舶來本の背などにも穴をあけてゐる。僕はこの衣魚の跡を眺めた時に進化論を思ひ、ラマルクを思ひ、日本文化の上に起つた維新以後六十年の變遷を思つた。三十世紀の衣魚はことによると、樟腦やナフタリンも食ふかも知れない。

或抗議

「文壇に幅を利かせてゐるのはやはり小說や戲曲である。短歌や俳句はいつになつても畢に幅を利かせることは出來ない。」――僕の見聞する所によれば、誰でもかう言ふことを信じてゐる。「誰でも」は勿論小說家や戲曲家ばかりを指すのではない。歌人や俳人自身さへ大抵かう信じるか、或はかう世間一般に信じてゐられると信じてゐる。が、堂堂たる批評家たちの短歌や俳句を批評するのを見ると、不思議にも決して威張つたことはない。いづれも「わたしは素人であるが」などと謙抑の言を並べてゐる。謙抑の言を並べてゐるのはもとより見上げた心がけである。しかしかう言ふ批評家たちの小說や戲曲を批評するや、決して「素人であるが」とは言はない。恰も父母未生前より小說や戲曲に通じてゐたやうに滔滔、聒聒、絮絮、綿綿と不幸なる僕等に教を垂れるのである。すると文壇に幅を利かせてゐるのは必ずしも小說や戲曲ではない。寧ろ人麻呂以來の短歌であり、芭蕉以來の俳句である。それを小說や戲曲ばかり幅を利かせてゐるやうに評ひられるのは少くとも善良なる僕等には甚だ迷惑と言はなければならぬ。のみならず短歌や俳句ばかりいつまでも幅を利かせてゐるのは勿論不公平を極めてゐる。サント・ブウヴも或は高きにゐてユウ

ゴオやバルザツクを批評したかも知れない。が、ミユツセを批評する時にも格別「わたしは素人であるが」と帽子を脱がなかつたのは確かである。堂堂たる日本の批評家たちもちつとは僕等に同情して横暴なる歌人や俳人の上に敢然と大鐵槌を下すが好い。若し又それは出來ないと言ふたらば、——僕は當然の權利としてから批評家たちに要求しなければならぬ。——僕等の作品を批評する時にも一應は帽子を脱いだ上、歌人や俳人に對するやうに「素人であるが」と斷り給へ。

艶福

「……自分の如きものにさへ、屢々手紙を寄せて交を求めた婦人が十指に餘る。未だ御目にかかつた事はないが夢に見ましたと云ふのがある。御兄樣と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふのがある。寫眞を呉れと云ふのがある。何か肌に着けた物を呉れと云ふのがある。使ひ古した手巾を呉れれば處女として最も清く尊きものを差上げますと云ふのもあつた。何たる清き交際であらう。……」

これは水上瀧太郎君の「友はえらぶべし」の中の一節である。僕はこの一節を讀んだ時に少しも掛値なしに瞠目した。水上君の小說は必ずしも天下の女性の讀者を隨喜せしめるのに足るもので

はない。しかも猶彼等の或ものは水上君を御兄樣と稱し、又彼等の或ものは水上君の寫眞など(！)を筐底に祕めたがつてゐるのである。飜つて僕自身のことを考へると、――尤も僕の小說は水上君の小說よりも下手かも知れない。が、少くとも女性の讀者に多少の魅力のあることは決して「勤人」や「海上日記」や「葡萄酒」の後には落ちない筈である。しかし行年二十五にして才人の名を博してよりこのかた、僕のことを御兄樣と呼んだり、僕の寫眞を欲しがつたりする美人の手紙などの來たことはない。況や僕の手巾を貰へば、「處女として最も淸く尊きものを差上げます。」と言ふ春風萬里の手紙をやである。僕の思はず瞠目したのも偶然ではないと言はなければならぬ。

けれども偶かう言つたにしろ、直ちに僕を輕蔑するならば、それは勿論大早計である。僕にも亦時に好意を表する女性の讀者のない訣ではない。彼等の一人は去年の夏、のべつに僕に手紙をよこした。しかもそれ等は內容證明でなければ必ず配達證明だつた。僕は萬事を抛擲して何度もそれ等を熟讀した。實際又僕には熟讀する必要もあつたのに違ひない。それ等はいづれも百圓の金を至急返せと言ふ手紙だつた。のみならずそれ等を書いたのは名前も聞いたことのない女性だつた。それから又彼等の或ものは僕の「春服」を上梓した頃、絕えず僕に「アララギ」調の寫生の歌を送つて來た。歌はうまいのかまづいのか、散文的な僕にはわからなかつた。いや、必ずしも一首殘らずわからなかつた次第ではない。「日の下の入江音なし息づくと見れど音こそなかりける

かも」などは確かに僕にもうまいらしかつた。けれどもこの歌はとうの昔にもう齋藤茂吉君の歌集に出てゐるのに違ひなかつた。それから又彼等の或ものは僕の支那へ出かけた留守に僕に會ひに上京した。僕は勿論不幸にも彼女に會ふことは出來なかつた。が、彼女は半月ほどした後、はるばる僕に一すぢの葡萄色のネク・タイを送つて來た。何でも彼女の手紙によれば、それは明治天皇の愛用し給うたネク・タイであり、彼女のそれを送つて來たのは何年か前に墓になつた母の幽靈の命令に從つたものだとか言ふことだつた。それから又彼等の或ものは、……

兎に角僕にも手紙を寄せた女性の讀者のゐることは疑ふべからざる事實である。が、彼等は僕に對するや、水上君に對するやうに纏綿たる情緒を示したことはない。これは抑も何の爲であらうか？　僕は僕に手紙を寄せた何人かの天涯の美人を考へ、つまり僕の女性の讀者は水上君の女性の讀者よりもはるかに彼等の社交的趣味の進步してゐる爲と斷定した。成程彼等の或ものは彼女自身の歌の代りに齋藤君の歌を送つて來た。しかしそれは僕のことを夢に見ると言ふ代りに、彼女も僕の先輩たる齋藤君の歌集などを讀んでゐることを傳へたのであらう。又彼等の或ものはお兄樣と僕を呼びたかつたかも知れない。が、彼女の遠慮深さは百圓の金を返せと言ふ內容證明の手紙を書かせたのである。又彼等の或ものは明治天皇の愛用し給うた――これだけは正直に白狀すれば、確かに僕にも難解である。けれども彼女の淑しさの餘り、僕の手巾を呉れと言ふ代り

に、歴史的意義あるネク・タイを送つて來たのではないであらうか？　僕の女性の讀者たるものはいづれも上に示したやうに纖細な神經を具へてゐる。して見れば水上君に手紙を寄せた無數の女性の讀者よりも數等優れてゐると言はなければならぬ。よし又僕の斷定に多少の誤りはあるにもしろ、――たとへば彼等の或ものは不幸なる狂人だつたにもしろ、少くとも唐突として水上君に手巾を呉れと言つた讀者よりも氣違ひじみてゐないことは確かである。僕はかう考へた時に私かに僕自身の幸運を讚美しない訣には行かなかつた。日本の文壇廣しと雖も、僕ほど艷福に富んだ作家は或は一人もゐないかも知れない。

（大正十四年八月）

僞者二題

この夏僕のところへ、山形縣から手紙が來た。手紙を出した人は、山崎操と云ふ人だつた。これが今迄、手紙を貰つたこともなければ逢つたこともない人だつた。

ところが、手紙をあけてみると、あなたに貸した百圓の金を至急返してくれ、もし返してくれなければ告訴すると云ふのだから吃驚した。何でもその文面によると、僕が仙臺の針久旅館とかに泊つてゐて、電報爲替で金を取り寄せたと云ふのであつた。しかし僕は、山形縣は勿論、仙臺へ行つたこともなければ、況んや針久旅館などに泊つたこともない。

その山崎と云ふ人の手紙は、内容證明になつてゐたから、僕も早速内容證明で、あなたには逢つたこともなければ、金を借りた憶えは猶更ないと云つてやつた。それから僕は輕井澤に行つた。

すると又、その山崎と云ふ人の手紙が、東京から輕井澤へ轉送して來た。今度は内容證明ではなかつたけれども、中をあけてみると、やはりあなたに貸した百圓を返して下さいと書いてあつ

た。のみならず、わたしも病身ではあり女のことだからと書いてあつた。僕は、山崎操なるものの女だと云ふことを發見して氣の毒にも感じたが、借りた憶えのない借金を返せ返せと云はれるのは不愉快に違ひなかつた。それからも一度、あなたに金を借りた憶えはない。あなたも借金の催促をする前に、あなたの知つてゐる芥川龍之介は本ものかどうか、確めたらよいだらうと云つてやつた。

それぎり今日まで何とも云つて來ない。二度目の手紙は飯坂溫泉から出したものだが、誰か僕の名前を騙つて、金を借りたやつがあるに違ひない。

さうかと思ふと、その前に長野縣から何とか云ふ人が、盜難見舞の手紙をよこした。これも未知の人だつた。それにも係らず、手紙の末に、あなたに序文を書いて頂いて洵に難有いと書いてあつた。

勿論僕はその人の本に——第一どんな本を出したのかさへ不明である——序文など書いた憶えはなかつた。しかしその手紙には、生憎住所が書いてなかつたから、未だに、長野縣の人には返事を出すことが出來ずにゐる。

これは一人僕ばかりではない。文壇の諸家の名を騙るものが、この頃は時々ゐるやうである。畫家や俳人の僞者は、實際繪なり句なりを作らせてみれば看破するのも容易だが、小說家の僞者は、眼の前で小說を作るなどと云ふ御座敷藝のない爲に看破しにくいのに違ひない。地方の文藝愛好家は、かう云ふ僞者の毒手にかからないやうに注意して貰ひたいと思つてゐる。

一體僕に云はせれば、動物園の象でも見たがるやうに小說家などを見たがるのが間違ひなんだ。

（大正十四年）

病牀雜記

一、病中閑なるを幸ひ、諸雜誌の小説を十五篇ばかり讀む。瀧井君の「ゲテモノ」同君の作中にても一頭地を拔ける出來榮えなり。親父にも、倅にも、風景にも、朴にして雅を破らざること、もろこしの餅の如き味はひありと言ふべし。その手際の鮮かなるは恐らくは九月小説中の第一ならん乎。

二、里見君の「蚊遣り」も亦十月小説中の白眉なり。唯聊か末段に至つて落筆匆匆の憾みあらん乎。他は人情的か何か知らねど、不相變巧手の名に背かずと言ふべし。

三、旅に病めることは珍らしからず。（今度も輕井澤の寐冷えを持ち越せるなり。）但し最も苦しかりしは丁度支那へ渡らんとせる前、下の關の宿屋に倒れし時ならん。この時も高が風邪なれど、東京、大阪、下の關と三度目のぶり返しなれば、存外熱も容易には下らず、おまけに手足にはピリン疹を生じたれば、女中などは少くとも梅毒患者位には思ひしなるべし。彼等の一人、僕を憐

んで曰、「注射でもなすつたら、よろしうございませうに。」

　　東雲の煤ふる中や下の關

四、彼は昨日「小咄文學」を罵り、今日恬然として「コント文學」を作る。宜なるかな。彼の健康なるや。

五、小穴隆一、輕井澤の宿屋にて飯を食ふこと五椀の後女中の前に小皿を出し、「これに飯を少し」と言へば、佐佐木茂索、「まだ食ふ氣か」と言ふ。「ううん、手紙の封をするのだ」と言へど、茂索、中中承知せず、「あとでそつと食ふ氣だらう」と言ふ。隆一、憮然として、「ぢや大和糊にするわ」と言へば、茂索、愈承知せず、「ははあ、糊でも舐める氣だな。」

六、それから又玉突き場に遊びゐたるに、一人の年少紳士あり。僕等の仲間に入れてくれと言ふ。彼の僕等に對するや、未だ嘗「ます」と言ふ語尾を使はず、「そら、そこを厚く中てるんだ」などと命令すること屢なり。然れどもワン・ピイスを一着したる佐佐木夫人に對するや、慇懃に禮を施して曰、「あなたはソオシアル・ダンスをおやりですか？」佐佐木夫人の良人即ち佐佐木茂索、「あいつは一體何ものかね」と言へば、何度も玉に負けたる隆一、言下に正體を道破して曰、「小金をためた玉ボオイだらう。」

七、輕井澤に芭蕉の句碑あり。「馬をさへながむる雪のあしたかな」の句を刻す。こは甲子吟行

中の句なれば、名古屋あたりの作なるべし。それを何ゆゑに刻したるにや。因に言ふ、追分には「吹き飛ばす石は淺間の野分かな」の句碑あるよし。

八、輕井澤の或骨董屋の英語、――「ジス・キリノ(桐の)・ボックス・イズ・ベリイ・ナイス。」

九、室生犀星、碓氷山上よりつらなる妙義の崔嵬たるを望んで曰、「妙義山と言ふ山は生姜に似てゐるね。」

十、十項だけ書かんと思ひしも熱出でてペンを續けること能はず。

(大正十四年十月)

身のまはり

一 机

僕は學校を出た年の秋「芋粥」といふ短篇を新小説に發表した。原稿料は一枚四十錢だつた。が、いかに當時にしても、それだけに衣食を求めるのは心細いことに違ひなかつた。僕はそのために口を探し、同じ年の十二月に海軍機關學校の教官になつた。夏目先生の死なれたのはこの十二月の九日だつた。僕は一月六十圓の月俸を貰ひ、晝は英文和譯を教へ、夜はせつせと仕事をした。それから一年ばかりたつた後、僕の月俸は百圓になり、原稿料も一枚二圓前後になつた。僕はこれらを合せればどうにか家計を營めると思ひ、前から結婚する筈だつた友だちの姪と結婚した。

僕の紫檀の古机はその時夏目先生の奧さんに祝つて頂いたものである。机の寸法は竪三尺、横四尺、高さ一尺五寸位であらう。木の枯れてゐなかつたせゐか、今では板の合せ目などに多少の狂ひを生じてゐる。しかしもう、かれこれ十年近く、いつもこの机に向つてゐることを思ふと、さすがに愛惜のない訣でもない。

二　硯屏

僕の青磁の硯屏は團子坂の骨董屋で買つたものである。尤も進んで買つた訣ではない。僕はいつかこの硯屏のことを「野人生計事」といふ隨筆の中に書いて置いた。それをちよつと摘錄すれば

或日又遊びに來た室生は、僕の顏を見るが早いか、團子坂の或骨董屋に青磁の硯屏の出てゐることを話した。

「賣らずに置けといつて置いたからね、二三日中にとつて來なさい。もし出かける暇がなけりや、使でも何でもやりなさい。」

宛然僕にその硯屏を買ふ義務でもありさうな口吻である。しかし御意通りに買つたことを未だに後悔してゐないのは室生のためにも僕のためにも兎に角欣懷といふ外はない。

この文中に室生といふのはもちろん室生犀星君である。硯屏はたしか十五圓だつた。

三　ペン皿

夏目先生はペン皿の代りに煎茶の茶箕を使つてゐられた。僕は早速その智慧を學んで、僕の家

に傳はつた紫檀の茶箕をペン皿にした。(先生のペン皿は竹だつた。)これは香以の妹婿に當たる細木伊兵衛のつくつたものである。僕は鎌倉に住んでゐた頃、菅虎雄先生に字を書いて頂きこの茶箕の窪んだ中へ「本是山中人　愛説山中話」と刻ませることにした。茶箕の外には伊兵衛自身がいかにも素人の手に成つたらしい岩や水を刻んでゐる。といふと風流に聞えるかも知れない。が、生來の無精のために埃やインクにまみれたまま、時には「本是山中人」さへ逆さまになつてゐるのである。

四　火鉢

小さい長火鉢を貰つたのもやはり僕の結婚した時である。これはたつた五圓だつた。しかし抽斗の具合などは値段よりも上等に出來上つてゐる。僕は當時鎌倉の辻といふ處に住んでゐた。借家は或實業家の別莊の中に建つてゐたから、芭蕉が軒を遮つたり、廣い池が見渡せたり、存外居心地のよい住居だつた。が、八疊二間、六疊一間、四疊半二間、それに湯殿や臺所があつても、家賃は十八圓を越えたことはなかつた。僕らはかういふ四疊半の一間にこの小さい長火鉢を据ゑ、太平無事に暮らしてゐた。あの借家も今では震災のために跡かたもなくなつてゐることであらう。

(大正十四年十二月)

拊掌談

名士と家

夏目先生の家が賣られると云ふ。ああ云ふ大きな家は保存するのに困る。書齋は二間だけよりないのだから、あの家と切り離して保存する事も出來ない事はないが、兎に角相當な人程小さな家に住むとか、或は離れの樣な所に住んでゐる方が、あとで保存する場合など始末がよい。

帽子を追つかける

道を歩いてゐる時、ふいに風が吹いて帽子が飛ぶ。自分の周圍の凡てに對して意識的になつて帽子を追つかける。だから中々帽子は手に這入らない。

他の一人は帽子が飛ぶと同時に飛んだ帽子の事だけ考へて、夢中になつてその後を追ふ。自轉

車にぶつかる。自動車に轢かれかかる。荷馬車の土方に怒鳴られる――その間に帽子は風の方向に走つてゆく。かう言ふ人は割合に帽子を手に入れる。

しかしどちらにしろ人生は結局さううまく行くものではないらしい。餘程の政治的或は實業的天才でもなければ、樂々と帽子を手に入れる樣な人は恐らく居ないだらう。

不思議一つ

安月給取りの細君、裏長屋のおかみさんが、此の世にありもしない樣な、通俗小說の伯爵夫人の生活に胸をどらし、隨喜して讀んでゐるのを見ると、悲慘な氣がする。をかしくもある。

「キイン」と「嘆きのピエロ」

最近輸入された有名な映畫だと云ふ「キイン」と「嘆きのピエロ」の筋を聞いた。筋としてはキインの方が小說らしくもあり、面白いとも思ふ。大抵の男はキインの樣な位置には割になれ易いものである。大抵の女は、キインの相手の伯爵夫人の樣な境遇には置かれ易いものである。

嘆きのピエロ夫妻の樣な位置には、大抵の人達は、一生に一度もなり憎い事である。まして虎

に咬みつかれる様な事は、自分自分の一生を考へてみた所、一寸ありさうもないではないか。これが若し虎ぢやなしに、犬だつたら兎に角。

映畫

映畫を横から見ると、實にみじめな氣がする。どんな美人でもペチヤンコにしか見えないのだから。

又

映畫はいくら見ても直ぐにその筋を忘れて仕舞ふ。おしまひには題も何もかも忘れる。見なかつた前と一寸も變りがない。本ならどんなつまらないと思つて讀んだものでも、そんなにも忘れる事はないのに、實に不思議な氣がする。

映畫に出て來る人間が物を云つて呉れたら、こんなに忘れる事はあるまいとも考へて見る。自分がお饒舌だからでもあるまいが。

犬

日露戰爭に戰場で負傷して、衞生隊に收容されないで一晩倒れてゐたものは滿洲犬にちんぼこから食はれたさうだ。その次に腹を食はれる。これは話を聞いただけでもやり切れない。

「辨安和解」から

安井息軒の「辨妄和解」は面白い本だと思ふ。これを見てゐると、日本人は非常にリアリスチックな種族だと云ふ事を感じる。一般の種々な物事を見てゐても、日本では革命なんかも、存外雜作たく行はれて、外國で見る樣な流血革命の慘を見ずに濟む樣な氣がする。

刑

死刑の時絞首臺迄一人で歩いてゆける人は、殆ど稀ださうだ。大抵は抱へられる樣に臺に登る。米國では幾州か旣に死刑の全廢が行はれてゐる。日本でも遠からず死刑と云ふ事はなくなるだらう。

無暗と人を殺したがる人に、一緖に生活されるのは、迷惑な話ではある。だがその人自身にとつてみれば、一生を監禁される――それだけで、もう充分なのだから、强ひて死刑なぞにする必要はない筈である。

又

囚人にとつては、外出の自由を縛られてゐるだけで、十二分の苦しみである。在監中、その人の仕事迄取りあげなくともよささうなものである。假に僕が何かの事で監獄にはいる樣な事があつたら、その時にはペンと紙と本は與へて貰ひたいものだ。僕が繩をなつてみたところではじまらない話ではないか。

又

學校にゐた頃の事、授業が終つて二階から降りて來た。外にはいつの間にか、雨がざあざあ降つてゐた。僕は自分の下駄を履く爲に下駄の置き場所へ行つたのである。そこにはあるべき下駄がなかつた。いくら搜してもない。僕は上草履をはいてゐた。外には雨がひどく降つてゐる。全く弱つて仕舞つた。併しそこには僕のでない汚い下駄は一足あつたのである。それを欲しいと思つた。とりたいと思つた。
結局その時はその下駄をとらなかつたが、あの場合あの下駄をとつたとしても、それは仕方のない事だと思ふ。

（大正十五年一月）

その頃の赤門生活

一

僕の二十六歳の時なりしと覺ゆ。大學院學生となりをりしが、當時東京に住せざりしため、退學屆を出す期限に遲れ、期限後數日を經て事務所に退學屆を出したりしに、事務の人は規則を嚴守して受けつけず「既に期限に遲れし故、三十圓の金を收めよ」といふ。大正五六年の三十圓は大金なり。僕はこの大金を出し難き事情ありしが故に「然らばやむを得ず除名處分を受くべし」といへり。事務の人は僕の將來を氣づかひ「君にして除名處分を受けん乎、今後の就職口を如何せん」といひしが、畢に除名處分を受くることとなれり。

僕の同級の哲學科の學生、僕の爲に感激して曰、「君もシエリングの如く除名處分を受けしか」と！　シエリングも亦僕の如く三十圓の金を出し澁りしや否や、僕は未だ寡聞にしてこれを知らざるを遺憾とするものなり。

二

僕達のイギリス文學科の先生は、故ロオレンス先生なり、先生は一日僕を路上に捉へ、娓々數千言を述べられてやまず。然れども僕は先生の言を少しも解すること能はざりし故、唯雷に打たれたる啞の如く瞠目して先生の顏を見守り居たり。先生も亦僕の容子に多少の疑惑を感ぜられしなるべし。突如として僕に問うて曰く、"Are you Mr. K.?" 僕、答へて曰く、"No, Sir." 先生は――先生もまた雷に打たれたる啞の如く瞠目せらるること少時の後、僕を後にして立ち去られたり。僕の親しく先生に接したるは實にこの路上の數分間なるのみ。

三

僕等「新思潮社」同人の列したるは、大正天皇の行幸し給へる最後の卒業式なりしなるべし。僕等は久米正雄と共に夏の制服を持たざりし爲、裸の上に冬の制服を着、恐る恐る大勢の中にまじり居たり。

四

僕はケエベル先生を知れり。先生はいつもフランネルのシヤツを着られ、ショオペンハウエルを講ぜられしが、そのショオペンハウエルの本の上等なりしことは今に至つて忘るること能はず。

五

僕に確か二年生の時獨乙語の出來のよかりし爲、獨乙大使グラアフ・レックスよりアルントの詩集を四冊貰へり。然れどもこは眞に出來のよかりしにあらず、一つには喜多床に髮を刈りに行きし時、獨乙語の先生に順を讓り、先に刈らせたる爲なるべし。こは謙遜にあらず、今もなほかく信じて疑はざる所なり。

僕はこのアルントを郁文堂に賣り金六圓にかへたるを記憶す、爾來星霜を閲すること十餘、僕のアルントを知らざることは少しも當時に異ることなし。知らず、天涯のグラアフ・レックスは今果睹顏舊の如くなりや否や。

六

僕は二年生か三年生かの時、矢代幸雄、久米正雄の二人と共にイギリス文學科の教授方針を攻擊したり。場所は一つ橋の學士會館なりしと覺ゆ。僕等は寡を以て衆にあたり、大いに凱歌を奏

したり。然れども久米は勝誇りたる爲、忽ち心臟に異狀を呈し、本鄕まで步きて歸ること能はず。僕は矢代と共に久米を擔ぎ、人跡絕えたる電車通りをやつと本鄕の下宿へ歸れり。（昭和二・二・一七）

食物として

金澤の方言によれば「うまさうな」と云ふのは「肥つた」と云ふことである。例へば肥つた人を見ると、あの人はうまさうな人だなどとも云ふらしい。この方言は一寸食人種の使ふ言葉じみてゐて愉快である。

僕はこの方言を思ひ出すたびに、自然と僕の友達を食物として、見るやうになつてゐる。里見弴君などは皮造りの刺身にしたらば、きつと、うまいのに違ひない。菊池君も、あの鼻などを椎茸と一緒に煮てくへば、脂ぎつてゐて、うまいだらう。谷崎潤一郎君は西洋酒で煮てくへば飛び切りに、うまいことは確である。

北原白秋君のビフテキも、やはり、うまいのに違ひない。宇野浩二君がロオスト・ビフに適してゐることは、前にも何かの次手に書いておいた。佐佐木茂索君は串に通して、白やきにするのに適してゐる。

室生犀星君は――これは今僕の前に坐つてゐるから、甚だ相濟まない氣がするけれども――干物にして食ふより仕方がない。然し、室生君は、さだめしこの室生君自身の干物を珍重して食べることだらう。

（昭和二年四月）

僕の友だち二三人

1

小穴隆一君(特に「君」の字をつけるのも可笑しい位である)は僕よりも年少である。が、小穴君の仕事は凡庸ではない。若し僕の名も殘るとすれば、僕の作品の作者としてよりも小穴君の裝幀した本の作者として殘るであらう。これは小穴君に媚びるのではない。世間にへり下つて見せるのではなほ更ない。造形美術と文藝との相違を勘定に入れて言ふのである。(文藝などと云ふものは、——殊に小說などと云ふものは三百年ばかりたつた後は滅多に通用するものではない。)しかし大地震か大火事かの爲に小穴君の畫も燒けてしまへば、今度は或は小穴君の名も僕との腐れ緣の爲に殘るであらう。

小穴君は神經質に徹してゐる。時々勇敢なことをしたり、或は又言つたりするものの、決して豪放な性格の持ち主ではない。が、諧謔的精神は少からず持ち合せてゐる。僕は或時海から上り、「何だかインキンたむしになりさうだ」と言つた。すると小穴君は机の上にあつたアルコオルの罎

を渡しながら、「これを睾丸へ塗つて置くと好いや」と勸めた。僕は小穴君の言葉通りに丁寧に睾丸へアルコオルを塗つた。その時の睾丸の熱くなつたことは火焙りにでもなるかと思ふ位だつた。僕は「これは大變だ」と言ひながら、疊の上を轉げまはつた。小穴君はひとり腹を抱へ、「それは大變だ」などと同情(?)してゐた。僕はそれ以來どんなことがあつても、睾丸にアルコオルは塗らないことにしてゐる。……

小穴君は又發句を作つてゐる。これも亦決して餘技ではない。のみならず小穴君の畫と深い血脈を通はせてゐる。僕はやはり發句の上にも少からず小穴君の啓發を受けた(何の啓發も受けたいものは災ひなるかな。同時に又仕合せなるかな。)

足袋を干す畠の木にも枝のなり　　隆一

2

堀辰雄君も僕よりも年少である。が、堀君の作品も凡庸ではない。東京人、坊ちやん、詩人、本好き——それ等の點も僕と共通してゐる。しかし僕のやうに舊時代ではない。僕は「新感覺」に惠まれた諸家の作品を讀んでゐる。けれども堀君はかう云ふ諸家に少しも遜色のある作家ではない。次の詩は決して僕の言葉の誇張でないことを明らかにするであらう。

硝子の破れてゐる窓
僕の蝕齒よ
夜になるとお前のなかに
洋燈がともり
ぢつと聞いてゐると
皿やナイフの音がして來る。

堀君の小說も亦この詩のやうな特色を具へたものである。年少の作家たちは明日にも續々と文壇に現れるであらう。が、堀君もかう云う作家たちの中にいつか誰も眞似手のない一人となつて出ることは確かである。由來我々日本人は「早熟にして早老」などと嘲られ易い。が、熱帶の女人の十三にして懷姙することを考へれば、溫帶の男子の三十にして頭の禿げるのは當り前である。のみならず「早熟にして晚老」などと云ふ、都合の好いことは滅多にはない。僕は無遠慮に堀君の早熟することを祈るものである。「惡の華」の成つたのは作者の二十五歲(?)の時だつた。年少高科に登るのは老大低科に居るのよりも好い。晚老する工夫などは後にし給へ。

3

この後は誰を書いても善い。又誰を書かないでも善い。すると書かずにゐるほど氣樂であるから、「3」と書いただけでやめることにした。

（昭和二年五月）

講演軍記

僕が講演旅行へ出かけたのは今度里見弴君と北海道へ行つたのが始めてだ。入場料をとらない聽衆は自然雜駁になりがちだから、それだけでも可也しやべり惡い。そこへ何箇所もしやべつてまはるのだから、少からず疲れてしまつた。然し講演後の御馳走だけは里見君が勇敢に斷つてくれたから、おかげ樣で大助かりだつた。

改造社の山本實彥君は僕等の小樽にゐた時に電報を打つてよこした。こちらはその返電に「クルシイクルシイヘトヘトヘトダ」と打つた。すると市廳の遞信課から僕等に電話がかかつてきた。僕は里見君のラヂオ・ドラマのことかと思つたから、早速電話器を里見君に渡した。里見君は「ああ、さうです。ええ、さうです」とか何とか云ひながら、くすくすひとり笑つてゐた。それから僕に「莫迦莫迦しいよ、クルシイクルシイですか、ヘトヘトだですかときいて來たんだ。」と云つた。こんな電報を打つたものは小樽市始まつて以來なかつたのかも知れない。

講演にはもう食傷した。當分はもうやる氣はない。北海道の風景は不思議にも感傷的に美しかつた。食ひものはどこへたどり着いてもホッキ貝ばかり出されるのに往生した。里見君は旭川でオムレツを食ひ、「オムレツと云ふものはうまいもんだなあ」としみじみ感心してゐただけでも大抵想像できるだらう。

雪どけの中にしだるる柳かな

（昭和二年六月）

補遺

入社の辭

予は過去二年間、海軍機關學校で英語を教へた。この二年間は、予にとつて、決して不快な二年間ではない。何故と云へば予は從來、公務の餘暇を以て創作に從事し得る――或は創作の餘暇を以て公務に從事し得る恩典に浴してゐたからである。

予の寡聞を以てしても、甲教師は超人哲學の紹介を試みたが爲に、文部當局の忌諱に觸れたとか聞いた。乙教師は戀愛問題の創作に耽つたが爲に、陸軍當局の譴責を蒙つたさうである。それらの諸先生に比べれば、從來予が官立學校教師として小說家を兼業する事が出來たのは、確に比類稀なる御上の御待遇として、難有く感銘すべきものであらう。尤もこれは甲先生や乙先生が堂堂たる本官教授だつたのに反して、予は一介の囑託教授に過ぎなかつたから、予の呼吸し得た自由の空氣の如きも、實は海軍當局が予に厚かつた結果と云ふよりも、或は單に予の存在があれどもなきが如くだつた爲かも知れない。が、さう解釋する事は獨り禮を昨日の上官に失するばかり

でなく、予に教師の口を世話してくれた諸先生に對しても甚だ御氣の毒の至だと思ふ。だから予は外に差支へのない限り、正に海軍當局の海の如き大度量に感泣して、あの横須賀工廠の恐る可き煤煙を肺の底まで吸ひこみながら、永久に「それは犬である」の講釋を繰返して行つてもよかつたのである。

が、不幸にして二年間の經驗によれば、予は教育家として、殊に未來の海軍將校を陶鑄すべき教育家として、いくら己惚れて見た所が、到底然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸藥の如く服膺出來ない點だけでも、明に即刻放逐さるべき不良教師である。勿論これだけの自覺があつたにしても、一家眷屬の口が乾上る惧がある以上、予は怪しげな語學の資本を運轉させて、どこまでも教育家らしい店構へを張りつづける覺悟でゐた。いや、たとへ米鹽の資に窮さないにしても、下手は下手なりに創作で押して行かうと云ふ氣が出なかつたなら、予は何時までも名譽ある海軍教授の看板を謹んでぶら下げてゐたかも知れない。しかし現在の予は、既に過去の予と違つて、全精力を創作に費さない限り人生に對しても又予自身に對しても、濟まないやうな氣がしてゐるのである。それには單に時間の上から云つても、一週五日間、午前八時から午後三時まで機械の如く學校に出頭してゐる訣に行くものではない。そこで予は遺憾ながら、當局並びに同僚たる文武教官各位の愛顧に反いて、とうとう大阪毎日新聞へ入社する事になつた。

新聞は予に人並の給料をくれる。のみならず毎日出社すべき義務さへも強ひようとはしない。これは官等の高下をも明かにしない予にとつて、白頭と共に勅任官を賜るよりは遙に居心の好い位置である。この意味に於て、予は予自身の爲に心から予の入社を祝したいと思ふ。と同時に又我帝國海軍の爲にも、予の如き不良教師が部内に跡を絶つた事を同じく心から祝したいと思ふ。

昔の支那人は「歸らなんいざ、田園將に蕪せんとす」とか謠つた。予はまだそれほど道情を得た人間だとは思はない。が、昨の非を悔い今の是を悟つてゐる上から云へば、予も亦同じ歸去來の人である。春風は既に予が草堂の簷を吹いた。これから予も輕燕と共に、そろそろ征途へ上らうと思つてゐる。

（大正八年三月）

松浦氏の「文學の本質」に就いて

松浦先生の「文學の本質」は先生が最近一年間の大學の講義に若干の補正を加へて新に出版された物である。當時自分は此講義の怠惰なる聽講生の一人であつた。今先生の新著に就いて此稿を草するのも、批評と云ふよりは寧ろ聽講生の一人として、先生の文學論に對する感想の幾分を記して見たいと思ふのである。

先生の新著は骨子に於て先生の信仰の表白である。先生によれば、文學の本質は「死すべき人間」の肉眼を以て見らる可き物では無い。利害と因襲とを離れた心眼を以て捕捉す可き物である。時間空間乃至作家の個性を擧げて、一切の屬性に制限せらる可き物では無い。恰も「一輪の野菊の花の奥に神を見る如く」夫等の一切を絕して、始めて方寸の間に彷彿するを得べき超越（トランセンデンタル）的な或物である。此或物を把握する爲には、知解を抛つて悟入を求めるより外に無い。先生の此信仰は自分にとつて最も興味あるものである。

加之先生によれば文學の本質卽藝術の本質は同時に又「生命の限りなき泉」である。文學の根柢に潜んでゐる不可思議な力は、自然と人生とを貫流する大なる神意に外ならない。從つて文學の眞諦を證得する事は、一歩を相對の外に投じて至上の絶對——「覆面を脫した神」を見る事になるのである。先生は序論の中で「實生活に繫がる自己の一切を燃盡して始めて絶對自由なる自己」を現出し、時間空間因緣の一切を破棄するが故に、却て其一切を包攝する永久の生命に生きると云ふ事は宗教上の悟道であると共に亦藝術上の悟道である」と云つてゐる。先生の好んで用ゐる藝術的救濟(アーティスティックサルヴェーション)と云ひ文學の涅槃(ニルヴァナ)と云ふ語彙は、先生の此信仰から必然に生れて來るのである。此意味に於て先生の新著は獨り先生の藝術觀を開陳した物ではない。一面に於て如上の信仰に立脚した先生の人世觀と世界觀とを倂せて披瀝した物である。

先生は此信念を直下に他に證得せしめんが爲め、屢之を客觀的論證の方便門より搬出した。自家の信念を他に移植せんとする者は、嫌(いや)でも之を分析と綜合とに求める外は無い。先生の新著の皮と骨とを做す物は、實に此論理的正確を期せんとする論議である。先生は其論議の材料を汎く古今東西の文學と、倂せて卑近なる目前の社會的事象とに求めた。此二の方面に於て、僭越ながら自分は悉く、先生の所論に服するとは云へ無いかも知れ無い。併し「文學の旋律的世界と繪畫的世界」に於ける音樂上の旋律と建築上の構成との比較の如きは少くとも先生の信念に同情と理

解とのある限り恐らく何人にも興味ある問題の一であらう。

最後に自分は先生の新著を一貫してゐる或特色を擧げて此稿を完らうと思ふ。それは舊日本に對する先生の思慕である。乃至古東洋に對する先生の同情である。先生は其藝術觀を世阿彌十六部集の中に發見し、其世界觀を印度教的宇宙論の中に味得した。先生は其信念のユウトピアとして(先生の師事した小泉八雲氏の樣に)當然愛撫の眼を過去の空に聳える不二山と椿の花とさうして煎茶の煙とに向はしめざるを得ないのである。併し自分は先生にとつて舊日本が單なる趣味上の隱遁所で無い事を信じてゐる。舊日本に對する追慕の情は人類の將來に幸福を齎す可き何物かが其文明の中に潛んでゐる事を感得するからに外ならない。先生の前には恐らく限り無い未來が、希望と歡喜とに充ちて空の樣に擴がつてゐる事であらう。自分はさう信じ、且さう祈つて此稿の筆を擱かうと思ふ。

(大正五年一月)

新刊批評

翡翠　片山廣子氏著

この作者は、序で佐佐木信綱氏も云つてゐる樣に在來の境地を離れて、一步を新しい路に投じようとしてゐる。「曼珠沙華肩にかつぎて白狐たち黃なる夕日にさざめきをどる」と云ふ樣な歌が、其過去を代表するものとするならば、「何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり」と云ふ樣な歌は、其未來を暗示するものであらう。勿論、後者の樣な歌に於ては、表現の形式內容二つながら、この作者は、まだ幼稚である。しかし易きを去つて難きに就いたと云ふ事は、少くとも作者自身にとつて、意味のある事に相違ない。そして同時に又この歌集が、他の心の花叢書と撰を異にする所以は、此處に存するのではないかと思ふ。左に二三、すぐれてゐると思ふ歌を擧げて、紹介の責を完うする事にしよう。

灌木の枯れたる枝もうすあかう靑木に交り霜とけにけり。

日の光る木の間にやすむ小雀ら木の葉うごけば尾をふりてゐる。

沈丁花さきつづきたる石だたみ靜にふみて戸の前に立つ。

それから母としての胸懷を歌つた歌に、眞率な愛す可きものが、二三ある。

たゆたはずのぞみ抱きて若き日をのびよと思ふわが幼兒よ。

我をしも親とよぶひと二人あり斯くおもふ時こころをさまる。

野口米次郎氏の序も、内容に適切である。裝幀は瀟洒としてゐる。

（大正五年六月）

薄雪双紙　久保田万太郎氏著

氏の近業の小說四つと戲曲二つとを集めたものである。中はどれも氏の在來の傾向を、その儘追うてゐる作品ばかりだから、その傾向そのものを批評する事なしに、この本の批評をする訣には勿論行かない。手短に云へば氏の作品に、今日まで基調となつてゐるものは、或特殊の洗練を經たセンテイメンタリズムである。僕はその或特殊な洗練と云ふ語に、エムフアサイズしたい。何故と云へば、氏の強みが、完くここにあるばかりでなく、氏自身もここに安んじて、獨自の立

場を守つてゐるやうに見えるからである。その洗練と所謂東京趣味なるものとが、關係があるのは云ふ迄もない。(序ながら、僕は、センテイメンタリズムに、最、同情のある事をつけ加へて置かうと思ふ。)から云ふ特色は、遺憾なくこの本に現れてゐる。概して、戯曲の方が、小說よりもすぐれてゐるが、殊に「花の空」の最後には、愛すべきペエソスがある。東京は――少くとも、現在の東京は、この特色だけでも(氏の其他の作家としての長所を除いても)氏のやうな作家のある事に、感謝しなければならない。

(大正五年八月)

駒形より　久保田万太郎氏著

氏が、小說や戯曲を書く片手間に書いた感想や消息や劇評のたぐひを纏めたものである。冊中の諸篇は、僕にとつて、第一にいづれも氏の生活を想見させる點で、面白い。さうして、その氏の生活が、僕なんぞの生活とは、非常にちがつてゐる點で、更に面白い。(殊に、消息には、さう云ふ意味で、面白いのが澤山ある。)しかも、さう云ふ興味が、自叙傳めいた小說なぞとちがつて、單獨にそれ丈の興味として、受入れられる點で、餘程、よむのに氣が樂である。第二に、僕には、

氏の使ふ語彙の特殊な所が(これはこの本に限らないが)面白い。さうして、これも僕なんぞの日常使ふ語彙とは、非常にちがつてゐる點で、更に面白い。――から云ふ面白さから、僕はこの本を推奬しようと思ふ。尤も、かう云ふ僕だけに特殊な興味を並べたてたのでは、推奬の理由にならないと云ふ人があるかも知れない。が、僕にさへこの位面白ければ、氏と同じ生活をし、同じ語彙を使つてゐる氏の愛讀者には、更に幾倍の同情と興味とがある訣ではあるまいか。

それから、かかる凝つた裝釘の本を、容易に出版し得る點で、獨り僕のみならず、同人は皆、氏等大家に對して、一種の羨望を持つてゐる事を書き加へて置く。

(大正五年十一月)

藤娘　松本初子氏著

技巧を用ひると云ふ事と、眞率と云ふ事とは必しも背反するものではない。或技巧は、それを用ひた爲に、反て、その作者の眞率な事を、示す事がある。(善い意味にも、惡い意味にも)「藤娘」の作者が用ひてゐる技巧は、絢爛を極めてゐるやうでも、大抵この類である。だから、かう云ふ技巧を、全然嫌ふ人は格別、さもない人は、必、この作者の眞率な心もちに、微笑を禁じ得ない

ものがあると思ふ。尤も、その眞率な心もちと、作者の表現しようとしたものとが、一致するかどうかは、多少疑問かもしれない。

この縮刷本には、前の版の歌に、「柳の葉」三百首が添へてある。例は煩しいから擧げない。

（大正五年十一月）

微明　新井洸氏著

心の花叢書の一冊である。が、同叢書の外の歌集に比べると、技巧の點では、（石榑氏のを除いて）可也段がちがふ。それから、的確に自然をつかまうとする態度の眞面目さに至つては、殆、他のすべてを（石榑氏のを除かずに）凌駕してゐる。この二つの點で、氏は竹柏園中で、嘱目に價する歌人だと云ふも、決して過言ではない。これは、下の例について見ても明白であらう。

河岸の家にひとり寐に來て宵はやし遠稻光がらす戶に見ゆ。

夕汐に乘り來る船の舳目くるめく我鳩尾にあへて迫るも。

から梅雨の風ふきわたり大河の波の騷立ち閃けるかも。

郵便馬車ぬらりと赤し氷屋の店さきの灯に粉雨久しも。

（大正六年一月）

代表歌選　若山牧水金子薫園二氏共選

現代の各歌人の代表的名歌を選拔して、それを、その主題に依つて分類したものである。各歌人の特色を比較し得られる點でも、各時期に於ける歌の變遷を瞥見し得られる點でも、最後に、歌を製造すべく利この上ない。敢て天下に薦める所以である。

（大正六年一月）

未來創刊號

詩では、矢張三木露風氏が、憎い程氣分を捕へるのに鋭いやうである。「女性」は其最、傑出した作であらう。「村々」の第一のスタンザをよんだ時もゴーホのソレイユ（？）を思出さずにはゐられなかつた。自分は川路柳虹氏の口語詩にはどうしても妥協の出來ない性質を持つてゐるらしい。今度も「相」を讀んだら、終の一行でがつかりしてしまつた。柳澤健氏の諸作には猶、氏の近來の

象徴的傾向に十分な肯定を與へるのを躊躇せしめるものがある。唯「涙」だけは自分に大へん面白かつた。山宮允氏の「知見の塔」は、內へ內へ努力する作者の厳粛な心境を眼のあたりに見る心地がする。MASHINO 氏の英詩では To R. M. がすぐれてゐるやうだ。少くも氏の戯曲「知慧樹」よりはすぐれてゐるに相違ない。新城和一氏の詩をよむと何時でもいい意味での未成品だと思ふ。未來がある詩だと思ふ。「瞳と心」を讀んだ時には殊にさう思つた。唯、かう思ふ時間が餘り長くならない事を祈つて置く。西條八十氏の「海にて」はメーテルリンクの小歌 IV V VII などが思ひ出されるが、調はワイルドの「王女のかなしみ」の第一スタンザを彷彿せしめる。始は此詩が好きだつたが「假面」の三月號にある同じ人の詩を見たら、其方の古童謠のやうななつかしさが之よりずつとなくなつてしまつた。服部嘉香氏は多くの場合、內容が勝ちすぎる。(形式に不滿が多いと云ふ方がロヂカルかもしれない)「落ちゆく地平」なぞが其の好例であらう。「雪の日」になると渾然として全體が微妙な諧調をなして顫動してゐる。三木氏の作に次ぐものは此の一聯かとも思はれる。散文では山宮氏の「詩歌の象徴」と柳澤氏の「バッハマン論」とが、興味を惹いた。山宮氏の飜譯は其忠實なる註解に於て、譯者の研究的良心に尊敬を拂はせるものが少くない。柳澤氏は次號にセザアル・フランクを紹介するさうであるが、バッハマンに試みたよりも、更に自由な、實に主觀の勝つた紹介であつて欲しいと思ふ。灰野庄平氏の感想「見不可見」は其用語の氣の利いてゐる點

のみでも一讀する價値がある。同氏の戲曲「緣にゆるゝ空へ」は藍衣の女、紫衣の女、橙衣の女と、生々しい色彩がのべつに眼にはいるので、讀み了らぬ中にくたびれて仕舞つた。序に云つて置くが體裁は可成高雅であつた。唯、どうしてもわからないのは、題言の始に「年四回刊未來は」とやつた事である。

（大正三年四月）

校正後に

○僕はこれからも今月のと同じやうな材料を使つて創作するつもりでゐる。あれを單なる歴史小說の仲間入をさせられてはたまらない。勿論今のが大したものだとは思はないが。その中にもう少しどうにか出來るだらう。（新思潮創刊號）

○酒蟲は材料を聊齋志異からとつた。原の話と殆變つた所はない。（新思潮第四號）

○酒蟲は「しゆちう」で「さかむし」ではない。氣になるから、書き加へる。（新思潮第六號）

○僕は新小說の九月號に「芋粥」と云ふ小說を書いた。

○まだ明き地があるさうだから、もう少し書く。松岡の手紙によると、新思潮は新潟縣に眞面目な讀者をかなり持つてゐるさうだ。さうしてその人たちの中には、創作に志してゐる靑年も多いさうだ。獨り新思潮の爲のみならず、日本の爲にも、さう云ふ人たちの多くなる事を祈りたい。もし同人のうぬ惚れが、單にうぬ惚れに止らない以上は。

○僕の書くものを、小さく纏りすぎてゐると云うて非難する人がある。しかし僕は、小さくとも完成品を作りたいと思つてゐる。藝術の境に未成品はない。大いなる完成品に至る途は、小なる完成品あるのみである。流行の大なる未成品の如きは、僕にとつて、何等の意味もない。(以上新思潮第七號)

○「煙草」の材料は、昔、高木さんの比較神話學を讀んだ時に見た話を少し變へて使つた。どこの傳說だか、その本にも書いてなかつたやうに思ふ。

○新小說へ書いた「煙管」の材料も、加州藩の古老に聞いた話を、やはり少し變へて使つた。前に出した「虱」とこれと、來月出す「明君」とは皆、同じ人の集めてくれた材料である。

○同人は皆、非常に自信家のやうに思ふ人があるが、それは大ちがひだ。外の作家の書いた物に、帽子をとることも、隨分ある。何でもしつかりつかまへて、書いてある人を見ると、書いてゐる事は暫く問題外に置いて、つかまへ方、書き方のうまいのには、敬意を表せずにゐられない事が多い。(さう云ふ人は、自然派の作家の中にもゐる。)傾向ばかり見て感心するより、かう云ふ感心のし方の方が、より合理的だと思つてゐるから。

○褒められれば作家が必よろこぶと思ふのは少し蟲がいい。

○批評家が作家に折紙をつけるばかりではない。作家も批評家へ折紙をつける。しかも作家のつ

ける折紙の方が、論理的な部分は、客觀的にも、正否がきめられ得るから。（以上新思潮第九號）
○夏目先生の逝去ほど惜しいものはない。先生は過去に於て、十二分に仕事をされた人である。が、先生の逝去ほど惜しいものはない。先生は、この頃或轉機の上に立つてゐられたやうだから。すべての偉大な人のやうに、五十歳を期として、更に大踏步を進められようとしてゐたから。
○僕一身から云ふと、外の人にどんな惡口を云はれても先生に褒められれば、それで滿足だつた。同時に先生を唯一の標準にする事の危險を、時々は怖れもした。
○それから僕はいろんな事情に妨げられて、この正月にはちつとも働けなかつた。働いた範圍に於ても時間が足りないので、無理をしたのが多い。これは今考へても不快である。自分の良心の上からばかりでなく、外の雜誌の編輯者に、嘸迷惑をかけたらうと思ふと、實際いい氣はしない。
○これからは、作が出來てから、遣ふものなら遣つて貰ふやうにしたいと思ふ。とうからもさう思つてゐたが、此頃は特にその感が深い。
○さうして、ゆつくり腰を据ゑて、自分の力の許す範圍で、少しは大きなものにぶつかりたい。計畫がないでもないが、どうも失敗しさうで、逡巡し度くなる。アミエルの云つたやうに、腕だめしに劍を揮つて見るばかりで、一度もそれを實際に使はないやうな事になつては、大變だと思ふ。

○絶えず必然に、底力強く進歩して行かれた夏目先生を思ふと、自分の意氣地ないのが恥しい。心から恥しい。

○文壇は來るべき何物かに向つて動きつつある。亡ぶべき者が亡びると共に、生まるべき者は必生まれさうに思はれる。今年は必何かある。何かあらずにはゐられない、僕等は皆小手しらべはすんだと云ふ氣がしてゐる。(以上新思潮第二年第一號)

(大正五年三月—大正六年一月)

骨董羹

天路歴程

Pilgrim's Progress　を天路歴程と飜譯するは清の同治八年(西歷千八百六十九年)上海華草書館にて出版せる漢譯の名を蹈襲せるにや。この書、篇中の人物風景を悉支那風に描きたる銅版畫の插畫數葉あり。その入窄門圖の如き、或は入美宮圖の如き、長崎繪の紅毛人に及ばざれど、亦一種の風韻無きに非らず。文章も漢を以て洋を敍するの所、讀み來り讀み去つて感興反つて尠からざるを覺ゆ。殊にその英詩を飜譯したる、詩としては見るに堪へざらんも、別樣の趣致あるは插畫と一なり。譬へば生命水の河の詩に「路旁生命水清流、天路行人喜暫留、百菓奇花供悅樂、吾儕幸得此埔遊」と云ふが如し。この種の興味を云々するは恐らく傍人の嗤笑を買ふ所にならん。然れども思へ、獄中のオスカア・ワイルドが行往坐臥に侶としたるも、こちたき希臘語の聖書なりしを。(一月二十一日)

三馬

二三子集り議して曰、今人の眼を以て古人の心を描く事、自然主義以後の文壇に最も目ざましき傾向なるべしと。一老人あり。傍より言を挾みて曰、式亭三馬が大千世界樂屋探しは如何と。二三子の言の出づる所を知らず、相顧みて啞然たるのみ。(一月二十七日)

尾崎紅葉

紅葉の歿後殆二十年。その「多情多恨」の如き、「伽羅枕」の如き、「二人女房」の如き、今日猶之を翻讀するも宛然たる一朶の鼈甲牡丹、光彩更に磨滅すべからざるが如し。人亡んで業顯るとは誠にこの人の謂なるかな。思ふに前記の諸篇の如き、布局法あり、行筆本あり、變化至つて規矩を離れざる、能く久遠に垂るべき所以ならん。予常に思ふ、藝術の境に未成品ある莫しと。紅葉亦然らざらんや。(二月三日)

誨淫の書

金瓶梅、肉蒲團は問はず、予が知れる支那小說中、誨淫の譏あるものを列擧すれば、杏花天、

燈蕊奇僧傳、痴婆子傳、牡丹奇緣、如意君傳、桃花庵、品花寶鑑、意外緣、殺子報、花影奇情傳、醒世第一奇書、歡喜奇觀、春風得意奇緣、鴛鴦夢、野叟曝言、淌牌黑幕等なるべし。聞く、夙に船載せられしものは、既に日本語の飜案ありと。又聞く、近年この種の飜案を密に剞劂に附せしものありと。若し這般の和譯艶情小說を一讀過せんと欲するものは、請ふ、當代の照魔鏡たる檢閲官諸氏の門を叩いて恭しくその藏する所の發賣禁止本を借用せよ。（二月十二日）

演劇史

西洋演劇研究の書今は多く出でたれど、その濫觴をなせしものは永井徹が著したる各國演劇史の一卷ならん。この書、太鼓喇叭竪琴などを描きたる銅版畫の表紙の上に、Kakkoku Engekishi なる羅馬字を題す。內容は劇場及機關道具等の變遷、男女俳優古今の景狀、各國戲曲の由來等なれど、英吉利の演劇を論ずること最も詳しきものの如し。その一斑を紹介すれば、「然るに千五百七十六年女王エリサベスの時代に至り、始めて特別演劇興行の爲め、ブラック・フラヤス寺院の不用なる領地に於て劇場を建立したり。之を英國正統なる劇場の始祖とす。（中略）俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり。當時は十二歲の兒童なりしが、ストラタフオルドの學校にて、羅甸並に希臘の初學を卒業せしものなり。」の如き、破顏微笑せらるる記事少からず。明治十

七年一月出版、著者永井徹の警視廳警視屬なるも一興なり。（二月十四日）

壽陵余子

（大正九年）

八寶飯

石敢當

今東光君は好學の美少年、「文藝春秋」二月號に桂川中良の桂林漫錄を引き、大いに古琉球風物詩集の著者、佐藤惣之助君の無學を嗤ふ。瀟麗の文章風貌に遜らず、風前の玉樹も若かざるものあり。唯疑ふ、今君亦石敢當の起源を知るや否や。今君は桂川中良と共に姓源珠璣の說を信ずるものなり。されど石敢當に關する說は姓源珠璣に出づるのみにあらず、顏師古が急就章(史游)の註にも「衞有石碏鄭有石癸齊有石之紛如其後亦以命族石敢當」とあり。その何れを正しとすべき乎、何人も疑ひなき能はざるべし。徐氏筆精に云ふ「二說大不相侔亦日用不察者也」と。然らばその起源を知らざるもの、豈佐藤惣之助君のみならんや。桂川中良も亦知らざるなり。今東光君も亦知らざるなり。知らざるを以て知らざるを嗤ふ、山客亦何ぞ嗤はざるを得んや。按ずるに鍾馗大臣の如き、明皇夢中に見る所と做すは素より稗官の妄誕のみ。石敢當も亦實在の人物たらず、無何有鄕裡の英雄なるべし。もし又更に大方の士人、石敢當の出處を知らんと欲せば、秋風不索

を動かすの邊、孤影蕭然たる案山子に問へ。

猥談

聞說す、我鬼先生、佐佐木味津三君の文を稱し、猥談と題するを勸めたりと。何ぞその無禮なるや。佐佐木君は溫厚の君子、幸ひに先生の言を容れ、君が日星河岳の文字に自ら題して猥談と云ふ。君もし血氣の壯士なりとせんか、當に匕首を懷にして、先生を刺さんと誓ひしなるべし。その文を猥談と稱するもの明朝に枝山祝允明あり。允明、字は希哲、少きより文辭を攻め、奇氣甚縱橫なり。一たび筆を揮ふ時は千言立ちどころに就ると云ふ。又書名あり。筆法遒勁、風韻蕭散と稱せらる。その內外の二祖、咸な當時の魁儒たるに因り、希哲の文、典訓を貫綜し、古今を茹涵す。大名ある所以なり。然りと雖も佐佐木君は東坡再び出世底の才人、枝山等の遠く及ぶ所にあらず。この人の文を猥談と呼ぶは明珠を魚目と呼ぶに似たり。山客、偶「文藝春秋」二月號を讀み、我鬼先生の愚を嗤ふと共に佐佐木君の屈を歎かんと欲す。佐佐木君、請ふ、安心せよ。君を知るものに山客あり矣。

赤大根

江口君はプロレタリアの文豪なり。「文藝春秋」二月號に「切り捨御免」の一文を寄す。論旨は昆吾と鋭を爭ひ、文辭は卞玉と光を競ふ。眞に當代の盛觀なり。江口君論ずらく、「星霜を閲すること僅に一歳、プロレタリアの論客は容易に論壇を占領せり」と。何ぞその壯烈なる。江口君又論ずらく、「創作壇の一の木戸、二の木戸、本丸も何時かは落城の憂目を見ん」と。何ぞその悠悠たる。江口君三たび論ずらく、「プロレタリア文學勃興と共に、俄かに色を染め加へし赤大根の輩出山の如し」と。何ぞその痛快なる。唯山客の頑愚なる、もしプロレタリアに急變したる小說家、批評家、戲曲家を呼ぶに赤大根を以てせんか、その論壇を占領し、又かの創作壇の一の木戸、二の木戸、乃至本丸さへ占領せんとする諸先生も赤大根にあらざるや否や、多少の疑問なき能はず。且山客の所見によれば、赤大根の繁殖したるはプロレタリア文藝の勃興以前、隣邦露西亞の革命に端を發するものの如し。もし然りとせば江口君も、古色愛すべき赤大根のみ。もし又君の爲に然らずとせんか、かの近來の赤大根は君の小說に感奮し、君の評論に蹶起したる新進氣鋭の青年にあらずや。君自身これが染上げを扶け、君自身これを赤大根と罵る、無情なるも亦甚しいかな。君聽け、啾啾赤大根の哭、文壇の夜氣を動かさんとするを。然れども古人言へることあり。「英雄豈兒女の情なからんや」と。山客亦嚴に江口君が有情の人たるを信ぜんと欲す。もし有情の人と做さんか、君と雖も遂に赤大根のみ。君と雖も遂に赤大根のみ。

瑯琊山客

（大正十二年三月）

念仁波念遠入禮帖

燕雀生といふ人、「文藝春秋」三月號に泥古殘念帖と言ふものを寄せたり。この帖を見るに我等の首肯し難き事二三あれば、左にその二三を記し、燕雀生の下問を仰がん。

（一）春臺の語、老子に出でたりとは聞えたり。老子に「衆人熙々。如享太牢。如登春臺」とあるは疑ひなし。然れども春臺を「天子が侍姬に戯るる處」とするは何の出典に依るか。愚考によれば春臺は禮部の異名なり。禮部は春臺の外にも容臺とも言ひ、南省とも言ひ、禮闈とも言ふ。春の字がついたとて、いつも女に關係ありとは限らず。宋の畫苑に春宮祕戲圖ある故、枕草紙を春宮とも言へど、春宮は元來東宮のことなり。

（二）才人を女官の名とするも聞えたり。才人の官、晉の武帝に創り、宋時に至つて尙之を沿用す。然れども才子を才人と稱しても差支へなきは勿論なり。辭源にも「有才三人四才人。猶言才子」とあるを見て知るべし。燕雀生は必しも才人と言つてはならぬと言はず、しかしならぬと言

はぬうちにもならぬらしき口吻あれば、下問を仰ぐこと上の如し。

（三）佐藤春夫、「キイツの艶書の競賣に附せらるる日」と題する詩を賦したりとは聞えず。賦すとは其事を陳ずるなり。轉じて只詩を作るに用ふ。然れども、キイツ云々の詩はオスカア・ワイルドの作なれば、佐藤春夫の賦す筈なし。それを賦したと言はれては、佐藤春夫も迷惑ならん。賦すに譯すの意ありや否や、あらば叩頭百拜すべし。

（四）門下を食客の意とは聞えたり。平原君に食客門下多かりし事、史記にあるは言ふを待たず。然れども後漢書承宮傳に「過徐盛廬聽經遂請留門下」とあり。門弟子の意なるは勿論なり。然らば誰それの門下を以て居るも差支へなき筈にあらずや。「青雲の志ある者の輕々しく口にすべき語にあらず」とは燕雀生の獨り合點なり。

文藝春秋の讀者には少年の人も多かるべし。斯る讀者は泥古殘念帖にも誤られ易きものなれば、敢て念には念を入れて「念仁波念遠入禮帖」を艸すること然り。

大鵬生

（大正十四年四月）

各種風骨帖*の序

諸公の畫を看るは諸公の面を看るが如し。眼横鼻直、態相似たり。骨格血色、情一にあらず。我は嗤ふ、杜陵の老詩人。畫中馬を看て人を看ざる事を。秋夜燈下に此冊を披けば、一面は夭夭、一面は老ゆ。借問す、靈臺方寸の鏡、我面は抑誰の面にか似たる。

大正十三年十一月

芥川龍之介筆記

* 各種風骨帖は瀧田樗陰氏所藏の書册なり。百穗、古徑、靫彦、未醒、恒友、芋錢六家の畫を收む。

「人魚の嘆き」

（廣告）

谷崎潤一郎氏は當代の鬼才、筆下に百段の錦繡を展べ、胸中に萬顆の珠玉を藏す。殊に其「人魚の歎き」「魔術師」の二編に至つては、正に天下第一の奇文。一は天風海濤の蒼々浪々たるの處、明眸星の如き水怪を戀せる風流才子の情痴を述べ、他は深夜冷月の沈々悽々たるの時、妖姬を化して孔雀たらしむる白面魔君の幻術を描く。才鬼は奔放なる事、盤古が混沌の暗を闢くが如く、文章は瑰麗なる事、女媧が五色の石を練るに似たり。加ふるに水島爾保布氏の彩管を揮ふや、有聲の畫と無聲の詩と善く相待ち相應じて、沈香亭北牡丹に香を生じ、未央殿前月輪亦孤ならざるかと疑はる。古往今來此書と比肩すべき者、かのビイアズレエが插畫を加へたるワイルドの神品サロメを措いて、未嘗有らざるなり。今や金鷄東海の天に啼き、新日本藝術の曙光世界を光被せんとするの時に當り、此の劃世的名著の出版を見る。豈啻に弊堂が榮譽のみなりとせんや。又實

に文壇空前の偉業、恆河萬里の水翻つて、忽地に並頭の大紅蓮を湧出したるの觀あるべきなり。

（大正八年）

鏡花全集目錄開口

鏡花泉先生は古今に獨歩する文宗なり。先生が俊爽の才、美人を寫して化を奪ふや、太眞閣前、牡丹に芬芬の香を發し、先生が淸超の思、神鬼を描いて妙に入るや、鄒湛宅外、楊柳に啾啾の聲を生ずるは已に天下の傳稱する所、我等亦多言するを須ひずと雖も、其の明治大正の文藝に羅曼主義の大道を打開し、艶は巫山の雨意よりも濃に、壯は易水の風色よりも烈なる鏡花世界を現出したるは啻に一代の壯擧たるのみならず、又實に百世に炳焉たる東西藝苑の盛觀と言ふ可し。

先生作る所の小說戲曲隨筆等、長短錯落として五百餘篇。經には江戸三百年の風流を呑却して、萬變自ら寸心に溢れ、緯には海東六十州の人情を曲盡して、一息忽ち千載に通ず。眞に是れ無縫天上の錦衣。古は先生の胸中に蟠つて藍玉愈溫潤に、新は先生の筆下より發して蚌珠益燦然たり。加之先生の識見、直ちに本來の性情より出で、夙に泰西輓近の思想を道破せるもの尠からず。其の邪を罵り、俗を嗤ふや、一片氷雪の氣天外より來り、我等の眉宇を撲たんとするの概あり。試

みに先生等身の著者を以て佛蘭西羅曼主義の諸大家に比せんか、質は擎天七寶の柱、メリメエの巧を凌駕す可く、量は拔地無憂の樹、バルザックの大に肩隨す可し。先生の業亦偉いなる哉。

先生の業の偉いなるは固より先生の天資に出づ。然りと雖も、其一半は兀兀三十餘年の間、文字三昧に精進したる先生の勇猛に歸せざる可からず。言ふを休めよ、騷人清閑多しと。痩容豈詩魔の爲のみならんや。往昔自然主義新に興り、流俗の之に雷同するや、塵霧屢高鳥を悲しましめ、泥沙頻に老龍を困しましむ。先生此逆境に立ちて、隻手羅曼主義の頽瀾を支へ、孤節紅葉山人の衣鉢を守る。轗軻不遇の情、獨往大步の意、倶に想見するに堪へたりと言ふ可し。我等皆心織筆耕の徒、市に良驥の長鳴を聞いて知己を誇るものに非ずと雖も、野に白鶴の廻飛を望んで壯志を鼓せること幾回なるを知らず。一朝天風妖氛を拂ひ、海内の文章先生に落つ。噫、嘘、先生の業、何ぞ千萬の愁無くして成らんや。我等手を額に加へて鏡花樓上の慶雲を見る。欣懷破顏を禁ず可からずと雖も、眼底又淚無き能はざるものあり。

先生今「鏡花全集」十五卷を編し、巨靈神斧の痕を殘さんとするに當り、我等知を先生に辱うするもの、敢て謭劣の才を以て參訂校對の事に從ふ。微力其任に堪へずと雖も、當代の人目を聳動したる雄篇鉅作は問ふを待たず、洽く江湖に散佚せる萬顆の零玉細珠を集め、一も遺漏無からんことを期せり。先生が獨造の別乾坤、恐らくは是より完からん乎。古人曰「欲窮千里目更上一層

樓」と。博雅の君子亦「鏡花全集」を得て後、先生が日光晶徹の文、哀歡双双人生を照らして、春水欄前に虛碧を漾はせ、春山雲外に亂青を疊める未曾有の壯觀を恣にす可し。若し夫れ其大略を知らんと欲せば、「鏡花全集」十五卷の目錄、悉載せて此文後に在り。仰ぎ願くは劉覽を賜へ。

（大正十四年三月）

鏡花全集の特色

一　作品　泉先生の作品は小説、戯曲、隨筆の三方面に亙り、何れも天下無双の光彩を放つてゐる事は贅言するを待たないであらう。其取材構想は或は市井任俠の譚を捉へ、或は深山幻怪の事に及び、或は閨閤子女の情を寫し、あらゆる自然、あらゆる人生、あらゆる社會相を網羅してゐる。其又筆致行文は絢爛と蒼古とを併せ具へ、殆ど日本語の達し得る最高の表現と稱しても好い。加之颯爽たる理想主義的人生觀は到る處に光芒を露し、如何に此偉大なる藝術家の背後に偉大なる思想家があるかを示してゐる。卽ち「鏡花全集」十五卷は明治大正の文藝のみならず、日本文藝の建造したる一大金字塔と言はなければならぬ。

二、編輯　編輯は泉先生自身之に從ひ、小山內薰、谷崎潤一郎、里見弴、水上瀧太郎、久保田万太郎、芥川龍之介の諸氏が參訂の任に從つてゐる。泉先生の著作年月は三十餘年の久しきに亙つてゐるから、作品の數も五百餘篇に及び、新聞雜誌に掲載された儘、單行本にならぬものは甚

だ多い。泉先生の編輯方針はそれ等の斷簡零墨をも一つ殘らず集めた上、全體を小說、戲曲、隨筆の三方面に分ち、各方面それぞれ年代順に作品を排列する計畫である。卽ち「鏡花全集」十五卷は天才泉先生の精進の跡を示すのみならず、近代日本文藝史の最も光彩陸離たる一頁を造るものと言はなければならぬ。

三　校正並びに印刷の體裁　校正並びに印刷の體裁等は小村雪岱、濱野英二の兩氏之に當り、職業的義務心を超越した獻身的情熱を注いでゐる。兩氏とも泉先生に親炙する事多年、先生の人格藝術に至大の尊敬を抱いてゐるから、坊間行はれる「全集もの」の校正並びに印刷の體裁とは自ら同日の談ではない。卽ち「鏡花全集」十五卷は字字魯魚の誤を脫し、行行珠璣の觀を具へた萬古の定本と言はなければならぬ。

（大正十四年三月）

The Modern Series of English Literature 序

學生は新を愛するものである。新を愛する學生に Macaulay や Huxley を讀めと云ふのは殘酷と評しても差支へない。尤も教科書となつたが最後、如何なる斬新の名文にもせよ、忽ち退屈を與へるのは僕自身も經驗した悲劇である。が、退屈を與へるとは云へ、兎に角新は舊よりも幾分か興味を生じ易いであらう。且又新らしい英米の文藝は大陸の作品の英語譯のやうに容易に讀破出來るものではない。それを容易に讀破する爲には、特に新らしい文藝に對する語學的訓練を受けなければならぬ。教科書の中作品に多少の新を加へるのは其の爲にも確かに必要であらう。かたがた編者はこの叢書も幾分か學生諸君の爲に役立ちはしないかと思つてゐる。

大正十三年七月

第一卷の序

この卷を Modern Fairy Tales と稱するのは或は妥當ではないかも知れない。編者はこの卷を編するにあたり、Wilde や Lady Gregory の外に Barrie を加へるつもりであつた。が、頁數の都合その他の理由により、やむを得ず "Peter Pan" の數篇を "The Jungle Book" の數篇に取り換へたのである。

是等の作品の大半は所謂少年文學である。しかし是等の作品をその爲に等閑に附するならば、その本末を顚倒した譏を招かずには措かないであらう。この卷に集めた Kipling や Wilde は啻に少年文學の白眉と呼ばれてゐるばかりではない。又實に彼等の散文の中でも、最も彼等の特色に富んだ傑作と言ふ定評を受けてゐるからである。

大正十四年

第二卷の序

この卷に集めた作品に就いては格別何も言ひたいことはない。が、若し強ひてつけ加へるとすれば、是等の作品を讀過することは Victoria 朝以後の日光の當つた英米の文藝の大通りをちよつと振り返つて見ることである。英米の文藝も世界の文藝と全然交渉を絶つてゐるのではない。Baudelaire の作品に與へた Poe の影響は言ふを待たず、Stevenson の作品は――この卷に收めた Markheim は殺人を敢てする主人公に Dostoevsky の面目を止どめてゐる。すると英米の文藝の大通りをちよつと振り返つて見ることは同時に又世紀末の風に吹かれた世界の文藝の大通りを髣髴することになるかも知れない。

大正十四年

第三卷の序〔闕〕

第四卷の序

Shaw, Galsworthy, Lord Dunsany の三者は既に誰にも知られてゐる。Ervine も或は學生諸君の耳に熟してゐる名前の一つかも知れない。が、念の爲につけ加へれば、彼は一八八三年

愛蘭土の Belfast に生まれた戯曲家兼小説家である。一九一五年愛蘭土文藝運動と共に名高い The Abbey Theatre の manager となり、更に又一九一七年歐羅巴の大戰に出征した。"The Critics" の一篇は彼の全豹を傳へるものではない。しかし兎に角好謔を極めた諷刺劇の佳作たることは事實である。

なほ又 Shaw の "The Dark Lady of the Sonnets" を書いたのは Shakespeare を記念する A National Theatre 建立の資金を求める爲である。この一幕物の中の Shakespeare は在來の文藝史家の Shakespeare ではない。徹頭徹尾 Shaw らしい Shakespeare である。この點は "Cæsar and Cleopatra" の Cæsar と共に The Shavian type of the great men を示してゐるものとも言はれるであらう。

大正十四年三月

第五卷の序

Beerbohm, Walkley の兩批評家はいづれも批評上の impressionist である。が、Shaw は誰でも知つてゐるやうに "brilliance" のみに安ずる批評家ではない。所謂 Life-force の哲學を

高唱して止まない批評家である。もし前二者を art for art's sake の批評家と稱するならば、Shaw は當然 art for life's sake の批評家と稱せられるであらう。一九八〇年代の英吉利文藝は大體 art for art's sake の精神から art for life's sake の精神に推移したと言つても好い。即ち三者の essays を併せ讀むことは同時代の英吉利文藝の推移に一瞥を與へることにもなる訣である。尤も Shaw の一篇に Beerbohm, Walkley の數篇を配するのは輕重を失してゐるかも知れない。しかし後二者の essays は從來餘りに閑却されてゐた觀のある爲、特にこの卷には多きを嫌はず、編者の愛するものを加へたのである。

更に又翻つて Butler を見れば、これは Darwin の進化論を駁するに Neo-Lamarckism の進化論を以てした、戛戛たる獨造底の思想家である。Shaw は彼の進化論を――この卷に收めた "Darwinism and Vitalism" の思想を Butler の進化論の中に發見した。即ち併せて "Darwin Among the Machines" の小論文を加へた所以である。なほ次手に附言すれば、Butler は "Life and Habit" 等進化論に關する諸著の外にも Odyssey の作者を Homer ならざる女詩人にありとした "The Authoress of the Odyssey," それから Swift の "Gulliver's Travels" の外に新機軸を出した諷刺小説 "Erewhon," 最後に當代の社會の機微を穿つた小説 "The Way of All Flesh" 等の逸什を殘した。しかも彼はその生前殆ど英吉利文壇の一顧さへ得ずにしまつた

のである。

他の二篇の essays を收めたのは格別深意のある訣ではない。只兩者とも犀利の筆に富んだ近代の essayist の面目を窺ふのに足りると思つたからである。

大正十四年三月

第六卷の序

第八卷に集めた短篇の realistic 傾向に富んでゐるやうに、この卷に集めた短篇は大抵又 romantic 趣味を漂はせてゐる。しかしこの卷に名を列した作家は必しも romantic 趣味に終始するものではない。たとへば Arnold Bennett の如きは佛蘭西風の realism を多量に具へてゐる作家である。けれども短篇作家たる彼等の力量は略是等の作品にも髣髴出來ることと信じてゐる。殊に構想に奇才を誇つた O. Henry の面目は "Roads of Destiny" の一篇に盡きてゐると言つて好い。なほ又 O. Henry と號した亞米利加の作家 William Sidney Porter を除けば、他の四人は悉く現存する英吉利の作家である。

Wells, Herbert George; b. 1866—

Porter, William Sidney; b. 1862 —— d. 1910
Bennett, Enoch Arnold; b. 1867——
Chesterton, Gilbert Keith; b. 1874——
Beerbohm, Max; b. 1872——

大正十三年十月

第七巻の序

M. Crawford の名は屢我國にも傳へられてゐる。A. Bierce と A. Blackwood との兩作家は既に「第三卷の序」に紹介して置いた。が、他の三人の作家に就いては多少の紹介を要するかも知れない。

1. E. Benson (1867—) は英吉利の作家である。考古學者をも兼ねてゐることは R. James (「第三卷の序」參照)に近いかも知れない。"The Man Who Went Too Far" の中に異教の神 Pan の現れるのも、必しも偶然ではないのであらう。

2. V. O'Sullivan (1872—) は亞米利加の作家である。短篇作家としては相當の名聲を博し

てゐるらしい。"The Interval" の末段の手法は Bierce の辣手段に近いものである。

3. F. Wood は亞米利加の女流作家である。「略半世紀前に生まれた」と云ふ以外に今は生年を詳にしない。"The White Battalion" はその世間に發表した最初の作品だと云ふことである。歐羅巴の大戰は Ghost Story の分野にも少からぬ作品を殘した。これも亦其等の作品中、興味のあるものの一つである。

大正十三年七月

第八卷の序

この卷に集めた英米の作家はいづれも現存する人のみである。S. Aumonier, D. Easton, P. Truscott の三人は英吉利、他は亞米利加の作家である。尤も A. Abdullah だけは名前の示すやうに歐羅巴人ではない。Afghanistan の Kabul に生まれた亞剌比亞－土耳古系の東洋人である。

何よりも簡勁を旨とする近代の短篇の特色は是等の作品に漲つてゐる。殊に露西亞に生まれ、亞米利加に人となつた B. Rosenblatt の "In the Metropolis" はその尤なるものであらう。

それから H. Rhodes の "Extra Men" は歐羅巴の大戰の生んだ、新らしい亞米利加の傳說である。或は Irving の "Rip Van Winkle" や Hawthorne の "The Gray Champion" 等と竝稱するのに堪へるかも知れない。

大正十三年七月

「近代日本文藝讀本」緣起

僕は大正十二年九月一日、――卽ち大地震のあつた當日に友人神代種亮氏の紹介により、書肆興文社の石川氏から「近代日本文藝讀本」を編纂してくれろと言ふ依賴を受けた。何でも石川氏の計畫によれば、明治大正の諸作家の作品を集めた副讀本用の選集を出版したいとか言ふことだつた。僕は格別この仕事を大事業とも何とも思はなかつたから、やつて見ても好いと返事をした。しかしこれはとりかかつて見ると、漫然と僕の想像してゐたよりも遙かに骨の折れる仕事だつた。僕は實際どうかすると本職も碌に出來ぬのに驚き、何度もこの仕事を抛たうとした。が、石川氏はその度に巧みに僕の機嫌をとり、如何に抛たうと試みても、到底抛たれぬやうに仕向けて行つた。たとへば「近代日本文藝讀本」は始は文部省の檢定を受け、學校用副讀本になる筈だつた。けれども檢定を受ける爲には有島武郎、武者小路實篤兩氏の作品を除かなければならぬ。兩氏の作品を除くことは勿論天下の好奇心を刺戟し、兩氏の著書の發行部數を百倍せしめるのに違ひない。

僕は何もその賣れ行きに異存を持つてゐる次第ではなかつた。しかし「近代日本文藝讀本」は「近代日本文藝讀本」にしたかつたから、やはり兩氏の作品は保存することに決定した。が、この時にも石川氏は快く僕の意見を容れ、「では檢定を受けないことにしませう」と卽座に初志を撤回した。これは必しも石川氏には易易たる犧牲ではなかつたであらう。しかし石川氏の僕を待つことは槪ねかう言ふ調子だつた。僕はその爲に苦情を言ひ言ひ、始めに依賴を受けた時から一年有半を閱した後、やつと「近代日本文藝讀本」五冊の編纂を終ることになつた。今編纂を終るのに當り、この緣起を記したのは啻に Book-making の男兒一生の大業たることを世間に廣告する爲ばかりではない。同時に又如何に安請け合ひの自他ともに苦しめるかを僕自身末代までも忘れざらんことを期する爲である。

大正十四年三月

「近代日本文藝讀本」の序

「近代日本文藝讀本」は明治大正の諸作家の作品中、道德、法律、社會的慣例等に牴觸せず、しかも

文藝的或は文藝史的に一讀の價値のある作品を百四十八篇(短歌や俳句は數首或は數句を一篇とし)收めたものである。しかしこの讀本に收めた諸作家の外に必しも作家のない訣ではない。現に編者は種種の事情により、明治初葉の諸作家——たとへば河竹默阿彌を割愛した。のみならずこの讀本に收めた作品は各作家の面目の一斑は示してゐるにもせよ、その又面目の全豹を示してゐるかどうかは疑問である。若しこの讀本を目するのに近代日本文藝選集を以てするならば、それは編者を誤るばかりではない、恐らくは明治大正の諸作家にも(この讀本に洩れたると否とを問はず)累を及ぼすことになるであらう。編者は唯この讀本が在來の文藝讀本よりも若干の長所のあることを信じ、併せて文藝的教育の上にも多少の貢獻を與へることを期待してゐるのに過ぎないのである。

文藝的教育の特長は今更多言を費さずとも好い。唯編者の一言したいのは文藝的教育の「特短」である。文藝的教育は特長と共に時には「特短」をも說かれぬことはない。しかしその「特短」とは何かと言へば、薄志弱行に陷るとか、偸安姑息に傾くとか、いづれも文藝的教育とは直接に緣のないことばかりである。薄志弱行の輩や偸安姑息の徒も尙且文藝を愛するであらう。が、それは偶彼等の園藝をも愛するのと同じことである。よし又文藝を愛した爲に惡德を學んだものがあるとしても、一を以て他を律するとすれば、我等は日射病を豫防する爲にもやはり日輪を打ち碎か

なければならぬ。編者がこの讀本を編したのは勿論文藝的教育の「特短」を認めてゐない爲である。けれども萬一この讀本にさへ毒せられるもののあつた時には、――編者は決して教育家諸君や年長者諸君や青年諸君の「特短」を認めるのを辭せないであらう。

この讀本の成つたのは勿論編者の力の外にも高作の掲載を許された諸氏、殊にこの讀本に掲げる爲に高作の全部或は一部に加筆の勞を吝しまれなかつた有島生馬、佐藤春夫、廣津和郎、上司小劍、長田幹彥、藤森成吉、久米正雄等の諸氏の好意に待つ所の多いものである。更に又この讀本の編纂の上には泉鏡花、鈴木三重吉、久米正雄、久保田万太郎、菊池寛、廣津和郎、室生犀星、小島政二郞、佐佐木茂索等の諸氏も便宜を與へられたことは尠少ではない。いづれも禮を失するのを避けず、編者のここに深謝の意を表したいと思ふ所以である。

大正十四年十月

「近代日本文藝讀本」の凡例

一 「近代日本文藝讀本」に收められた作品は一篇一人(たとへば森鷗外)に當るよりも、寧ろ一篇一作家(たとへば小說家森鷗外や飜譯家森鷗外を除外した戲曲家森鷗外)に當るものである。

二　「近代日本文藝讀本」に收められた作品は總計百四十八篇中十篇前後を除外すれば、悉く一篇として獨立したものである。

三　「近代日本文藝讀本」に收めた作品は大體中學の一學年から五學年に至る學生諸君の讀書力に準じて配列したものである。（しかし念の爲に注意すれば、勿論容易に讀み得るのは容易に味はひ得るのと同じことではない。）

四　「近代日本文藝讀本」に收めた作品はいづれも文字や假名遣ひの上に或程度の統一を保つたものである。但し各作家の特に用ゐた文字や假名遣は改めてゐない。これは又この本の校正と共に一に神代種亮氏を煩はす外はなかつたものである。

第一集の序

この集に收めた作品中、坂本四方太の「向島」は正岡子規に端を發した寫生文の一例を示すもの

である。尙又齋藤綠雨の「新體詩見本」は必しも批評家齋藤綠雨の作品を示す爲に收めたのではない。寧ろ明治以後の日本には少い擬似詩（Parody）の一例を示す爲に三篇の見本を選んだのである。

大正十四年十月

第二集の序

この集に收めた作品に就いては特に記したいことは一つもない。若し强ひて記すとすれば、――如何に强ひて記すとしても、やはり特に記したいことは一つもないと言ふことだけである。

大正十四年十月

第三集の序

この集に收めた作品中、森田思軒の「ルヰ・フィリップ王の出奔」は森鷗外、二葉亭四迷等の散文飜譯の外に日本の小說に影響を與へた散文飜譯の一つである。思軒の文章は文法上の規則を無

視した場合も稀ではない。が、編者は奇峭を極めた原文の面目を保存する爲に一語も改竄を加へぬことにした。

大正十四年十月

第四集の序

この集に收めた作品中、饗庭篁村の「與太郎料理」は明治中葉に輕妙を誇つた所謂根岸派の作風を窺はしむるのに足るものである。これは又この讀本に收めた作品中でも、明治初葉を渡つて來た江戸末期の小說の反響を與へる唯一の作品にもなつた訣であらう。

大正十四年十月

第五集の序

この集に收めた作品中、樋口一葉の「みづの上」は小說家樋口一葉の作品を示すのに足るものではない。が、小說家樋口一葉の生活を示すのに足るものである。或は又當時の文壇の一瞥を示す

ことにもなるかも知れない。編者は一つには讀本の中に日記體の文章も收めたかつた爲に特に「みづの上」を收めることにした。

大正十四年十月

自序跋

羅生門の後に

この集にはいつてゐる短篇は、「羅生門」「貉」「忠義」を除いて、大抵過去一年間――數ヘ年にして、自分が二十五歳の時に書いたものである。さうして半は、自分たちが經營してゐる雜誌「新思潮」に、一度掲載されたものである。

この期間の自分は、東京帝國文科大學の怠惰なる學生であつた。講義は一週間に六七時間しか、聽きに行かない。試驗は何時も、甚だ曖昧な答案を書いて通過する。卒業論文の如きは、一週間で匆忙の中に作成した。その自分がこれらの餘戲に耽り乍ら、とにかく卒業する事の出來たのは、一に同大學諸教授の雅量に負ふ所が少くない。唯偏狹なる自分が衷心から其雅量に感謝する事の

出來ないのは、遺憾である。

自分は「羅生門」以前にも、幾つかの短篇を書いてゐた。恐らく未完成の作をも加へたら、この集に入れたものの二倍には、上つてゐた事であらう。當時、發表する意志も、發表する機關もなかつた自分は、作家と讀者と批評家とを一身に兼ねて、それで格別不滿にも思はなかつた。尤も、途中で三代目の「新思潮」の同人になつて、短篇を一つ發表した事がある。が、間もなく「新思潮」が廢刊すると共に、自分は又元の通り文壇とは緣のない人間になつてしまつた。

それが彼是一年ばかり續く中に、一度「帝國文學」の新年號へ原稿を持ちこんで、返された覺えがあるが、間もなく二度目のがやつと同じ雜誌で活字になり、三度目のが又、半年ばかり經つて、どうにか日の目を見るやうな運びになつた。その三度目だ、この中へ入れた「羅生門」である。その發表後間もなく、自分は人傳に加藤武雄君が、自分の小說を讀んだと云ふ事を聞いた。斷つて置くが、讀んだと云ふ事を聞いたので、褒めたと云ふ事を聞いたのではない。けれども自分はそれだけで滿足であつた。これが、自分の小說も友人以外に讀者がある、さうして又同時にあり得ると云ふ事を知つた始めである。

次いで、四代目の「新思潮」が久米、松岡、菊池、成瀨、自分の五人の手で、發刊された。さうして、その初號に載つた「鼻」を、夏目先生に、手紙で褒めて頂いた。これが、自分の小說を友人

以外の人に批評された、さうして又同時に、褒めて貰つた初めである。

爾來程なく、鈴木三重吉氏の推薦によつて、「芋粥」を「新小說」に發表したが、「新思潮」以外の雜誌に寄稿したのは、寧ろ「希望」に揭げられた、「虱」を以て始めとするのである。

自分が、以上の事をこの集の後に記したのは、これらの作品を書いた時の自分を幾分でも自分に記念したかつたからに外ならない。自分の創作に對する所見、態度の如きは、自ら他に發表する機會があるであらう。唯、自分は近來ますます自分らしい道を、自分らしく步くことによつてのみ、多少なりとも成長し得る事を感じてゐる。從つて、屢々自分の頂戴する新理智派と云ひ、新技巧派と云ふ名稱の如きは、何れも自分にとつては寧ろ迷惑な貼札たるに過ぎない。それらの名稱によつて概括される程、自分の作品の特色が鮮明で單純だとは、到底自信する勇氣がないからである。

最後に自分は、常に自分を刺戟し鼓舞してくれる「新思潮」の同人に對して、改めて感謝の意を表したいと思ふ。この集の如きも、或は諸君の名によつて——同人の一人の著作として、覺束ない存在を未來に保つやうなことがあるかも知れない。さうなれば、勿論自分は滿足である。が、さうならなくとも、亦必ずしも滿足でないことはない。敢て同人に語を寄せる所以である。

大正六年五月

「影燈籠」附記

「世之助の話」は本來「傀儡師」に加ふべきであつたが、當局の忌避に觸れた爲、やつと一部を削つて本集に收める事が出來た。
二篇の飜譯は「羅生門」以前の舊稿であるが、紙數の不足を補ふ爲、止むを得ず卷末に加へる事にした。
その他は皆「傀儡師」以後の創作である。

大正八年十二月十五日

「夜來の花」附記

これは「影燈籠」以後の短篇集である。「杜子春」「アグニの神」の二篇は童話であるが、前例通り篇中に收める事にした。

この書の裝幀は小澤忠兵衞、小穴隆一の兩氏を煩はした。どの位兩氏が私の爲に、面倒な工夫を重ねてくれたか、それは兩氏を知らぬ人には想像も出來ぬのに相違ない。私は兩氏の好意を思ふと、愈私の小說の拙さに、恥ぢ入らずにはゐられぬのである。

大正十年二月十六日

「點心」自序

點心とは、早飯前及び午前午後哺前の小食を指すやうである。小説や戲曲を飯とすれば、これらの隨筆は點心に過ぎぬ。のみならずわたしはこの四五年、丁度點心でも喫するやうに、時時これらの隨筆を艸した。この書に題して點心と云ふのも、畢竟こんな理由に出でたのである。

昔、板橋の三娘子は新作の燒餅を食牀に置き、客に薦むる點心とした。この點心を食つた客は、忽ち驢馬に變じたさうである。吾家の閑點心を食つたものも、或は驢馬に變ずるかも知れぬ。しかし手前味噌を揚げさせれば、或は麒麟に變ずるかも知れぬ。

大正十一年四月十六日於澄江堂

「沙羅の花」自序

これは大正五年から大正十一年に至る間の、わたしの作品の選集である。選の標準は必しも、作品の佳否にのみに據つたのではない。一卷の中に出來る限り、種々の企圖のもとに書かれた作品を集めたいと思つたのである。

沙羅の花は和漢三才圖會に據れば、「白單瓣狀似山茶花而易凋」と云ふ事である。是等の作品も沙羅の花のやうに、凋落し易いものかも知れぬ。かたがたふと思ひついた通り、この選集の名前にする事とした。

大正十一年七月

「邪宗門」の後に

「邪宗門」は少時の未定稿である。今更本の形にすべきものではない。それを今上梓するのは一には書肆の囑により、二には作者の貧によるのである。

たほ又未定稿のまま上梓するのは作者の疎懶の爲ばかりではない。作者の心も谷水のやうに逆流することを得ないからである。

大正十一年十月

「春服」の後に

「春服」には例の通り、「夜來の花」以後の短篇を集めた。但し「老いたる素戔嗚尊」は「夜來の花」以前の作品である。

一二の例外を除きさへすれば、「春服」に收めた作品は二十代に成つたもののみである。だから「春服」と名づけることにした。

卷首に掲げた作者の寫眞は明治二十九年十一月、袴着の祝ひに寫したものである。これも深意のある訣ではない。唯「春服」の成るに至つた年少時代を紀念する爲に、筐底の一枚を選んだのである。

裝幀もやはり一游亭小穴隆一氏の筆である。小穴氏は今春病の爲に、丁度「春服」の校正中、一脚を切斷することになつた。作者は裝幀のみならず、平生小穴氏に負ふところの甚多いものである。今この文を艸するに當り、愴然の感を禁じ得ない。

大正十二年二月九日夜

普及版「春服」の前に

「春服」の普及版は震災の爲に、豫定よりも發賣を早めることにした。普及版の內容は特裝版と

全然同一である。但し一游亭の裝幀は勿論卷頭の寫眞ははひつてゐない。これだけは特裝版「春服」の後記と矛盾することになつて來るから、念の爲に附言する次第である。

大正十三年三月

「黃雀風」の後に

「黃雀風」は例の通り、「春服」以後の短篇集である。「黃雀風」と云ふ名は深意のある訣ではない。唯「此節東南常有風。俗名黃雀風」とあるのに依り、「春服」に繼いだ意を示しただけである。

裝幀も亦例の通り、小穴隆一君を煩はせる事にした。君の一脚を截斷した後、却て神身とも旺になつたのはひとりわたしの喜びのみではあるまい。

なほ又神代種亮君に校正の面倒を見て貰つたことも深謝の意を表したいと思つてゐる。

大正十三年六月二十一日

「梅・馬・鶯」小序

「梅・馬・鶯」は僕の書いた短篇以外のものを集めた本である。尤も「點心」や「百艸」の中から拔いて來たものも少くはない。それは短篇以外のものをざつと一冊に纏めたかつた僕の心もちに同情して大目に見て頂きたいと思つてゐる。

大正十五年十月十五日

追記。「梅・馬・鶯」と名づけたのは別に意味のある訣ではない。字面の感じだけを悅んだのである。これは出版者に尋ねられたから、次手にちよつと斷ることにした。

露譯短篇集の序

わたしの作品がロシア語に飜譯されると云ふことは勿論甚だ愉快です。近代の外國文藝中、ロシア文藝ほど日本の作家に、――と云ふよりも寧ろ日本の讀書階級に影響を與へたものはありません。日本の古典を知らない青年さへトルストイやドストエフスキイやトゥルゲネフやチェホフの作品は知つてゐるのです。我々日本人がロシアに親しいことはこれだけでも明らかになることでせう。のみならずわたし自身の考へによれば、ロシアが生んだ近代の政治的天才、レニンのことを考へても、所謂 Europe がレニンを理解しなかつたのは餘りにレニンが東洋的な政治的天才だつた爲かも知れません。最も理想に燃え上つたと共に最も現實を知つてゐたレニンは日本が生んだ政治的天才たち、源頼朝や徳川家康に可なり近い天才です。言はば東洋の草花の馨りに滿ちた、大きい一臺の電氣機關車です。近代の日本文藝が近代ロシア文藝から影響を受けることが多かつたのは勿論近代の世界文藝が近代のロシア文藝から影響を受けることが多かつたのにも原因

があるのに違ひありません。しかしそれよりも根本的な問題は何かロシア人には日本人に近い性質がある爲かと思ひます。我々近代の日本人は大きいロシアの現實主義者たちの作品を通して(durch, through)兎に角ロシアを理解しました。どうか同樣にロシア人諸君も我々日本人を理解して下さい。(我々日本人は世界的には美術や美術工藝を除いた藝術的には全然孤立してゐるものです。)わたしは日本の現代の作家たちの中でも大作家の一人ではありません。のみならずロシアに紹介されるのに最も適當な一人かどうかも疑問であると思つてゐます。千八百八十年以後の日本は大勢の天才たちを生みました。それ等の天才たちは或は Walt Whitman のやうに人間に萬歳の聲を送り、或は Flaubert のやうに正確にブルヂョアの生活を寫し、或は又世界中にひとり我々の日本にだけある、傳統的な美を歌ひ上げてゐます。若しわたしの作品の飜譯を機會にそれ等の天才たちの作品もロシア人諸君に知られるとしたらば、それは恐らくはわたし一人の喜びだけではありますまい。この文章は簡單です。しかしあなたがたのナタアシアやソオニアに我々の姉妹を感じてゐる一人の日本人の書いたものです。どうかさう思つて讀んで下さい。

(昭和二年一月)

問に答へて

小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い

小學校に通つてゐる頃、私の近所にあつた貸本屋の高い棚に、講釋の本などが、澤山並んでゐた。それを私は何時の間にか端から端迄すつかり讀み盡してしまつた。やがて、さうしたものから導かれて、まづ「八犬傳」を讀み、「西遊記」「水滸傳」を讀み、馬琴のもの、三馬のもの、一九のもの、近松のものを讀み始めた。傍ら十歳位の時から始めてゐた英語と漢學とを習つた。德冨蘆花の「思ひ出の記」や「自然と人生」を、高等小學一年の時に讀んだ。中學時代には、泉鏡花のものに沒頭して、それを悉く讀んだ。漢詩も可也讀んだ。續いて夏目さんのもの、森さんのものも大抵皆讀んでゐる。中學の五年の時に「義仲論」といふ論文を校友會雜誌に出した。これが一番始め

に書いて出して見た文章であつた。しかし、當時ではまだ作家にならうといふやうな考は浮ばなかつた。將來は歴史家にならうといふやうに思つてゐた。

中學を卒業してから、無試驗で一高の英文科に入學した。もう歴史家になる考もなかつた。相變らず小說を讀んでゐた。主に德川時代のものが多かつた。德川時代の淨瑠璃や小說の次には、西洋のものにも移つた。丁度自然主義運動で當時我文壇に流行したツルゲエネフ、イブセン、モウパッサンなどを出鱈目に讀み獵つた。

高等學校から大學に進むと、小說は支那のものに移つた。「珠邨談怪」「新齊諧」「西廂記」「琵琶行」などを無闇と讀んだ。日本の作家のもののうち、志賀直哉氏の「留女」を好きで讀んだ。武者小路實篤氏のものも讀んだ。その頃讀んだものの中で、殊に感激させられたものは、ジャン・クリストフであつた。

以上は主にこれまでにもお話したことのある私の讀んだものに就ての、大あらましの筋道だが、創作を書き出した動機といふと、大學一年の時、豐島だの、山宮だの、久米だので第三次の「新思潮」を出した時に、「老年」といふ短篇を書いたのが初めである。それでもまだ作家になる考がきまつてゐたのではなかつた。その頃久米がよく小說や戲曲などを書くのを見て、ああいふものなら自分達でも書けさうな氣がした。そこへ久米などが書け書けと煽動するものだから、書いて見た

のは、「ひよつとこ」と「羅生門」とだ。かういふ次第だから、書き出した動機としては、久米の煽動に負ふ所が多い。「ひよつとこ」も「羅生門」も「帝國文學」で發表した。勿論兩方共誰の注目も惹かなかつた。完全に默殺された。現に「羅生門」の如きは、今日親しく交際してゐる赤木桁平すらも默殺した。

その後新たに出た第四次の「新思潮」の同人に加はつて、その初號に「鼻」といふ小説を書いた。それが夏目さんを始め、小宮君や、鈴木三重吉君や、赤木の目にとまつて、褒められた。三重吉君の如きは、それを動機として、その年の「新小說」の特別號に小説を書かしてくれた。それが「芋粥」である。前の「羅生門」も「芋粥」も「今昔物語」から材料を取つてゐる。「今昔物語」は當時でも今日でも、私は愛讀を續けてゐる。その後今日まで小説を書き續けてゐるが、本當に小説を書いて行かうといふ勇氣を生じて來たのは、最近半年ばかりの事である。

（大正八年一月）

愛讀書の印象

子供の時の愛讀書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも僕の愛讀書である。比喩談としてはこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない。それから「水滸傳」も愛讀書の一つである。これも今以て愛讀してゐる。一時は「水滸傳」の中の一百八人の豪傑の名前を悉く諳記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒險小說や何かよりもこの「水滸傳」だの「西遊記」だのといふ方が遙かに僕に面白かつた。

中學へ入學前から德富蘆花氏の「自然と人生」や樗牛の「平家雜感」や小島烏水氏の「日本山水論」を愛讀した。同時に、夏目さんの「猫」や鏡花氏の「風流線」や緑雨の「あられ酒」を愛讀した。だから人の事は笑へない。僕にも「文章俱樂部」の「青年文士錄」の中にあるやうな「トルストイ、坪内士行、大町桂月」時代があつた。

中學を卒業してから色んな本を讀んだけれども、特に愛讀した本といふものはないが、概して云ふと、ワイルドとかゴオチエとかいふやうな絢爛とした小説が好きであつた。それは僕の氣質からも來てゐるであらうけれども、一つは慥かに日本の自然主義的な小説に厭きた反動であらうと思ふ。ところが、高等學校を卒業する前後から、どういふものか趣味や物の見方に大きな曲折が起つて、前に言つたワイルドとかゴオチエとかいふ作家のものがひどくいやになつた。ストリンドベルクなどに傾倒したのはこの頃である。その時分の僕の心持からいふと、ミケエル・アンヂエロ風な力を持つてゐない藝術はすべて瓦礫のやうに感じられた。これは當時讀んだ「ジヤン・クリストフ」などの影響であつたらうと思ふ。

さういふ心持が大學を卒業する後までも續いたが、段々燃えるやうな力の崇拜もうすらいで、一年前から靜かな力のある書物に最も心を惹かれるやうになつてゐる。但、靜かなと言つてもただ靜かなだけでも力のないものには餘り興味がない。スタンダアルやメリメエや日本物で西鶴などの小説はこの點で今の僕には面白くもあり、又ためにもなる本である。

序ながら附け加へておくが、此間「ジヤン・クリストフ」を出して讀んで見たが、昔ほど感興が乘らなかつた。あの時分の本はだめなのかと思つたが、「アンナ・カレニナ」を出して二三章讀んで見たら、これは昔のやうに難有い氣がした。

（大正九年八月）

文藝家たらんとする諸君に與ふ

文藝家たらんとする中學生は、須らく數學を學ぶ事勤勉なるべし。然らずんばその頭腦常に理路を辿る事迂にして、到底一人前の文藝家にならざるものと覺悟せよ。

文藝家たらんとする中學生は、須らく體操を學ぶ事勤勉なるべし。然らずんばその體格常に薄弱にして、到底生涯の大業を成就せざるものと覺悟せよ。

文藝家たらんとする中學生は、須らく國語作文等を學ぶに冷淡なるべし。これらの課目に冷淡にして、しかもこれらの課目に通曉し得る人物にあらずんば、到底半人前の文藝家にさへならざるものと覺悟せよ。

數學の出來ず、體操の嫌ひなるを以て、反つて己の文藝的天分豐なるかの如く己惚るるものは元より、國語の點數多く作文の甲ばかりなるを以て、一かどの天才の如く考ふるものは、自家の愚を天下に廣告すると共に、併せて文藝の大道を冒瀆するものと云はざる可からず。こは予自身

の經驗に基く言にして、予亦然く中學時代を有效に經過せざりしを悲しみつつあるものなり。一言文藝家たらんとする諸君に告ぐる事斯くの如し。

（大正八年三月）

私の愛讀書

目下特に擧ぐ可き愛讀書も無之従つてこの感銘と云つたやうなものも申上げ難けれど、此の一週間ばかりに病床にて讀みし小泉八雲氏の Interpretations of Literature 二卷及び Appreciations of Poetry 一卷を近來にない好著と存じ、邦人の英文學に親しまんとするものにとりて絕好の指針たるは元より「怪談」「心」等を愛讀するものにとりても、殆ど八雲氏と膝を交へてその卓嗣風發を耳にするの概ある所快心極りなかる可く候。右御答へまで。草々。

（大正八年四月）

眼に見えるやうな文章

景色が visualize（眼に見えるやうに）されて來る文章が好きだ。さういふところのない文章は嫌ひである。僕に云はせると、「空が青い」と書く人と「空が鋼鐵のやうに青い」と書く人とは、初めから感じ方が違ふのだ。前者はただ「青い」と感じ、後者は「鋼鐵のやうに青い」と感ずる。この場合「鋼鐵のやうに」といふことを附け加へるのは、單なる技巧ではない。それだけ適確に情景を摑まへてゐるのだと思ふ。その摑まへ方の適確さが、夏目漱石氏の文章では非常に獨得であつて、しかも優れてゐる。「四篇」に收められてゐる「永日小品」の中の「蛇」の冒頭、「木戸を開けて表へ出ると、大きな馬の足迹の中に雨が一杯溜つてゐた。」これだけの一句で以て、實際雨の降つてゐる田舍道といふ感じがよく出てゐる。かうした文章が好きだ。

「風が高い建物に當つて、思ふ如く眞直に拔けられないで、急に稻妻に折れて、頭の上から斜に鋪石迄吹き卸して來る。自分は歩きながら被つてゐた山高帽を右の手で抑へた。」

「暖かい夢」の一節のこれなぞも、非常に適確な表現である。矢張り「永日小品」の中の「昔」と題するものの一番初めの一節なぞ實に巧いと思ふ。漱石氏の作品には隨所にさうした私の好きな文章を發見することが出來る。

（大正七年五月）

森さんのスタイル

スタイルも外のものと變りがありません。讀んで讀み飽かない、讀む度に寧今までの氣のつかない美しさがしみ出して來る。さう云ふスタイルがほんとうのスタイルです。ほんとうのスタイルは今も數へる程しかありません。

森さんのスタイルは正にそのほんものの一つです。

（大正六年十一月）

谷崎君の文章

○谷崎君は文章にもあらはれるけれど非常に日本のクラシックの素養が深い。今の文壇にはめづらしい程。そして種々な事に精しい。殊に「源氏物語」「榮華物語」などをよく讀んで、それから出て來たらしい文章の味はひもある。國文學の素養の深いところへ持つて來て、漢文からの影響がまた多い。その漢文もあたりまへの硬い漢文でなしに、小說とか稗史とか雜劇とかの綺麗な軟かな言葉使ひのものである。

○ポオやボオドレエルのものも讀んでゐるが、その影響は、內容の上からではなく、文章、スタイルの上では存外深くなく大きくない。日本の古典からの方がより大きくより深い。だから文章が非常に豐麗である。

○作の上では實に苦心をしてゐる。一見すると溢れるやうに書いてあつても、非常に細心に彫琢に彫琢を重ねて仕上げてある。

○何時であつたか、谷崎君が、京都を背景とした歴史小説を書く時、中に出て來る人の言葉に困る、現代語では物足らず、ありふれた古めかしいのでも不十分だと僕に話したことがあつた。そして谷崎君が京都に居た時、ある日大原女が二人通りかかつた。その一人の大原女のものを買つた。頭に載つけてゐた花でも買つたのだらう。すると、買つて貰へなかつた方の大原女が、谷崎君をつかまへて「わなみのも買うてたもや」と言つた。その調子が忘れられない。それで現代の京都ものを基礎として、昔使はれてゐたと思ふやうな言葉をクリエエトしなくちや氣がすまない。といふことであつた。で、その話を聞いた時、僕は名工の苦心談を聞くやうに面白く思つた。その程度に谷崎君は苦心する。

○文章の調子に氣をつけてゐる。日本語の語尾が同一になつてゐる。それを切り抜けるといふやうなところが、谷崎君には苦しい負擔なのであらうと思はれる。ユニフォムティに苦心してゐるだけ、それだけの效果が立派に出てゐる。

○谷崎君はリズムばかりでなく、文章の上には想像し難い苦心をする人なのだから、人の飜譯文は讀めない。原書でなくては氣がすまない。

○書かれた文章の調子といふことにも、使用された象形文字の感じといふことにも、一通りでない吟味をしてゐる。これは何時か「中央文學」に谷崎君が書いてゐた。敏感な人であるから、用ゐ

る字を、美的な目的ばかりでなく、同時に感じを實際的な目的にまで適はせようとする。例へば普通の人が、「家」と書いてウチと讀ませるやうな場合を、「內」といふ字を使ふといつたやうに。

（大正七年一月）

〔談話〕

谷崎潤一郎論

一、小說家中森鷗外先生を除き谷崎潤一郎君の如く日本の古典に通ぜる人は恐らく一人もなかるべし。

一、君が西田博士の「自覺に於ける直觀と反省」を再讀したるは予の記憶に新なる所なり。かくの如き哲學に對する君の興味は坊間に多く知られざるが如し。されどこの點に於ても君は決して人後に落つるものにあらず。

一、君の批評眼も亦甚精透なり。唯予は君自身の作品と予自身の作品とに限り、時に君の眼識

に伏する能はざるを遺憾とす。一笑。
一、君が文章道に於ける雕龍の技は天下皆これを知る。故に贅せず。

（大正八年四月）

鈴木君*の小説

鈴木君の藝術は、自然主義以後の文壇の傾向を善い方面も惡い方面も代表してゐる觀がある。一例を示すと君の小說は、或ポイントのないものは殆一つもない。そこは確に新しいと云はる可き特色であらう。が、そのポイントなるものが、君の人生觀なり世界觀なりに、深い根ざしを下してゐると思はれない事も少くない。そこが又當に非難さる可き缺點であると思ふ。

善惡兩樣の意味で、時代の標本的作品を見たいと思ふ人は、鈴木君の小說を讀むに若くはない。一言天下に勸める所以である。

附記　但君の近作には、流行兒の免れ難き忙中落筆の弊に陷つてゐるものがある。自分は君の

爲に、これをとらない。

（大正七年九月）

*鈴木善太郎氏

久米正雄の印象

久米正雄の事を書けと云ふ注文である。

が久米のやうな友人の事は、容易に印象なんぞ書けるものぢやない。何故かと云ふと——

第一、久米の大體の性格と云ふやうなものは、旣に世間がよく心得てゐる。それを今更增補するやうな事をしたつて、格別面白くも何ともない。

第二、よし世間で知つてゐても、自分に書く興味があれば兎も角、これまでにこんな問題は、何度となく話したり書いたりしてゐるから、義理にも書きたい氣なんぞは持ち合せてゐない。

第三、では大體の印象以上に、もつと突きこんだ事を書いたらどうかと云ふと、これにも三つ

の困難が附隨してゐる。

（イ）さう云ふ事を書くと云ふと、我々同樣よく久米を知つてゐるものには好いが、遠くから彼を見てゐる讀者諸君には、飛んでもない誤解を起させ易い。たとへばAと云ふ性質のある事を豫想した上で、Bと云ふ性質があると云つても、一々註釋を入れなければ、讀者はそのBと云ふ性質を如實にのみこむ事が困難である。さうかと云つて一々註釋を入れる日には、久米正雄傳を編纂するのと同じ手數がかかつてしまふ。して見れば間違つた久米の肖像畫を流布させる事に興味を持たない限り、そんな立入つた事を活字にするのは、考へ物だと云ふ事に歸着する。

（ロ）假に讀者がどんな誤解を持つてもかまはないとした所が、さう云ふ事の中には、久米自身が公にしたくない事もあるかも知れない。或は彼自身その存在すら認めたくない事があるかも知れない。それを天下に廣告する爲には、廣告すべき理由が必要である。が、そんな理由は久米や僕の生きてゐる限り、夢にも來ようとは思つてゐない。だからこの場合も、さう云ふ事は、書きたくもなければ書けもしない、且又反つて書かない方が好いと云ふ事になつてしまふ。

（ハ）　だがさう云ふ事の中でも、取捨選擇を加へたらどうかと云ふと、（イ）及び（ロ）に述べたやうな差支へは起らないにしても、今度は唯内輪だけに通用する樂屋落のやうなものが出來上り易い。これ又獨り好がつてゐれば結構だが、僕がその任でない事は勿論である。既に讀者も迷惑であり、僕にもその氣がない以上、やはりまづ書かないのに越した事はないだらうと思ふ。

斯くの如く久米の印象を書く事は、おいそれと出來るものではない。すると既に久米の大體を知つてゐる世間の爲に、幾分でもその知識を增さうとすれば、この容易に書けないと云ふ事を傳へる事があるだけである。そこで僕はやむを得ず、この一文を中央文學に送つて、寄稿の責を塞ぐ事にした。久米正雄の愛讀者諸君が、僕の意を諒としてくれれば幸甚である。

（大正九年六月）

女形次第で

芝居とは日本の舊劇なるべし。既に劇と云ふ、その女なるものは、或女形によりて扮されたる或女の役の意なり。故にその女の好悪を論ずる時は、勢、女形その人の影響をも考へざるを得ず。是に於て予は、「予が好きな芝居の女」を得んが爲には、先、頸細くして足袋を穿たざる時に足の形ぶざまならざる女形を要求す。（女優の場合は暫く例外とす。）而して斯くの如き女形を得たりとせんか、その女形の獨創的なる役の解釋及び演出は、次に予が好悪の決定上、重大なる要素を形づくるものなり。最後に斯くの如き女形にして、斯の如き解釋及び演出をなすものありとせんか、予はそのお染たると、政岡たると、乃至妲妃のお百たるとを問はず、すべて「予の好きな芝居の女」たるべきを信じて疑はず。何となれば予はその芝居たる以上、お染に纏綿せらるる惧なきと共に又妲妃のお百に殺害さるる惧もあらざるを以て、彼等の性格と行動とを純藝術的に鑑賞し得ればなり。從つて又同一なる女の役も、それに扮する女形の如何によりて、予の好悪同一ならず。聊責問に答ふる事爾り。

（大正八年一月）

私の生活

朝は九時に起きて、パンと牛乳と紅茶とで朝飯を濟ませる。「日日」「朝日」の二新聞を取上げて、先づ一番先に三面記事を見る。(「時事」や「讀賣」は、此一二年來、文壇に出てからといふもの讀まない。)

それから調子がよければ小說を書きに、この書齋へ入る。調子が惡ければ、小說を書かないで本を讀む。

午は普通の飯を食ふ。三杯位。特に好きな食物と云つて別にないが、煙草は、到底一と色ではすまされぬ。紙卷、西洋の刻み煙草、葉卷などを、二色か三色いろいろなのをのむ。

風呂は僕の家でたてるので、每日か或は一日隔きに入る。

髮は滅多に刈つた事がない。三月に一度も刈らないだらう。

×

きまつた散歩といふものはしない。ただ東京の街の中へ人を訪ねて行くとか、買物に行くとかする時に歩く位である。

酒は日本酒も西洋酒も飲まない。少しは飲む事もあるが、しかし、うまいとは思はない。別に好きな料理屋などが何處にあるといふのではない。人と飯を食ふ時、行當りばつたりの家へ入る。

遊戯の心得は殆どない。只水泳が少しやれる位のものだ。

芝居も見るし、活動寫眞も見る。また音樂も聽く。だが必ずしも、そんな處に行かなくてはならぬといふのではない。殊に芝居はこの頃では見に行つても、人と話をしてゐる丈けである。さういふ意味で、必ず僕にしなくてはならぬのは、少くとも一週間に一遍位は人中へ入る事である。そして、人浪に揺られるやうな心持になる事である。それは往來でもよい。實際これは僕に取つて緊要な事であつて、それがないと、何となく萎縮してしまふのである。

×

帽子は時に黑の中折を、時に茶のソフトを被る。着物などには別段の好みももつてゐない。惡く粹がつたなりなどは嫌ひである。僕は御覽の通り紫檀の机を二つ使つてゐる。一つは本などを置く机で、一つは原稿紙を置いて書く机である。本箱は、あの安物の西洋家具屋の店先に並んでゐるやうなものは嫌ひである。好きな動物？　猫を飼つてゐる。御覽に入れませうか。西洋種の

虎のやうな毛色をした、大きい奴で、頸には銀色の鈴をつけてゐる。
外國語は英語丈けが讀める。他に獨逸、佛蘭西、伊太利皆讀める程でない。
僕も男と生れた甲斐には、どんな女でも好きである。僕の小說の好きな人なら特別に。

（大正九年一月）
〔談話〕

私の生活

眼が覺めれば直ぐ起きる。大概八時か九時であるが、夏はもう少し早い。夜は大抵、十二時頃寢床へ入る。さうして必ず何か讀む。眠氣がさすと、本を置いて、電球を小さいのに付け換へて薄暗くする。

×

新聞は昔から「朝日」と「日日」との二つだけである。他の新聞の文藝欄などに、自分のことが、

褒められたり悪く言はれてゐたりすれば、誰れかが早速知らせてくれるから、さういふことでは別段不自由しない。新聞を讀むのは、飯を喰べながらである。先づ讀み始めるのは海外電報で、それも近頃一層興味を持つてゐるのは支那動亂の電報である。ついで面白いのが社會欄、一番熱心に讀まないところは相場記事だが、ちよつと見ることもないではない。講談は時々、ほゞ五回おきぐらゐに讀む。

×

歩くことを目的にして歩くことはない。若しさう云ふ純粹な散歩をするとすれば、一年に一度位であらう。旅行は一年一度春或は秋に試みる。さうして海よりも山を好む。僕は旅へ出ると長つ尻になる。いつも旅館の宿帳には「大阪毎日新聞社員」と書く。

×

洋服も和服も、いづれも似たやうなものだ。他處へ行つて疊へ上る時には和服がいいし、靴を脫がなくとも差支へなければ洋服もいい。僕の所持するものは、黑の背廣に縞のズボン、夏冬とも、これ一着。風呂は家でたてる。大概二三日おき。髮を刈るのは非常に不精で、まづ三月に一度位。顏は時々自分であたる。その剃刀は安全剃刀。

×

食事は大體、時間的にしてゐる。朝は、オートミルに牛乳に玉子。一體小食で、晝も晩も飯は二杯である。

×

料理は、洋食支那料理いづれも喰べることは喰べるが(但、關西の不味い洋食は例外)好みは日本料理を第一とする。兎に角、殊更惡食はしないが、大概のものは敢て却けない。然したつた一つ、どうにも厭なのは蠶豆である。酒は飲まない。尤も、何かの場合に、盃一杯か二杯はやらないこともないが。一番うまいと思ふのは白葡萄酒。茶は隨分飲む。机の側の火鉢に始終鐵瓶をかけて置くが、この鐵瓶の湯を日に三度はからにする。それほど茶好きだ。茶は煎茶を用ゐてゐる。珈琲紅茶折々飲む。然し、夜は眠れぬことを恐れて、紅茶は決して飲まない。果物は可なり好きだが、それも酸味のないものがいい。例へば、柿、乾葡萄、龍眼肉、バナナなど。殊に無花果はこれ等好物の隨一である。それとは反對に、酸味をもつものは嫌ひで、特に蜜柑などその筆頭である。これは胃酸過多の爲めだと思ふ。菓子はそれに使ふ砂糖の優劣によつて胃に良し惡しである。「和三二」もの或は「大島」ものを用ゐた菓子は胃に惡くない。近頃、渡邊町の「ちもと」の菓子を賞美してゐるのは、近いからでもあるが、又、その材料の砂糖を信用してゐるからでもある。唯、僕は干菓子であらうと、蒸菓子であらうと西洋流に、食事の際喰べる。間食は一切しない。一日

の喫煙量は、平均バツト二つと敷島二つであるが、一番多量に喫むのは執筆中か客と應對する時だ。故に、面會日の日曜の喫煙量が最高である。煙草の種類は多ければ多いほどよく、一つものだと馴れてうまくない。輸入煙草では、細いサルタナアを望み、ABCのやうな太い金口は大嫌ひである。

×

書畫骨董は非常に好きだ。金さへあれば東亞古今を通じて、求めたいものが澤山ある。音樂も亦、悦んで聽く。然し、この頃は怠つてゐる。學生時代には、音樂學校の演奏會通ひに熱中したものだが。芝居はこの頃、見るなら飜譯劇を望む。新作物なら友人のものを見る位である。寄席へは殆んどいかない。活動寫眞を見に行くのは間歇的である。つまり見たい慾望が內訌したければ、どんなに評判の高いものでも出掛けて行く氣になれない。

×

草花は萩、女郎花、芙蓉など、日本風のものを好むが盆栽は大嫌ひである。犬は嫌ひだ。犬も以前二匹飼つたこともあるが、今でも家で飼ふことは構はないと思ふが、餘所の飼犬は、どうも怖くて嫌ひである。この頃も犬の爲めに惜しいリボンを失つた。と云ふのは、この夏輕井澤で新たに得た鍔廣の帽子をかぶつて、久保田万太郎君を訪ねようとすると、ちやうど久保田君の家の

前で、犬が二匹、僕に吠えついた。犬の眼が帽子にそそがれてゐると思つたので、わざと脱いで小脇にかかへると、その拍子にリボンが路傍に落ちて了つた。拾はうと思つても、二匹の犬は頑として立去らずにゐるので、どうも怖くて拾へないで、甚だ殘念だつたが、その儘久保田君の家へ入つた。歸りに見ると、リボンは、犬が啣へていつたらしく、到頭見當らなかつたのである。

×

餘技は發句の外には何にもない。勝負事はどうもやる氣が起らない。人は、負けるのが厭だからなのだらうと云ふが、自分は、必ずしもさうとは思つてゐない。

×

書齋の光線などにはこだはらない。インキありペンあり、原稿紙あり、さうして明窓淨机ならば結構である。

×

創作を書き出す前は、甚だ愉快ではない。便秘してゐる樣な不快さである。書いて行くうちに行き詰れば、そこで一先づやめる。そのままその作を抛り出してしまふこともある。然し、いつか又、それを必ず書き上げる。騷々しいのが、何よりいやだ。子供などが騷ぐと、怒鳴りつける。それから、家のものに話し掛けられて、返辭を要求されるのもいやだ。一年ぢうでは、冬から春

へかけての季節が、僕の創作氣分に、一番適つてゐる。一口ぢうでは、午前が、最もいい。然し、夜も書く。

×

原稿用紙は本郷松屋製の半ペラ青罫のもの。半ペラを用ひるのは書損ないが多い爲めである。萬年筆は嫌ひで、普通の金ペン(G)を使つてゐる。毛筆で手紙など書くことも稀にある。

×

子供には此方の都合のいい限りの放任主義をとる。

(大正十三、四年?)

痛感した危險

別に感想らしい感想はありません。唯、いろいろな事情が、仕事の上で、可也所期を狂はせたのが、業腹です。さう云ふ外部の故障を除けば實力の足りなすぎるのを、忌々しく思ひました。

それから今まで氣のつかずにゐた、或は氣がついてゐても實際痛感しなかつた、危險の多いのに驚きました。頭より先に手が進步するなどと云ふ危險は、或はその最も小さいものかも知れません。えらい奴は、その危險を克服しながら、逆にその危險から養分をとつて成長するのでせう。さう云ふ離れ業が出來るかどうか、考へると、甚心細くなります。

その外批評家に對しては、別に希望も要求もありません。第一、或作家の作品を批評したら、その作家が必ずその批評を讀むだらうと思ふのは、批評家の己惚れです。たまには一切そんなものを讀まない作家だつてゐるのですから。まあ私なぞもこの頃はその一人です。だから批評家に對しては、甚冷淡になりました。

強ひて感想と云へば、この位のものです。以上。

（大正九年十二月）

「チヤツプリン」其他

×

この頃はあんまり讀んでゐないが、「改造」九月號に載つてゐる久米正雄の「病床」——原名“Charlie In His Sick Bed.”——を讀んだ。面白いと思つた。そして、今年の三月頃の何かの雜誌に出てゐたのだが、アイルランドの作家 St. John G. Ervine が今度の戰爭で服役中、チヤアリイ・チヤツプリンの映畫を見て大いに感激し、チヤツプリンは世界一の喜劇俳優であると褒めてゐたのを思ひ出した。若し、チヤツプリンがそれを知つてゐたら何と思ふだらう。そして、今また、久米正雄のこの「病床」の中に書いてあるやうに高橋邦太郎の手紙をもらつたのと、アアビンにほめられたのと、どつちをよろこんだだらう。

或はひよつとすると、チヤツプリンは高橋邦太郎から手紙をもらつた時の方が嬉しかつたかも知れない。

×

それから「象徵」といふ同人雜誌で、何といふ題であつたか忘れたが、伊藤貴麿といふ人の作を讀んだ。一寸うまいと思つた。近頃さかんに出る同人雜誌の若い作家などは、大てい何を書かうとするのか、自分でもはつきりとわかつてゐない人が多いのに、この人はちやんと、書くものを持つてゐたので、一寸たのもしく思はれた。が、希くは、その姓名が上品であるやうに、作品も、

もう少し上品であつてほしいと思つた。

×

活動寫眞もあまり見ないが、近頃谷崎潤一郎氏脚色の「蛇性の婬」を見た。思つたより面白かつた。あれだけのものを、こしらへるのは、なかなか樂ではないだらうと思つた。ただ慾を云へば、家の中の場面で、人物がいつも障子の前にゐて、それを同じ方面からばかり寫してあるのが物足らなかつた。こんなことを言ふのは少し無理な注文かも知れないが、もつと方々から撮影して、立體的な感じを出してゐたらと思つた。その上、もつと、王朝時代が出てゐてほしかつた。

（大正十年十月）

洋裝と和裝と

このごろ男を見ると、日本の男もきれいになつたなと思ふけれども、女は、洋裝美にも和裝美にも、格別、昔よりもきれいになつたと思つたことがない。殊に、冬毛皮の外套も着ずに、乘合

自動車の車掌のやうななりをした女が歩いてゐるのを見ると、日本中が貧乏になつたやうな心細い氣がする。しかし、概していふと、若い娘さんの洋裝は「新らしい年增」の洋裝よりも美しい。あれは、洋裝の下にある骨組が、テニスだの何んだののお蔭で洋裝に適するやうに出來てゐるためだらうと思ふ。もう一つ、「新らしい年增」に不利なことは、いかに洋裝をしてゐても、擧措動作は一向西洋の婦人らしくない。例へば、歩きかたとか、椅子のかけかたとか、乃至はまた、紅茶茶碗を置く手つきとかいふものが、どうも倭臭を帶びてゐる。

けれども、和裝になると、概して中年以上の女の服裝が、若い娘さんの服裝よりも、品がわるくない。元來、若い娘さんの和裝は、はでな色彩に富んでゐるし、その派手な色彩も、このごろ流行の色は、就中はでなものだから、趣味のいい服裝は出來にくいのかも知れない。

では、和裝がいいか洋裝がいいかといふと、どちらがどのくらゐいいかは暫らく問はず、とにかく、どちらも惡いことは事實である。なぜかといふと、現代の日本の女は、洋裝するにはあまりに日本じみてゐるし、和裝するにはあまりに西洋じみてゐるから、どちらにしても、ろくな感じを與へる訣がない。

しかし、かういふ過渡時代を經過しなければ、新らしい美は生れないのだから、みつともないなりをして歩くのも、將來の日本の文明のためには、たしかに壯烈な犧牲である。

最後に、僕は、現代の日本の婦人のかういふ犧牲的精神に、尊敬と愛とをもつてゐることを、つけ加へておきたい。

（大正十四年一月）

思つてゐるありの儘を

わたしは柳原燁子さんにはお目にかかつたことはありません。只作品を少し拜見してゐるだけであります。柳原さんは藝術的天分を持つてゐられると思ひます。しかし無遠慮に申上げれば豐富に持つてゐられるとは思ひません。柳原さんの離婚問題に對する世間の態度は勿論俗惡を極めてゐました。世間はいつもああ言ふ問題を眞に憎んではゐないのです。眞に憂へてもゐないのです。只面白がつてゐるのです。面白がつてゐるのもよろしい。しかし面白がつてゐるのならば、露骨に面白がつて然るべきであります。大義名分などを振りかざして、中學生の演說じみたことを喋喋すべきものではありません。わたしは柳原さんの物質的

にも困つてゐられると言ふ話を何かの新聞で讀んだ時、お氣の毒に感ずると同時に、文明的私刑の殘酷なことを頗る不快に思ひました。尤もあの問題に對する柳原さんの處置は賢明を缺いてゐられたかも知れません。少くともわたし自身の趣味とは大分隔つた處置をとられたやうであります。けれどもそれは瑣事であります。あの問題に對する世間並びに新聞に現れた限りの御親族の處置に比べれば遙かに同情の出來るものであります。島中君のお賴みによりわたしの平生思つてゐることをありの儘に文字にしました。若し柳原さんに失禮に當らなければ幸甚であると思つてゐます。

（大正十四年二月）

私がもし生れかはるならば

もし現在の自分の個性をそのまま持つて生れかはるとすれば、先づ矢張り人間に生れかはりたい。唯もう少し、頭が良くて、肉體が丈夫で、男振りが好い人間に生れかはりたい。生れる場所

は、成るべく金のある家に生れて一生食ふ爲に働かずともいいやうにしたい。あまり大金持の家に生れるとすると、却つて苦んだり戰つたりしない爲めに、健全に發達しないと云ふ說もあるけれど、僕の個性をそのまま持つてゐれば、その點は大丈夫だから、矢張り大金持の方が好都合である。

その外に僕は、かう云ふことを考へてゐる。と云ふのは、もし本當に生れかはるものとすれば、人間より下等な馬か牛に生れかはる。そして何か惡いことをして死ぬ。さうすると、神だか佛だか知らないけれども、兎に角、さう云ふものが僕を、馬や牛よりも下等な雀か烏にするだらう。それが又惡いことをして死ぬと、今度は、魚か蛇にするだらうと思ふ。それが又惡いことをして死ぬと、今度は蝶々とか蚯蚓とか云ふものにするだらうと思ふ。それが又惡いことをして死ぬと、今度は松の樹や苔などになるだらうと思ふ。それが又惡いことをして死ぬと、今度は、バクテリヤになるだらうと思ふ。そのバクテリヤが惡いことをして死んだ時に、神だか佛だか何かさういふ知らないものが、一體僕を何にする了簡だらうと思ふと、ちよつと馬や牛に生れかはつて、順順に惡いことをして、死んで行つてみたいやうな氣もする。

（大正十四年三月）

我机

材。紫檀。

大きさ。横、二尺八寸。竪、一尺六寸五分。(因に言ふ。装飾用彫刻等は少しもなし。)

我手に入れる因縁。我結婚せし時、夏目先生の奥さんよりお祝ひに頂けるもの。但し奥さんよりお金を預り、神田邊の唐木屋にて買ひ求めたる上、受取りとお金の殘りとを奥さんのもとへ届けしと記憶す。大正七年一月頃のことなり。

愛惜。唯永年使ひをれば、多少の親しみを感ずるのみ。(因に言ふ。格別上等の机を欲しいとも思はず。)

その外に何も書くことなし。尤も特に書かんと欲すれば、二三十枚位は書けるかも知れず。

(大正十四年九月)

雲の峯

雲の峯いくつ崩れて月の山　　芭蕉

雲の峯四澤の水の涸れてより　　蕪村

蟻の道雲の峯より續きけん　　一茶

何も芭蕉故感心する訣にては無之候へども「雲の峯いくつ崩れて」の句立ちまさりて相見え候。なぜと申さば素人量見にも「いくつ崩れて」などと申す波瀾萬丈の言葉は着け難き故に御座候。

（大正十五年八月）

註文無きに近し

家には格別註文もない。第一註文し始めれば際限ないことはわかつてゐる。一昨年書齋を拵へたものの、冬は寒いのにやり切れない。おまけに米材が黑み出すのにはかなさを感ずるばかりである。

庭にも註文のないことは同樣である。のみならず僕は室生君のやうに心から庭を作らうと思つてゐない。——と云ふよりも作らうと思ふほど、精神的に餘裕がないのだらう。善い加減に矢竹や唐棕櫚を植ゑた、田端の庭にも不滿はない。

唯現在の僕に欲しい家は何よりも先に日當りの善い、暖房設備の行き屆いた、しかも家賃の安い家である。庭も多少の空地だけ欲しい。そこへ室生君とも相談の上、澤庵石に松の木でも植ゑれば、少くとも僕には不足のない庭になることと信じてゐる。

（昭和二年二月）

藤森君の「馬の足」のことを話せと言ふから

或雜誌に出た藤森成吉氏の「馬の足」は日清戰爭の勇士原田重吉をモデルにした爲に問題になつたと云ふことである。「文藝時報」の記者曰く「何か感想をお話しなさい。」そこで何か話すことになつたものの、實は大して話すほどのことはない。第一「馬の足」の中の原田重吉の話はほんの二行か三行である。それから藤森君の反軍國主義的感情はあるにしても、原田重吉その人に對する惡意などは感じられない。そんなことを問題にせずとも——と思ふのは同業の身贔屓ばかりではないつもりである。

しかし原田重吉(呼び捨てにするのは輕蔑してゐるのではない。歷史的人物としてゐるからである)が今もなほ健在してゐるとすれば、玄武門の一番乘は彼の一生の誇りであるから、それを「臆病の爲」と言はれるのは愉快ではないのに違ひない。(しかし勿論藤森君はそんなことを知らなかつたのであらう)から云ふ原田重吉に同情出來ることも確である。殊に年をとつてゐるとすれ

ば、一層氣の毒に思はないこともない。

僕は勿論事實としては玄武門の一番乘のどう云ふものだつたかを知らないものである。しかし藤森君の傳聞した通り、門の陰に隱れてゐた爲に一番乘をしたとすれば、まつ先に進んで擊たれたものよりも落ち着いてゐたとも考へられないことはない。誰でも特別の事情のない限りは成る可く彈丸に當らずに功名を擧げたいのに違ひない。戰國時代の豪傑などもいづれも多少は身を完うして手柄を樹てる工夫を凝らしてゐる。のみならずその手柄の爲に祿の增すことさへ考へてゐる。

僕は又原田重吉の役者になつて玄武門の芝居をしたことを覺えてゐる。その芝居の中の原田重吉は日淸戰爭の了つた後、確か木挽か何かしてゐた。藤森君は「馬の足」の中の役者の言葉を信じたかどうか、それは藤森君に尋ねて見なければならない。しかし僕はあの芝居を見てゐたから、ああ云ふ傳聞を聞いたとすれば、落ちぶれて死んだ位のことは多分噓とは思はなかつたであらう。

（昭和二年二月）

（談話）

しるこ

久保田万太郎君の「しるこ」のことを書いてゐるのを見、僕も亦「しるこ」のことを書いて見たい欲望を感じた。震災以來の東京は梅園や松村以外には「しるこ」屋らしい「しるこ」屋は跡を絕つてしまつた。その代りにどこもカツフエだらけである。僕等はもう廣小路の「常盤」にあの椀になみなみと盛つた「おきな」を味ふことは出來ない。これは僕等下戶仲間の爲には少からぬ損失である。のみならず僕等の東京の爲にもやはり少からぬ損失である。

それも「常盤」の「しるこ」に匹敵するほどの珈琲を飮ませるカツフエでもあれば、まだ僕等は仕合せであらう。が、かう云ふ珈琲を飮むことも現在ではちよつと不可能である。僕はその爲にも「しるこ」屋のないことを情けないことの一つに數へざるを得ない。

「しるこ」は西洋料理や支那料理と一しよに東京の「しるこ」を第一としてゐる。(或は「してゐた」と言はなければならぬ。)しかもまだ紅毛人たちは「しるこ」の味を知つてゐない。若し一度知つた

とすれば、「しるこ」も亦或は痲雀戲のやうに世界を風靡しないとも限らないのである。帝國ホテルや精養軒のマネエヂヤア諸君は何かの機會に紅毛人たちにも一椀の「しるこ」をすすめて見るが善い。彼等は天ぷらを愛するやうに「しるこ」をも必ず――愛するかどうかは多少の疑問はあるにもせよ、兎に角一應すすめて見る價値のあることだけは確かであらう。

僕は今もペンを持つたまま、はるかにニユウヨオクの或クラブに紅毛人の男女が七八人、一椀の「しるこ」を啜りながら、チヤアリ・チヤプリンの離婚問題か何かを話してゐる光景を想像してゐる。それから又パリの或カツフエにやはり紅毛人の畫家が一人、一椀の「しるこ」を啜りながら、――こんな想像をすることは閑人の仕事に相違ない。しかしあの逞しいムツソリニも一椀の「しるこ」を啜りながら、天下の大勢を考へてゐるのは兎に角想像するだけでも愉快であらう。

（昭和二年五月七日）

昭和十年五月一日印刷
昭和十年五月五日發行

芥川龍之介全集第八卷

著作者　芥川龍之介

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所　精興社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店

電話九段(33)〔一八八七・一八八八番
〔一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

（大森製本）